ISSN 0916-3425

彩の国 さいたま

第11号

調査研究報告

目　次　CONTENTS

1・稲荷山鉄剣と教科書　高橋一夫　1

2・企画展「古墳時代の馬の装い
　　ーさきたまに馬がやってきたー」の記録　岡本健一　23

3・《資料紹介》稲荷山古墳出土の須恵器
　　—平成9年度発掘資料—　宮　昌之　45

4・民俗事例の窓（2）
　　—自治体は民俗をどのように描いてきたのか—　斎藤修平　57

5・最後のオカノエ講
　　—行田市大字埼玉百塚中組の庚申講—　田中裕子　93

6・博物館と学校教育の連携（3）
　　—ボランティア活動の試み—　渡辺　勤　101

7・埼玉古墳群研究の新視点　111
　　高橋一夫　塚田良道　吉川國男　宮　昌之
　　塩野　博　斎藤国夫　坂本和俊

8・雄略紀所載の武蔵国直丁と稲荷山鉄剣銘につて　吉川國男　119

平成10年3月

埼玉県立さきたま資料館

ごあいさつ

さきたま資料館にとって平成９年度は、記念すべきことが重なりました。

まず第一は、将軍山古墳の復原整備がいちおう終わり、同古墳に取り込んでつくった全国初の展示館が４月２９日にオープンしたことです。８割がた崩されていたこの古墳を、５年かけて築造当時の姿に戻し埴輪を立てた古墳の再現は、風土記の丘の新名所になりました。

二つ目は、この事業を記念して、初夏には「さきたま風土記の丘・想い出のアルバム」展を、また秋には特別展「古墳時代の馬の装い」を開催しました。この特別展では、古代馬の血をひく馬をさがしてきて、職員全員で実際飼ってみて、馬具装着の演示をするとともに、来訪者には乗馬体験をしていただきました。まさに風土記の丘らしい行事にすることができ、新聞やテレビにもたびたび紹介されました。

三つ目は、稲荷山古墳の復原整備事業に着手したことです。この古墳は国宝の金錯銘鉄剣が出土した古墳ですが、前方部は昭和十二年に採土削平されたままで、円墳と誤解されがちでした。９年度は、周堀と墳丘の表面をトレンチ発掘し、長方形の二重堀を確認するいっぽう、墳丘造り出しや堀からは、築造時期を示すとみられる須恵器や土師器、埴輪が多数出土しました。

四つ目は、以上のような事業の効果あって、来館の方がたが急増し、５月４日には、１日入館者がこれまで最高の６４２８人を数えました。また、８月２日には、昭和４４年の開館以来の入館者が４００万人を突破しました。さらにこの年度末には年間入館者も過去最高の２１万人を越える勢いです。単に来館の方々が増えたばかりでなく、説明解説の要望も増えたり、高度な質問が多くなってきたことも最近の傾向です。

ときあたかも、県の重要施策に位置づけられている「彩の国さきたま古墳公園づくり」が、いよいよ動きだしたことです。この事業は、風土記の丘を中核として周辺部に拡張し、９７ヘクタールの公園にするという計画で、今年度は約５ヘクタールの用地買収に向け埼玉県北部公園建設事務所が取り組まれております。

本書は、このような館務を遂行するなかで、北武蔵の古墳時代および民俗の基礎資料を得るため、平成９年度に職員が行った調査の成果です。いずれも、今後の当館やさきたま風土記の丘の運営に役立つものと確信いたしますし、歴史学、考古学、民俗学の分野に裨益できるものであれば幸いに存じます。

刊行にあたり、本書が教育、文化、学術などに広く活用されますようお願い申し上げますとともに、調査にさいし御教示、御協力賜りました各位に厚く感謝申し上げます。

平成１０年２月２８日

埼玉県生涯学習部参事兼さきたま資料館長

吉　川　國　男

稲荷山鉄剣と教科書

高　橋　一　夫

要旨　稲荷山鉄剣の銘文は、空白の５世紀を埋めるものであった。その鉄剣は古代史を考える上で欠かすことができない貴重なものとして国宝に指定された。鉄剣銘文の解釈をめぐっていまなお活発に議論され、さまざまな説が提示されている。

現在、多くの教科書で稲荷山鉄剣が取り上げられている。稲荷山鉄剣は単に研究資料としてだけでなく、いまや小・中学校の社会、高校の歴史教育に欠かすことができない資料となっている。

本稿では、稲荷山鉄剣がいつ頃から教科書に取り上げられ、各段階でどのように扱われているかを統計的に示すことを目的にしている。また、研究の進展が教科書にどのように反映するかを知るとともに、今後の本館の研究活動や普及活動の参考にしようとするものである。

はじめに

さきたま風土記の丘とさきたま資料館には年間数多くの人びとが訪れ、1969年（昭和44）の開館以来の入館者数は８月２日に400万人を突破した。

このように多くの人びとが訪れる理由として、第一に全国的にもまれに100ｍ級の９基の古墳が群をなして存在すること、第二に稲荷山古墳から出土した国宝の「金錯銘鉄剣」が展示されていることがあげられる。つまり、古墳と遺物がともに存在し、あわせて見学できるのである。

もうひとつの大きな要因として、教科書に稲荷山古墳や金錯銘鉄剣が取り上げられていることが考えられる。そのために、社会科見学等で資料館に訪れる小・中学生が多く、過去９年間の全入館者数の内、多いときで46％、少ないときで31％であった。

そこで、小・中学校の社会と歴史の教科書に、また高校の日本史の教科書にどのように取り扱われているかを調べ、今後の館の運営や展示活動等の参考にしようとするものである。

１　稲荷山古墳と金錯銘鉄剣の歴史

埼玉古墳群はかつて旧埼玉村の入会地として、地元の人びとによってによって保存・管理されてきた。1937年（昭和12)、新設された学校の校庭埋立用の採取地として稲荷山古墳が選ばれ、古墳から学校までトロッコが敷設され、前方部の土が運び込まれた。古墳は昔から埋立用の土の採取地として、格好の目標になっていたのである。稲荷山古墳が後円部しか残っていないのは、こうした理由によるのである。

これを知った国は貴重な古墳が破壊されるということで国の史跡に仮指定し、翌1938年には古墳群全体が国指定史跡となったのである。

1966年（昭和41)、国は大規模な開発に対処して史跡等の保存を図るには、個々の史跡を保存するだけでは不十分であるという認識から、史跡等が集中し歴史的風土を残している地域については、

「風土記の丘」として広域に保存する事業を予算化した。埼玉県では翌 1967年に、さきたま風土記の丘建設事業費を予算化し、さきたま風土記の丘の整備に着手した。あわせて資料館建設も行うが、主体部が見学できる古墳が１基は必要だという観点から、古墳を１基発掘調査する計画が立てられた。そこで選ばれたのが、前方部が消滅していた稲荷山古墳であった。

稲荷山古墳の発掘調査は1968年（昭和43）８月に実施された。稲荷山古墳の破壊が契機となり国の指定史跡になってからちょうど30年後の夏であった。この時、他の副葬品とともに鉄剣が出土し、翌1969年10月に開館した資料館に展示された。しかし、錆が進み保存処理が必要となったため、奈良の元興寺文化財研究所に保存処理を依頼し、錆落としの段階で金象嵌の115文字が発見されたのである。世紀の大発見であった。この銘文が発見された1978年（昭和53）は、発掘から10年、古墳群が国指定史跡となって40年という節目の年でもあった。２年後の1980年（昭和55）には、金錯銘鉄剣のための新たな収蔵展示棟が開館し一般公開された。

そして、1981年（昭和56）には出土品は一括重要文化財に、1983年（昭和58）一括して国宝に指定された。

埼玉古墳群は毎年度、整備のための調査が行われ、個々の古墳の年代が明確になりつつある。しかし、全体の築造年代を把握しているわけではなく、隣接する丸墓山古墳との前後関係は正確には不明であるが、稲荷山古墳は埼玉古墳群で最初に築かれた古墳であると考えられている。

稲荷山古墳は築造後およそ1500年間もその雄姿をとどめていたが、1937年には前方部が削平された。しかし、このことが契機に埼玉古墳群は国指定史跡となるわけであるが、まさに稲荷山古墳はわが身を削って埼玉古墳群を守ったといっても過言ではない。その後、稲荷山古墳はさきたま風土記の丘の整備一環として発掘調査が行われ、銘文の発見へとつながっていくのである。金錯銘鉄剣は県民といや国民と資料館をつなぐ架け橋として、現在もなお多大な貢献をしているのである。

2　銘文の解釈

銘文の「辛亥年」は出土須恵器の年代から、471年が定説となるつつある。問題は鉄剣を造らせた乎獲居臣が果たして古墳の被葬者か否か、あるいは北武蔵の豪族か否かという点である。遺物は遺跡と相違して、人の手により移動することができるので問題を複雑にしている。これまでに、乎獲居臣をめぐってさまざまな見解が打ち出されているが、大雑把にまとめると次のようになる。

◎在地豪族説

乎獲居臣は杖刀人の首として大和の斯鬼宮に奉事した記念に金象嵌の鉄剣を造らせ銘文を刻ませた。それを持ち帰り、死後、鉄剣が礫槨に副葬された。

◎畿内豪族説

大和の王権の中枢にいた乎獲居臣が杖刀人の首としての自らの功績を記念して鉄剣に銘文を刻ませた。その後、北武蔵の地に派遣され、稲荷山古墳に埋葬された。

◎畿内豪族鉄剣下賜説

杖刀人の首である畿内豪族の乎獲居臣が、部下の東国出身の杖刀人に鉄剣を下賜した。

以上３説はいずれも有力な学説で、どの学説を採用するかによって稲荷山古墳の評価は変わってくるが、稲荷山古墳から金錯銘鉄剣が出土したことはまぎれもない事実である。次に金錯銘鉄剣が小・中・高の教科書でどのように扱われているかをみていこう。

3　小学社会と金錯銘鉄剣

小学校社会の教科書に金錯銘鉄剣が掲載されるのは1986年度版（昭和61）からである。調査対象とした教科書数は図の凡例で「全体」と記されている数である。

なお、調査対象とした教科書は埼玉県立南教育センターと東書文庫が保有しているものだけに限られていることをあらかじめお断りしておく。

（1）本文での扱われ方

教科書本文で稲荷山鉄剣について記されている教科書数は第１図のとおりである。

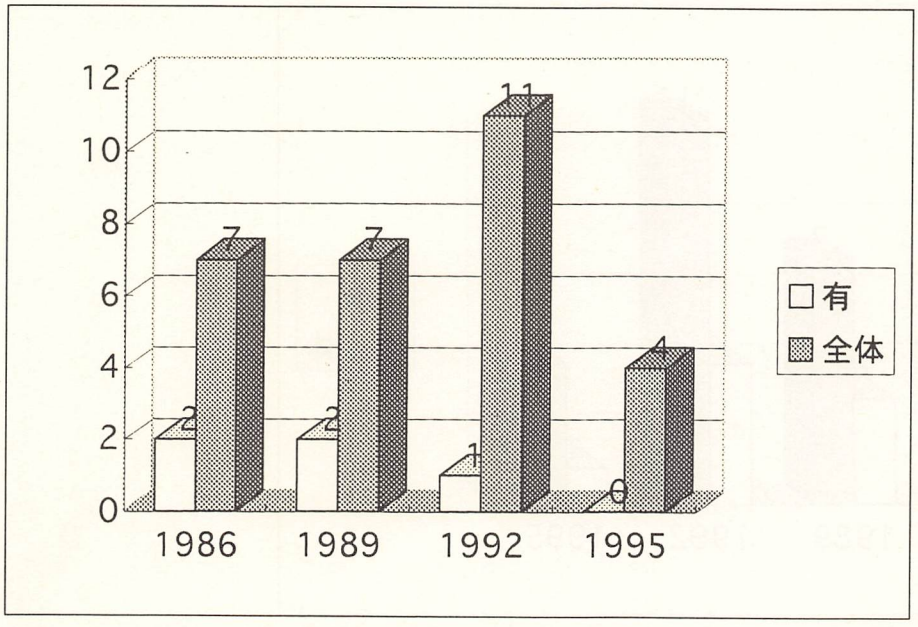
教科書本文は次のように記載されている。

A、1986年度「埼玉県の稲荷山古墳から発見された鉄剣には、この地方の王が大和朝廷につかえていたことが記されています。」

B、1986年度「埼玉県の稲荷山古墳で発見された鉄剣には、ワカタケル大王が天下をおさめていたという文字がきざまれていました。熊本県の江田船山古墳で見つかった鉄剣に記された大王の名も、ワカタケルだと考えられています。」

C、1989年度「埼玉県の稲荷山古墳から出土した鉄剣には、ワカタケル大王が天下をおさめるのを助けた、という意味の文字がきざまれていました。オワケはこの鉄剣をつくらせた人で、ワカタケル大王は雄略天皇だと考えられています。」

D、1992年度「埼玉県にある稲荷山古墳から出土した鉄剣には、ワカタケル大王が天下をおさめるのを助けた、という意味の文字がきざまれていました。ワカタケルは、雄略天皇だと考えられています。また、オワケはこの剣をつくらせた人のようです。」



第１図　小学社会・本文での記載数

Aのみが鉄剣の銘文に「この地方の王が大和朝廷につかえていた」との歴史的評価を下しており、B・C・Dは銘文の内容をそのまま記している。

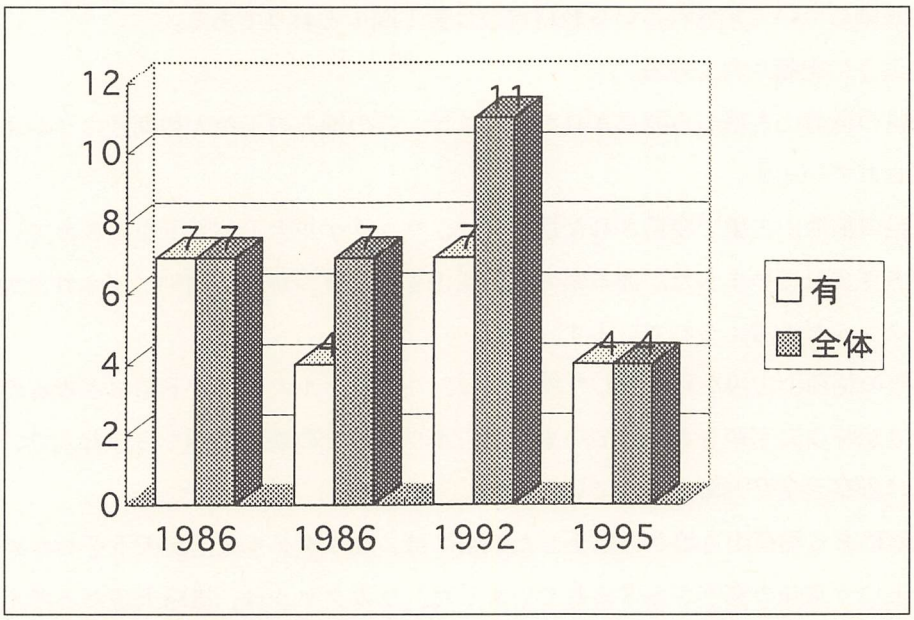
（2）鉄剣写真の掲載

鉄剣の写真が掲載されている教科書数は第2図のとおりである。高い割合で鉄剣の写真が掲載されているようすがわかる。

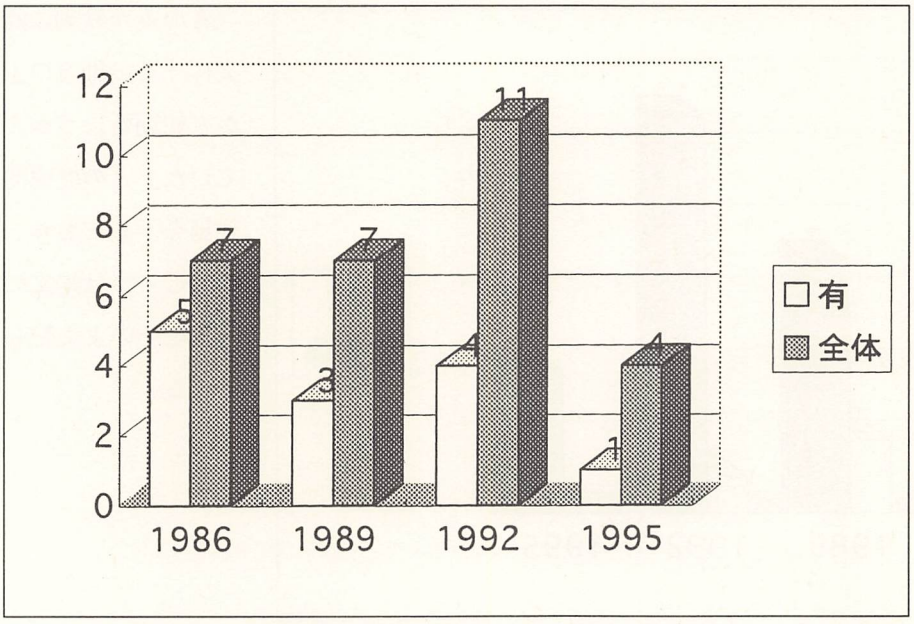
（3）鉄剣に関する説明

鉄剣の写真に何らかの説明を加えている教科書は第3図のとおりである。主なものを紹介しよう。

A、1986・1992年度「埼玉県行行田市の稲荷山古墳から出た鉄剣には、次のような意味の文字がきざまれています。『わたしは、オホヒコの子孫のオワケである。代々、武人のかしらとして大王を守ってきた。それを記念して、この剣をつくった。』この文字から、五、六世紀ごろの大和国家と、この地方の豪族の関係がつかめそうです。」



第2図　小学社会・鉄剣写真掲載数



第3図　小学社会・鉄剣資料説明数

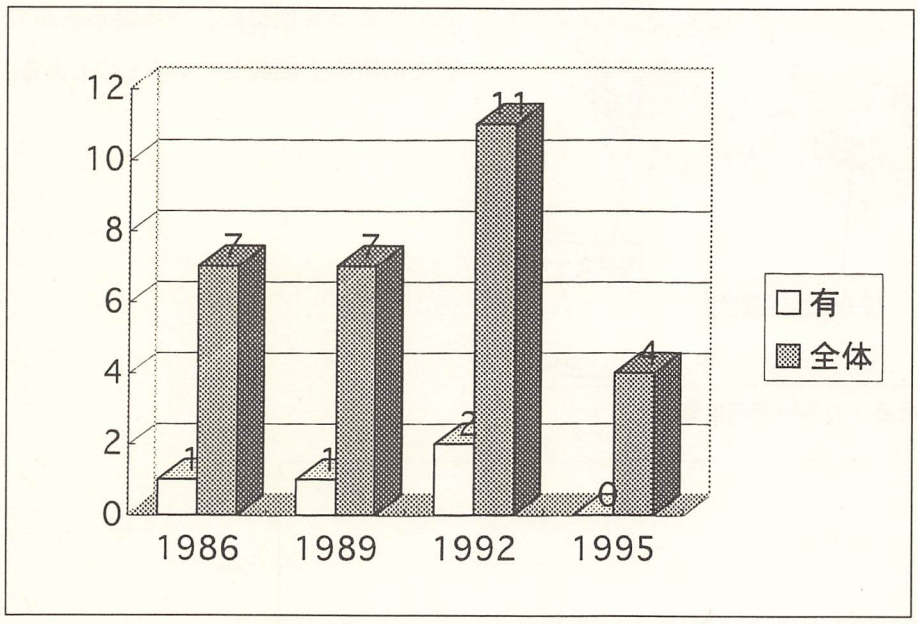
B、1986年度「埼玉県の稲荷山古墳から発掘された鉄剣には、115の文字のがほりこまれていて、この地方の豪族が大王を助けてきたという意味のことが記されています。」

C、1986年度「使われ始めたころの漢字『埼玉県の稲荷山古墳で発見された鉄剣にきざまれた漢字』

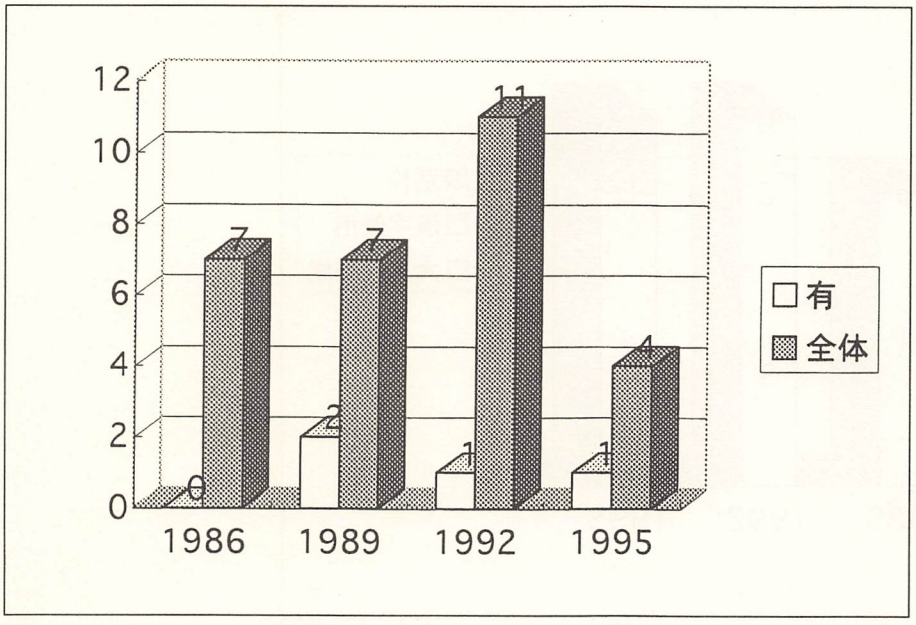
D、1989年度「埼玉県行田市の稲荷山古墳で発見された鉄剣にきざまれていた文字。ワカタケル大王と読める。」

E、1992年度「漢字が使われ始めたころのものです。(埼玉県)」

F、1995年度「わたしは、この鉄剣をつくらせた豪族のオワケである。わたしの家は、大王を守る軍隊の隊長を代々つとめ、わたしはワカタケル大王（雄略天皇）につかえていた。大和朝廷と埼玉県にいた豪族とのつながりが分かります。」



第４図　小学社会・古墳写真掲載数

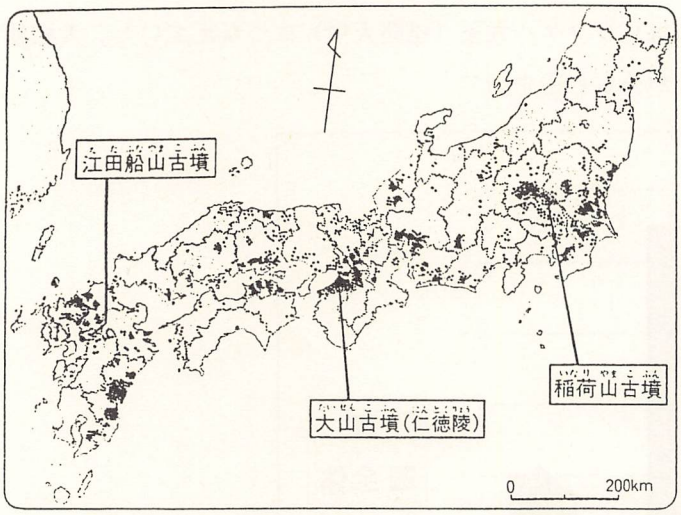


第５図　小学社会・古墳位置図掲載数

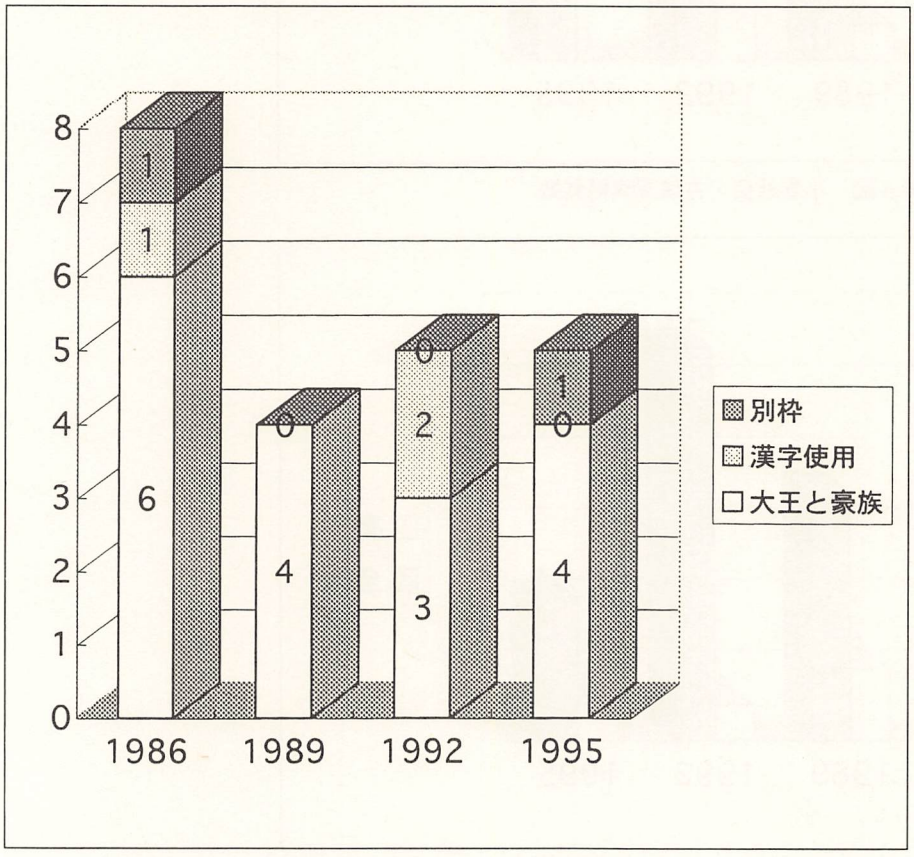
G、1995年度「現在の埼玉県の古墳から出土したもので、大王の役人としてつかえたことが書かれています。」

H、1995年度「埼玉県にある稲荷山古墳から、鉄剣が発掘されました。それには115文字が金でしるされていました。剣は、5世紀の終わりごろのものといわれています。『わたしは、ワカタケル大王のおられる宮廷におつかえして、大王が天下を治めるのを助けた」という意味のことが書かれています。ワカタケル大王は、雄略天皇だと考えられています。ワカタケル大王の時代には、各地の豪族たちが大和に出向いて、大王につかえる政治のしくみができあがっていたようです。」

多くの教科書は銘文の内容をそのまま記しているが、乎獲居臣は在地豪族ということを前提に、一歩踏み込んで歴史的解釈を掲載しているものもある。



第6図　小学社会・古墳位置図掲載例



第7図　小学社会・取り扱われ方

（4）稲荷山古墳写真の掲載

鉄剣とともに稲荷山古墳の写真を掲載しているのは第4図のとおりである。1989年度版の教科書は稲荷山古墳を表紙に採用している。

（5）稲荷山古墳の位置図掲載

稲荷山古墳の位置が地図上に位置が示されているのは第5図のとおりである。掲載方法は全国の前方後円墳の分布や、主要古墳の分布図のなかに、大阪府仁徳陵（大仙古墳）、熊本県江田船山古墳、兵庫県五色塚古墳とともに稲荷山古墳の位置が表示されている（第6図）。

（6）取り扱われ方

最後に、鉄剣がどのような個所で扱われているかを調べてみると第7図となる。

小学校段階では東アジアとの関係を記述することはないので、倭王武との関係で記載されることはない。最も多いのが大王と地方豪族との関係の資料として扱われている例が多いことがわかる。また、最古の漢字使用例として扱われる例もある。さらに、別枠を設けて詳細に解説している場合もある。

参　考

小学校学習指導要領　社会　平成元年3月

1　目標

（1）　国家・社会の発展に大きな働きをした先人の業績や優れた文化遺産について関心と理解を深めるようにし、我が国の歴史や伝統を大切にする心情を育てる。

2　内容

（1）　我が国の歴史は、大和朝廷による国土統一が行われてから、政治の中心地や世の中の様子などによって幾つかの時期に分けられることに気付き、それぞれの時代の歴史上の主な事象について、人物の働きや代表的な文化遺産を中心に理解できるようにするとともに、我が国の歴史や先人の働きについて関心を深めるようにする。

ア　身近な地域や国土に残っている遺跡や文化財などを調べて、自分たちの生活の歴史的背景に関心をもつとともに、我が国の歴史を学ぶ意味について考えること。

イ　遺跡や遺物などを調べて、農耕が始まると人々の生活や社会の様子が変わったことや、大和朝廷による国土の統一の様子について理解すること。その際、神話・伝承を調べて、国の形成に関する考え方などに関心をもつこと。

小学校指導書　社会編　平成元年6月

大和朝廷による国土統一の様子については、古墳やその出土品などを調べて、具体的に理解させることが考えられる。

4　中学歴史と稲荷山鉄剣

鉄剣が中学歴史の教科書に登場するのは1981年度版からで、銘文が発見されてから2年後である。小学校社会では本文中に鉄剣の記載がみられたが、中学校歴史では本文中の記載は一切みられない。

（1）　鉄剣写真の掲載

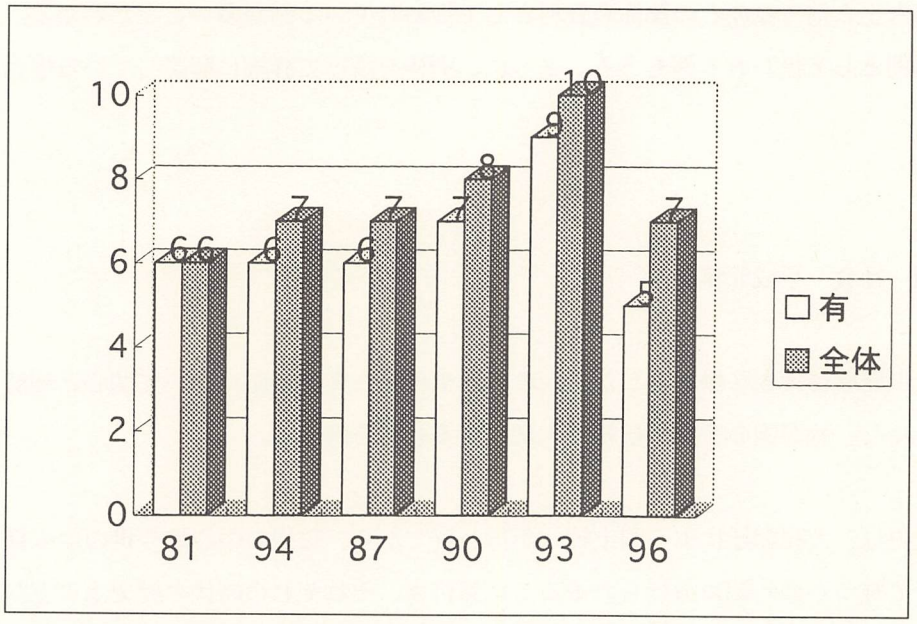
鉄剣の写真が掲載されている教科書数は第８図のとおりである。大半の教科書に写真が掲載されているようすがわかる。なお、181年度版の以前の教科書をみると、鉄剣の代わりに和歌山県隅田八幡神社に伝わる銅鏡が、漢字で日本語を表記した最古の使用例と掲載されている。

（2）製作年代

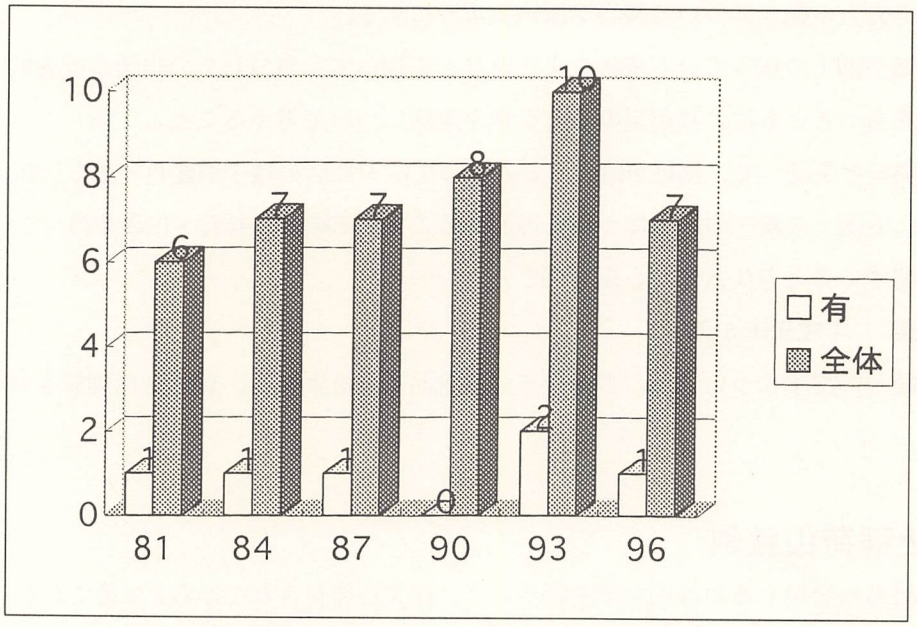
小学校の社会ではみられなかったが、中学校歴史では鉄剣銘文の最初に書かれている「辛亥年」について、資料説明のなかで触れている（第９図）。年代については1981・1984年度版は「471年か531年」、1987年度版以降は「471年が有力」となっており、辛亥年＝471年説が定着しつつある。

（3）鉄剣に関する説明

鉄剣についての説明は、写真同様多くの教科書で行われている（第10図）。ここでその主なものをみていこう。



第８図　中学歴史・鉄剣写真掲載数



第９図　中学歴史・製作年代記載数

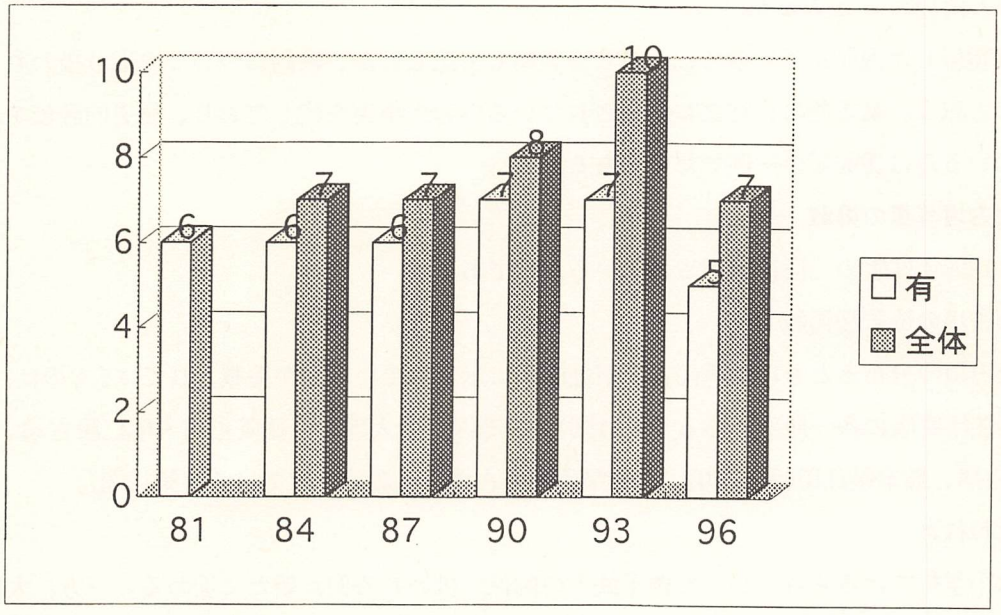
A、1981年度「この文字をどう読むかが学問上重要な問題になっている。」

B、1981年度「大王の名と考えられる文字などがある。漢字で日本語をあらわしたもっとも早い時期の5世紀か6世紀はじめごろのものといわれている。」

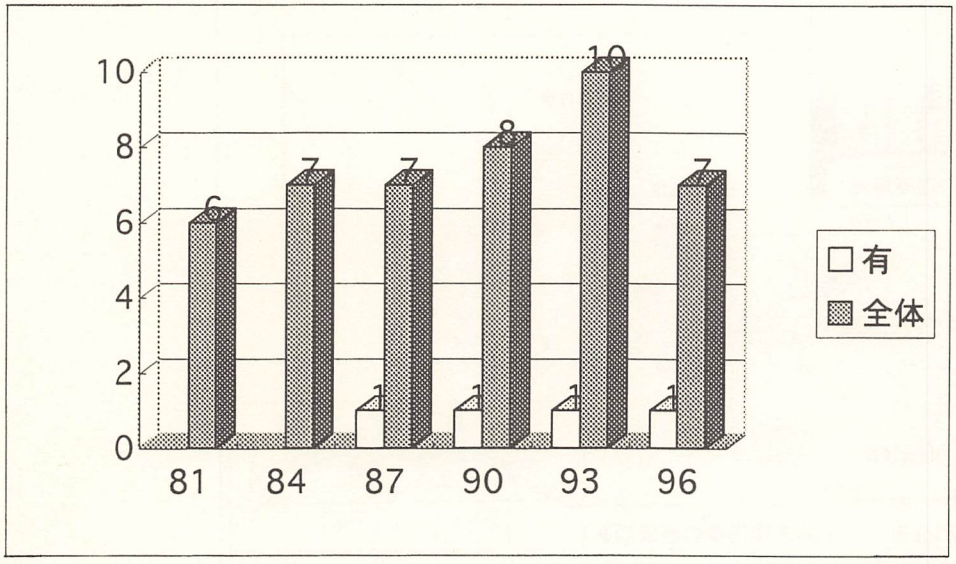
C、1981年度「471年か531年のいずれかに書かれたものといわれ、乎獲居臣とその7人の先祖の名がしるされている。」

D、1981年度「この鉄剣にみえる獲加多支鹵（ワカタケル）大王が倭王武にあたると考えられている。」

E、1984年度「金文字の文の最初に、『辛亥年七月中』に書かれたと記されており、その年は471年か531年をさすと考えられる」。「現在、日本で出土しているもののなかでは最古の文字とおもわれ、ひじょうに貴重なものである。金文字をきざませた人は『乎獲居』という名で、



第10図　中学歴史・鉄剣資料説明数



第11図　中学歴史・古墳位置図掲載数

その祖先７人の名も書かれている。なかでも『意富比垝』いう人については、初代という意味の『かみつおや』という漢字であらわしている。このように漢字の音と訓をたくみに使って日本語の話し言葉を文字にうつしかえていったのである」。（別枠「鉄剣に115の金文字」の概要　埼玉古墳群の図も掲載）

F、1987年度「1978年（昭和53年）、剣身から115文字が発見された。そこには、この鉄剣をつくらせたのはオワケで、ワカタケル大王（雄略天皇と考えられる）が、天下を治めたのを助けたことなどが記されていた。鉄剣の製作は、471年といわれている。」

G、1993「1978年（昭和53年）、埼玉県の稲荷山古墳出土の鉄剣から、金ではめこまれた銘文が発見され、そのなかの「辛亥年」は471年、「獲加多支鹵大王」は雄略天皇とされ、船山古墳出土の大刀銘についても、「治天下獲□□□鹵大王世」と読むべきだとする説が強まった。とすれば、５世紀後半には大和政権の支配が少なくとも西は現在の熊本県から、東は埼玉県までおよんでいたことになる。」

各年度版には類似した説明が多いので、それらを省略して記したが、鉄剣についての取り扱われ方はわかるものと思う。基本的には銘文に記載されている内容の事実を記しており、歴史的評価をあわせて記しているのは1993年の一例でだけである。

（４）稲荷山古墳写真の掲載

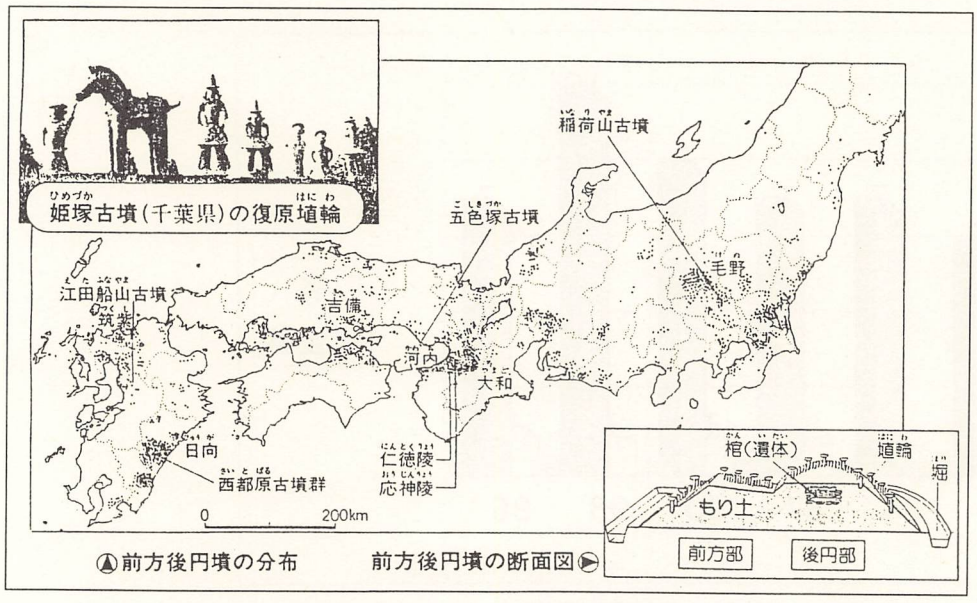
写真の掲載は1990年度版の一冊に掲載されているだけである。

（５）稲荷山古墳の位置図掲載

全国の前方後円墳の分布とともに稲荷山古墳が地図上に示されている図が掲載されているものは、1984年度から1996年度版に各一冊ずつある（第11図）。分布図には大阪府仁徳陵古墳・応仁陵古墳、兵庫県五色塚古墳、熊本県江田船山古墳、宮崎県西都原古墳群も表示されている（第12図）。

（６）取り扱われ方

中学歴史では小学校ではみられなかった倭王武との関係で扱われる例が新たに加わる。一方、大



第12図　中学歴史・古墳位置図掲載例

王と地方豪族との関わりでの扱われ方は小学社会と比較してもその数は減少している。1996年度版ではゼロというのも興味深い減少である。各学説があり評価が定まっていないことが大きな要因と推察される。また、一方では漢字を使用しての最古の日本語表記例としての解説が増加している。これは事実として認定できるのでからであろう。別枠を設けて詳細に解説を加えている例が1981・1984年度版にはみられたが、それ以降はみられない（第13図）。

参　考

中核校学習指導要綱　歴史的分野　平成元年３月

1　目標

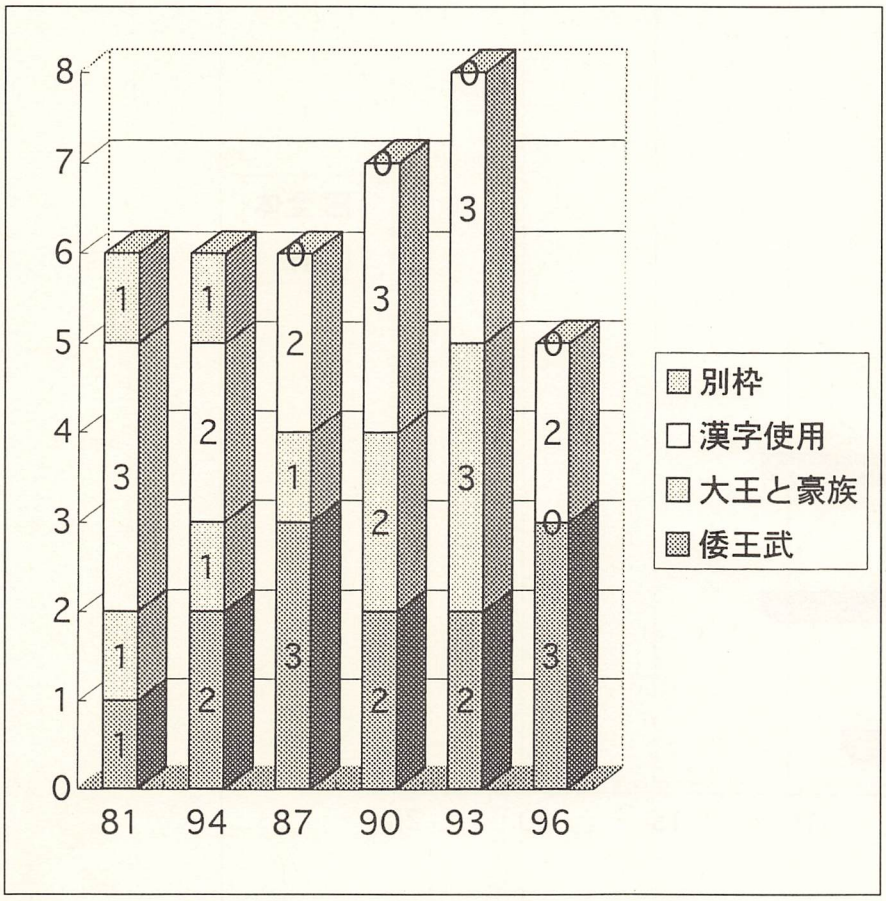
（1）　我が国の歴史を、世界の歴史を背景に理解させ、それを通して我が国の文化と伝統の特色を広い視野に立って考えさせるとともに、国民としての自覚を育てる。

（2）・（3）略

（4）　歴史に見られる国際関係や文化交流のあらましを理解させ、我が国と諸外国の歴史や文化が相互に深くかかわっていることを考えさせるとともに、他民族の文化、生活などに関心をもたせ、国際協調の精神を養う。

2　内容

（2）国の統一が進み、大陸の文物・制度を積極的に取り入れて古代国家が形成されたことを、当時のアジアの動きと関連させながら理解させるとともに、仏教文化が栄えたことや当時の



第13図　中学歴史・取り扱われ方

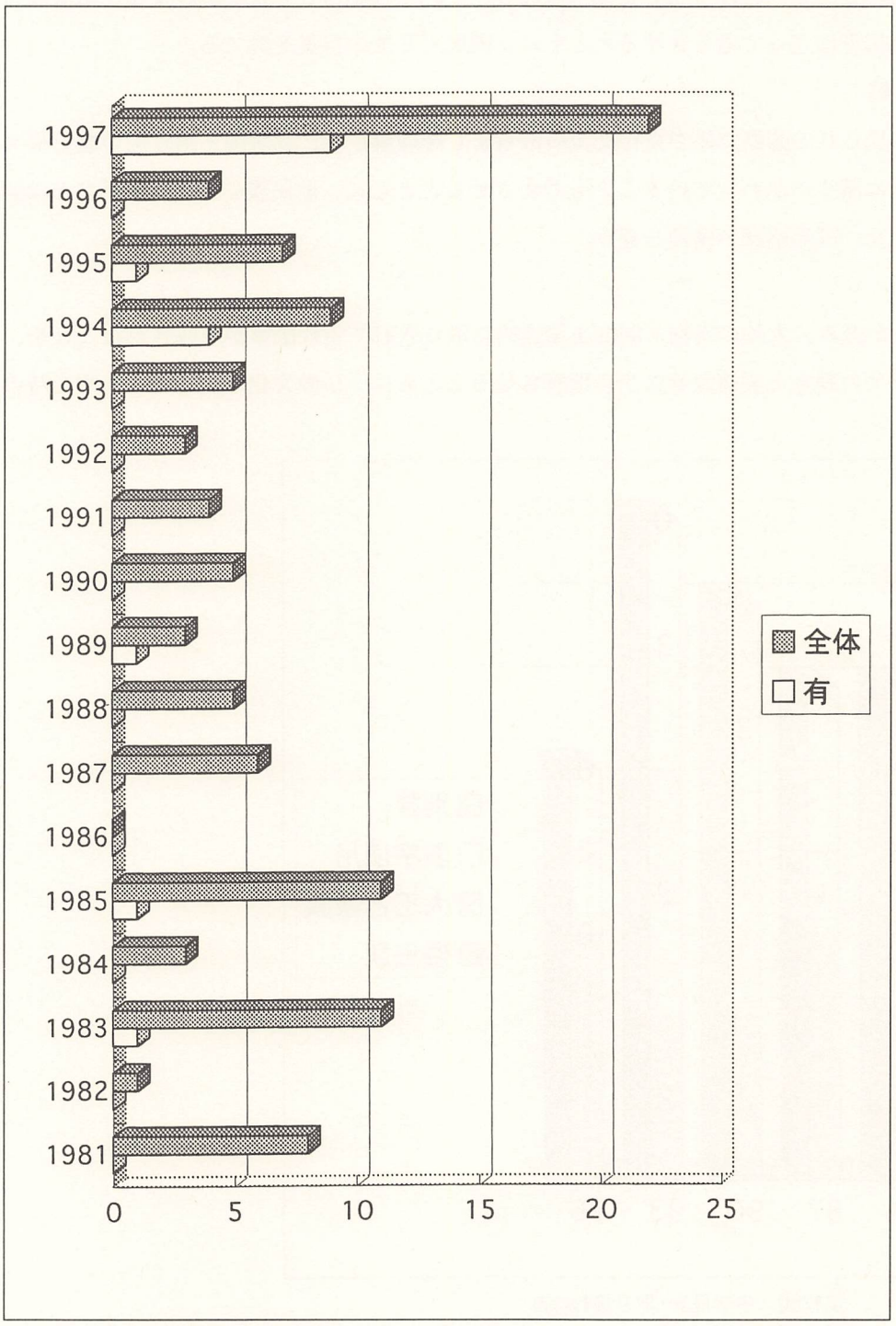
文化に見られる国際的な要素に着目させる。(以下、略)

ア　国の成り立ちと東アジアの動き

古墳文化と大和朝廷による国の統一を扱い、国家の形成過程を理解させるとともに、当時の人々の信仰、中国や朝鮮の情勢、大陸から移住してきた人々が日本社会の発展に果たした役割に着目させる。

中学校指導書　社会編　平成元年７月

ここでは、古墳文化と大和朝廷による国の統一と東アジアの動きを背景に学習して、我が国における国家の形成過程を理解させるのがねらいである。



第14図　高校日本史・本文での記載数

「古墳文化」については、その分布や形状、出土品に見られる特色から当時の社会の生活の様子を知るとともに、国の統一の過程を考えさせる手がかりともする。

「大和朝廷による国の統一」については、小国家の形成から大和朝廷による国の統一までの大筋をつかませる。(略)

「中国や朝鮮の情勢」のあらましと、「大陸から移住してきた人々が日本社会の発展に果たした役割」については、彼らがもたらした文物、例えば漢字や仏教、土木・冶金などの技術が、どのように我が国の発展と関連をもったかに着目させるようにすることが大切である。

5　高校日本史と金錯銘鉄剣

高校日本史に鉄剣が登場するのは、中学社会と同じ19981年度からである。鉄剣が登場する以前は、隅田八幡神社所蔵鏡の銘文が日本最古の文字として取り上げられていたが、鉄剣登場後もあわせて紹介されている。

（1）本文への記載

1983年度以降、毎年度ではないが本文の記載が散見される(（第14図)。それをここに紹介しよう。

A、1983年度「古墳から出土する刀剣の銘文によれば、強大となった大和政権の王は、みずから大王と称し、5世紀の後半には関東地方や九州中部の首長をも従えたと推定される」。

B、1994年度「埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣や熊本県江田船山古墳出土の鉄刀には、ともに『獲加多支鹵大王』の名がみえる。これは倭王武にあたる雄略天皇をさすと考えられ、5世紀後半には大王の支配権が九州から東国までおよんでいたいたことがわかる。」

C、1994年度「埼玉県稲荷山古墳の鉄剣などに見られる銘文は、5世紀後半頃、すでに和音にあわせて、漢字を使いこなせるようになっていたことを示している。」

D、1994年度「5世紀後半ころには、埼玉県稲荷山古墳や熊本県江田船山古墳から出土した鉄剣・大刀の銘文に「獲加多支鹵大王」というように大王号がみえており、大王家が他を圧倒する地位を得ていたことがわかる。」

E、1995年度「倭王武がのちに雄略天皇とよばれたワカタケル大王である可能性は高い。埼玉県稲荷山古墳と熊本県江田船山古墳から、この大王に仕えた豪族のことが銘文として刻まれた鉄剣と大刀が発見されたており、ワカタケル大王の時代に大和政権の勢力圏が関東地方と中部九州にまで及んだことを推定させる。」

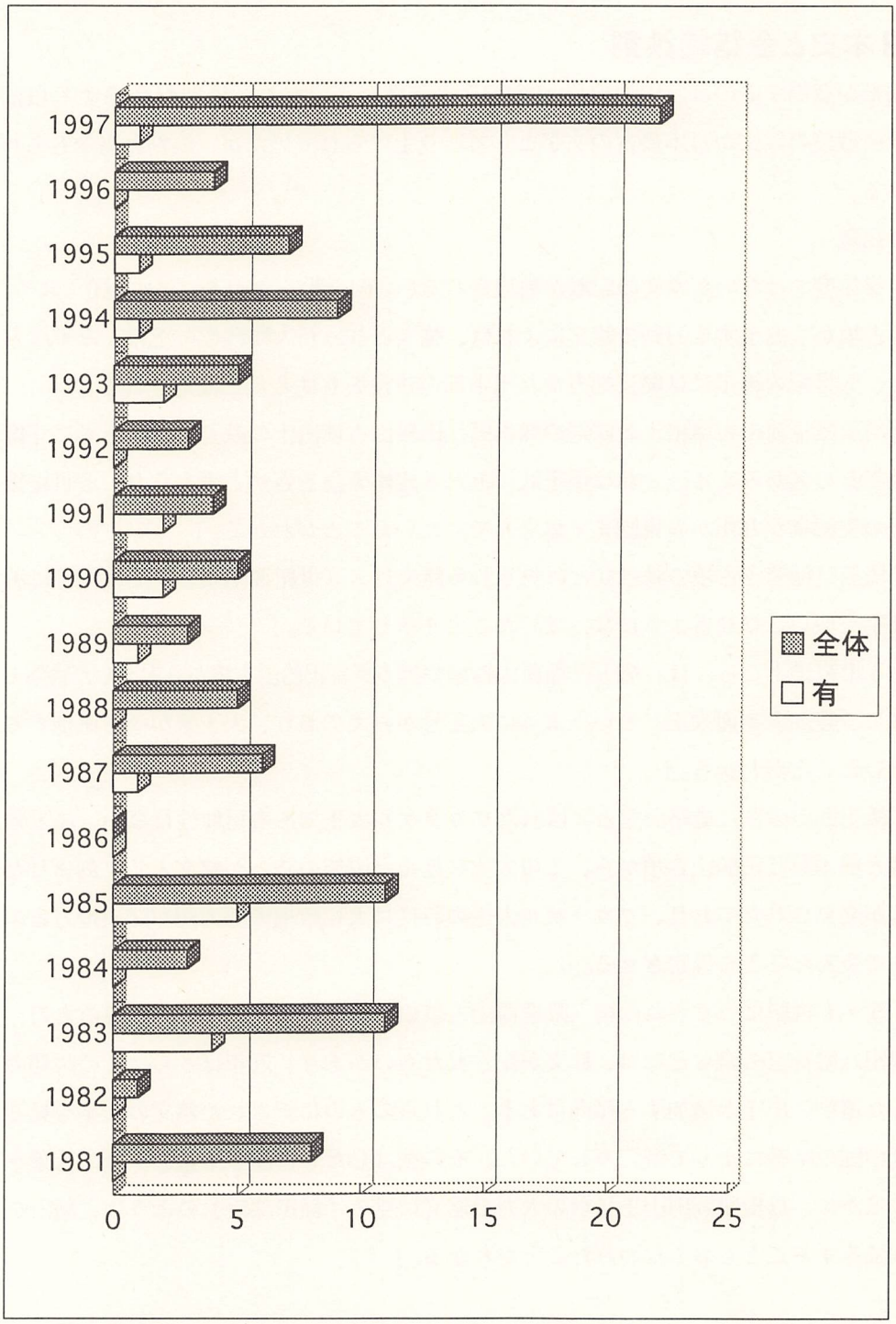
F、1997年度「5・6世紀につくられた埼玉県稲荷山古墳の鉄剣、熊本県江田船山古墳の大刀、和歌山県隅田八幡神宮の鏡などには、銘文が記されたものがあり、近年はさらにこの時期の文字を記した遺物の出土が増加する傾向にある。これらのものに記された銘文の文字を見ると、当初は中国の字音によって音読みしていた。その後はしだいに漢字で音をかりて言葉をしたもののほかに、島根県岡田山1号墳の大刀の銘文に見る「額田部臣」のように、額田をヌカタと訓読みすることもおこなわれたことがわかる。」

1997年度版は本文に記されている件数は９件と高い数値をしめしているが、それ以前の内容が重複している例が多いので省いた。

記載内容は鉄剣銘文に歴史的評価をし、在地豪族説を採用し、大和政権の支配範囲の拡大示す資料として扱うものと、最古の日本語の資料として扱う二者に鮮明に分かれる。

（２）本文注の内容

高校日本史では小・中ではみられなかった注が設けられている（第15図)。その内容についてみ



第15図　高校日本史・本文注の記載数

てみよう。

A、1983年度「埼玉県行田市の稲荷山古墳の鉄剣銘に『獲加多支鹵大王』とあり、熊本県菊水町江田船山古墳の大刀銘に治天下獲□□□鹵大王世……」とあるのは、倭王武にあたる雄略天皇をさすので、これらの古墳にほうむられた人びとが、大和政権と密接な関係をもっていたことがわかる。」

B、1983年度「埼玉県稲荷山古墳から出土した鉄剣は471年につくられたと考えられ、この鉄剣をつくった東国の豪族は獲加多支鹵（ワカタケル）大王の宮に仕えていたと推定される。なお、熊本県江田船山古墳から出土した鉄刀の銘にみえる『獲□□□鹵大王』も同じワカタケル大王と考えられ、このころ大和王権が東国から九州にいたる小国の首長をしたがえていたことが推定される。」

C、1983年度「埼玉県行田市の埼玉古墳群の稲荷山古墳から出土の鉄剣銘に「獲加多支鹵大王」（雄略天皇・倭王武か）とあるのは、大和政権の勢力がすでに関東にまでおよんでいたことを推測される。」

D、1983年度「漢字使用のもっとも古い例として、熊本県江田船山古墳出土の大刀、埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣、和歌山県隅田八幡神社蔵の銅鏡などの銘文がある。稲荷山鉄剣にきざまれた115文字の金象嵌の銘文中、『辛亥年』を471年とし、『獲加多支鹵大王』をワカタケルノオオキミと読んで雄略天皇にあてる説が有力である。」

E、1985年度「熊本県玉名郡菊水町の江田船山古墳出土の大刀銘には『治天下獲□□□鹵大王世…』とあり、埼玉県行田市の稲荷山古墳出土の鉄剣銘にも『獲加多支鹵大王』とある。『大王』は、倭五王の１人武、記紀（『古事記』『日本書紀』）ワカタケルの名で記録された雄略天皇をさすと考えられる。これらの大刀や鉄剣をもつ古墳の被葬者は、大和政権と密接な関係にあったと推測される。」

F、1993年度「和歌山県の隅田八幡神社に伝わった人物画像鏡には、大王の称があり、また、埼玉県の稲荷山古墳や熊本県の江田船山古墳から出土した刀剣の銘文から、５～６世紀ごろ、地方の首長が特定の職務をおびて大和王権に仕えたようすがうかがわれる。」

これ以降は各出版社ともほぼ同じ内容の注を掲載している。また、注では大和政権と地方豪族との関係での解説が多く、「密接な関係」、「したがえていた」、「勢力がおよんでいた」、「特定の職務をおびて大和王権に仕えていた」など、より歴史的評価をしている点が特徴である。

（３）別枠の内容

本文中に別枠を設けてさらに詳細に解説をしている教科書は13件存在する。しかし、同一出版社による数年度にわたる同一内容の掲載もあるので、実質的には６件ということができる。その内容の概略を紹介しよう。

主題学習－漢字使用最古の遺品　隅田八幡神社の鏡と江田船山古墳出土の大刀が漢字使用の最古の例であり、大刀銘文の冒頭部分をタジヒノミヤニミズハノオオキミと読み、反正天皇と推定していたが、稲荷山古墳から出土した銘文には「辛亥年」471年、「獲加多支鹵大王」と記されていることから、江田船山古墳の大刀銘も「獲加多支鹵大王」と読むべきだとする説が強まった。「とすれ

ば、漢字使用の最古の遺品がいま一つふえるとともに、5世紀後半には大和政権の支配が、少なくとも西は熊本県から東は埼玉県にまでおよんでいたことになる。」とある。

古代史の再発見　1ページを割いて詳細に解説している。その内容は以下のとおりである。

1、わが国形成される過程は記紀などに記されているが、記述に史実性を認めるには裏付けが必要なこと。

2、金石文や木簡のなどの新発見は、記紀の史実性が確認されたり、従来まったく知られなかった新知識をもたらしてくれる。

3、発見の経緯

4、銘文の内容　①115文字は飛鳥時代以前の金石文中最大であること、②辛亥年（471）の年が紀があること、③孝元天皇の皇子と推定である大彦命と思われる「意富比垝」の名がみえること、④倭王武すなわち雄略天皇と推定される「獲加多支鹵大王」の名が記されていること。

5、③については異論も少なくなく、大彦命は崇神天皇のときに四道将軍の一人として北陸に派遣されたと伝えられているが、この伝承が稲荷山鉄剣銘によって史実であると証明されたとする説と、それを認めない説とがある。しかし、記紀編纂より二百数十年前、すでに関東の人々が、「意富比垝」なる指導者を自分たちの先祖だと信じていたことは確かであること。

6、稲荷山鉄剣の発見により、江田船山古墳の大刀銘も「獲加多支鹵大王」と読みなおして雄略天皇にあてることができ、雄略天皇の勢力が東は武蔵、西は肥後におよんでいたことが裏付けられ、倭王武の上表文からもその勢力がひろくおよんでいたと考えられるようになった。

7、稲荷山古墳出土の鉄剣銘は古代史の再発見に重要な手がかりをあたえてくれた。

テーマ学習　115文字の発見　1ページを割いて解説している。その内容は、①稲荷山古墳と副葬品の概要、鉄剣の形状、②発見の経緯、③銘文の概略、ただ、雄略天皇は斯鬼宮にいた記録がないことなどから、これを疑問視する説もあること、④これまでに発見された金石文は、いずれも西日本で発見されもので、東日本でははじめてで、かつこれまでに発見されたもののどれよりも長く、内容が豊富であり、史料の乏しい東日本の古代史を研究するうえで、重要な史料として注目される。

ワカタケル大王の時代　①副葬品の概要と副葬品から馬に乗る武人が想定される、②発見の経緯、③銘文の概略、④この鉄剣の銘文が解読されたことにより、江田船山古墳の大刀銘文の大王もワカタケル大王と解読された、⑤こうしたことから、東国と九州の豪族がワカタケル大王に仕えていたことが明らかになり、大王が東は東国、西は九州中部にいたる広い範囲を支配していたことが推定される。

鉄剣は語る　①発見の経緯、②銘文の概要、③この鉄剣の銘文の発見により、江田船山古墳大刀の王名も「獲加多支鹵大王」とよめるようになった、④こうしたことから5～6世紀には大和王権が、東国から九州の豪族を支配していた事実が明らかになった。

銘文の語る歴史－115文字の大発見　①6世紀以前の金石文の紹介、②銘文の概要、③1987年発見の千葉県市原市稲荷台1号墳出土の「王賜」銘鉄剣は、稲荷山鉄剣より古い5世紀中ごろ以前で、「王」を畿内の倭王とみるか、東国の有力首長とみるかの見解は分かれているが、5世紀ころの東国を研究する貴重な資料となった。④稲荷山鉄剣の銘文の解読がきっかけになって、江田船山古墳

銘文の語る歴史 —115文字の大発見—

6世紀以前の金石文としては，福岡県志賀島の金印，奈良県東大寺山古墳出土鉄剣の銘文，同県石上神宮の七支刀の銘文，熊本県江田船山古墳出土鉄刀の銘文，和歌山県隅田八幡宮の鏡の銘文などが知られていた。いずれも西日本で発見されたり伝えられたものである。

そのため東日本の古代史資料の発見が望まれていたが，1978(昭和53)年，発掘後11年たった鉄剣のさび落しの過程で，剣に刻まれ金線をはめ込んだ(金象眼)115の文字が発見された。

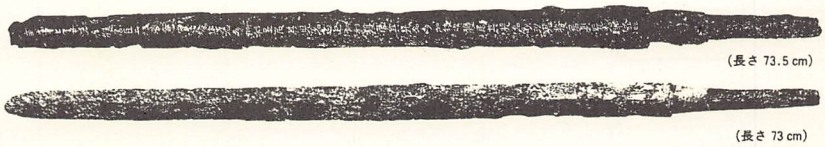
その鉄剣は，埼玉県行田市の稲荷山古墳(全長120mの前方後円墳)から発掘されたもので，銘文は「辛亥年七月中記」ではじまり「乎獲居臣の系譜」や「乎獲居臣が獲加多支鹵大王の斯鬼宮に仕えていること」などをしるしてあった。出土した副葬品から，辛亥年は471年で，獲加多支鹵大王は雄略天皇(倭国王武)であると考えられる。

1987年には，千葉県市原市の稲荷台1号墳(直径27.5mの円墳)から発掘された鉄剣に，「王賜」ではじまる銀象眼の12文字が確認された。この古墳は，副葬品の須恵器から5世紀中ごろの築造と推定され，鉄剣の製作時期は5世紀中ごろ以前ということになった。「王」を畿内の倭王とみるか，東国の有力首長とみるかの見解は分かれているが，これも5世紀ころの東国を研究するための貴重な資料となった。

稲荷山鉄剣の銘文の解読がきっかけとなって，1873(明治6)年に発掘された熊本県の江田船山古墳(全長61mの前方後円墳)の鉄刀の銀象眼の銘文にも，「獲□□□鹵大王」の名が見えることが確認された。

これらの銘文によって，5世紀後半の雄略朝に畿内の王権の勢力が関東地方や九州地方中部にまで及んでいたことは確実となり，倭国王武の上表文に見える状況に対応していることがわかった。

→P.20



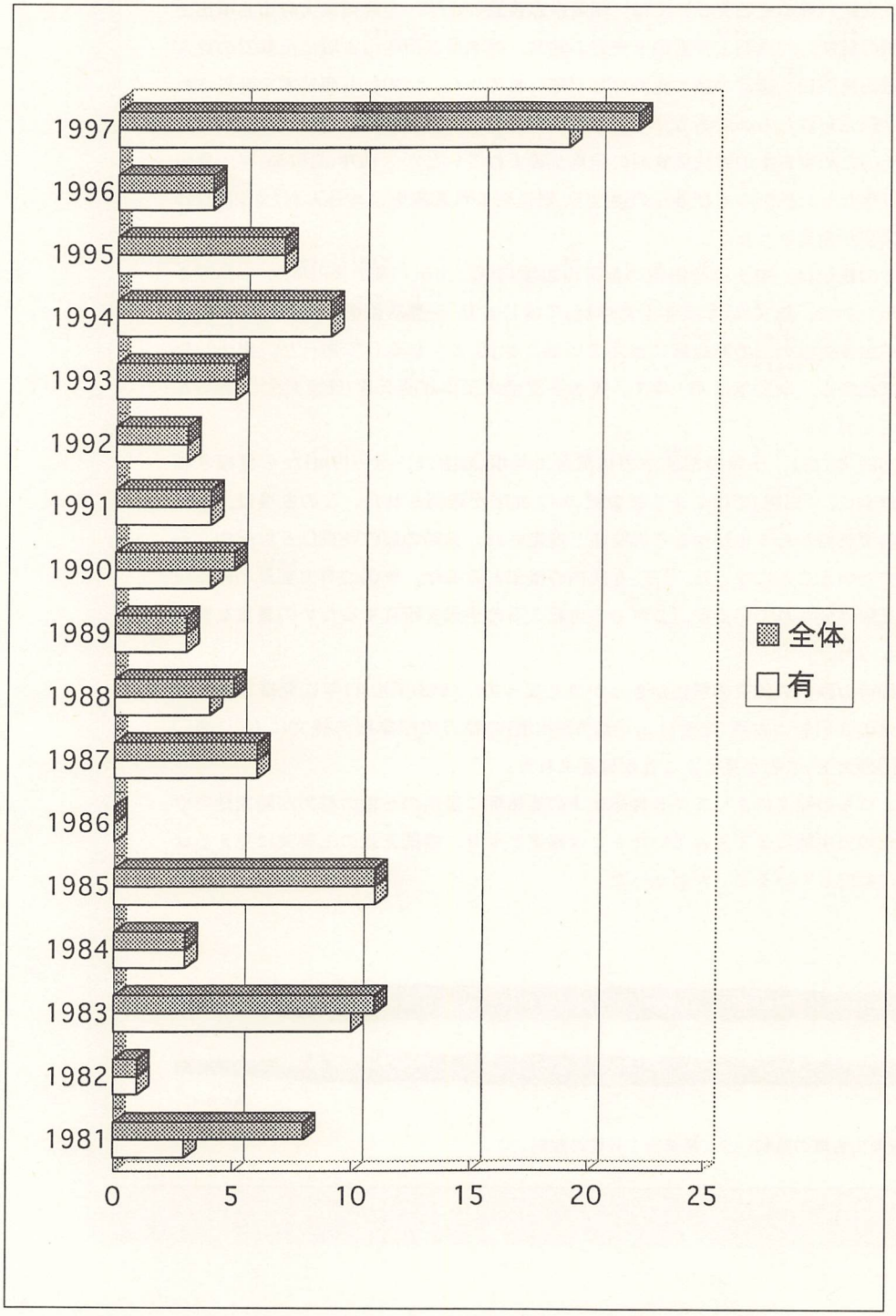
▲稲荷山古墳の鉄剣(上)と稲荷台1号墳の鉄剣(下)

第16図　別枠掲載例（高校日本史B・帝国書院）

の大刀銘文も「獲加多支鹵大王」であることが確認された。⑤これらの銘文によって、5世紀後半の雄略朝に畿内の王権の勢力が関東地方や九州地方中部まで及んでいたことは確実になり、倭王武の上表文に見える状況に対応していることがわかった（第16図）。

（4）鉄剣写真の掲載

第17図をみてもわかるように、1881年度版では8件中なか3件とその割合は少ないが、それ以降は100%に近い掲載である。また、高校日本史では隅田八幡神社蔵の銅鏡の写真もあわせて掲載

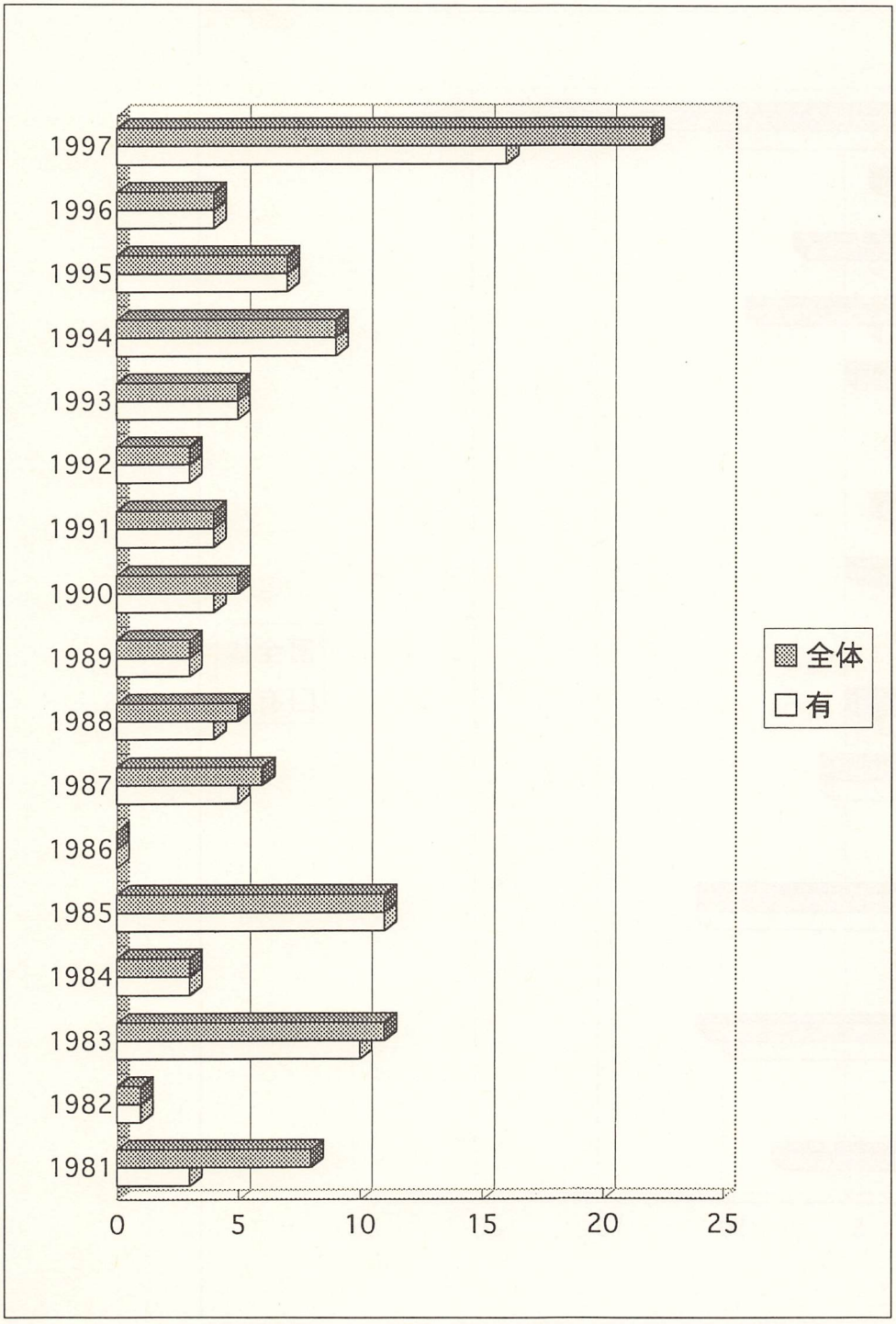


第17図　高校日本史・鉄剣写真掲載数

している教科書が大半であり、さらに江田船山古墳出土大刀の写真も掲載しているものもある。

（5）資料説明

高校日本史ではこれまでみてきたように、本文注や別枠を設けて詳細に解説しているが、その他に掲載した写真に簡単な説明を加えている。第18図のように何らかの説明を加えている。その内容は「獲加多支鹵大王」＝「雄略天皇」と考えられること、また漢字使用の最古の例であること、また注などで詳細な解説を加えていないものは、この時代には大和政権の勢力が東国から九州中部まで及んでいたという歴史的評価もつけ加えている。



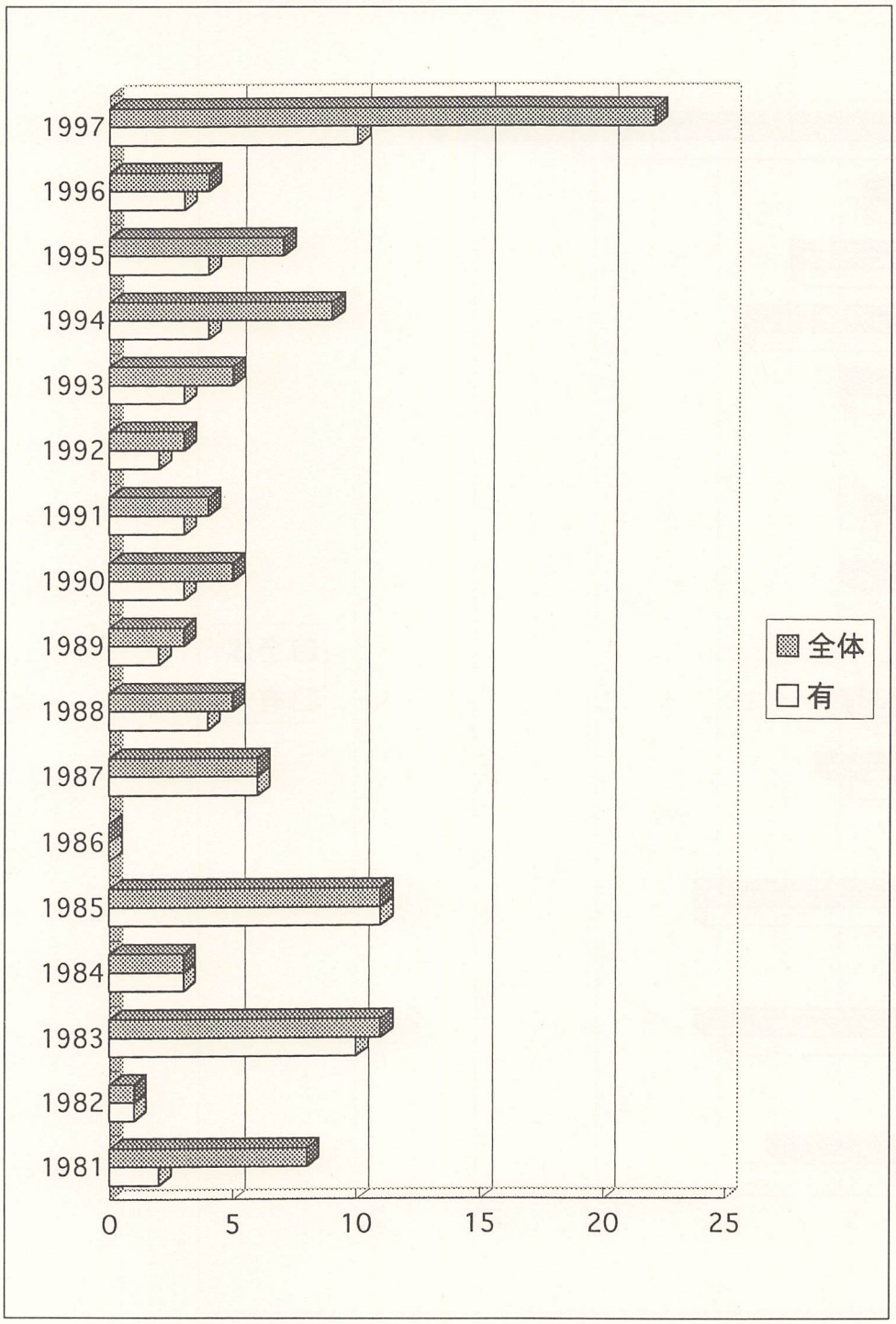
第18図　高校日本史・鉄剣資料説明数

（6）製作年代の記載

製作年代が記されている教科書は第19図のとおりである。大半のものに記されているとみてよい。ほとんどの教科書が辛亥年471年説を採用しており、2教科書が471年が有力であるが、531年説もあることを紹介している。

（7）鉄剣の扱われ方

稲荷山鉄剣は115文字という長文で、内容も豊富であることから、高校日本史では第20図に示し

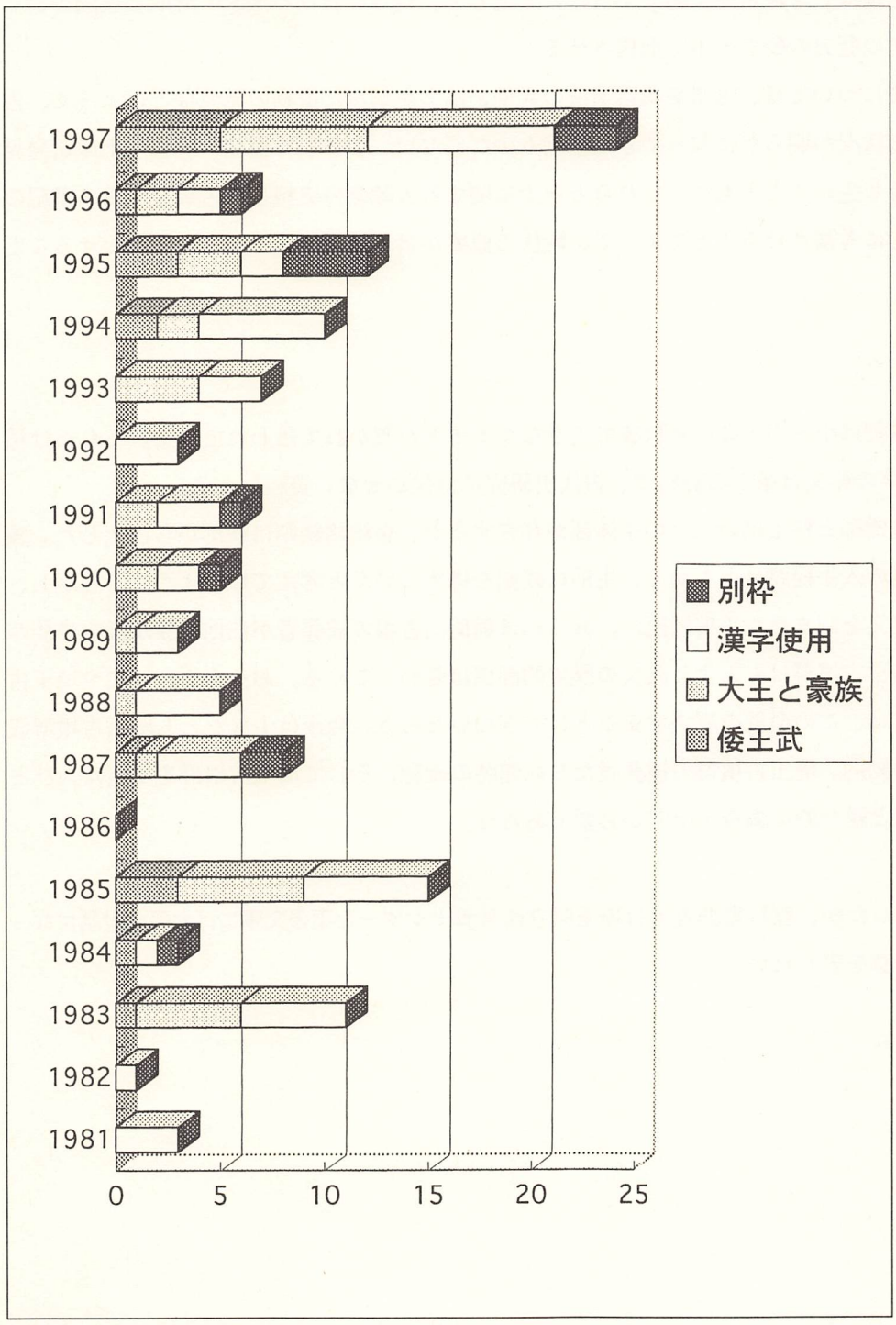


第19図　高校日本史・製作年代記載数

たように倭の五王の一人である武との関係、大王と地方豪族との関係、漢字で日本語を表記した最古の例のひとつとして、重複して説明しているようすがわかる。

（8）その他

小・中の教科書では、古墳の写真と稲荷山古墳の位置が明示された分布図が掲載されていたが、高校日本史では古墳の写真を掲載したものは、1社の教科書のみで、分布図の掲載は一切ない。



第20図　高校日本史・取り扱われ方

参　考

高等学校学習指導要領解説　地理歴史編　日本史Ｂ　平成元年12月

ア　国家の形成と大陸文化の摂取

古墳文化の特色や大陸文化の摂取と日本に渡来した人々の果たした役割などに着目して、日本における国家の形成過程を理解させる。

ここでは、古墳文化と国家の形成の過程を中心に扱う。その際、古墳文化に表れた各地における政治勢力の形成、大陸から渡来した人々による文字や各社の技術など大陸文化の伝来とその受容、大和朝廷の成立過程などを総合的に考察することを通して、日本における国家の形成と展開を、この時代の東アジアの歴史の動きの中で把握させる。

この時代の歴史については、古墳や集落遺跡の発掘、銘文を刻んだ遺物の発見などによって、古代の国家や文化の状況が明らかになってきた事例も少なくない。こうした種種の考古学上の新発見を教材として指導し生かすとともに、これらと日本に関する大陸側の史料及び古事記、日本書紀の記述などを総合的に考察させることによって、時代の概要がほぼ把握できることに気付かせることが大切である。

まとめ

以上、稲荷山鉄剣は小・中・高の教科書で大きなウエイトが置かれて扱われている。それだけ稲荷山鉄剣の115文字の銘文は第１級資料で、古代史研究には欠かせない資料いえる。

稲荷山古墳には礫槨と粘土槨の二つの主体部が存在するが、金錯銘鉄剣は礫槨から出土した。礫槨の被葬者は鉄剣の入手経路はともかく、生前に鉄剣を携えていたと考えていいようだ。しかし、鉄剣をつくらせ銘文を刻ませた乎獲居臣が、あるいは稲荷山古墳の被葬者が在地豪族か畿内豪族か否かによって、埼玉古墳群はもとより銘文の歴史的評価は変わってくる。おそらく、銘文や埼玉古墳群だけの研究では、この命題を解決することはできないだろう。今後は少なくとも埼玉古墳群成立以前の北武蔵の動向、埼玉古墳群の被葬者たちの館跡の確認、そして埼玉古墳群を支えた人びとの集落跡の確認など総合的な調査・研究が必要であろう。

なお、最後になったが、教科書調査では埼玉県立南教育センターと東書文庫には大変お世話になった。記して感謝の意を表したい。

企画展「古墳時代の馬の装い
－さきたまに馬がやってきた!－」の記録

岡　本　健　一

はじめに

平成９年10月14日(火)から12月７日(日)まで、県立さきたま資料館では、将軍山古墳整備事業完成記念企画展「古墳時代の馬の装い－さきたまに馬がやってきた！－」を開催した。私にとっては初めての本格的な企画展で、わからないことも多々あったが、多くの方々の御協力でなんとか無事開催することができた。この企画展では、古墳時代の馬具を中心に展示を行い、当時の馬文化について理解をしてもらう一方、本物の馬を登場させて馬具の複製品をつけ、さらにその馬に乗ってもらうという、前代未聞のイヴェントまで飛び出した。会期中の約３万人の入館者からは、概ね好評であった。

本稿では、準備から資料搬出までの慌ただしかった毎日をふりかえり、反省の念もこめながら、この企画展の意義と今後への課題について、報告方々記しておきたい。また、出品を快諾いただいた各機関や、佐島牧場に深く感謝いたします。

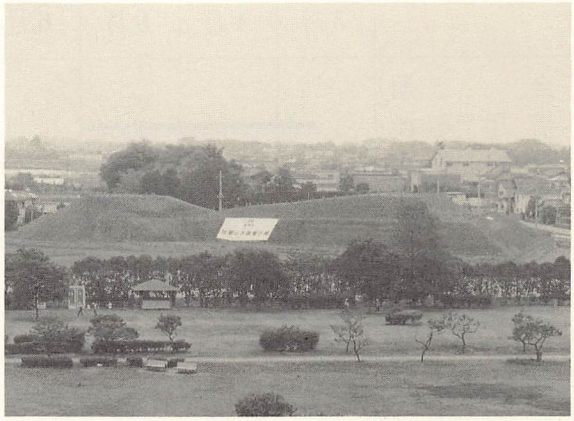
１　企画展の開催に至るまで

埼玉将軍山古墳は1894年に地元の人々によって発掘され、後円部の横穴式石室からは多くの遺物が出土したことで古くから知られていた。その後、墳丘の半分以上が失われて、崖面などの崩壊が危惧されていたことから、平成４年度より保存修理と古墳の活用の両面から整備事業を開始し、平成８年度に完成した。

墳丘や堀はできる限りの範囲で復元を行い、墳丘上には埴輪の複製品を並べて、当時の偉容を再現した。また後円部には、墳丘の欠損した部分を補完する形で「将軍山古墳展示館」を建設し、埋葬当時のようすをイメージした石室をそのまま公開し、古墳についてのガイダンスを行うようにした。このユニークな手法は全国的にも注目され、開館を待ち望む声が日増しに高くなっていた。

このような情勢のなかで、将軍山古墳の整備事業が完成した記念に、企画展を開催しようという意見が生じてくるのは、自然ななりゆきだったと言えるだろう。

将軍山古墳の副葬品の中で、全国でも出土例が少ない馬冑や旗ざおを含めた馬具類は、この古墳の特異性を示すものとされている。企画の段階で作成した開催要項には、開催趣旨について次のように記した。



完成した将軍山古墳整備事業

史跡埼玉古墳群の将軍山古墳に展示館を建設したのを記念して、将軍山古墳の出土品で特に注目される馬具にスポットを当てて展示を行う。

馬に乗る風習は、古墳時代になって大陸からもたらされたもので、きらびやかな馬具は権力の象徴であるとともに、当時の金工技術の最先端を示すものである。埼玉古墳群では稲荷山古墳と将軍山古墳から優れた馬具が出土しているが、馬との関わりが希薄な現代人にとっては難解な資料である。そこでこれらの古墳の馬具の解説を基本にして、埼玉県内外の馬具だけにとどまらず、馬にまつわるさまざまな資料を展示することにより、馬と人とのつきあいの始まりの様子を再現しようとするものである。

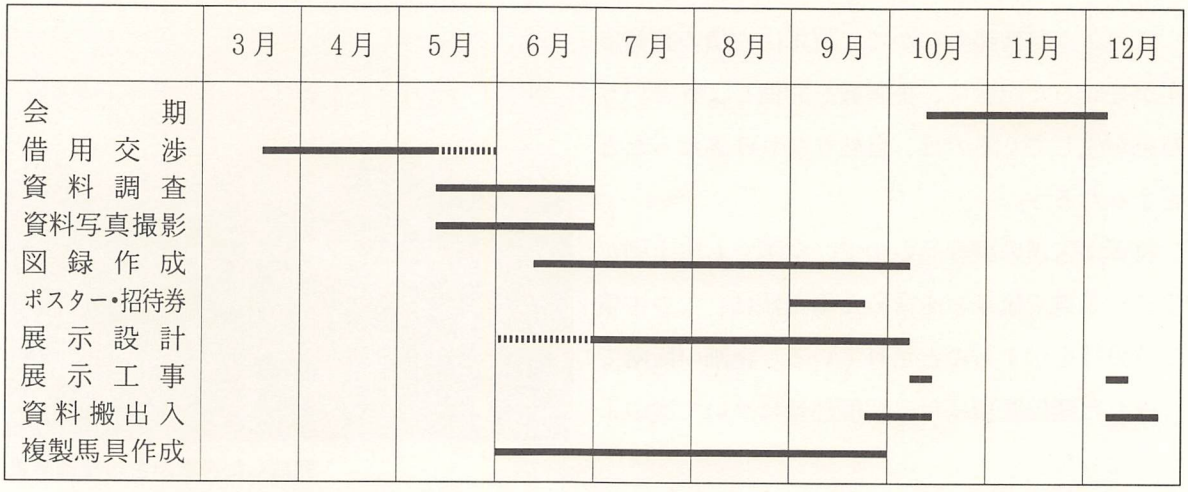
平成９年４月29日、ついに将軍山古墳展示館がオープンし、連日大勢の人々でにぎわうこととなったのである。

企画展開催までの日程は、表１のとおりである。企画展の準備を開始したのは、もう３月も終わる頃であったが、４月には将軍山古墳展示館の開館準備もあって、なかなか軌道に乗ることはできなかった。５月に入って、やっと本格的に出品交渉や資料調査を始めたのである。結果的には、各機関の御厚意があって、ほぼ順調に進んでいったのであるが、やはり早めに準備を開始するに越したことはなかろう。

７月には学芸員実習の担当（実習生が行う古代劇の脚本、演出、主演の３役をこなさなければならない）のため、一時企画展準備も停滞したが、なんとか開催までこぎつけることができた。とくに田中学芸員の献身的な(?)協力のお陰で、ポスターや招待券などの印刷や資料展示作業などが滞りなく進んだことに、深く感謝したい。なお、この時期には後述するように、複製馬具や本物の馬の借用などの諸事もあり、多忙を極めたことは言うまでもない。

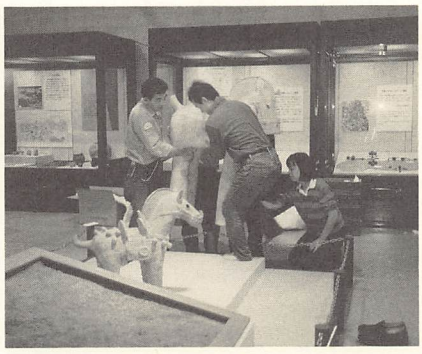
10月14日、かくして企画展「古墳時代の馬の装い－さきたまに馬がやってきた！」は盛大に開幕したのであった。

企画展「古墳時代の馬の装い－さきたまに馬がやってきた！」にむけて



ポスター

梱包風景



展示作業風景

2　展示の内容

【展示の構成】

開催趣旨で述べたように、今回の企画展では古墳時代の馬の文化について、わかりやすく展示することを第一に考えた。馬具だけではなく、その背景にある馬文化全般にわたって理解してもらうような展示をめざして、次のようなストーリーを組んだ。

序　日本に馬がやってきた！

現代では特別な存在になってしまった馬。しかしつい最近まではごく身近な動物だった。その馬がいつ日本にやってきたのか。どんな馬だったのか。素朴な疑問から出発して、古墳時代の馬の世界へ、入館者を誘っていく。

Ⅰ　さきたま古墳群出土の馬具 －稲荷山古墳と将軍山古墳－

埼玉古墳群のうち、稲荷山古墳と将軍山古墳からは見事な馬具が出土している。それは古墳時代にこのさきたまにも馬がやってきた証拠。身近な遺物から、馬に対する興味を喚起する。

Ⅱ　馬を飼う人々

馬がやってきたからには、馬を飼う人々もいたはず。大阪で見つかった馬飼集団の遺跡を中心に、馬飼いの人々のくらしにスポットをあてる。

Ⅲ　古墳時代の馬の造形

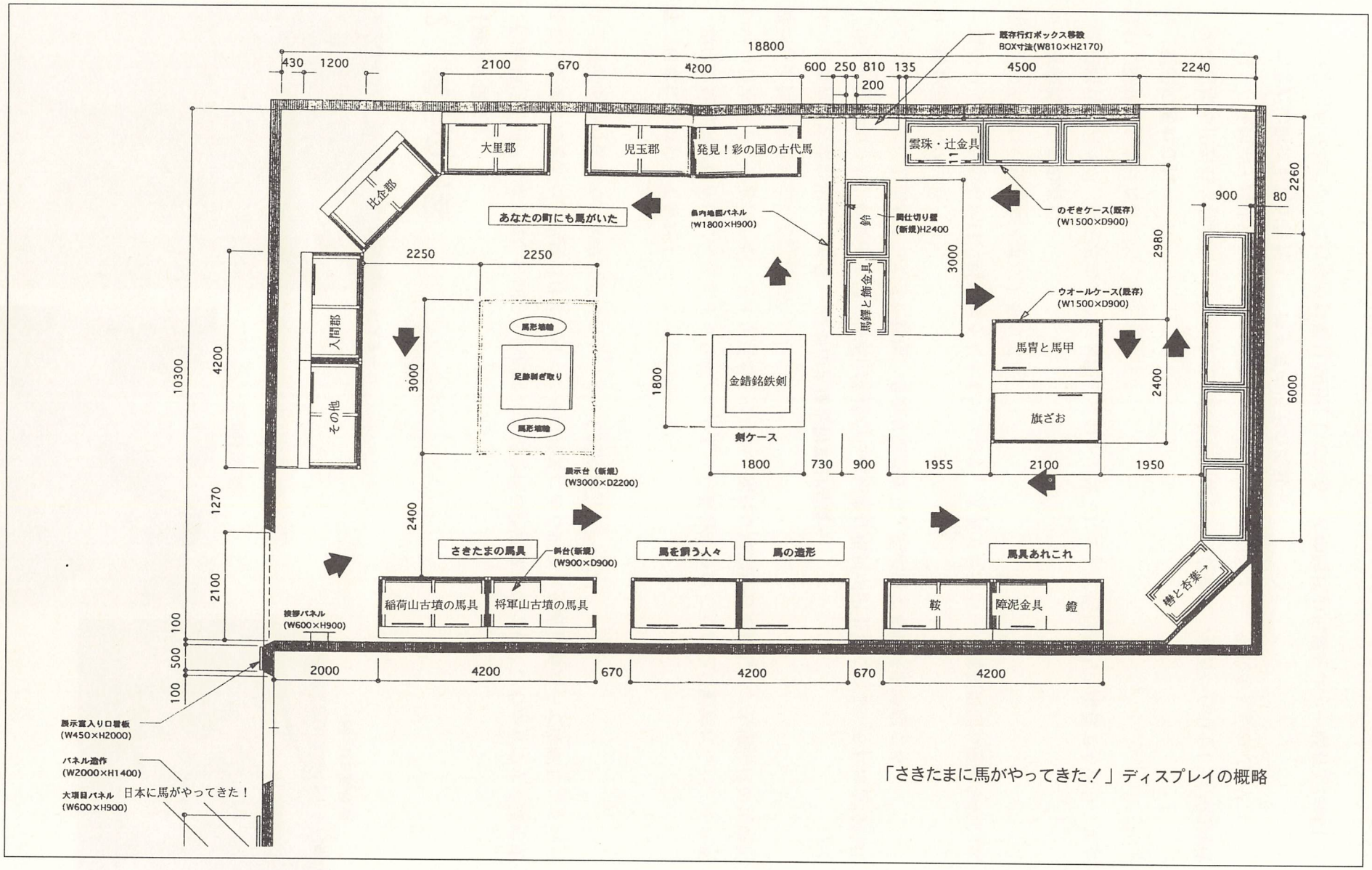
古墳時代の人々が、馬をどのように表現したのか。彼らにとって馬は権力の象徴でもあり、また憧れの動物でもあった。

Ⅳ　馬具のあれこれ

後期古墳の代表的な副葬品で、馬の文化を最も端的に表すのが馬具。全国から出土した古墳時代の馬具を、種類別・時代別に並べる。当時の金工技術の水準の高さは、現代をもしのぐ。

Ⅴ　あなたの町にも馬がきた！ －埼玉県内出土の馬具－

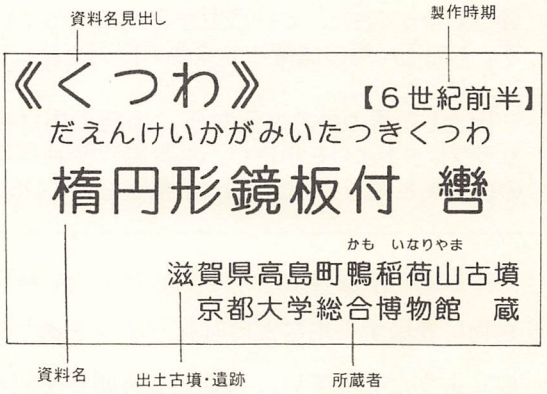
埼玉県内からも、こんなに多くの馬具が出土している。古墳時代の馬具をより一層身近に感じてほしい。



「さきたまに馬がやってきた！」ディスプレイの概略

当資料館の入館者をみると、約半数を小学生が占めており、また考古学にはそれほど興味がなくても、古墳公園に遊びにきたついでに立ち寄っていく人も多い。逆に古代史のメッカとして、遠くからわざわざ展示を見に足を運んでくれる人も多いのが事実である。従って、さまざまなニーズに応えるような展示パネルが必要なのであるが、今回は試みに2種類のパネルを作成することにした。一つは一般向きの「教科書的」な文体のもの、もう一つは、一層かみくだいた文体のもの（バグジー君というキャラクターに語らせる形の、「おしえて！バグジー君」シリーズ）である。後者だけを読んでも展示内容が理解できるように留意している。なお、さらに詳しく知りたい人には、展示図録をお薦めした。

資料に付けるキャプションは、機能別に地色を分けて作成してみた。轡－水色、杏葉－ピンク、鞍－だいだい、鐙－緑、雲珠－黄、鈴・飾金具－青、その他－白とした。馬具はその部位だけを見ていても、理解されにくい資料であり、常に馬のどの部分に付けて使ったのかを意識してもらいたいという意図から、色分けを行ってみたのである。

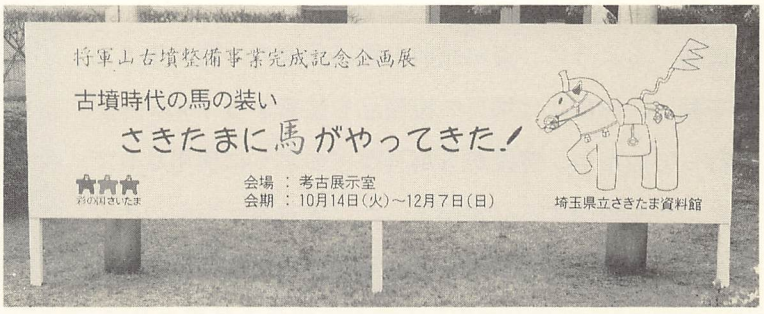


キャプションの一例

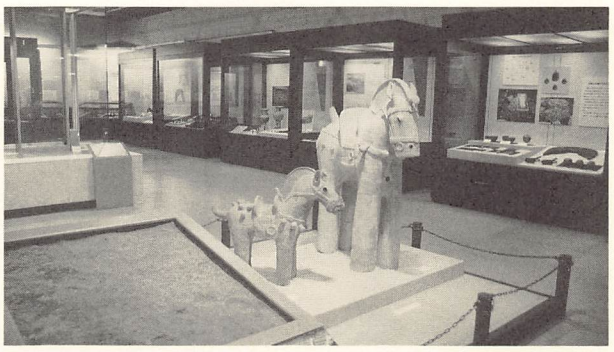
また、馬具の資料名は難しい漢字が並ぶことがあり、ルビをふっても敬遠されがちである。従って見出し的に、キャプション左上に《くつわ》とか《あぶみ》などと表示して、どの部位なのかを単純明快に示した。さらに、その資料が作られた時期についても、おおよそ記しておき（研究者によって製作時期については見解が異なるが）、馬具の変遷を知りたい人に対して情報を提示した。

それでは、企画展「古墳時代の馬の装い－さきたまに馬がやってきた！」の会場へ、ご案内いたしましょう。

県道入口看板



受付入口看板


展示室のようす

【序　日本に馬がやってきた！】

倭国に馬がやってきた！
ー其の地に牛・馬・虎・豹・羊・鵲無しー

いわゆる魏志倭人伝に記された、３世紀の倭（日本）のようすです。

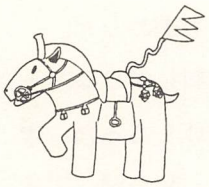
考古学では、縄文・弥生時代の貝塚から馬の骨が出土することから、このころすでに馬がいたといわれてきました。しかし、最近では馬骨の科学分析の結果から、馬は古墳時代になって海を渡ってやってきた、という説が有力になっています。もちろん馬の飼育法や乗馬の技術を身につけた人々とともに。

出土した馬の骨の復元から、当時の馬は今のサラブレットよりも小さく、木曽馬や御崎馬などの在来馬と同じくらいだったと推定されています。

ーおしえて！バグジー君ー
日本にはいつ、馬がきたの？

こんにちは。ぼくのなまえはバグジー。みんな馬は好き？馬はいつから日本にいると思う？実は今から約1600年前、古墳時代になって、朝鮮半島というところから、わたってきたといわれているんだ。もちろん馬をかう人たちといっしょにね。

馬って、力持ちで、足が早くて、おとなしくて……すごく役に立つ動物なんだよ。今の自動車っていったところかな。



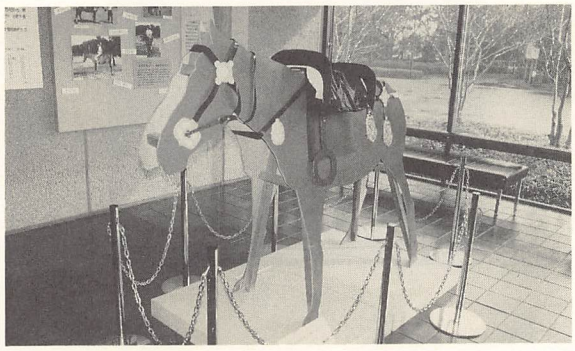
考古展示室前のホワイエで、パネルのみの展示。当初は現代の馬具を展示し、流鏑馬や絵馬、絵巻物に登場する馬などの写真パネルを通して、現代から古墳時代へのタイムトンネル的なコーナーにしようと考えていた。しかし時間と手間の関係から、現代の馬装の写真と古墳時代の馬装の写真を並べたり、当時の馬に近い御崎馬の写真を掲示したりして、現代の馬と古墳時代の馬が二重写しになるような感じを出すようにした。

また、パネルのまわりには馬に関することわざをちりばめて、馬と日本人とのつきあいの深さを暗示し、馬への意識を高めていくような演出をめざした。

しかし、このホワイエの壁という場所が悪かった。パネルの前には馬の模型が設置してあり、馬の陰に隠れてしまうのである。また、パネル専用の照明がないものだから、天気の悪い日や夕刻には、パネルが暗くて見にくくなってしまったのである。

日本に馬がやってきた

後述するように、資料館前の移築民家の中庭で生きた馬を飼い、休日には馬具の複製品を装着する「ショー」を行っていたが、普段から馬具がどのように使用されていたのかを説明する必要があった。考古展示室前のホワイエに、木製の馬を設置し（通常は移築民家の馬小屋に住んでいた）、紙などで作った自前の馬具を装着させて、入館者にまず古墳時代の馬の姿を印象付けるようにした。片面には馬具のキャプションを付けず、もう片面にキャプションを付けて馬具の名称を覚えやすいような工夫をしてみた。



馬具をつけた馬の模型

【Ⅰ　さきたま古墳群出土の馬具 －稲荷山古墳と将軍山古墳－】

さきたま古墳群から出土した馬具
－稲荷山と将軍山－

埼玉古墳群の９基の大型古墳のうち、発掘調査で副葬品がわかっているのは、稲荷山古墳と将軍山古墳ですが、いずれの古墳からも華やかな馬具が出土しています。

まずはじっくりと、これらの馬具をみてください。

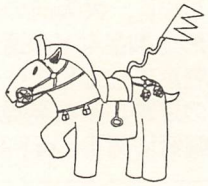
この馬具どうやって使ったの？
どんな馬につけてたの？
だれが馬を飼っていたの？
馬具にはどんな種類があるの？
馬具はどこでだれが作ったの？
私の住んでる町にも馬具はあったの？

疑問が次々わいてきませんか。

－おしえて！バグジー君－
これ、なーに？

ここにあるのは、さきたま古墳群からみつかった、馬具というものだよ。馬具とは馬にのるためにつける道具のこと。古墳には、亡くなった人といっしょに、馬具をおさめることが多かったんだ。

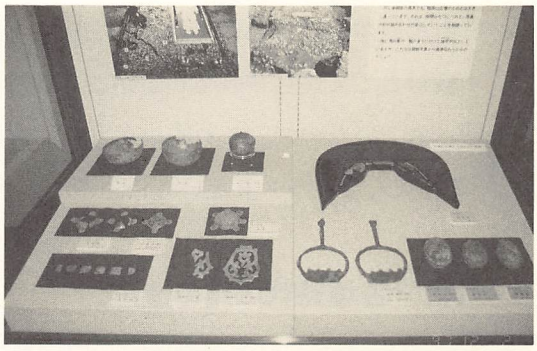
いろんな形のものがあるだろ。どうやって使ったのかって？とりあえず、これらの馬具のかがやきを目にやきつけてから、ゆっくり展示を見てってよ！



このコーナーをどこにもってくるか、悩むところであった。「Ⅴ　あなたの町にも馬がきた！」の中に含めることもできたが、今回の企画展は将軍山古墳の整備事業が完成したことを記念して開催することから、埼玉古墳群から出土した馬具は、トピックス的に扱うのがよいと考えた。とくに稲荷山古墳の馬具は国宝に指定され、かつ一式すべて揃っていることから、馬具についてのガイダンス的な役割も持たせたかったのである。

稲荷山古墳の馬具

稲荷山古墳から出土した国宝の馬具は、すべて当館で保管していることもあって（所蔵は文化庁）、一式すべてを展示することができる。その利点を生かし、馬具の使用法が明確になるように、展示台に馬形を切りぬいたフェルトを敷いて、轡は口に、杏葉はお尻にというように、使用されていた場所に並べて展示した。入館者からは、とてもわかりやすいとの評価を得た。



将軍山古墳の馬具

さて将軍山古墳の資料は、現在では当館の他に、東京大学や東京国立博物館、本庄市教育委員会などに収蔵保管されている。将軍山古墳の馬具を最も多く収蔵している東京国立博物館が、展示館改築のために貸出しを停止していることから、すべてを揃えることができなかったが、幸い、埼玉県立博物館に複製品が何点か収蔵されているので、それを借用させていただいた。

説明パネルは、少々強引な誘導尋問のようだとの指摘もあった。

【II　馬を飼う人々】

馬を飼う人々

馬がやってきたからには、馬を飼う人と牧場がなければなりません。

古墳時代の牧場については、文献による手がかりがなく、また発掘調査でも、馬を飼っていたと判断できるような遺跡にめぐりあうことは、非常に稀です。

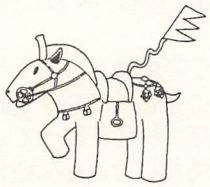
しかし、大阪府の生駒山西麓では、馬の骨や馬形土製品などの遺物が、渡来系の遺物とともに豊富に出土したり、群馬県の白井遺跡群では馬の足跡が多数発見されるなど、古墳時代の馬の飼育に関する資料は増えつつあります。

－おしえて！バグジー君－

だれが馬をかっていたの？

古墳時代に、どこでだれが馬をかっていたのかは、実はよくわからないんだ。でも大阪のある遺跡では、馬をかっていた人たちが、いのりをささげていたと思われるあとが見つかっているんだよ。

この遺跡からは、朝鮮半島の土器と同じものが出土しているので、海をこえてやってきた人たちが、馬をかっていたんだろうね。



馬を飼う人々

ここで目を転じて、馬の文化を陰で支えていた、馬飼い集団の人々のくらしにふれてみた。大阪府四条畷市では、馬の骨や歯とともに、製塩土器や渡来系の土器、土製の馬形や人形などが出土する遺跡が多い。奈良井遺跡では、馬飼いにかかわる祭祀が行われたと思われる、方形の区画溝などが検出されている。

これらは、文献に表れる河内馬飼首の本拠地と考えられ、馬の飼育に渡来系の人々が深く関わったことを示す資料である。馬の頭骨の他、須恵器や渡来系土器、製塩土器（馬に与える塩を作る土器）、土製馬形・人形を展示した。また四条畷市教育委員会から借用した、奈良井遺跡の復元イラストパネルを掲示し、見学者の理解を促した。

群馬県の白井遺跡群では、火山灰の下から馬の蹄の跡が多数出土している。これは馬の放牧を示す資料として注目されているが、この蹄跡をはぎとったパネルが群馬県埋蔵文化財調査事業団に収蔵されていたので、これを借用した。展示室の入口正面に斜めに設置したが、物珍しさも手伝って、「これなんだろう？」という目で多くの人々の注意を惹いていた。

【III　古墳時代の馬の造形】

古墳時代の馬の造形

弥生時代には、土器や銅鐸などに描かれた動物は鹿が多く、確実に馬を表現したものはありません。日本で馬の造形ものがあらわれるのは、輸入品を除いて5世紀以降ですが、それは馬具が広く普及するのと同じ時期にあたります。

馬形の埴輪はあまりにも有名ですが、他に滑石製品、土器(須恵器)の飾り、冠の飾り、大刀の象嵌、古墳の壁画などに登場します。

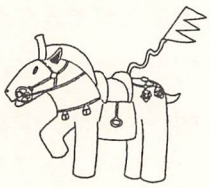
身近な動物というよりも、「権力の象徴」として表現されることが多いようです。

－おしえて！バグジー君－

馬をあらわしたものは？

ほら、いろんなところに馬がいるよ。わかるかな？鏡や冠、土器、古墳の壁画……。おっと、ぼくの仲間、はにわ馬をわすれちゃいけないよ。

馬の「つよさ」や「美しさ」をあらわしたんだろうね。



次に馬を表現したものをいろいろ集めてみた。中国や朝鮮半島から輸入されたものとしては、神人車馬画像鏡（展示したものは中国出土）や馬形帯鈎、冠（国産との意見もあり）、国産品では馬形埴輪や装飾須恵器の飾り、滑石製馬形などを展示した。また江田船山古墳の大刀には銀象嵌の馬があり、九州地域を中心にした装飾古墳には馬が描かれることも多かったが、これらについては写真パネルで説明した。これらの造形物からは、当時の人々が馬に対して抱いていた考え方を垣間見ることができる。

古墳時代の馬の模型

馬形埴輪は、当館保管で国内でも最大級かと思われる行田市酒巻１号墳のものと、稲荷山古墳と通じる馬具を装着した、川本町舟山古墳の埴輪の２体にとどめた。普段馬具展となると馬具を付けた馬の姿を表す馬形埴輪が、主要な展示品となるのであるが、今回は生きた馬や馬の模型などもあり、あえて馬形埴輪には固執しなかった。しかし、最も親しみやすいものなので、展示室の入口からもよく見える場所に置いた。

埼玉県内でも地蔵塚古墳の壁画に馬が登場したり、滑石製の馬形が出土したりするが、これらは「Ⅴ　あなたの町にも馬がきた！」のコーナーに一括して展示した。

【Ⅳ　馬具のあれこれ】

今回の企画展で、メインとなるコーナー。さらに馬具の部位ごとに分けて展示した。それぞれ、「馬をあやつる・かざる－轡・杏葉」「馬に乗る－鞍・鐙」「ベルトを留める－雲珠・辻金具」「馬を鳴らす－鈴・飾金具」「馬を武装する－馬冑・馬甲・旗ざお」として、機能についても見出しにつけた。それぞれに一般向き説明パネルと「おしえて！バグジー君」パネルを掲げた。

なお、馬具はもともとセットで使用されたもの。轡だけとか、鞍だけでは役に立たないものであった。従って、馬具を展示する場合も、一式揃えるのが理想と言えるだろう。しかし、セットとして残っている馬具はそれほど多くはなく、一方では各機関とも馬具は古墳時代の展示資料として中心的な役割を果たしているので、セットとしてすべて借りることは難しいという現実がある。

よって、今回は馬具を部位別に分けて展示することにし、轡と杏葉以外はセット関係についてはほとんど触れなかった。しかし、資料はただ羅列するのはなく、部位別にどのように変遷し、どんな種類のものがあったのか、という点を強調して展示した。

また、馬具の中で最も早く登場し、馬をあやつるための重要な部位として発達するのは轡であることから、轡を筆頭に展示するべきであったが、展示ケースの配置の関係で、鞍・鐙を最初に展示

馬具のあれこれ

馬具は乗馬の風習とともに伝えられたと考えられます。すでに北九州では４世紀後半の古墳に馬具が副葬され、近畿や関東でも５世紀前半の古墳から出土しています。当初は輸入品に頼っていましたが、５世紀後半には国産品が登場します。

６世紀は馬具生産の最盛期で、さまざまな種類のものが作られました。

馬具は当時の金工技術の粋を集めたものでその水準は驚くべき高さです。このように馬具製作によって培われた金工技術は、飛鳥時代の優れた仏教美術に受け継がれていきます。

ちなみに飛鳥寺の大仏を作ったのは「鞍作鳥（くらつくりのとり）」という人です。

せざるを得なかった。

これまで何度も強調しているように、それぞれの部位の馬具がどのように使用されたかがわかるように、複製品を馬に装着した写真や、「着せ替えバグジー君」と呼んだイラストを、執拗なほどに展示ケース背面に掲示し、常に使用法を念頭に置きながら展示を見てもらうように工夫した。

《馬に乗る－鞍・鐙》

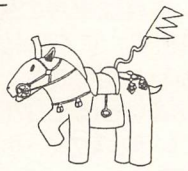
鞍はスペースを使うので最小限にとどめることにした。鞍には、磯金具が鉄製のもの、鉄地金銅張りのもの、木だけでできているものがあり、それぞれの種類を１点ずつ展示した。なお障泥金具も鞍の仲間に含めた。

鐙は、初期の段階では木心鉄板張輪鐙が流行するが次第に廃れ、やがて壷鐙が登場して奈良時代に続いていく。今回は木心鉄板張輪鐙の最古格、七観古墳の鐙と、金銅製壷鐙の代表格、半兵衛奥古墳の鐙などを対比的に展示し、輪鐙と壷鐙の違いや、時期による変遷についての理解を促した。

鞍・鐙

－おしえて！バグジー君－
くら

ぼくのせなかに着けるもの。みんなが馬にのるときにすわるんだよ。ほとんど木でつくられているんだけど、鉄などの金具も使われているから、その金属の部分だけがのこってることが多いんだ。



－おしえて！バグジー君－
あぶみ

みんなが馬にのるときは、まずこのあぶみに足をかけて、くらにまたがるんだよ。そして、のってるあいだは、あぶみに足をのせてバランスをとるんだ。

足をのせる部分が、輪になったものと、ふくろみたいになってるものがあるよ。

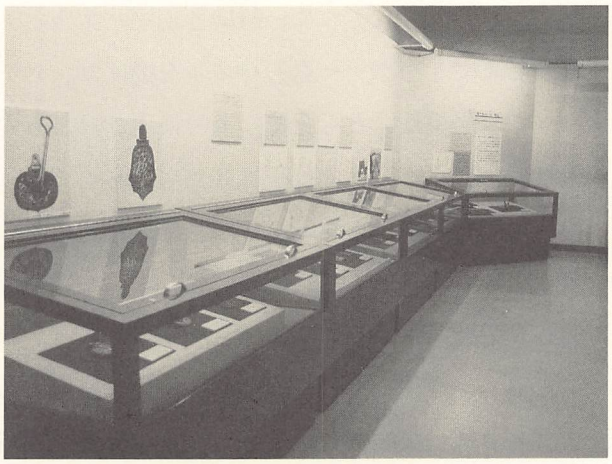
《馬をあやつる・かざる－轡・杏葉》

－おしえて！バグジー君－
くつわ　と　ぎょうよう

「くつわ」は馬をあやるつるために、口にくわえさせる道具だよ。くつわをおさえるために板がついてるんだけど、これには金メッキをした銅をはったりして、華やかに飾ることが多いんだ。

「ぎょうよう」は、おしりの近くにぶらさげる飾りなんだけど、ほら、くつわの模様とよく似たものがあるだろ。

「くつわ」と「ぎょうよう」はとっても仲良しなんだね。



轡と杏葉

轡と杏葉はセット関係が強く、意匠が同じものも多いので、いっしょに展示することにした。さらにコーナーを次のように分け、それぞれに説明パネルを付した。

①初期の馬具にみる轡　②ｆ字形鏡板付轡と剣菱形杏葉　③鈴付鏡板付轡と鈴杏葉

④楕円形鏡板付轡と楕円形杏葉　⑤鐘形鏡板付轡と鐘形杏葉

⑥ハート形鏡板付轡とハート形杏葉・棘葉形杏葉　⑦花形鏡板付轡と花形杏葉

⑧鉄製Ｓ字棒状鏡板付轡

以上、轡と杏葉の種類はほぼ網羅しており、時期による移り変りがわかるように配慮して、それぞれ最小限度の資料数で示した。また、①では４月ころに出土したばかりだった群馬県高崎市剣崎長瀞西遺跡出土の、関東で最古の轡の複製品や、⑥では平成６年度に出土した静岡市賤機山古墳の金銅装馬具を、関東では初めて展示することができたのは幸運であった。

《ベルトをとめる－雲珠・辻金具》

雲珠・辻金具には、環状のもの・板状のもの・鉢状のものがあり、これらも時期によって変遷していく。展示では大谷古墳の透彫りのある雲珠を中心にして、すべての種類の雲珠・辻金具が並ぶようにした。

《馬を鳴らす》

馬鈴や馬鐸の他、三環鈴、飾金具もこのコーナーに含めた。

－おしえて！バグジー君－

うず・つじかなぐ

ぼくのおしりや頭には、馬具を固定するためにベルトがめぐらされているだろ。このベルトの交わるところを、しっかりさせるための金具が、「うず」と「つじかなぐ」だ。

輪っかだけのとか、きれいな透彫りがあるのとか、こんもりもりあがったものとか…うず・つじかなぐだけでも、こんなに種類が多いんだね。

－おしえて！バグジー君－

すず・ばたく

はにわ馬をみると、むねのところに「すず」や「ばたく」というベルをつけていることがあるよ。歩くとこころよい音をひびかせてくれるんだ。

この音をみんなに聞いてもらえないのがざんねんだな。

《馬を武装する》

－おしえて！バグジー君－

うまかぶと・うまよろい

馬だって、戦争のときは武装するんだぞ。とはいっても、これは朝鮮半島や中国でのはなし。日本では出土した例が少ないので、たぶん武装はしてなかったと思うよ。

よかった。だってこんな重いものつけられちゃ、たまんないよ！

－おしえて！バグジー君－

うまの　はたざお

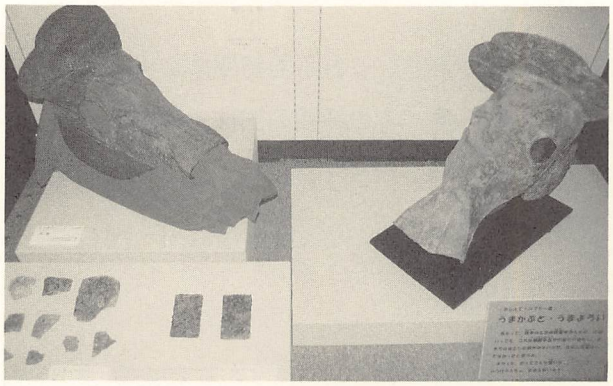
この、ぐにゃぐにゃしたのはなんだ！これは、くらのうしろに取り付けて、旗をかかげるためのものなんだ。日本では出土した例が少ないけど、朝鮮半島の古墳の壁画には描かれているよ。これも戦争のときに使ったものらしい。

行田では、この旗ざおをつけた馬のはにわが出土して、話題になったね。

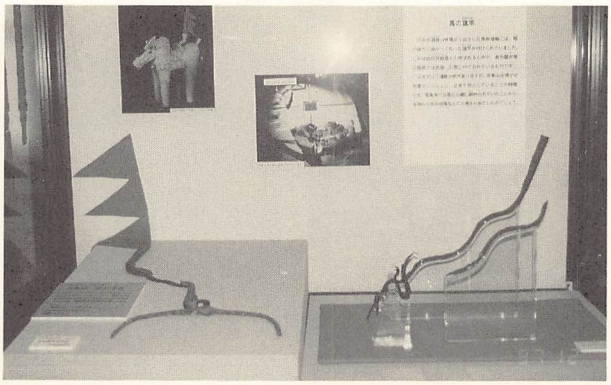
将軍山古墳から出土した、馬冑と鉄製の旗ざお（蛇行状鉄器）は、大陸や朝鮮半島とのつながりを直接示す重要な資料として、学界の注目を浴びているものである。これらをトピックス的に扱って、当館ならではのコーナーをめざした。

「馬冑と馬甲」では、将軍山古墳と大谷古墳（複製品）の馬冑を並列し、馬甲の小札といわれる滋賀県甲山古墳のものと、大谷古墳出土のもの（複製品）を展示した。馬冑は一見しただけで、その使用法がわかり、威圧感もあることから、人気コーナーになっていた。

「旗ざお」では、飛鳥寺から出土したものを借用し、将軍山古墳のものと並べて展示した。フェルトで旗の形をつくり、その使用法がわかるように工夫した。もちろん、酒巻14号墳出土の旗ざおを着けた馬形埴輪の写真パネルも掲示している。



馬冑と馬甲



蛇行状鉄器

【Ⅴ　あなたの町にも馬がきた！　－埼玉県内出土の馬具－】

あなたの町にも馬がきた！
－埼玉県内出土の馬具大集合－

埼玉県内で馬具が出土した遺跡は、現在行方不明のものも含めて58例が確認されています。

関東では、群馬県が約300例、栃木県が約100例、千葉県が約70例であるのと比べると埼玉県の出土数の少なさは際立っています。

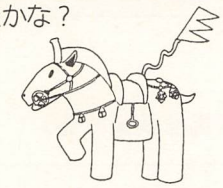
馬具が出土した古墳や遺跡は、児玉郡や大里郡、そして埼玉古墳群のある北埼玉郡に多く分布しています。だたし秩父郡のように開発に伴う発掘調査が少ないところでは、未発見の馬具がたくさんある可能性があります。

県内では５世紀後半に馬具が登場し、６世紀にはさかんに副葬されます。それは主に前方後円墳や大型の円墳で、最も多く造られた小さな円墳には、あまり副葬されませんでした。それが、他県に比べて出土数が少ない理由です。

－おしえて！バグジー君－
さいたまの馬具

これまで、日本中の馬具をみてきたけど、いよいよ埼玉県の馬具をみてみよう。きみはどこにすんでるのかな。意外や意外すぐ近所の古墳からも馬具が出土しているのがわかったかな？

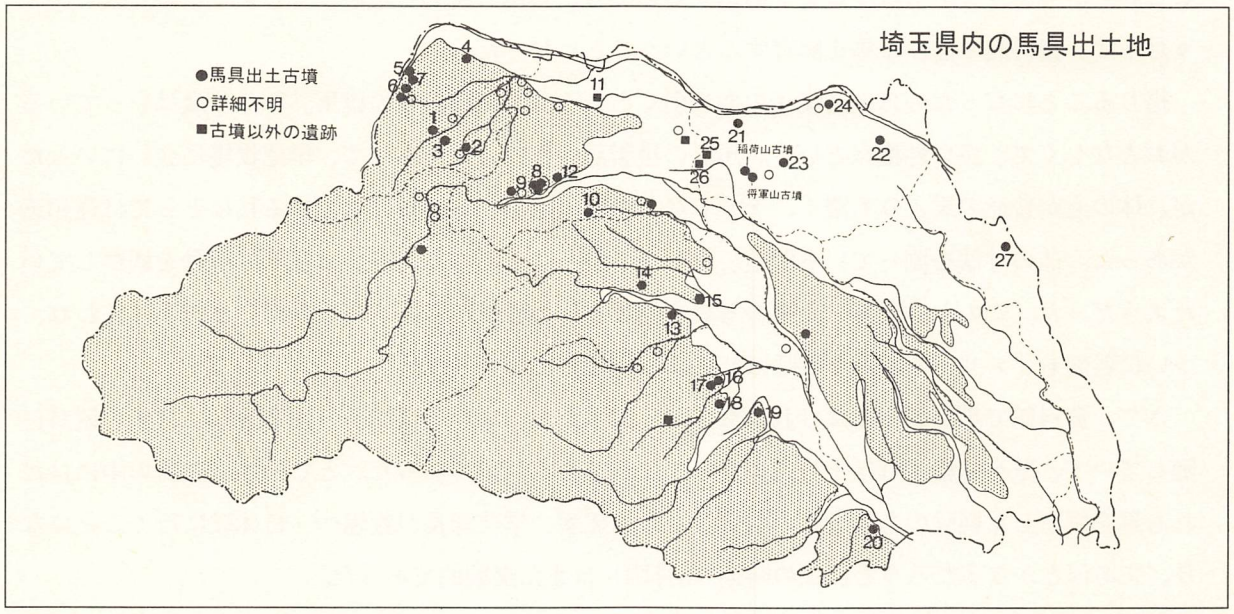
よし、うちにかえったら、その古墳を見にいこう！



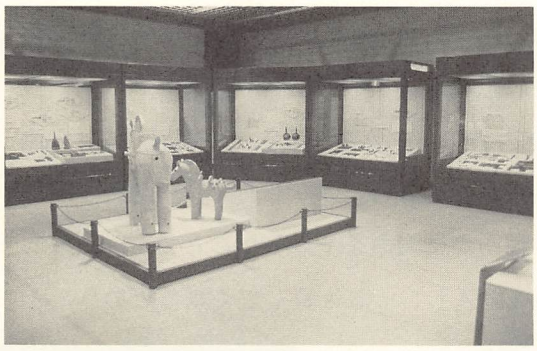
埼玉県の県立館である以上、やはり埼玉県について言及しないわけにはいかない。県内の馬具は58遺跡から出土しているが、現在行方不明のものも多い。群馬県の約300例や栃木県の約100例に比べると出土数は少ないが、さまざまな種類・形態のものがあって、ヴァラエティに富んでいるといえる。この企画展では、可能なものについてはすべて借用し、展示ケース内にぎっしりと並べた。県内の馬具資料を一同に集めた展示は、これが初めてである。

Ⅳの「馬具のあれこれ」では、最小限の資料で当時の馬具のきらめきを強調してきたのであるが、Ⅴでは反対に数を強調したかった。たしかに県内の馬具は、その華やかさでは見劣するが、自分の住んでいる町でも、こんなに馬具が出土しているということを知ってもらうことを第一に考えた。馬に関する祭祀や、地蔵塚古墳の馬の壁画の紹介に始まり、郡市ごとに馬具をまとめて展示した。従って、あらゆる部位の馬具が混在し雑然となることを恐れたが、キャプションの色分けによって混乱を免れたと言えよう。

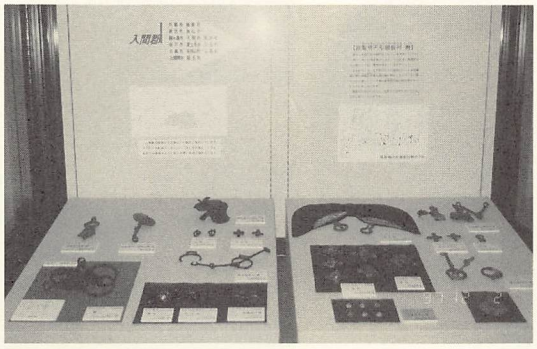
一つ一つの馬具についての説明ができなかったが、埼玉県内の馬具で特徴的な鉄製楕円形鏡板付轡や、環状鏡板付轡については説明パネルを掲示した。



1　伝長沖古墳群　2　伝広木　3　庚申塚古墳
4　御手長山古墳　5　伝中新里諏訪山古墳
6　二ノ宮17号墳　7　南塚原26号墳　8　黒田古墳群
9　伝小前田古墳群　10　塩古墳Ⅲ18号墳
11　東川端遺跡　12　見目1号墳　13　諏訪山1号墳
14　冑塚古墳　15　古凍14号墳　16　どうまん塚古墳
17　下小坂3号墳　18　牛塚古墳　19　伝仙波父塚古墳
20　一夜塚古墳　21　大稲荷２号墳　22　伝宮西塚古墳
23　鎧塚古墳　24　永明寺古墳　25　池守遺跡
26　小敷田遺跡　27　目沼9号墳



あなたの町にも馬がきた



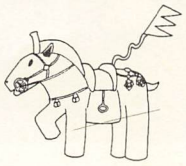
県内出土の馬具

－おしえて！バグジー君－

さあ、見おわったよ！

「さきたまに馬がやってきた！」の展示はどうだった？馬具ってちょっとわかりにくいけど、馬にどういうふうに着けてたのかを考えながら見ると、わくわくしてこない？

「さきたまの馬具」を最初に見たときは、チンプンカンプンだったかもしれないけど、展示を見おわってから、もう１回見ると……ほら、いちだんと輝いて見えるでしょ！



3　古代馬「代ちゃん」の登場

①代ちゃんが来るまで

馬具をテーマにした企画展を構想した段階から、生きた本物の馬に古墳時代の馬具の複製品を装着して、見学者に乗ってもらおう、という企画がもちあがっていた。しかし、現実的にはどこで馬を調達するか、馬に合うような馬具の複製品が作れるか、だれが馬の世話をするか‥‥などの難問が多く、果たして実現できるのだろうか、という不安を学芸課のだれしもが抱いていた。

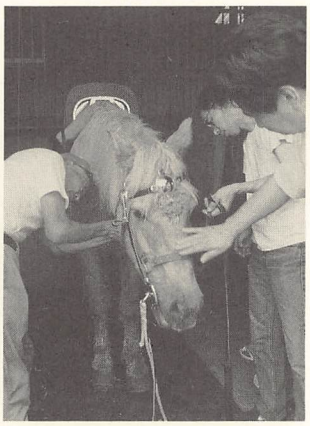
まず、どこで馬を借りるか。斎藤学芸課長が懇意にしている毛呂山町で、毎年行っている流鏑馬の馬を貸している、日高市の佐島牧場というところに問い合せると、快く引き受けてもらえるとのこと。しかもイヴェントの度に馬を搬送するのでは、費用も時間もかかってしまうとのことで、1ヵ月の間、資料館で借りた馬を飼育するということになった。

借りることになったのは、道産子の血を引くという、やや小振りの雄馬。かなり歳はいっているがおとなしくて、良い性格だという。馬具の複製品を作ることもあって、早速牧場に会いにいったが、体の毛が普通の馬よりも濃く、テレビなどでサラブレットを見慣れている私にとっては違和感があった。体の寸法を測っている間も、別にいやがることもなく、静かに我々の行動を観察していたようだった。このとき撮影した馬の写真を見て、他の職員から「羊のようだ」と口々に言われ、ついに名前も「メリーちゃん」と呼ばれるようになってしまった。

さて、資料館で馬を飼育しなければならなくなったが、幸い資料館前の移築民家には馬小屋が付随していて、壁を修繕すれば十分馬を飼うことができる状況であった。ところが、職員の中にはだれも馬を飼育した経験のある者はいない。とりあえず、学芸課長が牧場へ一日体験に行くことになり、まあ何とかなるだろうと、この時期（5月頃）はまだ楽観的であった。

馬具の複製品の製作は、展示模型を作る業者に発注していた。当然、これまで本物の馬に付ける馬具は作ったことはない。何度も牧場に足を運びながら、「メリーちゃん」に合う馬具を悪戦苦闘しながらも製作してもらった。ほぼ完成に近付いたころ、思わぬ報せが飛び込んできた。

それは企画展の約1ヵ月前の、9月上旬であった。「メリーちゃんが死んだ」と佐島牧場から連絡があったのである。老衰死だった。青天の霹靂とはまさにこのこと。メリーちゃんの遺影の前では、沈鬱な空気が流れていたが、せめてもの慰めは彼が穏やかに天命を全うしたことであった。しかし、佐島牧場の御厚意によって、牧場が新たに別の馬を購入し、それを貸してくれるということ



ありし日のメリーちゃん

になり、ひとまずは胸を撫で下ろしたのであった。だが、馬がやってくるのは10月になってから。企画展の直前である。果たしてどんな馬なのか、馬具は合うのか……など新たな心配が生じてきたのであった。

馬は渡辺主査の命名により、古代馬の「代」と、メリーちゃんの代わりに来る馬ということから、「代ちゃん」となった。

10月上旬、馬は牧場にやってきた。一日牧場体験に行った学芸課長の報告では、毛並みのいい馬で性格もいいとのこと。資料館側の受け入れ準備も一応は完了し、あとは「代ちゃん」がさきたまに来るのを待つだけであった。

②さきたまに代ちゃんがやってきた！

さきたまに代ちゃんがやってきた

あそこに代ちゃんが

10月10日、朝９時。ついに代ちゃんがさきたま資料館にやってきた。代ちゃんは、薄茶色の体（川原毛というらしい）に、足の先だけが黒い毛色をして、比較的がっしりとした肉付きであった。年令は６歳ということで、メリーちゃんよりはかなり若いのは、体つきを見てもうなづける。

馬は臆病な動物。見知らぬ土地に着いた代ちゃんは、どうも落ち着きがない。中庭に設けた柵の中に入っても、目をうつろにしてウロウロしたり、柵に体をぶつけたりしている。牧場の人の指導を受けながらえさをやったりして、その日の昼間は無事に過ぎていった。

その夜、代ちゃんを１頭残して帰るのも心配なので、学芸課長が移築民家に泊まり込んで番をすることになった。私も展示の準備のために資料館に残っていたが、10時半ころには帰宅した。12時過ぎ、さて寝ようという時に、電話のベルが鳴った。渡辺主査から「代ちゃんが馬小屋から逃げた！」という。すでにアルコールが入っていたので、私は駆けつけることはできなかったが、無事に代ちゃんが捕まったかという心配と、これから１ヵ月間思いやられるとの不安で、なかなか眠りにつくことはできなかった。

翌日、資料館へ行くと代ちゃんは柵の中。ほっと一安心。課長に昨夜の顛末を聞いた。代ちゃんは馬小屋の入口に、３本降ろしてあった木の棒をへし折って、外に飛び出したらしい。物音におどろいて外に出た課長の前には、中庭を走り回る代ちゃんの姿が外灯に映しだされていた。移築民家２棟は生け垣に囲まれているので、その外に逃げださなかったのは幸いであった。古墳公園の中に逃げ込んだら……と考えると血の気が引く。課長は何とか止めようと、勇敢にも代ちゃんの前に立ちはだかったらしいが、代ちゃんは走り抜けていった。そうこうしているうちに、代ちゃんも疲れたのか動きが鈍くなり、それを見計らって中庭の柵の中に追い込んだということである。動物を飼うことの難しさを感じた一件であった。

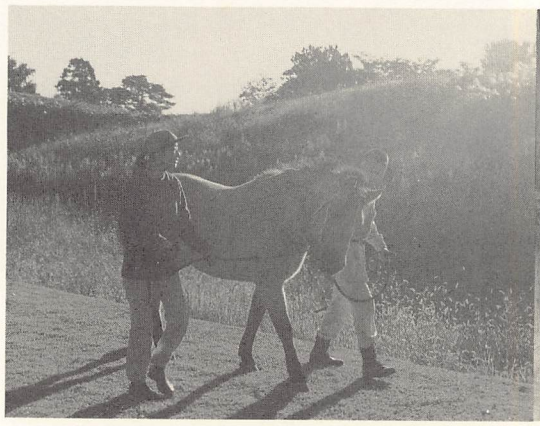
③代ちゃんを飼う

そして代ちゃんの世話が始まった。原則的には職員全員で飼育にあたったが、とくに渡辺主査や乗馬クラブに通う庶務課の池田主事、発掘のアルバイトに来ていた飯塚、市川の両氏には、早朝から夕刻まで、公務の合間をぬってよく代ちゃんの世話をしてもらった（以下馬方４人組という）。

朝は６時半に出勤してもらい、代ちゃんの散歩、馬小屋の掃除で一日が始まった。そしてえさをやって朝の世話は終わり、昼は中庭の柵で放し飼い。時々ようすを見にいったり、汚物の片付けなどをする程度。ただし、小学生の団体があるときは、何かあると困るので、なるべく誰かが付いているようにした。「代ちゃん！」と呼びながら近付いてくる子供たちの笑顔を見ていると、飼育疲れもふっ飛んだという。

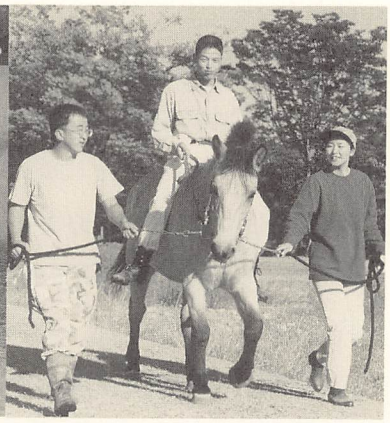
夕方に再び散歩、馬小屋のわら敷き、そして夕食。暗くなる頃には代ちゃんを馬小屋に入れ、初日のようなことのないように、ベニヤ板で入口をしっかりと閉めて、一日が終了した。この日課を約40日間。幸いなことに、代ちゃんも大きな病気をすることもなく、元気に牧場へ帰ることができた。馬方４人組はしばらくすると、すっかり代ちゃんと仲良しになり、散歩の時には裸馬のままでも乗りこなしてしまうほどになっていた。

その日によって馬の機嫌や調子も違い、また事故がないようにと気を使うので、体力だけでなく精神的にも相当消耗したのではないかと思う。私は展示の方の疲れと、開催してからの虚脱感とで、あまり代ちゃんの世話に加わらなかったが、この企画が大成功をおさめたのも、馬方４人組のお陰と大変感謝している。

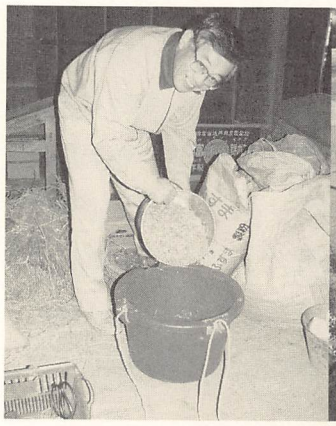


朝の光を受けて代ちゃんの散歩

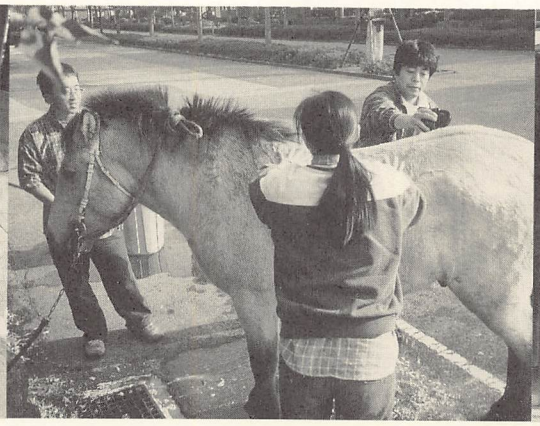
馬小屋の掃除をする
増田庶務課長



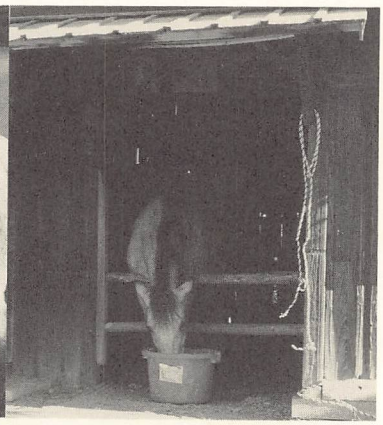
代ちゃんとはすっかり仲良し



飼葉とふすまをまぜて
えさをつくる



週に一度はシャンプーできれいに
代ちゃんは気持ちよさそう



馬小屋でくつろぐ代ちゃん

④複製馬具の製作

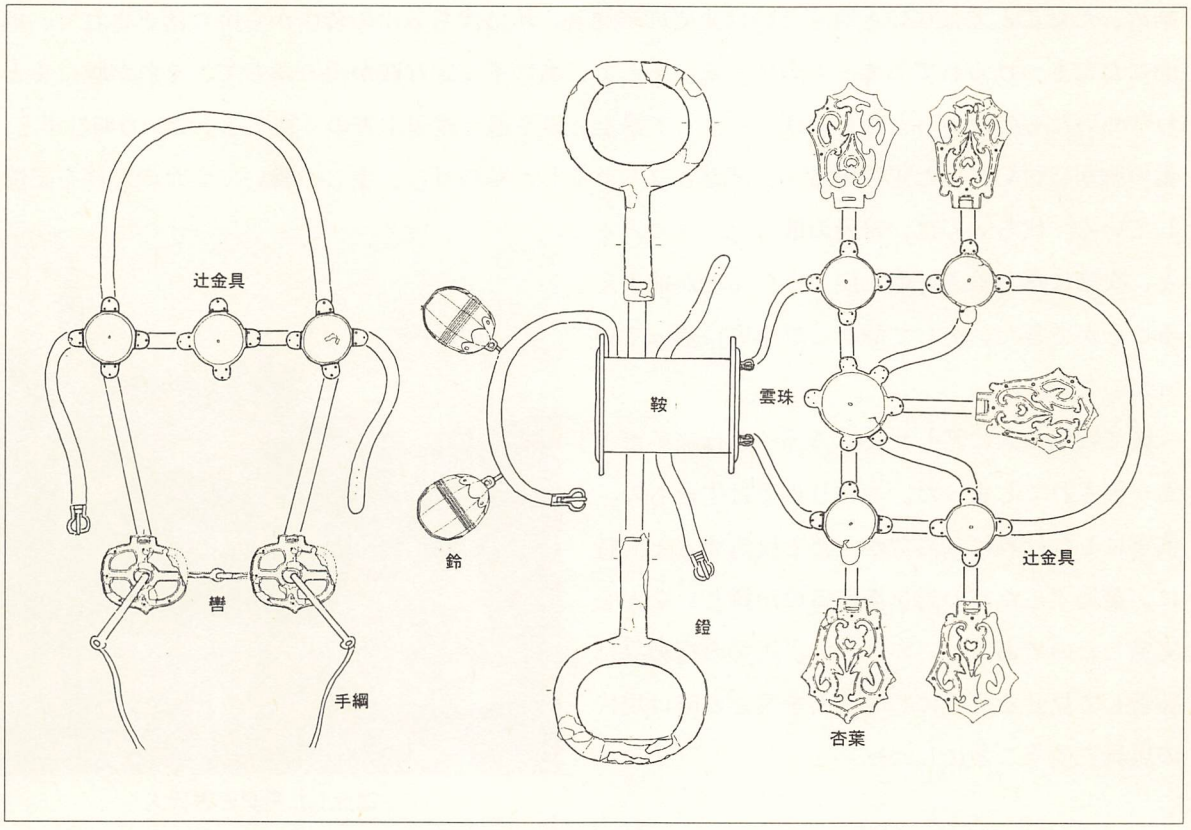
前述したように、代ちゃんを借りたのは、生きた馬に馬具の複製品を装着するためであった。これまで、馬の模型や剥製に装着して展示する例は何度も見てきたが、おそらく本物の馬に付けた例は初めてではないかと思う。それだけに今回の企画展では、これを大きな目玉としていた。

複製馬具のモデルは、将軍山古墳から出土した馬具である。その中でも金メッキを施した華やかなものを中心にしたセット関係を想定して製作した。当初はメリーちゃんに付けるように製作したことは、すでに述べた。代ちゃんはメリーちゃんよりも体格が良く、がっしりとしているので、果たして製作した複製馬具がうまく代ちゃんに合うかどうかが不安であった。

同じ道産子系の馬ということで、骨格はあまり変わらないようであった。従って、頭絡については、ほとんど変更なし。最も心配だった（というか変更がきかない）轡もそのまま使用できた。轡は馬によって大きさが左右されないので、ある程度の規格が決まっていたことが推測される。胸繋や尻繋もベルトの長さを変えれば大丈夫であった。はじめからベルトは余裕をもって作れば問題なかろう。

最も苦労したのは鞍である。将軍山古墳では磯金具の一部しか出土しておらず、鞍橋の大きさがわからなかったので、他の古墳から出土した鞍金具を参考に復元した。藤の木古墳のように装飾が華やかなものは、実用されたかどうか疑わしく思われたので、なるべく小さめの鞍や、明らかに実用品と言える木製鞍を参考に算出した寸法で製作した。結論から言えば、この寸法は小さすぎた。メリーちゃんではちょうどよかったのだが、代ちゃんの背中の上では不安定である。さらに鉄製の旗ざおを鞍に取り付けたものだから、なおさらである。

そもそも木で作った鞍というのは、馬の背中の上で非常に「すわり」が悪い。轡は現代に至るま



複製馬具模式図（馬具は1／10）

で基本的な構造が変わらないのに対して、鞍だけは大きく変化し、今では馬にフィットする革製の鞍が一般的である。この鞍でも馬が走行するとずれてしまうというくらいだから、木の鞍は甚だ使い勝手が悪い。おそらく古墳時代の人々も鞍を馬に固定することに、相当の苦心をしたのではないかと想像されるのである。

すなわち、鞍は馬よりも大きめに作らなければならなかった。鞍の下の敷物を厚くしていけば、ある程度の調節ができるからである。もちろん大きすぎれば、また安定感が悪くなるのは当然である。もっと多くのデータを集めて研究する余地があったと反省している。

鉄製の旗ざお（蛇行状鉄器）は、どのように装着したのかはわかっていない。構造的には鞍の内側、すなわち居木に旗ざおのU字形部分をはさむようにすれば、安定するのではないかと思われた。しかし、行田市酒巻14号墳の馬形埴輪では、旗ざおが鞍の外側で装着されていたので、今回はそれにならった。U字形金具の根元１ヵ所と先端２ヵ所に革紐を結び、それを鞍橋に開けた穴に通して固定させた。しかし馬が動くと次第に結びが緩くなり、不安定になってくる。これを装着させて騎馬戦をしたことを考えると、もっとしっかりと固定させる方法があったのではないかと想定された。

さて、代ちゃんに合わせて完成した複製の馬具。これらを装着して、果たして人が乗れるだろうか。10月18日に「代ちゃんを迎える会」を開催し、子供たちに代ちゃんに試乗してもらう予定だったので、前日にまず職員が乗ってみることにした。誰が‥‥当然、馬具製作の担当であった私に白羽の矢が立った。代ちゃんがさきたまに来て１週間たち、かなり慣れてもきていたので、まわりの人々に大丈夫だからと励まされて、とうとう乗ることとなってしまった。古代の豪族よろしく、古代服と甲冑に身を包み、さっそうと代ちゃんにまたがった‥‥。ところが、ただでさえ慣れない馬具を付けられ、突然重いものが背中に乗ったものだから、代ちゃんはびっくり仰天。次第に加速を始め、ただごとではないと悟った時はすでに時遅し。私は代ちゃんの背中から降り落とされて、地面にたたきつけられてしまったのである。そして、あの不安定な鞍が滑り落ちて、それが腹にまとわりついたものだから、さらにびっくりして暴走。後を追う渡辺主査の「待て！」という叫び声と、馬の胸繋に付いていた馬鈴の音が、茫然と立ちつくした私の耳に、虚しく響いていたのだけを記憶している。代ちゃんは、普段の散歩コースに入ると、次第に落ち着きを取り戻し、なんとか捕まえることができた。そして静かに馬小屋に帰っていったのである。

後で牧場の人に話したところ「それは無茶だ！」と一笑されてしまった。やはり相手は生きもの。慎重にしなければならなかったと反省すると同時に、乗馬するための馬具を作るのが難しいことを実感したのである。この一件で、馬具の複製品は装着して見せるだけにして、人を乗せる時は現代の馬具を使うことにした。

復元した馬具と古代人

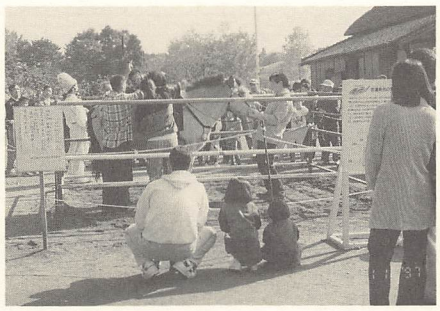
⑤イヴェント

10月18日に「代ちゃんを迎える会」を渡辺主査の主導で開催した。集まった地元の小中学生、約150人に、馬や馬具についての話をしながら、代ちゃんに親しんでもらうようにした。人の多さにびっくりしたのか、あるいは前日の「落馬事件」があったからか、代ちゃんの機嫌が悪く、あいにく子供たちを乗せることはできなかったが、この日のために学芸課長が作った「さきたまの代ちゃん」という歌をみんなで合唱して、会は無事終了した。

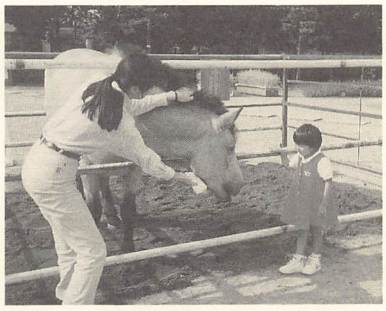
休日及び第２・４土曜日には牧場の人にも来てもらって、代ちゃんに古墳時代の馬具の複製品を付ける「馬具付けショー」を、原則的に午前・午後に１回づつ開催した。移築民家中庭の柵内で、古代人に扮した学芸員が馬具の説明をしながら、一つ一つ装着していくという方法。牧場の人にも馬に乗る立場で馬具を語ってもらい、乗馬に素人の私には大変勉強になった。古墳時代の馬装が完成した代ちゃんには、観客から毎回盛大な拍手がおこっていた。

「馬具付けショー」のあとは、小学生以下に限って、代ちゃんの試乗会を行った。毎回25人限定としたが、いつもほぼ満員状態。乗っている子供たちの楽しそうな笑顔とは裏腹に、馬を曳く職員は何かあっては大変と緊張のしどおし。無事に終わると、ホーっとため息がこぼれるのであった。しかし、馬に（それもタダで）乗れることは滅多にないので、馬に親しんでもらう良い機会であったと思っている。

代ちゃんを迎える会に集まった子供たち



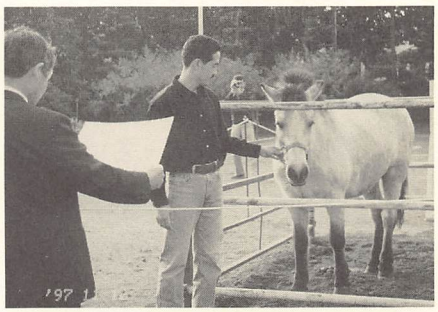
馬具付けショー



馬の試乗会

代ちゃんと記念撮影

期間中約600人の子供をのせた

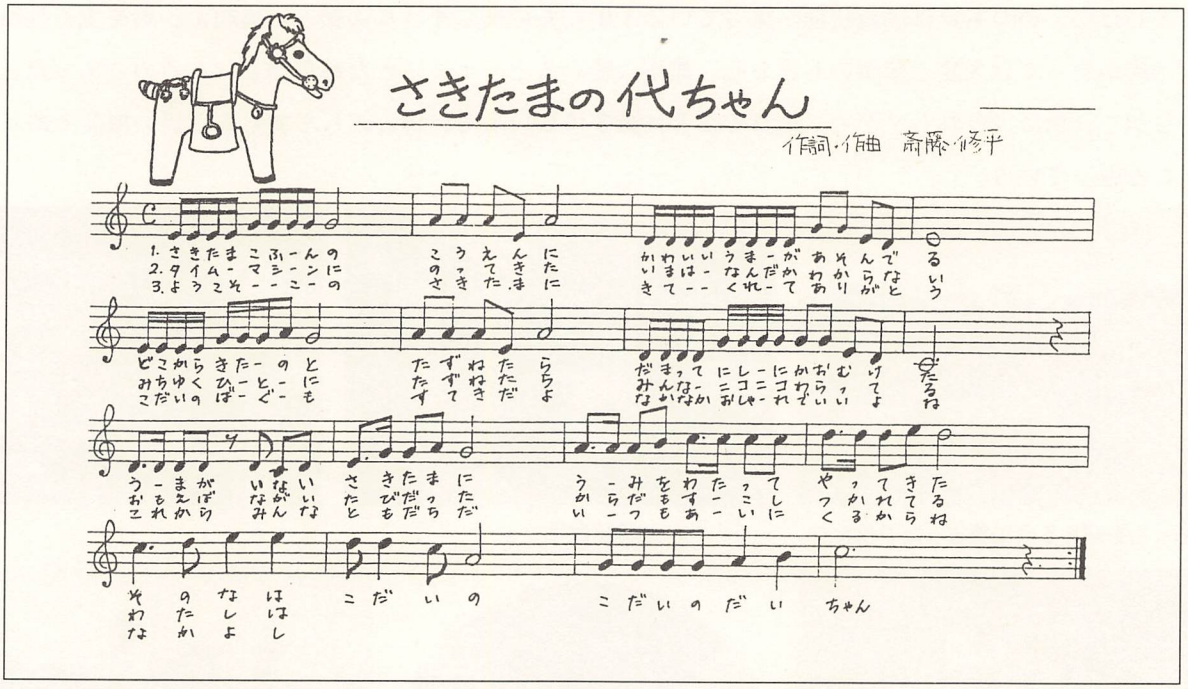


代ちゃんを送る会では館長が感謝状を贈る

代ちゃんは約１ヵ月のさきたま滞在を終えて、11月16日、ついに牧場に帰る日がやってきた。この日、代ちゃんの労をねぎらう意味で「代ちゃんを送る会」を開いた。館長から感謝状と箱いっぱいのにんじんが贈られ、みんなで「さきたまの代ちゃん」を合唱。別れを惜しむ観客や職員を尻目に、代ちゃんは早々と搬送車に乗り込んでいった。きっと代ちゃんにとって、このさきたまの40日間のことは一生忘れられないだろう、と職員一同自分に言い聞かせながら、代ちゃんを飼育してきた苦労をかみしめていたのである。

この後、企画展最終日の12月６日には、再び代ちゃんが登場した。また、将軍山古墳展示館内に代ちゃんをモデルにしたブロンズ風の模型を設置し、複製馬具を装着して展示している。

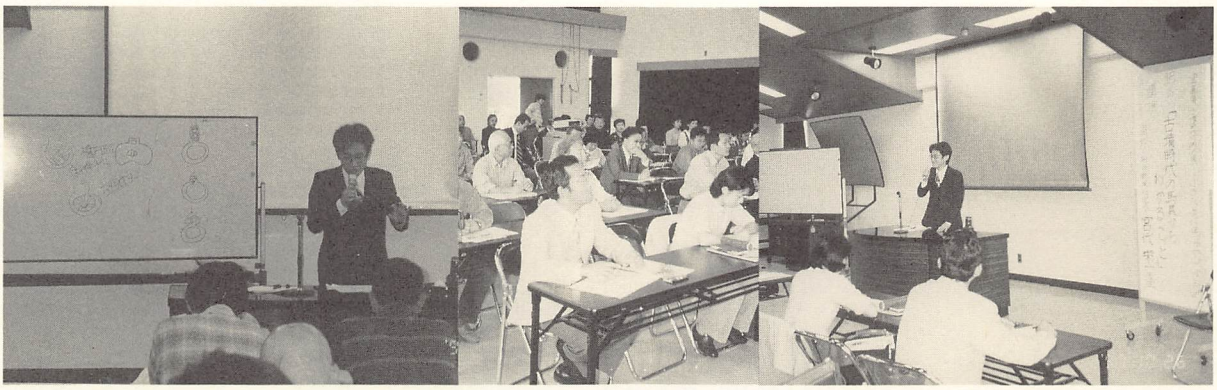
代ちゃんに複製馬具を装着したり、子供たちに試乗してもらったりしたこれらのイヴェントは、あくまでも企画展の補助的な行事ではあったが、新聞やテレビニュースでも、代ちゃんの方に報道の重点が置かれる傾向にあったのは確かであった。それはそれで、話題性があってよかったと思っている。ある他館の職員曰く、「廂を貸して、母屋を取られる、っていうやつだな。」



5　記念講演会

10月26日(日)に、企画展の記念講演会を行った。講師は朝日新聞東京本社の学芸部記者で、日本考古学協会員の宮代栄一氏。知る人ぞ知る馬具の研究者。馬具の各部位についてだけでなく、セット関係や馬具の使用法などにも論を展開して、学界の注目を浴びている若手研究者である。今回の企画展に際しても、氏の論文から多くのことを学び、展示の参考にさせていただいている。また図録の巻末には、私が聞き手となって、氏が語る「馬具論」を掲載している。

講演のテーマは「古墳時代の馬具からわかること」。当館の講堂には約80名の聴講者が集まり、スライドを交えて、約２時間の熱気あふれる講演会となった。馬具についての知識がない人にでもよくわかるような説明と、馬具の生産などについてのつっこんだ話が、バランスよく組み合わされ、とても聞きごたえのある講演であった。



記念講演会風景

6　企画展を終わって

12月７日に企画展は終了した。その後は再び戦場のような忙しさ。展示ディスプレイの撤去と借用資料の搬出で、一段落した時はすでにクリスマスになっていた。その時になって初めて、この企画展はいったい何だったのかを考えることができた。

われわれ学芸員がやるべき企画展では、常に現代的な視点や課題を追究していかなければならないと考えている。歴史の研究とはそもそもそういうものであり、またそうでなければ単なる絵空事で済まされてしまうのである。考古学の展示にしても、ただ珍しい物や派手な物を集めただけの「お宝拝見的」な企画展であれば、別に考古学を専門に勉強してきた学芸員がやらなくてもよい。多くの自治体で博物館が造られ、さまざまな展示が行われるようになり、ポリシーがなく視点の定まらない企画は見向きもされない時代になってきたと言えるだろう。

今回、「人と馬とのつきあいの始まりの再現」というテーマから、逆説的に「現代では失われてしまった人と馬とのふれあい」を主張している。日本に馬がやってきたのが古墳時代。当時は貴重な動物として、また権威の象徴として人々から大切に扱われていたが、そうした人々の馬に対する考え方は、華麗な馬具や馬造形などの表現から垣間見ることができる。そしてつい最近まで、約1500年もの間、最も身近な動物として深い関わりをもってきた。

しかし戦後、自動車や農耕機械等が普及すると、次第に馬は日本人の生活から排除され、今では競馬場や乗馬クラブなど、特別な場所でしか見ることがなくなったのである。そして「効率化」の名のもとに、あらゆるものが機械化され、人と馬とのふれあいはおろか、人間同志のふれあいすら希薄になりつつある。博物館もその例外ではなく、ハイテクとやらを駆使した展示が花盛りとなり、最近ではやや食傷気味の感もある。今回、生きた馬「代ちゃん」を資料館で飼ったのも、このような現代の風潮へのささやかな反抗でもあった。期待どおり、子供たちは楽しそうに馬とふれあい、大人たちも懐かしがりながら、頭をなでていく。そこで家族の会話も生まれる‥‥。そうした暖かな風景を数知れず見ることができたのも収穫だった。

さきたまに馬がやってきた！－このややくだけた言葉には、古墳時代のさきたまの人々が、初めて馬を見た時の感動が表現されているだけでなく、おそらく現代人の心の中に、まだ潜んでいるであろう馬に対する愛着感を喚起する意味が込められているのである。人間にとって大切なものを失わないために……。

展示品目録（●国宝、◎重要文化財、○県指定文化財）

Ⅰ　さきたま古墳群から出土した馬具

1●稲荷山古墳出土品			文化庁
ｆ字形鏡板付轡		1組	（埼玉県立さきたま資料館保管）
鈴杏葉		3点	
鞍金具		一式	
木心鉄板張壺鐙		1対	
環状雲珠・辻金具		一式	
組合式板状辻金具		一式	
三環鈴		1点	
2　将軍山古墳出土品			
ハート形鏡板付轡		1点	東京大学総合研究博物館
棘葉形杏葉		1点	本庄市教育委員会
雲珠		1点	東京大学総合研究博物館
辻金具		数点	田島邦夫
銅製鈴		1点	東京大学総合研究博物館
銅製鈴		1点	田島邦夫
鞍金具		一式	埼玉県立さきたま資料館
金銅製金交具		1点	東京大学総合研究博物館
金交具		1点	埼玉県立さきたま資料館
飾金具		6点	埼玉県立さきたま資料館
高台付蓋付銅鋺		1点	東京大学総合研究博物館
銅鋺		1点	東京大学総合研究博物館
銅鋺		1点	田島邦夫
棘葉形杏葉（複製）		1点	埼玉県立博物館
辻金具（複製）		1点	埼玉県立博物館
銅製鈴（複製）		1点	埼玉県立博物館
輪鐙（複製）		1対	埼玉県立博物館

Ⅱ　馬を飼う人々

1　奈良井遺跡（大阪府四条畷市）出土品			四条畷市立歴史民俗資料館
馬頭骨		1点	
韓式土器		1点	
陶質土器		4点	
製塩土器		4点	
ミニチュア土器		4点	
土製人形		5点	
土製馬形		6点	
滑石製臼玉		一連	
2　白井遺跡群（群馬県子持村）			（財）群馬県埋蔵文化財調査
馬の足跡		一式	事業団

Ⅲ　古墳時代の馬の造形

馬形埴輪	埼玉県舟山古墳出土	1点	埼玉県立博物館
	埼玉県酒巻1号墳出土	1点	埼玉県立さきたま資料館
馬形帯鉤	出土地不明	2点	（財）馬事文化財団馬の博物館
神人車馬画像鏡	中国出土	1点	（財）馬事文化財団馬の博物館
冠	茨城県三昧塚古墳出土	1点	茨城県立歴史館
装飾須恵器	大阪府山畑22号墳出土	1点	東大阪市立郷土博物館
	大阪府夫婦塚古墳出土	2点	東大阪市立郷土博物館
	三重県井田川茶臼山古墳出土	1点	三重県埋蔵文化財センター
陶製馬	兵庫県出石町出土	1点	京都大学総合博物館
滑石製馬形	群馬県長根羽田倉遺跡出土	8点	（財）群馬県埋蔵文化財調査
			事業団

Ⅳ　馬具のあれこれ

1　馬をあやつる・かざる－轡と杏葉			
轡（複製）	群馬県剣崎長瀞西遺跡出土	1点	高崎市教育委員会
円形鏡板付轡（複製）	滋賀県新開1号墳出土	1点	滋賀県立安土城考古博物館
◎ｆ字形鏡板付轡	和歌山県大谷古墳出土	1組	文化庁
◎剣菱形杏葉	和歌山県大谷古墳出土	3点	文化庁
ｆ字形鏡板付轡	愛知県大須二子山古墳出土	1点	南山大学人類学博物館
剣菱形杏葉	愛知県大須二子山古墳出土	2点	南山大学人類学博物館
ハート形杏葉	愛知県大須二子山古墳出土	2点	南山大学人類学博物館
ｆ字形鏡板付轡	三重県井田川茶臼山古墳出土	1組	三重県埋蔵文化財センター
剣菱形杏葉	三重県井田川茶臼山古墳出土	2点	三重県埋蔵文化財センター
鈴付楕円形鏡板付轡	愛知県志段味大塚古墳出土	1組	京都大学総合博物館
鈴杏葉	愛知県志段味大塚古墳出土	1点	京都大学総合博物館
楕円形鏡板付轡	滋賀県鴨稲荷山古墳出土	1組	京都大学総合博物館
楕円形杏葉	滋賀県鴨稲荷山古墳出土	1点	京都大学総合博物館
楕円形鏡板付轡	三重県井田川茶臼山古墳出土	1組	三重県埋蔵文化財センター
楕円形杏葉	三重県井田川茶臼山古墳出土	2点	三重県埋蔵文化財センター
鐘形杏葉	大阪府山畑33号墳出土	3点	東大阪市立郷土博物館
ハート形鏡板付轡	伝群馬県出土	1点	南山大学人類学博物館
◎ハート形鏡板付轡	千葉県金鈴塚古墳出土	1組	木更津市教育委員会
◎ハート形杏葉	千葉県金鈴塚古墳出土	3点	木更津市教育委員会
ハート形鏡板付轡	奈良県珠城山3号墳出土	1点	奈良国立博物館
ハート形杏葉	奈良県珠城山3号墳出土	1点	奈良国立博物館
ハート形鏡板付轡	静岡県賤機山古墳出土	1組	静岡市教育委員会
棘葉形杏葉	静岡県賤機山古墳出土	1点	静岡市教育委員会
棘葉形杏葉	兵庫県田辺古墳出土	1点	京都大学総合博物館
◎ハート形杏葉	群馬県八幡観音塚古墳出土	4点	高崎市教育委員会
花形鏡板付轡	栃木県下石橋愛宕塚古墳出土	1組	栃木県立博物館
花形杏葉	栃木県下石橋愛宕塚古墳出土	1点	栃木県立博物館
◎花形鏡板付轡	千葉県金鈴塚古墳出土	1点	木更津市教育委員会
◎花形杏葉	千葉県金鈴塚古墳出土	2点	木更津市教育委員会
◎花形鏡板付轡	群馬県八幡観音塚古墳出土	1組	高崎市教育委員会
花形杏葉（複製）	群馬県八幡観音塚古墳出土	1点	高崎市教育委員会
○鉄製Ｓ字棒状鏡板付轡	静岡市半兵衛奥古墳出土	1点	静岡市立登呂博物館
2　馬に乗る－鞍			
木製鞍	大阪府八尾南遺跡出土	1点	八尾市立歴史民俗資料館
鉄装鞍	大阪府御獅子塚古墳出土	一式	豊中市教育委員会
◎鉄地金銅装鞍	千葉県金鈴塚古墳出土	一式	木更津市教育委員会
◎革妥金具	群馬県八幡観音塚古墳出土	一式	高崎市教育委員会
障泥金具	栃木県下石橋愛宕塚古墳出土	一式	栃木県立博物館
3　馬に乗る－鐙			
木心鉄板張輪鐙	大阪府七観古墳出土	1対	京都大学総合博物館
木心鉄板張輪鐙	愛知県志段味大塚古墳出土	1対	京都大学総合博物館
木心鉄板張壺鐙	三重県井田川茶臼山古墳出土	1対	三重県埋蔵文化財センター
○金銅製壺鐙	静岡県半兵衛奥古墳出土	1対	静岡市立登呂博物館
4　ベルトを留める－雲珠・辻金具			
◎金銅製雲珠	和歌山県大谷古墳出土	1点	文化庁
雲珠・辻金具（複製）	群馬県八幡観音塚古墳出土	2点	高崎市教育委員会
雲珠・辻金具	栃木県下石橋愛宕塚古墳出土	一式	栃木県立博物館
5　鳴らす－鈴・馬鐸			
鈴	三重県井田川茶臼山古墳出土	1点	三重県埋蔵文化財センター
三環鈴（複製）	滋賀県新開1号墳出土	1点	滋賀県立安土城考古博物館
三環鈴	愛知県志段味大塚古墳出土	1点	京都大学総合博物館
三環鈴	伝長野県高松古墳出土	1点	埼玉県立博物館
三環鈴形埴輪	埼玉県新屋敷遺跡出土	1点	埼玉県立埋蔵文化財センター
馬鐸（複製）	滋賀県新開1号墳出土	1点	滋賀県立安土城考古博物館
馬鐸	栃木県星の宮神社古墳出土	1点	栃木県教育委員会
◎馬鐸	千葉県金鈴塚古墳出土	3点	木更津市教育委員会
◎飾金具	千葉県金鈴塚古墳出土	一式	木更津市教育委員会
飾金具	静岡県賤機山古墳出土	1点	静岡市教育委員会
6　馬を武装する－馬冑・馬甲・蛇行状鉄器			
馬冑（複製）	和歌山県大谷古墳出土	1点	（財）馬事文化財団馬の博物館
馬冑	埼玉県将軍山古墳出土	1点	埼玉県立さきたま資料館
馬甲（複製）	和歌山県大谷古墳出土	一式	（財）馬事文化財団馬の博物館
馬甲	滋賀県甲山古墳出土	一式	野洲町教育委員会
蛇行状鉄器	奈良県飛鳥寺出土	1点	飛鳥資料館
蛇行状鉄器	埼玉県将軍山古墳	2点	埼玉県立博物館

Ⅴ　あなたの町にも馬がきた！－埼玉県内出土の馬具－

発見！彩の国の古代馬			
熊谷市諏訪木遺跡出土	馬の頭骨	1点	熊谷市教育委員会
	木製鐙	1点	
	土器	3点	
本庄市西富田新田遺跡出土	祭祀土製品	一式	本庄市教育委員会
深谷市本郷前東遺跡出土	石製模造品	一式	埼玉県埋蔵文化財センター
熊谷市西別府遺跡出土	石製模造品	一式	國学院大学日本文化研究所
深谷市割山埴輪窯跡出土	土製馬形	1点	深谷市教育委員会
埼玉県内出土の馬具　大集合！			
［児玉郡］			
児玉町伝長沖古墳群出土	楕円形鏡板付轡	1点	埼玉県立博物館
	環状鏡板付轡	1点	
	ｆ字形鏡板付轡	1点	
	ハート形鏡板付轡	1点	
	ハート形杏葉	2点	
	鐙	1対	
	雲珠	2点	
	辻金具	2点	
美里町伝広木出土	鈴付楕円形鏡板付轡	一式	長瀞綜合博物館
児玉町庚申塚古墳出土	雲珠	1点	児玉町教育委員会
	貝製飾金具	1点	
	辻金具	3点	
	組合式板状辻金具	3点	
本庄市御手長山古墳出土	帯飾金具	2点	本庄市教育委員会
	革妥金具	1点	
神川町ニノ宮17号墳	革妥金具	1点	神川町教育委員会
神川町南塚原26号墳	辻金具	3点	神川町教育委員会
［大里郡］			
花園町伝黒田古墳群出土	環状鏡板付轡	1点	埼玉県立博物館
花園町黒田1号墳出土	環状鏡板付轡	3点	花園町教育委員会
	鐙	1対	
花園町黒田4号墳出土	環状鏡板付轡	1点	
	雲珠	3点	
江南町塩古墳群支群18号墳出土	雲珠	1点	江南町教育委員会
	辻金具	2点	
	革妥金具	2点	
川本町見目1号墳	鈴	2点	川本町教育委員会
深谷市東川端遺跡出土	馬鐸	1点	埼玉県埋蔵文化財センター
［比企郡］			
東松山市諏訪山1号墳出土	楕円形鏡板付轡	1点	東松山市教育委員会
	板状辻金具	2点	
	金交具	1点	
東松山市胄塚古墳出土	環状鏡板付轡	1点	東松山市教育委員会
	ハート形杏葉	1点	
	鞍金具	一式	
	雲珠	1点	
	辻金具	5点	
	半球形飾金具		
東松山市古凍14号墳出土	環状鏡板付轡	3点	東松山市教育委員会
	壺鐙	1対	
	金交具		
	革妥金具		
	金銅製鞍飾金具		
	帯飾金具		
［入間郡］			
川越市どうまん塚古墳出土	楕円形鏡板付轡（複製）	1点	埼玉県立博物館
	剣菱形杏葉（複製）	1点	
川越市下小坂3号墳	楕円形鏡板付轡	1点	（株）東洋クオリティワン
	辻金具	2点	
	金交具	2点	
川越市牛塚古墳	ハート形鏡板付轡	1点	川越市立博物館
	雲珠	1点	
	辻金具	1点	
川越市伝仙波父塚古墳出土	環状鏡板付轡	1点	川越市立博物館
川越市光山遺跡出土	轡	1点	埼玉県埋蔵文化財センター
［北足立郡］			
朝霞市一夜塚古墳出土	楕円形鏡板付轡	1点	朝霞市教育委員会
	雲珠	1点	
［北埼玉郡］			
行田市大稲荷2号墳出土	楕円形鏡板付轡	1点	埼玉県立さきたま資料館
加須市伝宮西塚古墳出土	鐘形鏡板付轡	1点	御岳神社
	環状杏葉	2点	
	辻金具	4点	
行田市鐙塚古墳出土	剣菱形杏葉	1点	行田市教育委員会
	帯飾金具	一式	
	半球状飾金具	4点	
永明寺古墳出土	貝製雲珠	1点	永明寺
	鐙	1対	
［北葛飾郡］			
○杉戸町目沼9号墳出土	鈴杏葉	3点	杉戸町教育委員会

≪資料紹介≫

稲荷山古墳出土の須恵器

－平成９年度発掘資料－

宮　　昌之

要旨　平成９年度に実施した国指定史跡埼玉古墳群中の稲荷山古墳の整備事業に伴う発掘調査において、墳丘造出し付近の周堀を中心に多くの埴輪片とともに須恵器と土師器が出土した。特に須恵器は、昭和13年の前方部土取りの際に採集された資料以外に、ほとんど発見されていなかった。今回の調査では、新たに発見された器種があるとともに、採集されていた資料と発掘資料が、約60年の年月を経て接合するなど多くの成果をあげた。ここに出土した須恵器の主なものを紹介する。

1　はじめに

稲荷山古墳は、埼玉県の北東部、ＪＲ高崎線行田駅の東方約４㎞の行田市大字埼玉に所在する、国指定史跡「埼玉古墳群」中の前方後円墳である。埼玉古墳群には、円墳としては国内最大の丸墓山古墳、県内最大規模の前方後円墳である二子山古墳、千葉県富津市付近の海岸の房州石を使用した横穴式石室に、馬冑や蛇行状鉄器を初めとした大量の豪華な副葬品を出土した将軍山古墳を含め、８基の前方後円墳と１基の大形円墳が現存している。この他にも開墾によって消滅した円墳や方墳を含め、南北１㎞、東西５００ｍの範囲に、30基以上の古墳が密集している[1]。

稲荷山古墳は、前方部が昭和13年の土取りによって消失し、現在平坦になっている。また周堀は昭和50年に復原されたが、当時の未買収地部分の復原はおこなわれていない。これらのことから、古墳や周堀の形について見学者に少なからず誤解を与えてきた（写真１）[2]。そのため埼玉県教育委員会では、平成９年度から文化庁の指導を受け、稲荷山古墳の復原整備を開始した。整備事業では破壊以前の実測図を参考に前方部を復原するとともに、不整形の周堀を改める計画である。

稲荷山古墳の整備事業に伴う報告書の作成が整備終了後になることから、平成９年度の発掘調査により出土した須恵器の一部を報告する。また、昭和13年の土取りの際に川鍋重寿氏が採取し、これまで伝稲荷山古墳出土須恵器とされていた須恵器についても比較するための参考として図を再掲載した[3]。大方のご意見、ご教示を承り、今後の整備事業に備えたいと思う。

2　稲荷山古墳の概況

稲荷山古墳の名称は、明治40年刊行の「北武八志」四ノ巻墳墓志上に初めて現れる。当時は「曽根塚」ともよばれ、昭和11年発刊の「史蹟埼玉」には「田山」とも呼ばれていたと記されている。規模的には小さい「将軍山古墳」や同規模の「鉄砲山古墳」が、19世紀初めの「武蔵志」や「新編武蔵風土記稿」等にみられるのに対してかなり遅い[4]。

第１図　埼玉古墳群古墳分布図（●現存、○消滅）

第１表　埼玉古墳群古墳一覧

番号	古墳名	墳　形	規模m	埋葬施設	備　　考
1	稲荷山古墳	前方後円墳	120	礫郭・粘土郭	二重周堀
2	丸墓山古墳	円墳	105	不明	裾に葺石
3	二子山古墳	前方後円墳	138	不明	二重堀
4	将軍山古墳	前方後円墳	90	横穴式石室他	二重周堀・房州石
5	愛宕山古墳	前方後円墳	53	不明	二重周堀
6	瓦塚古墳	前方後円墳	73	不明	二重周堀
7	鉄砲山古墳	前方後円墳	109	不明	二重周堀
8	奥の山古墳	前方後円墳	66.5	不明	二重周堀
9	中の山古墳	前方後円墳	79	横穴式石室？	須恵質埴輪壺
10	浅間塚古墳	前方後円墳	58	不明	周堀・前玉神社
11	戸場口山古墳	方墳	40	不明	二重周堀・墳丘無
12	天王山古墳	円墳	27	不明	周堀・埼玉１号墳
13	梅塚古墳	円墳	23.5	不明	周堀・埼玉２号墳
14	埼玉３号墳	円墳	12.5	不明	周堀
15	埼玉４号墳	円墳	17.5	不明	周堀
16	埼玉５号墳	円墳	26	不明	周堀
17	埼玉６号墳	円墳	22	不明	周堀
18	埼玉７号墳	円墳	21	不明	周堀
19	No.72古墳	円墳	24	不明	航空写真判読
20	No.73古墳	円墳	24	不明	航空写真判読
21	No.74古墳	円墳	24	不明	航空写真判読
22	No.75古墳	円墳	20	不明	航空写真判読
23	山宮山古墳	円墳	不明	不明	
24	白山古墳	円墳	50	横穴式石室	白山神社
25	白山２号墳	円墳	15	不明	
26	No.76古墳	円墳	13	不明	航空写真判読
27	No.77古墳	円墳	12.5	不明	航空写真判読
28	No.78古墳	円墳	13	不明	航空写真判読
29	毘沙門様古墳	円墳	不明	不明	
30	No.81古墳	円墳	不明	不明	
31	No.82古墳	円墳	不明	不明	
32	愛宕山古墳	円墳	30	不明	周堀
33	神明山古墳	円墳	19	不明	

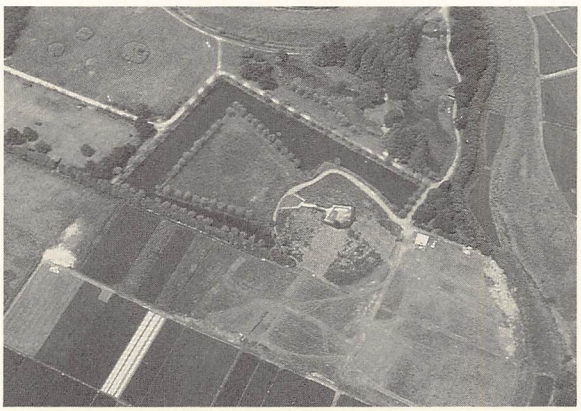


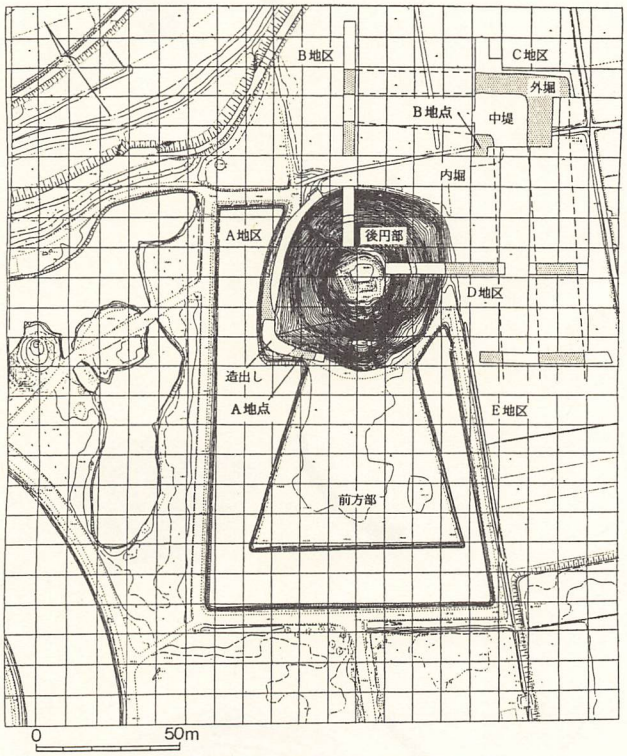
写真１　上空から見た稲荷山古墳

昭和13年に国指定となった埼玉古墳群であったが、昭和42年・43年に「さきたま風土記の丘」建設事業が実施された。併せて埋葬施設の確認と出土品の展示を目的として稲荷山古墳が発掘された。

昭和43年には墳丘及び内部主体の調査が行われ、後円部頂上から礫槨と粘土槨の二つの埋葬施設が発見された。

礫槨からの出土遺物は、115文字の金象嵌銘

写真２　昭和44年２月撮影航空写真



第２図　平成９年度調査区域及び須恵器出土地点

で知られる金錯銘鉄剣[5]・剣・直刀・鉾・刀子・鉄鏃・挂甲等の武具、環状乳画文帯神獣鏡・硬玉製勾玉・銀環・帯金具等の装身具、轡・壺鐙・鞍・鈴杏葉・三環鈴・雲珠・辻金具等の馬具、鉄鉗・鉄鏃・鉄斧・鑷子・砥石等の工具がある。

粘土槨はすでに盗掘され、剣・直刀・鉄鏃・挂甲・轡・辻金具・鎌等の破片が僅かに出土した。これら埋葬施設からの出土遺物は現在「武蔵埼玉稲荷山古墳出土品」として国宝に指定されている。

また、同じ頃撮影された航空写真（写真２）には、墳丘・周堀・中堤の位置が濃淡で判明し、長方形の周堀が映し出されていた。古墳周辺は１ｍ以上土取りされており、遺構確認面まで数cm程である[6]。そのため、堀と中堤直上の地表面の乾燥度の違い等により、航空写真にその位置が写ったと考えられる。

航空写真と墳丘の平面形から、前方後方墳の可能性も指摘されたが、昭和48年の周堀調査で後円部の裾が円形に巡り、前方後円墳であることが確認された。周堀の調査では巫女・武人・人物・弾琴・家形・盾形・馬形・猪形・円筒・朝顔形円筒等の埴輪、須恵器甕、土師器坏と甕が出土している。

その後、部分的な補修工事や埋葬施設のレプリカ設置、階段施設工事等が実施されていた。

3　平成９年度出土須恵器

1　有蓋脚付短頸壺〔蓋部〕口径5.9cm、摘径2.4cm、器高4.1cm。偏平で中央がくぼむつまみを付ける。へら削りを施した部分（天井部中央寄り2／3）と口縁部側の回転なで部分との境に明瞭な段を残す。へら削り部分はつまみの接合のため大部分がなでられている。天井部と口縁部の境の稜は鋭く尖り、稜の下に釉がたまる。ろくろ右回転。口縁部は僅かに内側に傾く。口縁内面の器壁が端部側３㎜が薄くなり、段になる。内外面に僅かに自然釉が付着する。

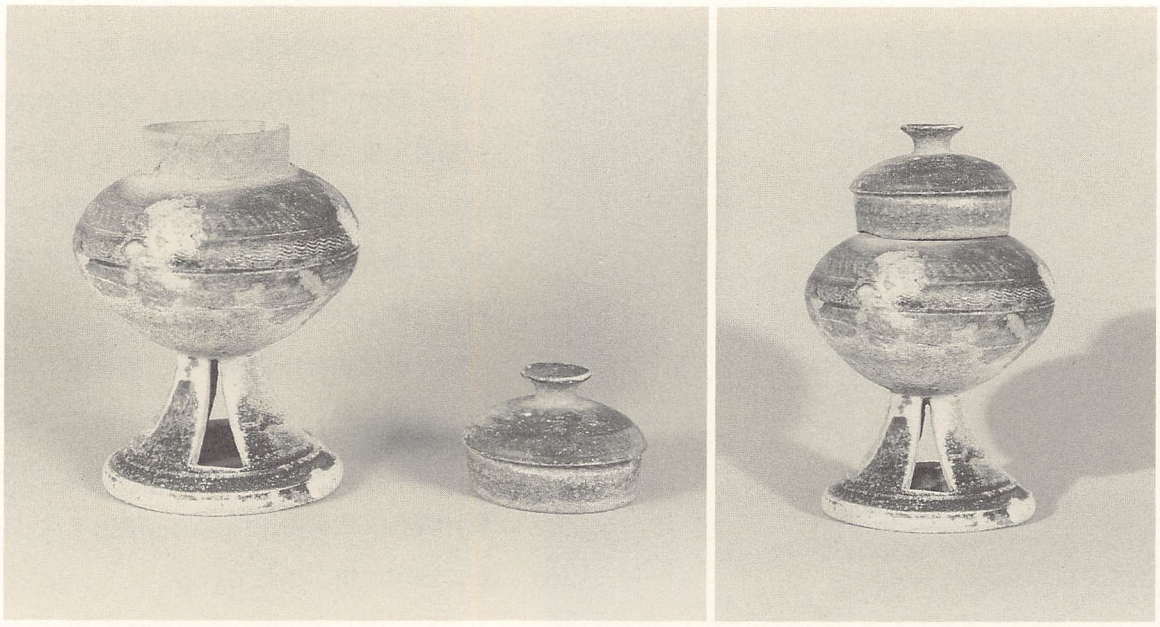
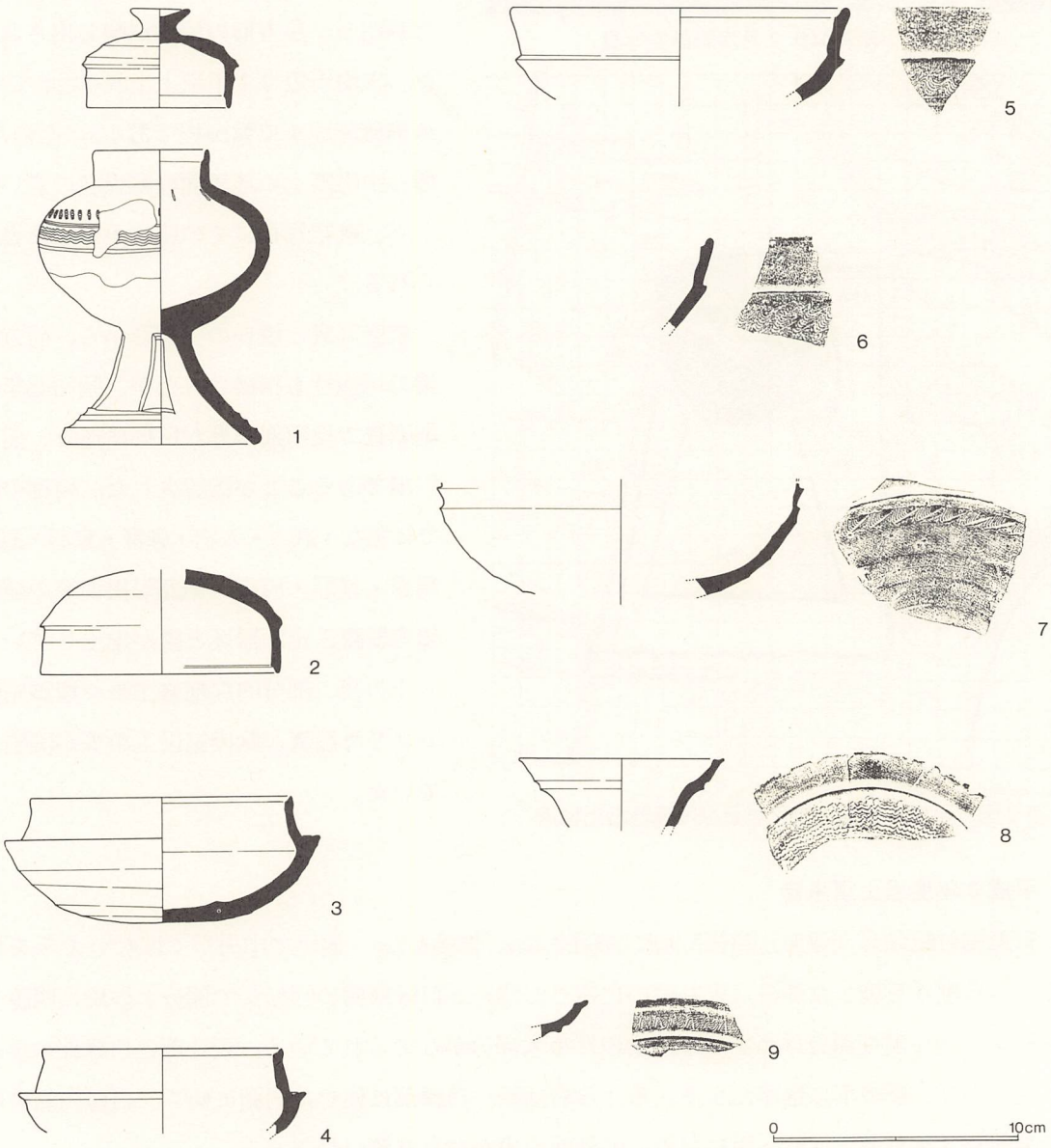


写真３　有蓋脚付短頸壺



第３図　平成９年度出土須恵器

〔壺部〕口径4.9cm、胴径9.5cm、脚径8.2cm、口縁部高1.5cm、脚高4.7cm、器高12.2cm、最大径は体部のやや上方にあり、口縁部は体部から直立して立ち上がり、端部の近くで僅かに外反する。口縁端部内面の器壁が端部側4mm程が薄くなり段になる。2以降の遺物の口縁端部内側も同様に段になるが、他は器壁の薄い部分の高さが狭い。体部上半には2条の沈線がめぐり、その間には一単位4本の櫛描波状文を施す。体部口縁部寄りには、右下がりの櫛状工具による刺突文を間隔を置いて一周させる。蓋とセットで焼成されたため蓋の一部が壺部に付着している。体部上半には僅かに自然釉が付着し、沈線の直下にも釉が付着する。脚の壺部との接合部分は細く、壺底はやや粗くなでられている。脚は大きく開き、裾部で僅かに下方へ向く、外面裾部には明瞭な3本の沈線（2本の凸線）を付け、台形の透かし孔が4方向に一段穿かれている。透かし孔に面取りは無く、切り込み線は壺部へ及ばない。外面には煤けた色調の部分に連続して釉が付着する。胎土は白色粒を含む。外面がすすけ、色調は暗灰色(N3／-)～灰白(10Y7／1、N6／-、N7／-)[7]。焼成は良好だが、壺下半は外面が荒れる。墳丘造出しと前方部に挟まれた内堀（A地点）から出土。

2　坏蓋　推定口径9.8cm、残存高4.4cm。口縁端部内面の器壁が薄くなるため、段になる。天井部は3／5に、ろくろ左回転の篦削りを施す。他は回転ナデ調整。胎土は砂粒、白色粒を含み、やや粗い。色調は灰色(N6／-)。焼成は良好。天井部と口縁部の境の稜はやや鋭い。口縁部 1／9、天井部1／5残存。A地点出土。

3　坏　口径10.8cm、受け部径13.0cm、器高5.1cm、底部外面4／5 を篦削り、他は回転ナデ調整。口縁部立ち上がりは外反し、端部は内傾し、凹面をなす。端部は鋭く尖る。胎土は砂粒を含み、やや粗い。色調は灰色(N6／-)。焼成は良好。1／2 残存。A地点出土。

4　坏　受け部径12.0cm、口縁部立ち上がりは僅かに外反し、端部は内傾し、凹面をなす。3ほど先端部は鋭くない。胎土は砂粒を含み、やや緻密。色調は灰色(N6／-)。焼成は良好。底部欠、受け部 1／4、口縁部1／10残存。ロクロ回転方向不明。A地点出土。

5　無蓋高杯　口縁部は斜め上方に立ち上がる。推定口径14.0cm、口縁端部内面の器壁が薄くくぼむ段になるが、製品全体に厚みがあり先端部は丸くなる。坏部外面には、一単位8本の櫛描波状文を施す。色調は灰色(N6／-)、胎土の色調は紫灰色(5RP6／1)。胎土は緻密。焼成は堅緻、1／10残存、ロクロ回転方向不明。後円部東側内堀の中堤側（B地点）から出土。

6　無蓋高杯　口縁部は肥厚しながら斜め上方に立ち上がる。小破片のため径は不明。口縁端部内面の器壁が薄くなるため段をもつが、先端部は緩やかに尖る。坏部外面には一単位8本の櫛描波状文を施す。色調は灰色(N6／-)。胎土は緻密。焼成は堅緻。5に類似するが、櫛描波状文や器壁の厚みが僅かに異なる。B地点出土。

7　無蓋高杯　全体の形状は不明だが、体部外面に一単位7本の櫛描波状文を施す。外面に凸線が2段みられ、上の段より上方の器壁が薄く、1mmに満たない。内面には成形時の凹凸残る。坏部外面約1／2 を回転篦削り。他は回転ナデ調整。色調は灰色(N5／-)、胎土には砂粒・白色粒含み、やや緻密。焼成は堅緻。A地点出土。

8　瓹　推定口径8.4cm、頸部には一単位8本の櫛描波状文を施すが波形が一定しない。頸部から凸線を境に口縁部となる。凸線から口縁部への移行部分に緩やかな窪みがある。口縁端部は内傾

し、凹面をなす。外面はくすべて黒色(N2／-)、内面は釉が掛かるが、あばた状に器面が荒れザラザラ。胎土は色調が灰色(10Y6／1)で緻密。焼成は堅緻。A地点出土。

9　瓹　推定口径14.0cm、大きく外反する口縁部は、端部内面の器壁が薄く、自然釉の影響もあり、ゆるやかな段になる。口縁部外面には一単位10本の櫛描波状文を施す。内面には自然釉がかかる。色調は外面黒褐色(7.5YR3／1)、内面暗オリーブ褐色(2.5Y3／3)。胎土は緻密。焼成は堅緻。A地点出土。

昭和13年の資料を含めて出土した須恵器をみると、胎土・焼成の違いから複数の生産地から持ち込まれているようすがうかがえる。生産地の判定は視覚的な判断では困難で、科学的な方法を加えて判断する必要があるが、胎土が洗練され緻密で、焼成が硬質なため重量感もある、陶邑窯の製品の可能性も考えられるもの。胎土が粗く含有する粒子が器面に噴出し、やや軽い、陶邑窯の可能性の低い製品。胎土が上質で器形や成形・整形の特徴から愛知県東山窯の可能性があるものに大まかに区分できよう。

4　稲荷山古墳出土須恵器の型式と年代

かつて『埼玉稲荷山古墳』で報告した「伝稲荷山古墳出土の須恵器」について、多くの研究者が様々な検討を加えている。まず、これらの須恵器が須恵器編年上どこに位置づけられているのか、主な文献の記述部分を抜き出してみる。(下線は筆者傍線)

金子眞土氏　「瓹・蓋杯にやや古式の様相をみとめる他、高杯蓋・高杯は細部で異なる部分を持つ。…(中略)…あえて時間差を問題にするほどの違いはなく、同時期の所産とすべきであろう。現在の知見ではＴＫ二三型式(陶邑Ｉ－４期)に比定することが妥当であるが、Ｉ期後半の円窓高杯についての資料が僅少である。」[8]

田辺昭三氏　「二つの主体部をもっているので、いずれの主体部に属するかは決定し難いが、その須恵器ば高蔵47号型式の中でもやや古い形式的特徴をもっている。」[9]

中村　浩氏　「少なくとも２段階の時期差があるものが認められ、従来いわれているよりは古く遡るものも見られることを確認した。さらに辛亥年を471年とすると、その年代に相当するものはＩ型式４段階の時期に遡る一群と考えた。」[10]

坂本和俊氏　「括れ部付近から出土したと伝えられるＴＫ23型式からＴＫ47型式に変わる時期の多量の須恵器は、副葬品の内容からみて礫槨に伴うものと想定する。」[11]

安村俊史氏　「田辺氏の型式に当てはめるとＴＫ23型式と考えてもいいのではないかと考えている。稲荷山古墳出土須恵器をＴＫ47型式と断定した記述をしばしば見かけるが、田辺氏はＴＫ47型式の中でも古い特徴を指摘しているのであり、ＴＫ23型式からＴＫ47型式にかけての時期にあたることに留意しておく必要があるのではないかと思う。」[12]

白石太一郎氏　「このうち須恵器は肉眼観察では大阪府陶邑窯跡群のものと判断される。田辺昭三氏の型式編年ではＴＫ47型式に近い。一部の有蓋高杯にはＴＫ23型式とすべきものも含まれるが、大部分の有蓋高杯は、蓋・杯部とも天井部・底部が丸みを増し、口径に比べて高く、深い。全体

としてＴＫ47型式でも古い段階に位置づけて大過なかろう。」[13]

この他、都出比呂志氏、駒宮史朗氏、橋本博文氏は「ＴＫ47型式」と述べている。[14] また、稲田晃氏は、陶邑窯跡群との比較ではないが、「久居２号窯出土の瑕破片を実見した結果、両者は瓜二つと言ってよく、稲荷山古墳の瑕が久居２号窯の製品であることには一片の疑いもないことが分かった。」として三重県久居市久居２号窯の製品と断定している。[15]

このように同一の資料について、「ＴＫ23型式」、「ＴＫ23型式の時期に遡るものとＴＫ47型式の両方」、「ＴＫ23型式のからＴＫ47型式に変わる時期」「ＴＫ47型式の古式」「ＴＫ47型式」とする様々な考えが出されている。

次に年代について記述している部分を要約してみる。稲荷山古墳の礫槨からは、実年代資料として、辛亥年銘の記された鉄剣が出土しているが、礫槨・鉄剣銘文・須恵器の三者の共伴関係の考え方の違いから、同じ型式であっても存続時期の一致をみていない。

須恵器の編年研究は、田辺昭三氏、中村浩氏によって進められ、その編年に照らし合わせることで、時期的な位置づけが試みられてきた。辛亥年銘の発見は、実年代の想定に少なからず影響を与えたようで、当該時期の型式は、発見される以前と若干異なっている。

田辺昭三氏は、ＴＫ23型式とＴＫ47型式の間に西暦500年の年代を与えている。出土須恵器の年代を西暦500年を僅かに下った位置に置いている。[16]

中村浩氏は、金錯銘鉄剣発見以前は、Ｉ型式４段階・５段階を６世紀前半の前後を僅かに含めた時期に置いていた[17]が、発見後はＩ型式４段階を５世紀末とし、Ｉ型式５段階との間に西暦500年をあてている。[18]

後藤建一氏は、直接ではないが、湖西編年と田辺・中村両氏の編年と対比させることで、年代について述べ、ＴＫ47型式・Ｉ型式４段階に５世紀の第４四半期（その後の後藤氏の論文でこの期に471年を置いている[19]）を、次段階に５世紀末から６世紀第１四半期の年代を与えた。

藤原学氏は、鉄剣銘文からＩ－４・５段階を５世紀最末期（西暦500年頃）～６世紀極初頭とする実年代を支持するとし、稲荷山古墳の須恵器を西暦500年頃にあてている。[20]

都出比呂志氏は、稲荷山古墳造営を471年以後とし、ＴＫ47型式に 471年以後20～30年の幅の年代を与えた。[21]

坂本和俊氏は、鉄剣が製作されてから埋葬されるまでの期間を30年と想定し、礫槨への埋葬を500年前後と考え、須恵器がＴＫ23型式からＴＫ47型式に移行する時期であることから、ＴＫ23型式を480～ 500年、ＴＫ47型式を500～520年と考えた。[22]

小沢洋氏は、ＴＫ23型式からＴＫ47型式の年代を５世紀末葉～６世紀初頭(580～600)に位置づけた。[23]

天野末喜氏は、稲荷山古墳出土須恵器の型式をＴＫ23型式・ＴＫ47型式と判断し、鉄剣の埋納までの期間を考慮して５世紀の第Ⅳ四半期に含まれるとみなした。[24]

斉藤孝正氏は、猿投窯との対比を行い、陶邑窯Ｉ型式第４段階と猿投窯第Ｉ期第４小期（城山－２）を、Ｉ型式第５段階と猿投窯第Ｉ期第５小期（Ｈ－11）とし、第５小期の終わりに西暦500年を入れた。[25]

白石太一郎氏は、辛亥年銘の鉄剣を出土した礫槨は、鈴杏葉の年代からＭＴ15型式の古い段階の須恵器が伴うはずで、出土した須恵器は未発見の中心主体の埋葬に伴う遺物と考えている。生前入手した剣を490年から500年頃に埋葬した時に副葬したと考え、ＴＫ47型式を５世紀の第４四半期を中心とすると頃、ＭＴ15型式を５世紀末から６世紀第１四半期にかけての頃と想定された。[26]

山田邦和氏は、田辺昭三氏・中村浩氏の編年序列を継承し、Ｉ後期古段階（高蔵寺23号窯式）と新段階（高蔵寺47号窯式）にわけ、新段階の初頭に500年を与えてる。[27]

このように、同一の須恵器について、型式の異なる見解が生じ、その型式の存続時期についても諸説がある。[28] これは、研究者の個人的な判断基準が異なるためなのか、酒井清治氏が指摘[29]するように型式の設定が妥当なのかという問題も生じかねない。この点について論ずるほどの技量はないが、いずれにしても稲荷山古墳の埋葬施設と須恵器の相関関係が、いまだ不明瞭なまでの論述である点に、内包された問題の一つががあることは明白であり、発見されている以外の主体部について、有無の確認の必要性を痛切に感じる。[30]

今回紹介した稲荷山古墳は今後も引き続き調査が実施され、接合する資料が発見される可能性も予想される。平成９年度の調査時点での見解であることを付け加えておく。

末筆ながら本資料を紹介するにあたり、市川康弘・飯塚光生氏をはじめ、お世話になった多くの方々に、厚く御礼申し上げます。

註

1）稲荷山古墳は、埼玉県教育委員会 1980 『埼玉稲荷山古墳』。二子山古墳は、1987『二子山古墳』及び1992『二子山古墳　瓦塚古墳』。将軍山古墳は、1997『将軍山古墳』（いずれも埼玉県教育委員会刊）に詳しい。埼玉古墳群に関連する刊行物は、拙稿 1995 「埼玉古墳群関連文献目録Ｉ」『調査研究報告』第８号　埼玉県立さきたま資料館　を参照していただきたい。

2）渡辺貞幸「辛亥銘鉄剣を出土した稲荷山古墳をめぐって」『考古学研究』99　考古学研究会　pp.27～34

3）埼玉県教育委員会 1980 『埼玉稲荷山古墳』p.29　において、採取された場所が括部東側として報告されているが、川鍋氏立会いのもと確認したところ括部西側であることが判明した。

4）寛政年中(1789 ～1801) に編修し、文化３年(1806)に献上された「館林道見取絵図」に、埼玉古墳群付近の絵図があり古墳が描かれているが、現在知られている名称と異なることから照合することが出来ない。児玉幸多監修 1995 『館林道見取絵図』東京美術

5）鉄剣の銘文には、辛亥の年七月中に記したことを述べ、乎獲居臣の祖先である意富比垝から乎獲居臣までの八代の系譜を示し、代々大王の親衛隊の長として仕えていたことと、乎獲居臣も獲加多支鹵大王が斯鬼宮にいたとき、天下を治めるのを補佐していたことから、その記念として立派な剣を作り、獲加多支鹵大王に仕えている由来を剣に刻むという内容が刻まれている。乎獲居臣が稲荷山古墳の被葬者なのかは確実ではない。

6）古墳周辺の土取り時期は、土取り後に浅間Ａ火山灰が堆積していることから、天明３年(1783)以前であり、削平面と火山灰層の間隔が数cmであることから、両者の時期が離れているとは思われない。天正18年(1590)石田三成が忍城水攻めのときに築造した堤（石田堤）や、稲荷山古墳の北を流れる旧忍川堤防の盛土に使用された可能性があるが、断定できない。

7）須恵器の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修 1976 『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社の色名により表示した。

8）金子眞土 1980 「土器」『埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会　p.124

9）田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店　p.45

10）中村浩 1988 「須恵器の編年」『季刊考古学』第24号　雄山閣出版　p.39

11）坂本和俊 1996 「埼玉古墳群と无耶志国造」『群馬考古学手帖』6　群馬県土器観会　p.70

坂本俊夫 1987 「東国における古式須恵器研究の課題」『第８回　三県シンポジウム　東国における古式須恵器をめぐる諸問題－第Ⅰ分冊－』千曲川水系古代文化研究所　p.464ではTK47型式としていた。

12）安村俊史 1996 『高井田山古墳』　柏原市教育委員会　p.174

13）白石太一郎 1985 「年代決定論(二)－弥生時代以降の年代決定」『岩波講座日本考古学』1　pp.230～231

白石太一郎 1997 「有銘刀剣の考古学的検討」『新しい史料学を求めて』吉川弘文館　p.208

14）都出比呂志 1982 「前期古墳の新古と年代論」『考古学雑誌』67-4　日本考古学会 p.121

駒宮史朗 1987 「埼玉県出土の古式須恵器」『第８回三県シンポジウム　東国における古式須恵器をめぐる諸問題－第Ⅰ分冊－』 p.144

橋本博文「文字の登場」『考古学キーワード』有斐閣　p.103

15）稲田晃 1969 「稲荷山古墳の年代をめぐって（上）（下）－岩戸山古墳から稲荷山古墳をみる－」『歴史手帖』第68・73号　名著出版（下）のp.53。なお、久居２号窯の製品については、器形や種類・製作技法の陶邑との類似が指摘されている。山沢義貴 1981 「三重の古代窯」『日本やきもの集成』近畿Ⅰ　平凡社

16）田辺昭三 1966 『陶邑古窯跡群』Ⅰ　平安学園考古学クラブ

田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店 p.43

17）中村浩 1978 「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑』Ⅲ 大阪府教育委員会 pp.168～241

中村浩 1977 『陶邑』　大阪府教育委員会　p.に実年代を入れた編年table がある。

18）中村浩 1984 「用語解説」『日本陶磁の源流－須恵器出現の謎を探る－』柏書房 p.237

19）後藤建一 1989 「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』静岡県教育委員会 pp.328～331

後藤建一 1995 「湖西編年と他窯編年対比表」『須恵器集成図録』第３巻　東日本Ⅰ　雄山閣出版　p.87

20）藤原学 1991 「須恵器の編年　１近畿　Ａ畿内」『古墳時代の研究』６　雄山閣出版　pp.121～135 、ただし、p.132 の表ではⅠ－４とⅠ－５の間を500年とした異なる年代を示している。

21）都出比呂志 1982 「前期古墳の新古と年代論」『考古学雑誌』67-4　p.121

22）坂本和俊 1996 「埼玉古墳群と无耶志国造」『群馬考古学手帖』6　p.76

23）小沢洋 1996 「上総・下総の前方後円墳」『東北・関東における前方後円墳の編年と画期』東北・関東前方後円墳研究会 p.52

24）天野末喜 1994 「倭の五王の墳墓を推理する」『倭の五王の時代－巨大古墳の謎にせまる－』　藤井寺市教育委員会 pp.62～73

天野末喜 1996 「倭の五王の墳墓を推理する」『倭の五王の時代』藤井寺市教育委員会 pp.137～158

天野末喜 1996（1994 の講演会記録）では、稲荷山古墳の須恵器をＴＫ23と断定されている。

25）斉藤孝正 1995 「猿投、美濃、美濃須衛窯編年と他窯編年対比表」『須恵器集成図録』第３巻　p.86

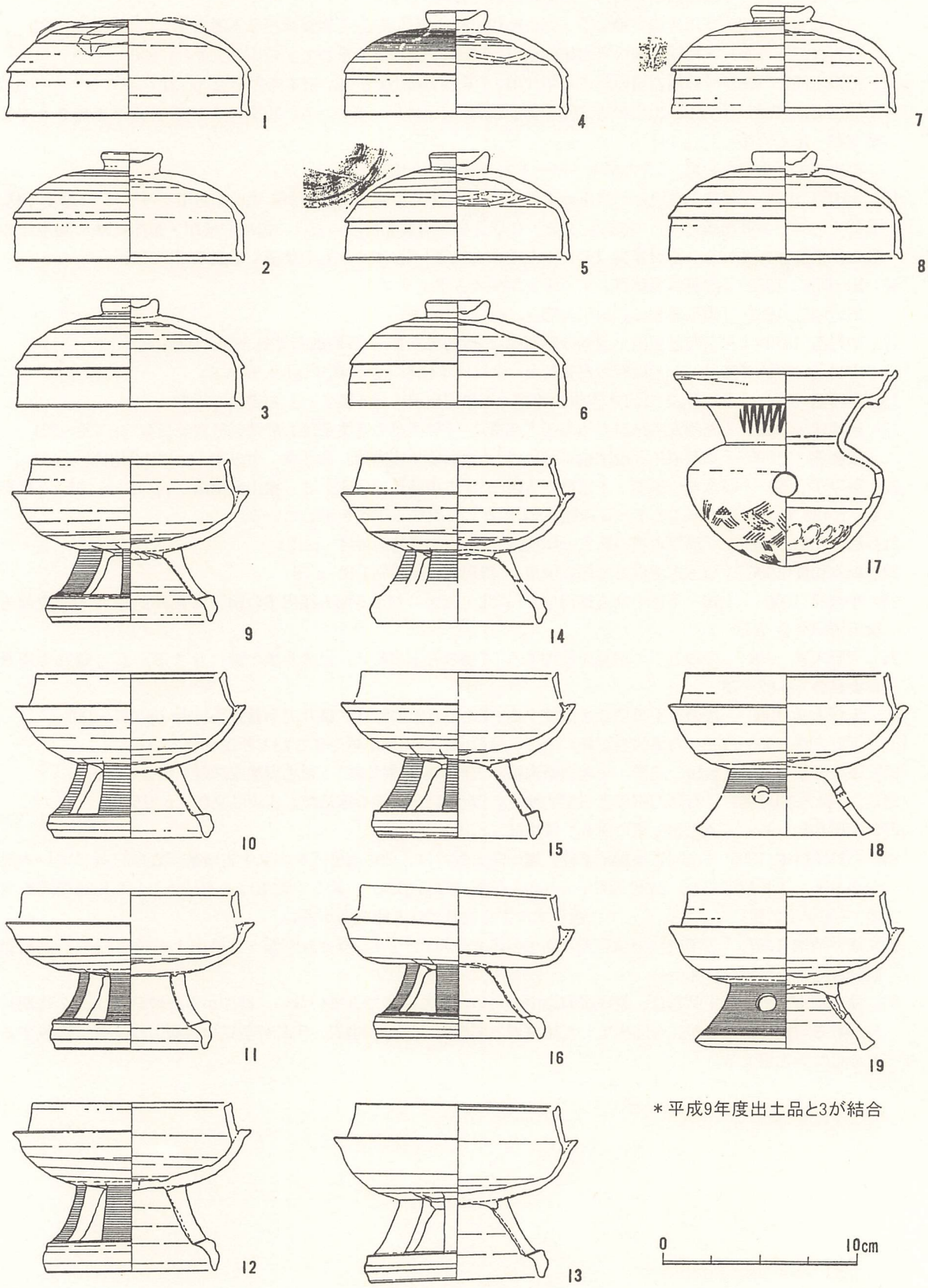
26）白石太一郎 1997 「有銘刀剣の考古学的検討」『新しい史料学を求めて』吉川弘文館　p.215

27）山田邦和 1998 『須恵器生産の研究』学生社　p.16

28）石野博信編 1995 『全国古墳編年集成』雄山閣出版では、須恵器型式を本文・古墳編年表に記載している部分がある。ＴＫ47型式を、西暦 500年より古く位置づける(6人）、新しく位置づける(3人)、ＴＫ23型式を含めて500年上に置いている(1人）で、西日本に古く位置づける研究者が多い。

29）酒井清治 1997 「古墳時代の須恵器－須恵器研究の視点－」『副葬された器－古墳出土の須恵器－』高崎市観音塚考古資料館 pp.40～41

30）稲荷山古墳出土の土師器は、整理復原途中のため詳しく観察できていない。破片からの観察では、２時期に分かれる可能性があるが、今回出土した須恵器と同様に、ＴＫ23型式・ＴＫ47型式の時期より前後に逸脱するものはないと思える。



第４図　昭和12年採集須恵器（川鍋重寿氏所蔵）

番号	器種	法量 cm	形態の特徴	成・整形の特徴	備考
1	蓋	口径 12.3 稜径 12.5 器高 4.9 口縁部高 2.2	口縁部は端部で外反気味に終る。端部は内傾する凹面をもつ。天井部の曲線は稜までなめらかに続く。	右回転ロクロ使用 天井部外面⅔を回転ヘラ削り調整	胎土・3㎜前後の白色砂粒、0.5㎜前後の黒色砂粒を含むも密　焼成・堅緻、自然釉　色調・灰色 口縁部の一部を欠く
2	高杯蓋	口径 11.6 稜径 11.9 器高 5.6 口縁部高 2.2 つまみ径 3.2 つまみ高 1.0	口縁部は、僅かに内弯気味に終る。端部は内傾する凹面をもつ。稜は短かく鋭い。鈕は基部が太く、上面は凹面をなす。鈕端部は肥厚する。出土例中最も大形。	左回転ロクロ使用 天井部外面⅔を回転ヘラ削り調整	胎土・組成はNo.1同様だがやや粗い。 焼成・良好 色調・青灰褐色 ほぼ完形
3	〃	口径 11.5 稜径 11.8 器高 5.5 口縁部高 2.0 つまみ径 3.0 つまみ高 0.85	口縁部は、端部に向かって肥高しながら直立する。端部は内傾する凹面をもつ。稜は短かく鋭い。鈕は筒状で、上面に凹面をもつ。	左回転ロクロ使用 天井部外面⅔を回転ヘラ削り調整	胎土・組成はNo.1同様だがやや粗い。 焼成・良好 色調・淡灰褐色 ¼から復原実測
4	〃	口径 11.4 稜径 11.6 器高 5.3 口縁部高 2.0 つまみ径 3.2 つまみ高 0.9	口縁部は端部に向かって肥厚しながら僅かに内弯する。 端部は内傾する凹面をもつ。 稜は短かく鋭い。 鈕は筒状で、上面に凹面をもつ。	左回転ロクロ使用 天井部外面¾を回転ヘラ削り調整。この削り痕はカキ目様の平行凹線となる。 内面中位に一部ナデツケ	胎土・組成はNo.1同様だがやや粗い。 焼成・良好 色調・淡青灰色 口縁部の⅓を欠く。
5	〃	口径 11.5 稜径 11.6 器高 5.5 口縁部高 1.9 つまみ径 3.15 つまみ高 0.95	口縁部は端部に向かって肥厚しながら直立する。 端部は内傾する凹面をもつ。 稜は短かく鋭い。 鈕を筒状で、上面に凹面をもつ。	左回転ロクロ使用 天井部外面⅔を回転ヘラ削り調整天井部内面中位にナデツケ。	胎土・組成はNo.1同様だがやや粗い。 焼成・良好（高杯重ね焼きの痕跡を残す） 色調・淡青灰色 口縁部は⅓から復原実測
6	〃	口径 11.05 稜径 11.2 器高 5.35 口縁部高 2.1 つまみ径 3.4 つまみ高 0.95	口縁部は端部に向かって肥厚しながら直立する。 端部は内傾する凹面をもつ。 稜は短かく鋭い。 鈕は筒状で、上面に凹面をもつ。出土例中最も小形。	左回転ロクロ使用 天井部外面⅔を回転ヘラ削り調整	胎土・組成はNo.1同様だがやや粗い。 焼成・良好（高杯重ね焼きの痕跡を残す） 色調・淡青灰色 ⅓から復原実測
7	〃	口径 11.5 稜径 11.7 器高 5.5 口縁部高 2.15 つまみ径 3.3 つまみ高 0.85	口縁部は、一定した器厚のまま端部に至る。端部は尖り、内傾する凹面をもつ。 稜は短かく、やや甘い。 鈕は偏平で、上面にゆるやかな凹面をもつ。	左回転ロクロ使用 天井部外面¾を回転ヘラ削り調整稜内面には他でみられる強いしめつけがみられない。	胎土・組成はNo.1同様だがやや粗い。 焼成・良好 色調・淡灰褐色 ほぼ完形
8	〃	口径 11.9 稜径 12.1 器高 (4.65) 口縁部高 2.1	口縁部は、端部にむかって肥厚しながら直立する。 端部は内傾する凹面をもつ。 稜は短かく鋭い。	左回転ロクロ使用 天井部外面⅘を回転ヘラ削り調整	胎土・組成はNo.1同様だがやや粗い。　焼成・良好　色調・淡青灰色 ¼から復原実測
9	高杯	口径 10.0 受け部径 12.1 器高 8.45 たちあがり高 1.7 脚部高 3.75 脚基部径 5.2 脚底径 8.1	杯部たちあがりは、直線的に内傾し、端部には内傾する凹面をもつ。受け部は、浅い凹面をもち、やや外上方にのびる。端部は鋭い。脚部はゆるやかに外反し、端部の肥厚部分は低く、厚い。長方形透を三方向、等間隔にあける。	左回転ロクロ使用 杯体部外面⅘を回転ヘラ削り調整 脚柱部外面にカキ目調整 脚内面にナデツケ	胎土・組成はNo.1同様だがやや粗い。 焼成・良好 色調・淡青灰色 杯部½を欠く。
10	高杯	口径 9.5 受け部径 11.8 器高 8.5 たちあがり高1.65 脚部高 3.8 脚基部径 5.2 脚底径 7.7	杯部たちあがりは直線的に内傾し、端部には内傾する凹面をもつ。受け部は浅い凹面をもち、やや外上方にのびる。端部は鋭い。 脚部はゆるやかに外反し、端部の肥厚部分は低く、厚い。長方形透を三方向、等間隔にあける。	左回転ロクロ使用 杯体部外面⅘を回転ヘラ削り調整 脚柱部外面にカキ目調整	胎土・組成はNo.1同様で密　焼成・堅緻　脚部に自然釉 色調・晴灰色 杯部は¼からの復原実測

第2表　土器観察表（1）

番号	器種	法量 cm	形態の特徴	成・整形の特徴	備考
11	高杯	受け部径 12.7 器高 (6.6) 脚部高 4.0 脚基部径 5.4 脚底径 7.5	杯部が大きく、体部はゆるやかに内弯。受け部は浅い凹面をもち、やや外上方にのびる。端部は鋭い。脚部の外反はやや強く、端部の肥厚部分がやや高く、端部は直立して尖り気味。 長方形透を三方向、等間隔にあける。	左回転ロクロ使用 杯体部外面⅔を回転ヘラ削り調整 脚柱部外面にカキ目調整 脚接合部は、強いナデが一周し、杯切り離し痕は消されずに残る。	胎土・組成はNo.1同様だが、やや粗い。 焼成・良好 色調・淡青灰色 杯部は⅓からの復原実測
12	〃	口径 10.1 受け部径 12.2 器高 8.8 たちあがり高1.45 脚部高 4.5 脚基部径 8.5 脚底径 5.6	杯部たちあがりは器壁が厚く一定し直線的に内傾する。端部には内傾する凹面をもつ。受け部は浅い凹面をもちほぼ水平にのびる。脚部はゆるやかに外反し、端部の肥厚部分は高く、器壁を減じながら、直立して尖る。長方形透を三方向、等間隔にあける。	左回転ロクロ使用 杯体部外面⅔を回転ヘラ削り調整 脚柱部外面にカキ目調整 杯立ち上がり部のしめは弱く、一定している。	胎土・組成はNo.1同様だが、やや粗い。 焼成・良好 色調・青灰褐色 ほぼ完形
13	〃	口径 10.4 受け部径 12.6 器高 9.2 たちあがり高 1.8 脚部高 4.25 脚基部径 5.6 脚底部 8.7	杯部たちあがりは僅かに外反気味。端部の内傾する凹面は段に近い様相を示す。受け部の凹面は浅く、ほぼ水平にのびる。脚部はゆるやかに外反し、端部の肥厚部分がやや高く、端部は直立して尖り気味。長方形透を三方向、等間隔にあける。	左回転ロクロ使用 杯体部外面¾を回転ヘラ削り調整 本高杯群中唯一カキ目調整がない。	胎土・組成はNo.1同様だが、やや粗い。 焼成・良好 良調・灰白色 ⅓を欠く。
14	〃	口径 9.8 受け部径 12.0 器高 (6.4) たちあがり高 1.8 脚部高 (1.7) 脚基部径 5.4	杯部たちあがりは直線的に内傾し、端部には内傾する凹面をもつ。受け部には浅い凹面をもち、やや外上方にのびる。端部は鋭い。 脚部はゆるやかに外反する。 長方形透を三方向、等間隔にあける。	左回転ロクロ使用 杯体部外面⅔を回転ヘラ削り調整 脚柱部外面にカキ目調整	胎土・組成はNo.1同様だが、やや粗い。 焼成・良好 色調・淡青灰色 ¼からの復原実測
15	〃	受け部径 12.1 器高 (7.1) 脚部高 4.0 脚基部径 5.4 脚底径 7.9	受け部は浅い凹面をもち、やや外上方にのびる。端部は鋭い。脚部はゆるやかに外反し、端部の肥厚部分は低く、厚い。長方形透を、三方向、等間隔にあける。	左回転ロクロ使用 杯体部外面⅔を回転ヘラ削り調整 脚柱部外面にカキ目調整	胎土・組成はNo.1同様だが、やや粗い。 焼成・良好 色調・淡灰褐色 杯体部⅓を欠く。
16	〃	受け部径 12.1 器高 (6.1) 脚部高 3.8 脚基部径 5.1 脚底径 8.3	受け部は浅い凹面をもち、僅かに外上方にのびる。端部は鋭い。杯部は内面に亀裂が走り、本来の杯部形はNo.9他同様のものと思われる。脚部はゆるやかに外反し、端部の肥厚部分は低く、厚い。長方形透を、三方向、等間隔にあける。	左回転ロクロ使用 杯体部外面⅔を回転ヘラ削り調整 脚柱部外面にカキ目調整	胎土・組成はNo.1同様だが、やや粗い。 焼成・良好、杯部にへたりがある。 色調・淡青灰色 杯体部は⅓から復原実測
17	甕	口径 11.3 器高 10.1 頸部径 5.2 口縁部高 3.8 体部最大径 10.1	最大径は口縁部にある。体部の肩の張りは大きいが、稜は弱く、なで肩であり、底部も僅かに尖り気味に終る。口縁部内面には明瞭な凹面をもつも端部は鋭さを欠く。口縁下に巡る凸線は鋭い。	左回転ロクロ使用 頸部には10本1単位の波状文 体部外面はタタキしめの後ナデツケ。体部内面には強い指頭圧痕を残す。タタキは体部中位以下のみ。	胎土・組成、密度ともにNo.1に酷似する。 焼成・堅緻　自然釉が厚くのる。 色調・暗灰色 口縁部は⅓から復原実測
18	高杯	口径 10.4 受け部径 12.4 器高 (6.4) たちあがり高 1.6 脚部高 (1.5) 脚基部径 5.5	杯部たちあがりは、直線的に内傾し、端部は内傾する凹面をもつ。 受け部は、本土器群中唯一凸面をなし、肥厚する。 脚部はゆるやかに外反する。 円形透は、三方向にあけられる。	左回転ロクロ使用 杯体部外面⅔を回転ヘラ削り調整 脚部外面にカキ目調整	胎土・No.1に比較して白色砂粒が少なく、やや粗い。 焼成・良好 色調・淡灰褐色 脚部は¼から復原実測
19	〃	口径 10.1 受け部径 12.2 器高 8.1 たちあがり高 1.8 脚部高 3.3 脚基部径 5.6 脚底径 8.1	杯部たちあがりは、直線的に内傾し、端部は内傾する凹面をもつ。受け部は、ほぼ水平にのび中央に浅い凹線が巡る。脚部は、端部に向かって肥厚しながらゆるやかに外反し、端部にはゆるく幅広い凹面をもつ。円形透は、三方向、等間隔にあけられる。	左回転ロクロ使用 杯体部外面⅔を回転ヘラ削り調整 脚部外面のカキ目調整は端部5㎜幅には及ばない。	胎土・No.18同様 焼成・良好 色調・淡灰褐色 脚部の¼を欠く。

第3表　土器観察表（2）

民俗事例の窓（2）－自治体は民俗をどのように描いてきたのか－

斎　藤　修　平

はじめに

本稿は、前号に続いて近年の市町村史ブームのなかで、民俗調査が調査団という、気の合った仲間で実施され、編纂された『民俗編』ないしは民俗の調査報告書といった類の章立てをいわば「民俗」資料として提示したものである。県内で調査され、記述された「民俗」というものが本稿では網羅的（実はそれほどでもない）に示されているから、インデックスとして重宝だというコメントも何人からかいただいたが、今回の「章立て」資料の追加提示で、その重宝性は増してくるだろうと思う。もちろんそうした目論見もあったわけだが、本来は民俗調査という名で実施されてきた、私たちのスタイルの反省材料としての意味も忘れてはならない、と思うのである。

さて、県内の市町村において、民俗調査の実施と成果としての民俗資料の刊行の動機は区々だと思うが、市町村史編纂の一環として、『近代編』や『近世編』や『中世編』と伍して行くために、独立した『民俗編』をまとめていく過程で事前にいわば小手調べ的に、どのようなテーマが潜んでいるのかを探り込みするために、ある地域を調査対象として選び、民俗調査を実施し、報告書を『民俗編』の前触れ的に刊行していくスタイルである。いわばその報告書群の成果に依拠しながら、最終的に集大成としての『民俗編』に活用していくために刊行されていく事例である。もちろん、『民俗編』として、限りあるページであるから、民俗報告書は積み残しをしないための補完的機能も有しているのが特色である。いずれにしても、事前の報告書の刊行は、『民俗編』というものが完成品だという位置づけを強化する役割を担って刊行されていたものである。次にあるのが、『民俗編』が刊行された後に、補遺編として報告書を刊行するスタイルである。これは、完成品としての『民俗編』が刊行された後だけに、なかなかこのスタイルは一般的ではないが、ひとつの動機としては存在しているのである。また、相当古い時代に、市町村史が編纂された自治体では、その中に収録された民俗資料が少なかったり、あまり本格的に扱われていなかったりした場合にあらためて、民俗資料を刊行していく、というケースである。さらに、重くて、厚くて、場所をとって、文字ばかりが多くて、読む気がしない（実際に読まれていない）『民俗編』から脱却していこうという趣旨で、分冊スタイルでビジュアル情報を多くした民俗資料を刊行していこうというケースもある。また、市町村史刊行のなかで、『市町村史研究』といったいわば、市町村史編纂室が発行する紀要的な資料にも民俗資料が紹介され、すこしばかり研究的な視点から述べられているのが特色である。

いわば、こういったケースで市町村では民俗資料が刊行されているのが目立つ。ただし、結果的には幅広い読者からの需要を期待はしているものの、ほとんど読者がいないまま、刊行されているのが現状だといえよう。それは恐ろしいほどにステレオタイプ化した章立ての繰り返しでもわかるように、調査者が章立てマニュアルにそって調査を実施し、それぞれの分担した調査項目をこなしていく、という作業の存在と無縁ではない、と思うのである。

埼玉県内民俗編等刊行状況

年　代	市　　史	町　　史	村　　史
1968年（昭和43年）	『川越市史』民俗編		
1969年（昭和44年）	『大宮市史』第五巻民俗文化財編		
1980年（昭和55年）	『浦和市史』民俗編『川口市史』民俗編		
	『与野市史』民俗編		
1981年（昭和56年）	『入間市史』民俗・文化財編		
1983年（昭和58年）	『戸田市史』民俗編『東松山市史』民俗編		
	『和光市史』民俗編		
1984年（昭和59年）	『岩槻市史』民俗資料編Ⅱ		『滑川村史』民俗編
1985年（昭和60年）	『狭山市史』民俗史料編『志木市史』民俗資料編Ⅰ	『大井町史』民俗編『騎西町史』民俗編	
	『八潮市史』民俗編		
1986年（昭和61年）	『新座市史』第四巻　民俗編	『皆野町誌』資料編五民俗	
1987年（昭和62年）	『草加市史』民俗編		
1988年（昭和63年）	『桶川市史』第六巻民俗編『鳩ヶ谷市史』民俗編		
1989年（平成1年）	『北本市史』第六巻民俗編『所沢市史』民俗	『日高町史』民俗編	
	『富士見市史』資料編7民俗		
1990年（平成2年）		『白岡町史』民俗編	
1991年（平成3年）	『久喜市史』民俗編『三郷市史』第九巻民俗編	『長瀞町史』民俗編Ⅱ野の石造物	
1992年（平成4年）		『鶴ヶ島町史』民俗社会編	
1994年（平成6年）	『蕨市史』民俗編		
1995年（平成7年）	『朝霞市史』民俗編『鴻巣市史』民俗編	『児玉町史』民俗編	
1996年（平成8年）		『江南町史』資料編五民俗	
1997年（平成9年）	『幸手市史』民俗編		

報告書等

年　代	市　　史	町　　史	村　　史
1982年（昭和57年）		『寄居町の民俗』町史編纂調査報告書第八集	
1983年（昭和58年）	『坂戸市史』民俗史料編Ⅱ『飯能市史』資料編Ⅵ		
1985年（昭和60年）	『坂戸市史』民俗史料編Ⅰ		
1986年（昭和61年）			『年中行事』りょうがみ双書1
1988年（昭和63年）			『祭りと芸能』　〃　2
1989年（平成1年）	『上尾の民俗Ⅰ』		
	『半田の民俗』三郷市史調査報告書3集	『毛呂山の民俗誌』Vol.1	
1990年（平成2年）	『高須の民俗』　〃　6集	『毛呂山の民俗誌』Vol.2	『両神山』りょうがみ双書3
1991年（平成3年）	『坂戸の民俗一』横沼の民俗　坂戸市民俗調査報告書		『昔がたり』　〃　4
		『毛呂山の民俗誌』Vol.3	『玉川の民俗』
1993年（平成5年）	『坂戸の民俗二』赤尾の民俗　坂戸市民俗調査報告書	『毛呂山の民俗誌』Vol.4	
1994年（平成6年）		『毛呂山の民俗誌』Vol.5	
1996年（平成8年）	『坂戸の民俗三』坂戸宿の民俗　坂戸市民俗調査報告書		『かわさとの民俗』第一巻　村史調査報告書第五集

通史編等より抜粋

年　代	市　　史	町　　史	村　　史
1961年（昭和36年）	『行田市史』下巻　第十六章民俗		
1977年（昭和52年）		『妻沼町史』第十一章民俗	
1982年（昭和56年）	『加須市史』第六編		
1982年（昭和57年）		『吉田町史』三　民俗	
1983年（昭和58年）			『荒川村誌』第七編民俗
1984年（昭和59年）	『熊谷市史』第三章民俗		
1989年（平成1年）		『川本町史』第六編民俗	

040『入間市史』民俗・文化財編
昭和56年11月

目　次

第一章　入間市の概観……3
第一節　自然環境……4
位置と面積　地勢　気象概況
第二節　入間市への道
（1）歴史的な沿革……10
原始　古代・中世　近世　近代　連合戸長役場制度
（2）行政の変遷……17
（3）戸数と人口動態……18
人口分布と男女別構成　世帯当りの人口の推移（世帯の変遷）
第三節　交通と生産活動
（一）交　通
1　道　路……21
日光裏街道　川越道と青梅道　成木道の開さく　霞橋の架設
2　鉄道とバス……27
（二）生産活動……30
茶　織物　養豚
第二章　町と村の暮し……37
第一節　村落社会の自治組織……38
（一）上藤沢の事例
1　村の変遷……39
2　区の機構と行事……39
各区の役員　村仕事　区費　共有地
3　近隣組織－班とクミアイ－……40
第二節　村の社会生活の具体相……42
（一）木蓮寺の社会生活
1　概　観……43
2　村の社会組織……43
クミ　クミイリ　クミアイ
3　村の運営組織……45
ムラヤク　大字総会　字費　ムラヅキアイ　村仕事　地区対抗運動会
4　村の交際……47
クミヅキアイ　クミアイヅキアイ　キンジョツキアイ　タチアイ　ヂルイ付合い
5　村の諸集団……51
木蓮寺囃子の会　青年団　消防団　甚六会　若葉会　葉桜会　婦人会　大正会　霞会　長寿会　笹子俳句会　同年会
（二）坊の社会生活
1　概　観……58
2　村の社会組織……59
ハン　ムライリ　クミアイ
3　村の運営組織……62
村の役場　総会　区費　共有地
4　村の交際……63
ムラヅキアイ　クミアイヅキアイ　ソトクミアイヅキアイ　シンルイヅキアイ
（三）ゼンワン・ゼンワンクミアイ……66
1　成立時期とその理由……69
2　膳・椀類を共有する単位……69
3　保管場所と規約……71
4　使用する機会……72
5　使用状況と将来の展望……72
6　膳・椀組合の事例……73
坊の事例　黒須の事例　小谷田の事例
第三節　衣・食・住
（一）衣生活
1　普段着－下着－……74
2　仕事着……76
野良着　職人　雨具
3　晴れ着……78
婚礼　子供の着物
4　喪　服……82
5　衣類の管理……83
（二）食生活
1　日常の食事……83
主食　粉食　穀箱　小麦粉　副食　タクアン漬　梅干し　切り干し　干柿　コンニャク　肉・魚・海産物
2　代用食・その他……87
サツマダンゴ　タラシモチ　乾燥芋　モロコシ酒
3　調味料……88
味噌　醤油　その他
4　食器類……90
箱膳　カブト鉢　ハンギリ　オタマジャクシ　タケジャクシ　弁当箱
5　ハレの日の食事……92
結婚式の食事　葬式の食事
6　行事と食事……93
ケンチン汁　赤飯　あずき飯　団子　マンジュウ　大福　キガラチャ　ボタモチ
（三）住生活……94
1　民家の間取り……99
2　商家の間取り……105
3　民家の特色……108
ジョウグチ　カゼヨケ　便所　井戸　イロリ　トボグチとセド　アガリハナ　カマド　屋根
4　建築儀礼……114
ヂマツリ　ドウヅキ　大工の仕事始め　タテマエ　トウリョウオクリ　ヤウツリ　イエミ
第四節　町の諸職
（一）酒造業……119
酒造　トウジ　酒の出荷　信仰　禁忌
（二）味噌屋……123
（三）箱　屋……124
職人　桐タンス　茶箱
（四）機　屋……126
機屋　女工と奉公人　男衆　女中　サクアイ　原料　デハタ　ハタ
（五）製糸工場……131
製糸　工女　作業工程　糸引き
（六）紺　屋……134
紺屋　職人　小僧時代　染料　染色法
（七）桶　屋……136
桶屋　桶職　製品
（八）市・問屋・旅館・茶屋……139
穀市・穀問屋　繭市・繭問屋　青物市・青物問屋　茶問屋　旅籠　茶や　飯屋　馬方
第三章　生産・生業……151
第一節　茶　業
（一）狭山茶の概観……152
（二）狭山茶の歴史……152
（三）戦中戦後の動向……158
（四）狭山茶の課題……162
第二節　稲作と畑作
（一）稲　作
1　ツミタ……164
タウナイ　タネフリ　タマワリ　ミボシ　タノクサトリ　肥料　オトシミズ　タカリ　脱穀　モミスリ
2　ウエタ……169
タウナイ　ネエマ　タネフリ　クロツケ・タカキ　ナエトリ　タウエ
3　ドブッタ……171
4　陸　稲……171
種まき　草取り　ソウゴ　ヒエヌキ　刈り入れ　脱穀
（二）畑　作
1　麦　作……172
畑うない（ジョゴシラエ）　ナワズリ　堆肥　トッチャアナゲ　麦まき　土かけ　麦踏み　ウネタテ　土入れ　サクリヨセ（サンバンザク・サンバンゴ）　麦刈り　脱穀　カラヌキ　麦作りの祝い
2　甘　藷……180
サツマ床　フセコミ　発芽　苗さし　トッチャアナゲ　ツルカエシ　サツマ掘り　貯蔵
（三）肥　料……186
灰　下肥　堆肥　金肥
第三節　養　蚕

（一）養蚕の時期……１８９
（二）桑……１９０
（三）蚕　室……１９２
（四）養蚕具……１９３
コノメ　蚕網　タケジ　マブシ　種紙
（五）蚕の飼育……１９７
掃き立て（催醒）　上蔟
（六）繭買い－座繰り－……２０２
（七）蚕の病気……２０３
軟化病　硬化病　白キョウ病　微粒子病　リョッキョウサン　カビによる病気　ダニによる病気
（八）養蚕信仰……２０４
第四節　野鍛冶
（一）弟子入りから独立まで……２０６
（二）鍛冶屋のモノビの日……２０８
（三）西　行……２０９
（四）得意先
（五）製作品……２１０
（六）鍛冶屋の仕事場……２１５
ふいご　ホド　金敷
（七）鍛冶屋の取り引き業者
１　金物屋
２　炭焼き
３　棒屋……２１６
４　下駄屋……２１７
（八）鍛冶屋組合……２１７
（九）転　業……２１８
第五節　カゴ屋
（一）カゴ屋とカゴ売り……２１８
（二）カゴ屋職人……２１９
年季奉公　一年のスケジュール
（三）カゴ作り……２２１
カゴの材料　カゴ作りの工程
（四）カゴ屋の製品
１　大　物……２２８
茶摘みザル　ショイカゴザル　運搬カゴザル　ヒラカゴ　クワカゴ　コノメダナ　クズハキカゴ　コイツミザル　クマデ　豚カゴ　カケナガシ　ヨコビツ　ハシゴ　ゴミクズカゴ　カクカゴ
２　小　物……２２９
マカイ　ショウギ　カブセ　スイノウ　ワンザル　ブッタイ　ウケ　ビク
（五）竹製品組合……２３０
第六節　川　漁
（一）入間川・霞川の概況……２３３
（二）川の利用……２３４
（三）漁　　撈
１　入間漁業組合……２３６
２　魚の種類……２４０
瀬にいる魚　淀にいる魚
３　漁　法……２４０
４　仕掛けによる方法……２４０
オキバリ　イシグラ　ウケ　ヤナ　ブッチャキ　瀬干し　ドク流し　クキヨセ　ブッタイ　コトーカキ　ヨトボシ　カジッカ突き
５　竿釣り……２４４
友釣り　ドブ釣り　アンマ釣り　ボッカン釣り　カバリ釣り　カゴ釣り　脈釣り　タタキ　トビッキ　サシコミ　コロガシ
６　網　漁……２４６
投網　カスミ網　モジ　地引網
第七節　杣　師
（一）山仕事……２４９
薪づくり　伐採の方法　石高　ネカス位置　ネガワ剥ぎ　サメツケ　クチをキル　ヤをハル　オイマサカリ　サルクチをオトス　トメキ
（二）山の信仰……２５７
第四章　年中行事……２５９
第一節　年中行事の概況……２６０
１　暦
２　節日の総称……２６５
第二節　年中行事
１　正月準備……２６６
ススハライ　餅つき　カマジメ　年神棚　門松立て　シメ飾り　ミソカッパライ　オオミソカ
２　一　月……２７０
正月　初詣で　年男　アサダテ　若水くみ　新年会　オオバン　仕事始め　タナサガシ　オタキアゲ　七草　山の日　倉開き　小正月　マユダマ　アボヒボ　女の正月　ウママチ　ナリキゼメ　山の神　エビス講
３　二　月……２７８
節分　稲荷講　オシラ講
４　三　月……２８０
女の節供　春彼岸
５　四　月……２８１
お釈迦様
６　五　月……２８１
端午の節供
７　七　月……２８２
土用餅　テンノウサマ　七夕
８　八　月……２８４
七夕　盆　観音様
９　九　月……２８７
ハッサク　二百十日　彼岸　十五夜
10　十　月……２８９
十三夜　オカマ様
11　十一月……２８９
トーカンヤ
12　十二月……２９０
カナヤマ様　冬至
第五章　信仰生活
第一節　神社と祭礼
（一）神職の生活……２９２
淵泉善次郎宮司の事例　枝窪邦康宮司の事例
（二）助祭関係……２９８
守谷宮司の助祭関係　沢田宮司の助祭関係
枝窪宮司の助祭関係　栗原宮司の助祭関係
（三）神葬祭……２９９
（四）神社の祭礼……２９９
１　八坂神社祭礼（東金子地区新久）……３００
テンノウサマ　祭りの準備　ヨミヤ　ムラマワリ　行列の順序　テンノサマのサカマンジュウ　社寺総代　祭典幹事
２　白髭神社祭礼（西武地区野田）……３０４
祭日　春祭り　夏祭り　奉賛会　祭礼の役員
３　神明神社祭礼（藤沢地区上藤沢）……３０５
テンノウサマ　ヨミヤ　供物　ホンマツリ　氏子組織　祭典費
４　氷川神社祭礼（豊岡地区高倉）……３０６
テンノウサマ　ムラマツリ
５　稲荷神社祭礼（金子地区根岸）……３０８
祭日　祭りの役　祭りの準備　祭り
６　春日神社祭礼（豊岡地区黒須）……３１０
祭日　春祭り　チョウチンクミアイ　ミキショ　神社組織
７　愛宕神社祭礼（豊岡地区扇町屋）……３１２
春祭り　祭りの運営組織　ヤマバン　余興当番　祭りの費用　祭典　ミキショ　屋台　ダシ
第二節　寺院の活動
（一）寺院の概況……３１６
（二）住　職－普山式　無住寺－……３１６
（三）寺院の活動……３１９
寺の年中行事　棚経
（四）寺と寺のつながり……３２１
第三節　民間信仰
（一）遠隔地信仰の諸相……３２２
榛名講　伊勢講　御嶽講　三峰講　大山講　戸隠講　平心講　秋葉講　富士講　古峰講　七石講　成田講
（二）講と生活
１　オヒマチ講（野田の事例）……３４４
２　オシラ講……３４４
野田の事例　黒須の事例　花ノ木の事例　上谷ヶ貫の事例　縄竹の事例　木蓮寺の事例

3　ビシャ講（高倉の事例）……346
4　エビス講（野田の事例）……346
5　阿弥陀講……346
的場　南矢萩・萩原の事例
6　百万遍講（狭山の事例）……347
7　念仏講……347
坊の事例　南中野の事例　花ノ木の事例
8　産泰講（縄竹の事例）……348
9　塩釜講（下藤沢の事例）……348
10　稲荷講……348
狭山東組の事例　上藤沢石田組の事例　寺竹の事例　花ノ木の事例　南矢萩の事例　野村イッケの事例　西三ッ木の事例　野田の事例　新久の山中組（十一区）の事例　子どもの稲荷講　上谷ヶ貫西組の事例　中神の事例　下谷ヶ貫の高山イッケの事例　根岸の事例
（三）家をめぐる神々
1　屋敷神の信仰……359
稲荷様　金比羅様　金山様　水天宮
2　日常生活のなかの神……361
荒神様　大神宮様　エビス様　井戸神様
（四）路傍の石仏
1　地蔵信仰……362
2　子育て地蔵……363
扇町屋の子育て地蔵　根岸の子育て地蔵　藤沢の六地蔵
3　北向き地蔵……363
大森の北向き地蔵　上藤沢の北向き地蔵
4　廻り地蔵……366
5　稲　荷……368
ハタヤの稲荷　カサモリ稲荷
6　庚　申……369
二本木の庚申様　根岸の庚申様　野田の庚申様
7　馬頭観世音……370
藤沢の馬頭様　縄竹の馬頭様
8　塞の神……371
新久の塞の神
9　杓子神……371
野田のオシャモジ様　根岸のオシャモジ様
第四節　民間医療
（一）民間薬……373
ジュウヤク　ナガネギ　トウヤク　マツヤニ　ミョウガ　クズコ　ゲンノショウコ　ユキノシタ　ムギ　クチナシ　コメヌカ　サツマイモの煮汁　マムシ　ムカデの油　セミの脱け殻　テッポウ虫　馬肉　その他
（二）神仏の祈願……377
棘ぬき地蔵　イボ地蔵　伊勢向き地蔵　カサモリ稲荷　呑竜様　庚申様　地蔵　薬師様の井戸　塩船観音　お百度参り
第五節　キリスト教
（一）入間市の教会……378
（二）信徒の生活……379
（三）集　会……380
（四）日曜学校
（五）イースター……383
（六）クリスマス……384
第六章　人の人生
第一節　産　育
（一）妊　娠……386
妊娠祈願　妊娠　妊娠中の禁忌　安産祈願
（二）出　産……389
出産場所　陣痛　出産の方法　出産の手伝い　ウブユ　後産の処理　へその緒の始末　授乳　産後の妊婦　出産祝い
（三）生児・育児儀礼……393
オシチヤ　ミヤマイリ　オクイゾメ　初正月　初節供　初誕生　年祝い　オビトキ　成人　厄年
第二節　婚　姻
（一）結婚相手の選択……400
結婚の条件　タレアイとヨアソビ　ミアイ　ヌスットミー　ハシカケとオセワニン
（二）結　納……403
クチガタメ　ユイノウ
（三）婚　礼……404
ヨメムカエ　嫁入り道中　デムカエザケ　トボサカズキ　シュウゲン　嫁のカオミセ　サトガエリ　再婚　リエン
第三節　葬　送
（一）臨　終……411
死の予兆　魂呼ばい　死の直後
（二）葬式の準備……413
手伝い　死亡通知　通夜　団子づくり　ニワバ
（三）トムライ……415
アナバ　湯灌　死装束　出棺と野辺送り　葬列　埋葬とネンブツダンゴ
（四）死後の供養……421
初七日と忌明け　年忌供養
第七章　言語伝承……423
第一節　言語伝承の概況……424
第二節　昔　話……425
猿蟹合戦　カチカチ山　つばめ孝行　ネズミ浄土　雀こじょろ　ベニ皿・かけ皿
第三節　伝　説
1　地名由来……433
根通り　金子　黒須　藤沢　水入　木蓮寺　坊　善蔵新田　宮前町　サルンボ山　ショウザエモン　谷戸　ミタチイリ　おます淵　おたけ淵　おまん坂
2　歴史人物……435
金子十郎とくつわ虫　新田義貞の涙　新田義貞の神社　新田一族と田中姓　宮寺の古戦場　黙旨和尚　ジャックイジエモン
3　木の部……437
高倉の竜頭杉　雨乞い松　高養寺のサザンカ
4　水の部……438
十郎清水　不老川
5　諸神諸仏……438
伊勢向地蔵　高倉の不動様　長徳寺の薬師様　西久保観音の力石　野田中池の稲荷様　馬場の稲荷様
6　塚の部……439
木蓮寺の塚
7　その他……440
野田の開発伝承　コガイトの年取り　飯能戦　板碑
第四節　世間話
1　狐に化かされた話……441
2　カッパの話……442
桂川のカッパ　コハゼ川のカッパ
3　諸神諸仏の話……442
オカマ様の話　天王様のたたり　御嶽様のたたり　恵比須様　山の神
4　円照寺の七不思議の池……444
5　その他……444
ヤドウカイ
第五節　俗　信
1　天候に関するもの……445
2　雨乞い……446
新久　木蓮寺　寺竹　野田　上藤沢
3　死の予兆……447
4　身体に関するもの……448
妊娠　夜泣き　乳歯　背丈　爪切り　腫れ物・ほくろ　足　髪の毛　ヘソの緒
5　火防せ……451
女の腰巻　火吹き竹
6　小動物……451
クモ　ミミズ　狐の嫁入り
7　植　物……452
七草がゆ　やきかがし　ナスのカラムシ　マメカラムシ・ゴマをムス
8　ことわざ……452
9　ケ　ガ……453
10　その他……453
生まれかわり　物隠し　虫封じ
第六節　禁　忌

1　妊娠に関するもの……454
2　葬式に関するもの……454
3　日に関するもの……454
4　方角に関するもの……455
5　衣食住に関するもの……455
6　家　霊……457
植物に関するもの（ヤツデ　イチョウ　イチジク　ザクロ　孟宗竹　ぶどう　ビワ　椿　ナンテン）　作物に関するもの（ウリ　キュウリ　ヤツガシラ　ニンジン）
第七節　方　言……458
第八章　遊戯と娯楽……499
第一節　子どもの遊び……500
（一）大正時代の子どもの遊び
1　遊びの種類……501
2　遊びの内容……503
アシタテンキニナーレ　イッチキチ　カイセンジックイ　ジッタンバッタン　イシケリ　ジュウロクムサシ　マリツキ　スモウ　オシクラマンジュー　コオリスベリ　アヤトリ　オヒトオハジキ　オニンギョウヅクリ　オリガミナンゾナンゾ　コマ　タケウマ　テンリュウトバシ　チャノミデッポー　タガマワシ　ミコシヅクリ　ダンゴヌスミ　トーカンヤ　オタマジャクシトリ　カエルトリ　カニトリ　セミトリドドメトリ
3　遊びの特色……512
（二）現代の子どもの遊び
1　遊びの種類
2　伝承の実態……513
第二節　民俗芸能
（一）獅子舞……520
（二）祭りばやし……521
高倉の祭りばやし　西三ッ木の祭りばやし　仏子の祭りばやし　二本木の祭りばやし　野田の祭りばやし　扇町屋の祭りばやし　南峰の祭りばやし　春日町の祭りばやし
（三）万　作……530
万作の演目と配役
第九章　民俗関係文書……537
はじめに……538
組織運営諸記録一般　ゼンワン関係　衣食住関係　寺社関係一般　榛名講関係　御嶽講関係　地蔵・観音講関係　古峰講関係　平心講関係　国富講関係　大山講関係　根本山関係　光明真言講関係　丸山講関係　稲荷講関係　戸隠講関係　庚申講関係　その他　川漁関係　諸職関係　婚礼・葬祭関係　娯楽関係
入間市史編さん計画概要について……793
入間市史編さん関係者名簿
あ　と　が　き
昭和56年11月1日発行
入間市

041『幸手市史』民俗編
平成9年3月
目　次
幸手市の概要……1
第一編　村の民俗
第一章　住まいと暮らし
第一節　村の景観と農家の造り
1　集村の集落……18
（1）自然堤防じょうの集落……19
（2）後背湿地の集落……23
2　散村の集落……25
3　水害と水塚
（1）地水と大水……28
（2）水にかかわる伝説……31
流されたイチョウの大木／ボカボカドの砂山／安戸の構え堀／将門の首／西沼に沈んだ舟の小判／大鱗山のいわれ
（3）昭和22年大水……33
大水が来る前／大水の流路／大水の様子／対策と避難／大水の間の活動／耕地の被害
（4）水　塚……40
概要／分布／呼称／築造時期／屋敷での配置／土盛りと高さ／建物／堀や池／舟／塚の上にまつられる神仏
4　農家の造り
（1）屋敷取り……68
屋敷の向きと形／建物の配置／生垣と屋敷林
（2）農家の形……75
屋根の形／間取り／土間と馬屋
第二節　住まいの使い方
1　火　所……81
主家と別棟の火所／主屋内部の火所／ガスの普及
2　照　明……85
3　井　戸……86
釣瓶井戸／掘り抜き井戸／井戸の利用／井戸の信仰／水道の普及
4　付属屋……90
外便所／外風呂／井戸／納屋／藁小屋／木小屋／灰小屋／堆肥小屋／土蔵／味噌部屋／鶏小屋／馬屋／その他の家畜小屋／蚕室／隠居屋／門
第三節　住まいの造り
1　職人の生活と技術
（1）大工職人……97
（2）屋根葺き職人……98
修繕時代／茅の調達／食事と風呂／屋根葺き作業／グシの装飾／寄り合いと信仰
2　建築儀礼……101
タテマエ／ダイクオクリ
第二章　衣食と暮らし
第一節　家族の装い
1　仕事着
（1）男の仕事着……106
ジバン／シャツ／股引／前掛け／手甲・ハボキ／防寒着／子供の仕事着／洋装化
（2）女の仕事着……109
ノラジバン／長着／股引／モンペ／腰巻／ノラオビ／前掛け／田植えの衣装／手甲・脚半／防寒着／洋装化
2　普段着と外出着
（1）普段着……113
男の普段着／男の下着／女の普段着／女の下着／おしめ／足袋／子供の普段着／小学生の通学着
（2）外出着……116
チョックラギ／ヨソイキ
3　晴れ着
（1）子供の着物……117
誕生／お七夜／お宮参り／ミツミイワイ／オビトキ
（2）婚礼の着物……119
花嫁衣装／婚礼後の花嫁衣装／花婿の衣装／列席者の衣装／嫁入りに持っていく衣類
（3）年祝いの着物……121
（4）葬式の着物……121
男性の喪服／女性の喪服
4　かぶり物・履物・雨具
（1）かぶり物……122
手拭い／帽子／菅笠
（2）履　物……124
裸足／地下足袋／ゴム足袋／下駄／草履／わらじ
（3）雨　具……126
蓑／ショイタ・キゴザ／傘
5　寝　具……127
布団／敷布など／枕／寝間着／座布団／カヤ
6　衣服の制作・管理
（1）木綿の機織り……129
木綿糸／染色／機織り
（2）絹の機織り……130
絹糸／機織り／染色
（3）裁　縫……131
学校での裁縫／お針の先生／裁縫の教材／裁縫所の服装／裁縫所の行事／家の針仕事／裁縫道具
（4）衣服の調達・管理……134

衣服の調達／洗濯／衣服の管理
7　髪　型
（1）男の髪型……136
（2）女の髪型……136
少女の髪型／日本髪／ハイカラ／マルメ／木炭パーマ／ミミカクシ
8　化　粧
（1）化　粧……139
女の化粧／小間物屋／オハグロ／マユオトシ
（2）洗　濯……140
（3）その他（歯磨気／風呂）……140
第二節　日々の食生活
1　生業と食事－普段の暮らしと食事……142
（1）町場の仕事と食事
米穀商の食事……142
工場の勤め人の食事……148
（2）村の仕事と食事
稲作を基調にした農家の食事……151
2　モノビの食生活名どー特別な食事……163
（1）年中行事と食事……164
餅搗き……169
ソバ・ウドン打ち……172
正月の雑煮……173
イビリダンゴ　スミツカレ……174
エビス講
冬　至……175
（2）仕事の節目と食事
定休日
田植え……176
サナブリ……177
ニクハン
刈り上げ……178
コキアゲ（稲）　籾摺りの終了……178
第三章　年中行事……182
年中行事について／旧暦・新暦と月遅れ／農家の休日と年中行事／記録された年中行事
第一節　春から夏の行事
1　正月準備と二月の行事……203
すす払い／松飾りと注連飾り／餅月／大晦日／年神／年男／若水／正月注の食事／年始回り／節分／七草／鍬入れ／小正月／オンダマ／繭玉団子／ケズリバナ／小豆粥／嫁御呼び／藪入り／二十日正月
2　三月の行事……213
次郎の一日／初午／針供養／ひとつ目玉／春彼岸
3　四月の行事（雛祭り）……216
4　五月の行事……217
お釈迦様の日／木綿坊主
5　六月の行事（端午の節供）……217
第二節　秋から冬の行事
1　八月の行事……218
釜の口開け／七夕／盆
2　九月の行事……225
八朔／十五夜／秋彼岸
3　十月の行事……226
オクンチ／十三夜／オカマサマ
4　十一月の行事……228
十日夜／お日待ち／恵比須講
5　十二月の行事……229
大師粥／冬至
6　一月の行事……230
川浸り／ひとつ目玉／出替わり
第四章　仕事の営み
第一節　稲　作……237
1　技術伝承……238
田うない／代掻き／苗代／種巻き／苗取り／田植え／田の草取り／田の管理／稲刈り／乾燥／運搬／脱穀・調整／籾摺利／選別／俵詰め／精米
2　掘り上げ田……251
3　稲作儀礼
（1）予祝儀礼……254
大正月の儀礼／クワイレ／小正月の儀礼
（2）播種儀礼
（3）田植え儀礼……255
（4）収穫儀礼
盆行事における儀礼……258
稲刈り終了後の儀礼……259
脱穀終了後の儀礼……259
籾摺り終了後の儀礼……259
十日夜　大師粥　恵比須講……260
（5）禁　忌……260
第二節　畑　作
1　麦……261
耕起／整地／麦巻き／中耕／麦踏み／土入れ／麦刈り／脱穀・調整／俵詰め／精麦
2　その他の作物……267
（1）そ　ば……268
播種／中耕／収穫／脱穀・調整
（2）大　豆……270
播種／手入れ／収穫
（3）小　豆……271
播種／手入れ／収穫／脱穀
（4）粟……271
播種／手入れ／収穫／精粟
3　畑作儀礼
（1）正月行事における予祝性……272
（2）播種儀礼……273
ムギマキサナブリ／播種の禁忌
（3）収穫儀礼　（4）その他の儀礼……274
第三節　養　蚕
1　養蚕の盛衰……275
2　蚕の飼育から上蔟まで……276
養蚕の回数／養蚕の場所／養蚕の入手／掃立て／飼育／桑の種類と桑摘み／上蔟／蔟の種類／繭掻きと出荷／養蚕信仰／ある日から
第四節　藁細工
1　副業としての藁細工……291
冬場の副業／藁について
2　さまざまな藁細工……293
縄／俵／筵／テゴ／蔟
第五節　漁撈と狩猟
1　漁　撈……299
漁撈の位置づけ／魚の販売
（1）河川の漁法……301
漁場と魚種／サシアミ／ハリアミ／ナガシアミ／ジビキアミ／キリコミ／フクロアミ／アジアミ／ヨツデアミ／ヒコーキアミ／ナガナワ／オキバリ／ハネツキ／うなぎの夜釣り／ウナギウケ／ヨコウケ／ダルマウケ／カブセ／タカッポ／タイヤウケ／ウナギカキ／モリ／メソ捕り
（2）用水路の漁法……312
漁場と魚種／ポカンヅリ／オキバリ／ドジョウウケ／タチウケ／ナマズウケ／ヨトボシ／その他の漁法
（3）沼の漁法……315
漁場と魚種／トアミ／タマアミ／ダルマウケ／その他の漁法
（4）ホリの漁法……318
漁場と魚種／オイカケアミ／オキバリ／カイボリ／ウケ／ウナギカキ／その他の漁法
2　狩　猟……322
狩猟の位置づけ／鴨網／無双網／ナガナバリ／トラバサミ／食用がえる捕り
第五章　交通と交易
第一節　道　路
1　古道の復元
（1）『武蔵國郡村誌』と『幸手町誌』に見る道路……332
（2）日光道中（奥羽街道）の道筋……337
（3）日光御成道の道筋……339
（4）その他の道筋……342
幸手道／幸手権現堂河岸道／幸手関宿道／幸手宝珠花道／幸手久喜道／幸手鷲宮道／幸手停車場線
2　道標
（1）道しるべに見られる地名……344

（2）主な道しるべ……347
日光御成道野道しるべ／権現堂河岸道の道しるべ／関宿道しるべ／筑波道の道しるべ
第二節　車の普及と交通機関の発達
1　車の普及……349
荷車／ヒキャク・ウンソー／自転車と自動車／リヤカー
2　交通機関の発達……352
人力車／乗合馬車／乗合自動車／バス路線
3　東武鉄道と鉄道敷設計画……358
東武鉄道／鉄道敷設計画／幸手鉄道／常武電気鉄道株式会社／千住馬車鉄道
第三節　河川交通
1　河川流路の変遷……361
利根川の瀬替え／権現堂川の開削／関宿水閘門の設置
2　河　岸
（1）権現堂河岸……363
関根回漕店に見る河岸場
（2）関宿向河岸……365
（3）船　荷……368
手数料／イリカタ／運賃／松葉／初荷／石塚回漕店に見る荷の動き
（4）船の種類と構造
形態による船の種類……372
ボウチョウ／ベカ／タカセ／和船の設備／新造船の進水／新造船の建設実費
船の機能による種類……375
売り船／湯船／肥船／砂利船／成田船／お諏訪船／早船／曳ボート／六斎船／通運丸とビンセン
（5）操船技術……378
船の操作／大水の避難／権現堂川船唄
（6）船頭の生活と信仰……380
船頭の生活／権現堂は口が悪い／飲料水と生活水／船頭の食事／船頭の服装／大水／船頭の信仰／フナドロボウ（船泥棒）／船頭と天気
3　橋と渡し場
（1）渡し場……385
六萬河岸の渡し（江戸川）／中島の渡し（江戸川）／富士見の渡し（江戸川）／権現堂の渡し（権現堂川）
（2）橋……387
関宿橋船橋架橋
第六章　地域と社会
第一節　ムラのしくみ
1　ムラの構造……390
ムラ／ムラから村・町へ／ムラ境
2　ムラの組織と運営……394
ムラの組織／区長／組と班／寄り合い／仲間入り／共有財産／共同作業
3　ムラの諸集団……403
消防団／夜警団／水防組合／子供組／ワカイシュウ会／青年団／女子同窓会／壮年団／主婦たちの集団／講集団
第二節　イエの仕組み
1　家族生活……419
家族の名称／家族の役割／奉公人／親分・子分／屋号／相続／隠居
2　親　族……423
本・分家関係
第七章　人の人生
第一節　誕生と成長
1　妊　娠……428
子授祈願／安産祈願／とりあげ婆さんと産婆／腹帯祝い／妊娠の見舞い／妊娠中の禁忌
2　出　産……432
出産の場所／産湯／お産中の夫の様子／後産の処理／へその緒の処理／ウブタテ
3　育　児……435
三日ぼたもち・力餅／産後の生活と禁忌／お七夜／セッチン参り／命名／床上げ／お宮参り／お食い初め／初正月／初節供／初誕生／初山
4　成長と儀礼……441
成長祈願／オビトキ／若い衆
第二節　婚　姻
1　婚　約……443
婚姻の条件／縁談と仲人／見合い／ナレアイ／タルイレ／結納／足入れ
2　祝　儀……448
祝儀と時期／荷送り／クレ祝儀／出家儀礼／入家儀礼／祝儀の座順／盃事／祝儀の宴席／宮参り
3　祝儀後の儀礼……457
ナビロメ／ミツメ／ヨメゴヨビ
第三節　厄年と年祝い……459
第四節　葬　送
1　死と霊……460
死の予兆／魂呼び／使者の扱い
2　葬式の準備……461
早使い・サタ／湯灌／入棺／枕団子／通夜／葬式組／帳場／六道
3　葬　儀……465
家でのトムライ／出棺／庭弔い／ツジロウ／葬列／シシテング／埋葬／念仏／本膳
4　年　忌……471
初七日／三十五日・四十九日／百か日／新盆／法事と祭り上げ
第二編　町場の民俗
第一章　幸手宿の町並み
第一節　表通りと裏通り
1　大通りと家並み……476
江戸時代の幸手宿／明治時代の幸手宿／家並
2　裏町の変遷……503
幸手宿の裏通り／久喜新道の開通／東武日光線の開通
第二節　町家の造り
1　屋敷取り……506
屋敷の向きと形／建物の配置
2　町家の形……510
屋根／間取り
第二章　町場の年中行事
第一節　春から夏の行事
1　一月の行事……518
新暦元旦／ネロハー・針供養／すす払い／餅つき／暮市／年男／注連飾り／大晦日／除夜の鐘
2　二月の行事
若水／初詣／正月の食事／食べ物以外の家例／お年玉　仕事初め／初市・初荷／年始まわり／節分／初辰／七草／鏡開き／繭玉団子／小正月／シャンシャン馬／恵比須講
3　三月の行事……530
初午／春の彼岸／社日／雛市
4　四月の行事……532
植木市／雛祭り／花見／花まつり／たにし不動
5　五月の行事……534
板倉参り／八十八夜
6　六月の行事……535
端午の節供／大杉さま
7　七月の行事……538
初山／夏祭り
第二節　秋から夏の行事……540
1　八月の行事……541
釜の口開け／七夕／井戸替え／四万六千日／中元／お盆／施餓鬼
2　九月の行事……546
厄日／八朔／鎮守の祭り／十五夜／秋の彼岸／秋の社日
3　十月の行事……548
甘酒祭り／十三夜／お日待ち／オベッカ
4　十一月の行事……550
オカマサマ（るすんぎょう）／恵比須講
5　十二月の行事……551
大師粥／フイゴ祭り／酉の市／七五三／冬至
第三章　町を支える人達
第一節　町のしくみ
1　町の範囲と区分……559

幸手宿／宿から町へ／町の道路／マチの名称と境界
2　町の組織と運営……563
町の組織／世話人／町内費／世話人と祭礼／仲間入り
3　現代の町の組織……568
区の役員／区の組織／区の総会
4　町の諸集団
（1）消防組……572
（2）青年団……573
青年団／少年団
（3）婦人会……575
女子青年団／婦人会
（4）講集団……576
第二節　家のしくみ
1　家族生活……577
家族の名称／奉公人／屋号／相続
2　親　　族……582
本・分家関係／付き合い
第四章　商人と職人
第一節　幸手宿の町並みと店商い・行商
1　幸手宿の町並み
（1）幸手宿……586
宿場と商人／幸手宿
（2）幸手宿の町並み……587
大正五年の町並み／「営業便覧」のみ記載された職種／『幸手町誌』のみ記載された職種
2　店商い
（1）S米穀店の創業／白米小売商の仕入れ／東京へ修業／修業を終えて／S米穀店の仕入れ法
（2）木綿商……598
（3）菓子商……598
大塚屋菓子店の経営／銘菓
（4）荒物商……602
3　市……603
暮れ市／正月の二日市／雛市／四月の二日市（植木市）／酉の市
4　行　　商
（1）村を訪れる商人……605
（2）村を訪れる職人……606
第二節　職人の技……607
1　瓦　屋……609
2　野鍛冶……613
3　籠　屋……618
4　桶　屋……622
5　棒　屋……625
6　絵馬屋……628
7　銚　屋……630
8　唐箕・水車……634
9　三味線屋……638
第三編　心の民俗
第一章　神仏への祈り
第一節　地域の中の神仏……646
1　平須賀集落の神仏祭祀
（1）村の神仏……653
香取神社／宝聖寺／馬頭観音
（2）株でまつる神仏
吉岡株……659
文殊院／浅間神社／観音経／念仏講
下　株……661
中　株……661
不動明王／地蔵尊／御嶽山
上　株……663
赤木株……664
外郷内株……664
香取神社／子育て地蔵
（3）地域外部の神仏……666
代参講／村外の神仏への祈願
（4）平須賀集落の神仏祭祀の特色……670
2　惣新田・六軒の神仏祭祀……671
（1）稲荷神社……672
（2）その他の神仏……677
（3）六軒の神仏祭祀の特色……678
第二節　家を守る神仏……688
1　屋敷神……689
氏神社／香取神社／稲荷神社
2　屋内神
（1）神棚にまつる上……692
（2）屋内上……693
（3）各家の事例……694
上吉羽・沢村家／内国府間・小堀家／平須賀・船川家／平須賀・野中家／惣新田・増田家／惣新田・鈴木家／上宇和田・遠藤家／中・平井家／中・新井家
（4）おわりに……698
第三節　水の信仰
1　水の行事……699
雨乞い／カビタリ
2　水神信仰……703
第四節　絵馬奉納
1　絵馬の起こり……707
2　絵馬の変遷　　3　幸手の絵馬……708
4　幸手の絵師……715
5　絵馬点描……716
（1）菓子屋が奉納した絵馬……717
（2）一色稲荷に奉納された絵馬……718
（3）幸手宿本陣知久家の絵馬……718
（4）河岸場で働く人の願いが込められた絵馬……719
第二章　季節の祭り
第一節　初　　午……732
行事の概要／下吉羽の事例／内藤内の事例／上吉羽小七の事例
第二節　辻　　縄……734
行事の概要／下吉羽の事例／平須賀中株の事例／長間蛭子の事例／戸島上戸の事例
第三節　百万遍と念仏……742
行事の概要／下吉羽の事例／上吉羽小七の事例
第四節　初　　山……744
行事の概要／幸手荒宿の初山／西関宿の初山
第五節　夏祭り……746
行事の概要
1　旧幸手町の天王様……746
祭りの期日／全体の組織／各町内の組織／山車と御輿／お仮屋と会所／祭りの準備／大御輿の遷御／前夜の山車の運行／花山／大御輿の還御
2　上高野の夏祭り……753
祭りの期日／祭りの組織／祭りの準備／以前の御輿の渡御／現在の御輿渡御
3　その他の夏祭り……756
天神島轡瀬の天王様／高須賀の大杉様
第六節　お獅子様……758
行事の概要／権現堂新田の事例／中川崎の事例／惣新田下沢目木の事例／西関宿向下河岸の事例／惣新田高須賀の事例
第七節　観音経……762
行事の概要／円藤内の事例／上吉羽小七の事例／上高野の事例
第八節　甘酒祭り・おびしゃ……765
行事の概要／長間蛭子の事例／下吉羽の事例／円藤内の事例／上吉羽の事例
第九節　お取越しと報恩講……771
行事の概要／上吉羽轡瀬のお取越し／浄誓寺の報恩講
第三章　伝承される芸能
第一節　獅子舞
1　松石のささら獅子舞……776
由来・伝承／組織／役割と道具／曲目／習いザサラ／祭礼の様子
2　下千塚のささら獅子舞……782
組織と当番／道具の保管／シシダシ／ハナカザリ／祭礼の様子
第二節　大杉囃子
1　高須賀の大杉囃子……786
由来・伝承／祭礼の日取り／囃子の構成と練習／組織と運営／祭礼の様子

2　西関宿向河岸の大杉囃子……789
由来・伝承／囃子の構成と練習／祭礼の様子
第三節　盆踊り……790
下川崎の石投げ踊り／石投げ踊り／田の草取り／流し踊り
民俗編執筆者
調査協力者・資料提供者（個人・機関）一覧
幸手市史編さん関係者名簿
あとがき
平成9年3月25日発行
幸手市教育委員会

042『新座市史』第四巻　民俗編
昭和61年12月

目　次

第一編　土地と生活
第一章　地形と土地利用
第一節　集落の立地と景観……3
開発と集落　集村と街村　集落とムラ　大字とムラ　ムラの構成物と領域
第二節　谷と台地……19
水田と谷と畑の台地　黒目川の谷と土地利用　堰と堰普請　湧水とドブッタ　中沢用水　柳瀬川と水田　摘み田とマキ
第三節　林と生活……34
ヤマの意味　ヤマと生活　サカイギの民俗
第二章　交通と交流
第一節　野火止用水……39
野火止用水と市域　用水と生活
第二節　川越街道と江戸道……45
曲がる道・直線の道　川越街道　江戸道・清戸道　鎌倉街道と奥州街道　坂と橋
第三節　往来と交流……58
買物と市　野菜出荷と下肥汲み取り　信心と往来
第二編　社会と集団
第一章　家　族
第一節　屋敷と間取り……67
新座の住居　屋敷の配置　部屋の使われ方　建物の構造　建築儀礼
第二節　家族と家……84
家族構成　家族の展開と役割
第三節　配偶者の選択　通婚圏　結婚年齢　仲人　オヤモトとのつきあい
第四節　親族と交際……101
本・分家関係　本家分家集団の名称　親戚関係　親族の交際
第二章　近隣組織と村
第一節　村の組織と運営……112
村の概況　ムラの組織　共有財産　共同労働
第二節　近隣組織……129
近隣組織の構成　近隣組織の機能
第三節　村の構成員……140
第四節　村の諸集団……141
年齢集団　講集団　氏子組織と檀家組織　その他の集団
第三章　町
第一節　町場の生活－大和田……152
町場の景観　川越街道の宿場町　町場のなりわい　料理屋と飲食店　米市と米穀商　周辺農村と商業　交通・運輸業の推移　職人の諸相と連帯　町場の発展と農村化　町の運営組織　町の構成と仲間入り　町場の住まい
第二節　都市化・住宅地化……177
都市化の概観　転入と転出　人々のさまざまな活動
第三節　新座の“町並”……185
伝統的な町並の保存　伝統的町並と新しい町並の並存　新しい町並
第三編　生産と労働
第一章　農業生産
第一節　水田と稲作……193
フットビデンチとカタヤマブヨ　田起こしと田植え　稲刈りとウチシゴト
第二節　畑と畑作……201
豊富な畑作物　麦作　オカボ　雑穀　サツマゴボウ　ニンジン　茶・小豆など自給的作物　養蚕
第三節　肥　料……210
堆肥・下肥から化学肥料へ　堆肥　シモゴイ　肥料屋
第四節　農耕儀礼……213
マユダマ　アズキガユ　代参講　刈上げ　ソウゴジマイとコナバツ　ボンクとハツホ　タナバタ　アマゴイ
第五節　農具と作業
1　農具……215
シロカキマンガ　タカキ　スキ　クロクワ　クワ　タネバコ　タネマキ　タネマキカゴ　フリコミ　タノクサトリ　カナコギ　モノグサボウ　クルリボウ　ミ　トウミ　マンゴク　ジュウゴ　オシギリ
2　労働と休息……222
一日の労働と休息　年間の労働と休日
第二章　衣と食
第一節　衣生活……224
仕事着と普段着　晴着　農民の仕事着　商人の仕事着　粉屋の仕事着　造り酒屋の仕事着
第二節　食生活……233
日常の食事　ハレの日の食事（片山）　主食と副食　飲料水と川魚　ハレの日の食事（大和田）
第三章　交易と職人
第一節　作物の出荷……245
商品生産の伝統　さまざまな商品作物　出荷の方法
第二節　大和田の商人……252
呉服商　材木商
第三節　水　車……259
片山　大和田
第四節　様々な職人……263
職人の概況　足袋屋　床屋
第四編　時間と儀礼
第一章　年中行事
第一節　正月・春から夏の行事……273
ススハライ　モチツキ　カキモチ　アラレ　ジザイモチ　オソナエ　カドマツ　チュウレン　クレノイチ　トシガミサマ　オセイボ　ミソカパライ　トシコシウドン　大晦日　ジョヤノカネ　サガニチ　正月のカレイ　タナサガシ　フクゾウサマ　ハツマイリ　シゴトハジメ　ハツニ　ショウゴク　セチ・セテ・オオバンナナクサ　オタキサゲ　ヨーカセック・メーカイ　クラビラキ　小正月　ヤブイリ　マユダマ　ダンゴナゲ　アズキガユ　オサエニチ　ナリキゼメ　アボーヘボー　ヨメのショウガツ　エビスコウ　セツブン　ハツウマ　ヒナサマ　彼岸　オシャカサマ　若宮八幡の祭礼　ハンソウサマ　神明様の祭礼　タンゴノセック　ノゲエブシ　テンノウサマ　ソウゴウジマイ　コナバツ　ボンク　タナバタ
第二節　盆・秋から冬への行事……299
盆の墓ソウジ　ボンダナヅクリ　ボンムカエ　ボンチュウ　ボンの食事　ニイボン　セガキ　ボンオクリ　ボンの十六日　ウラボン　ハッサク　クンチの節供　ジュウゴヤ　ジュウサンヤ　ヒガン　イノコ　コウジンサマ　ナカガエリ　オカエリ　エビスコウ　ダイシガユ　カビタリモチ　コトオサメ　トウジ　ホシマツリ　ユミハマ・ハゴイタ飾り
第三節　年中行事と生活時間……309
旧暦から新暦へ　モノビ・ハタビ・アソビヒ　ハレの日の食事　労働をしない休息日　消えゆく年中行事　復活した年中行事
第二章　人生儀礼
第一節　誕生・成長……315
人の成長と子供数　妊娠と帯祝い　安産祈願　まわり地蔵　妊娠中の食事と禁忌　人の誕生

産室・トリアゲバーサン　産婆　座室から寝室へ　子供と産婦　ナガレカンジョウ　出産後の始末　ウブミマイ　オシチャ・初外出　産の穢れと禁忌　オビアゲ・宮参り　食いぞめ・初節供　初正月　初誕生・ショイモチ　四二の二つ子・拾い親　子守り　オビトキ　ヒキズリモチ　オビトキの贈答　現在のオビトキ祝い
第二節　婚　姻……338
出会い　恋愛結婚　通婚圏　つり合い　クチキキ・仲人　クチガタメ・結納　アシイレ　婚礼デシュウギ・カオミセ　嫁の移動　入家式盃事　宴　道具披露　里帰り・アタマアライ実家・仲人とのつきあい　嫁の紹介　嫁の生活厄年
第三節　死・死後……357
死の儀礼　臨終　死の通知　死の忌　湯灌・納棺　通夜　葬儀の準備　葬具　葬式・出棺　野辺送り　床取・埋葬　清め・本膳　念仏　妊婦・子供の死　墓地　両墓制　両墓制の分布　ハカヒキ　両墓制の変遷　供養・忌明け　死者の魂　年忌・弔いあげ
第四節　魂のサイクル・生と死のつながり　儀礼の変化　「家」から専門機関へ
第五編　心と信仰
第一章　不安と信心
第一節　個人祈願と信心……389
不安と祈願　神社詣で　路傍の神仏　不安と流行
第二節　俗信・民間療法……394
民間療法　禁忌　禁忌の構造
第二章　家の神と先祖
第一節　屋内神と屋敷神……401
第二節　先祖と仏……412
盆と先祖まつり　彼岸と墓まいり　正月と斎日先祖のイメージ
第三節　寺と檀家……417
東福寺　蓮光寺　法台寺　満行寺　浄明寺　平林寺　番星寺　普光明寺　龍泉寺　寺とその機能　堂
第三章　地域と神々
第一節　村の鎮守・祭礼
1　氏神・鎮守……437
氷川神社（片山）　武野神社　氷川神社（大和田）　神明神社　氷川神社（野火止）　若宮八幡神社　氷川神社（西堀）　稲荷神社（北野）　熊野神社
2　ムラの神……454
須賀神社　八石稲荷　八雲神社　イガシラ稲荷・サクラモリ稲荷　稲荷神社（菅沢）　稲荷神社（西堀八軒）　稲荷神社（西堀西屋敷）
3　神格・祭礼……461
4　神社合祀……465
駒形権現　駒形稲荷
第二節　芸　能
1　野火止・石山家の神楽……469
石山家神楽の由来　素面の舞　面の舞（神代）神楽の奉納
2　中野の獅子舞……480
獅子舞の由来　獅子舞の概要　中野獅子舞の歌
3　大和田囃子……490
大和田囃子の概要　囃子のようす　囃子の譜
第三節　講と代参……498
ムラと講　講の種類とその機能
第四章　伝説と昔話
第一節　野火止と業平伝説……522
業平の東下り　業平伝説の定着　伝説の変化
第二節　場所をめぐる伝説……529
妙音沢の伝説　かしらなし　小僧ヶ淵　強清水おばけ田んぼ　クセ場所の発想
第三節　伝説としての霊験・縁起……543
滝見の観音　鬼鹿毛さま　野寺の鐘　引導地蔵さま　円光院のたぬき　鯉になった少女
執筆分担一覧
新座市史編さん関係者名簿
あとがき
昭和61年12月15日発行
埼玉県新座市

043『日高町史』民俗編
平成1月3月

目　次

第一章　日高町の概況
第一節　生活の舞台
1　自然環境……3
2　日高町の略沿革……4
（1）原始・古代……4
（2）中世・近世……6
（3）近現代……8
3　町の変遷と都市化
（1）人口の推移……9
（2）産　業……11
農業　工業　商業
（3）交　通……12
（4）観　光……12
奥武蔵自然公園　高麗神社と聖天院　奥武蔵自然歩道
第二節　日高町史民俗編について
1　民俗とは……14
2「日高町史民俗編」の特色について……15
第二章　年中行事
第一節　年中行事
1　正月行事
（1）正月準備……23
すす払い　オカザリ・注連縄作り　餅つき大晦日
（2）大正月……33
年男　若水くみ　歳神様と歳神棚　門松　正月の供え物と家例　仏様の日　初詣で　オオバン仕事始め　七草粥　タナサガシとオタキアゲ蔵開きブクの家の正月の過ごし方　正月の俗信・禁忌　正月の遊び　正月のことほぎ
（3）小正月……48
マユダマ団子　アボヒボ　カユカキ棒　小豆粥成木責め　小豆飯とジオウメシ　嫁の里帰り・ヤブイリ
（4）その他の正月行事……59
恵比寿講
2　春・夏の行事
（1）二月の行事……61
次郎の朔日　節分　八日節供　初午　野猿講天神講　大遊び　オシラ様
（2）三月の行事……71
女の節供　春の彼岸
（3）四月の行事……75
花まつり　ダイハンニャ
（4）五月の正月……76
端午の節供
（5）六月の行事……77
ケツアブリ　農耕儀礼
3　盆行事……81
（1）釜の口開け……82
（2）七夕……82
準備　当日の行事
（3）盆……85
盆の準備　盆棚　盆の迎え　盆中の食べ物・供え物　過ごし方　盆の送り　盆の十六日
4　秋・冬の行事
（1）九月の行事……92
八朔の節供　二百十日（嵐よけ）　秋の彼岸十五夜
（2）十月の行事……97
十三夜　オシラ様　オカマサマ　クンチ
（3）十一月の行事……99
亥の子　十日夜　恵比寿講　職人の太子講
（4）十二月の行事……102
大師粥　八日節供　冬至

第二節　民俗芸能
武幡横手神社の獅子舞……１０５
所在地　獅子舞の概況　獅子舞の所役　獅子舞の組織　獅子舞の練習　祭りの流れ　謡
諏訪神社の獅子舞……１１１
所在地　獅子舞の概況　獅子舞の所役　獅子舞の組織　祭りの準備・練習・流れ　謡
髙麗神社の獅子舞……１１８
所在地　獅子舞の概況　獅子舞の所役　獅子舞の組織　獅子舞の練習　祭りの流れ　謡
野々宮神社獅子舞……１２４
所在地　獅子舞の概況　獅子舞の所役　練習・準備　祭りの流れ　謡
女影の獅子舞……１３２
所在地　獅子舞の概況　獅子舞の所役　獅子舞の練習　祭りの流れ
上鹿山囃子……１３６
所在地　祭り囃子の由来　祭り囃子の復活　囃子連　祭り囃子の機会　練習　祭り囃子の演目・曲目　祭り囃子のジゴト
高萩囃子……１４０
所在地　祭り囃子の由来　祭り囃子の組織・練習　囃子の機会　祭り囃子の演目・曲目
駒寺野新田のモチアソビ……１４１
所在地　モチアソビの概況　モチアソビの準備　三月十五日　餅つきの技法　謡
第三章　人の人生
第一節　人生儀礼
１　出　産……１４９
妊娠　堕胎　帯祝い　安産祈願　妊娠中の禁忌　男女の見分け　助産　出産　臍の緒　後産　産湯　異常出産　ヤクドシッコなど　相孕み　アヤカリッコ　申し子伝説　ウブタテメシ　産婦のケガレ　産婦の食事　産見舞い・産祝い　カナババ　乳
２　子供の成長……１６１
ミツメの祝い　お七夜　二一日目　ウブゲ剃り　マゴダキ　宮参り　クイゾメ　初正月　初節供　初誕生　ミツミの祝い・帯とき　子供時代
３　青春時代……１６８
十五のハツヤマ　一人前
４　婚　姻……１７０
縁談　ナレアイケッコン　結婚の条件　仲人　見合い　クチガタメ　結納　結婚の時期　嫁入り道具　カタイレ　嫁の支度　クレ祝儀　嫁の行列　モライ祝儀　祝儀の流れ　クミアイ座敷　式の翌日　嫁の里帰り　送り雛　婚姻習俗の変遷
５　嫁の生活……１８５
嫁の十年泣き　嫁と子供　嫁と舅・姑　嫁の日常生活　嫁の楽しみ　嫁の格好　代がわり
６　厄年・年祝い……１８９
厄年　年祝い
７　葬　送……１９１
葬制　死の予兆　魂呼び・死に水　死後の処置　死の知らせ　通夜　湯灌　納棺　葬儀社　アナバン　団子　野道具　トムライの手順
喪服　念仏講　香典と引出物　キヨメ　翌日　初七日　四十九日　初彼岸・初盆　年忌供養　その他の死
第二節　人生の軌跡－桜井美与の人生－
最初の思い出（三歳から六歳頃まで）……２１２
小学校時代（七歳から一三歳間で）……２１４
奉公の時代（一四歳から二七歳まで）……２１８
募集　大宮館　入間川の縒り屋　買食い　夜学　外出　かせぎ・休み　関東大震災　最後の奉公
結婚まで（二八歳から二九歳まで）……２２６
開拓地の暮らし（二九歳から三一歳まで）・２２８
近所づきあい　最初の出産　招集と買い上げ
終戦まで（三二歳から四〇歳まで）……２３４
終戦の日
第四章　人々の暮らし
第一節　農民の暮らし
１　稲　作
（１）ツミタからウエタへ……２３９
ドブッタとカワキッタ　ウエタに変わった時期と理由　用水　苗代　タウエボタモチ　ユイシゴト
（２）ツミタ……２４２
堰普請　クロツケ　タウナイ　キッコウシシロカキ　イナシビオシ　タツミ　メボシ　クサトリ　オイゴエ　ハナカケミズ　オトシミズ　イネカリ　脱穀　籾干し・棒打ち　籾摺り・俵づめ
２　畑　作<畑　土壌>……２５０
（１）麦　作……２５２
整地　サクキリ　播種　中耕　麦踏み　土入れ　麦刈り　脱穀・調整
（２）タバコ……２５７
品種　養蚕とタバコ　育苗　移植　肥料　土寄　摘芯　収穫　乾燥　乾燥後の調整　収納　ビマチ
（３）そ菜　雑穀……２６１
ウド……２６１
タネ　耕起・整地　植付　中耕・施肥　病気　株掘り　伏せ込み　収穫
大　根……２６４
人　参……２６５
播種　消毒　収穫
ゴボウ……２６５
ヒ　エ……２６６
ア　ワ……２６６
ソ　バ……２６６
サトイモ……２６６
サツマイモ……２６６
苗床　移植　中耕・除草　つる返し　収穫
３　茶……２６７
品種　繁殖法　転耕・施肥　剪定　茶摘　製茶
４　養　蚕
（１）蚕の生活サイクル……２７２
（２）鼠と蛙の被害……２７６
（３）蚕の信仰……２７７
５　肥　料
（１）灰……２７９
（２）下肥について……２７９
（３）堆　肥……２８１
第二節　職人の暮らし
１　竹細工職人……２８２
（１）製　品……２８７
大籠　草刈籠　着笊　籠笊　荒笊　蚕籠　オシメ籠　目替　角籠　味噌漉ショウギ　米揚笊　ウドン揚　ビク
（２）製作と販売……２９２
（３）竹製品組合……２９５
（４）修業……２９８
２　屋根葺職人
（１）親方取りと修業……３０６
（２）寒葺きと夏葺き……３０８
（３）屋根屋組……３０９
３　炭焼き職人……３０９
黒消しの最初　専業と副業　炭焼きの季節　炭材　白消しと黒消し　窯築き　焼成　炭のでき・ふでき　炭と薪　窯の大きさ　炭焼小屋　カズッピョウ　炭俵　講習会・供出　禁忌
４　酒造職人……３１５
生産量　米　米の購入　水　南部杜氏　役割分担　麹とモト　麹作りの手順　仕込み　製品になるまで　年間日程　酒造職人の一日
吟醸酒　仕事場　米蔵　道具・帳簿　信仰
第三節　人と物の流れ
１　道　路……３２３
鎌倉街道　慈光道　オオ道　日光道　川越道　八王子道　飯能街道　河岸街道　旧一等公益道大宮郷東京道　坂戸道
２　道　標……３３１

3　橋……332
4　村外との往来……335
米の販売　ウドの出荷　江戸見物
5　交　易
（1）行　商……337
魚売り　ヨカヨカ飴屋　ドッケシ売り　富山の薬売り　大和の薬売り　コウモリ直し　フルイ屋　センセヤッカ
（2）市
町内の市……339
高萩の市　高麗の宿の市
近傍の市……340
越生の市　吾野の市　飯能の市　坂戸の市　入間川の市　豊岡（扇町屋）の市　川越の市
第五章　川と生活
第一節　水車の思い出……345
第二節　高麗川に見る漁法
1　高麗川の魚……352
2　高麗川の漁法……353
ハチブセ　ヒッカケ　クキヨセ　イシグラガマ釣り　シモヨリ　オイハネ・ハネオイ　オキバリ　タタキ　ヤス　エゴの実　ヤナトアミ　カスミ網　ヒキ網
第三節　水　害
1　浸水・冠水……359
2　橋の流失……360
第六章　信　仰
第一節　神社と寺院
1　村の鎮守
（1）村鎮守……365
（2）神社整理……368
（3）神社の祭礼……369
（4）神社の由緒
歴史的な由緒の分かるもの……369
創建者の分かるもの……371
社名の由来の分かるもの……371
2　寺院と堂庵
《寺院》
（1）寺　院……371
（2）寺院の統廃合……373
（3）寺院の行事……373
（4）寺院の由緒……375
歴史的な由緒の分かるもの……375
創建者が分かるもの……375
行基、慈覚大師作仏像をもって創建されたもの……376
《堂庵》
（1）堂　庵……377
（2）堂庵の由緒
創建（再建）が分かるもの……378
行基作仏像をもって創建されたもの・378
第二節　家の神々
1　屋敷神……379
（1）呼称について……457
（2）祭　神……458
（3）修験者（占師）と屋敷神……460
（4）集団祭祀……461
2　屋内神……462
屋内の神々　大神宮　歳神様　恵比寿・大黒様　荒神様　便所神様
第三節　講
1　日高町の講
（1）講の分布……465
（2）講の分類……472
（3）組織と運営……476
結講の範囲　講元　講金　オヒマチ　代参者の選出　ブクの場合
2　講の実際
（1）総参講・代参講……477
伊勢講　榛名講　大山講　三峰講　御嶽講　古峰ケ原講　富士講　戸隠講　秋葉講　宝登山講　与瀬講　成田講　木曽御嶽講
（2）村内講……493
天神講　観音講　稲荷講　ヤエン（野猿）講
第四節　民間知識
1　前兆・予知……499
（1）天候・気象の予知
自然現象によるもの……500
動物などによるもの……501
植物によるもの……503
諸事によるもの……503
（2）吉凶・事変の予知……504
天体・気象によるもの……504
動物によるもの……505
植物によるもの……505
暦によるもの……505
蚕の豊凶の言い伝え……506
（3）人格・運命の予知……506
2　民間療法……507
（1）薬草による療法……508
内臓・風邪など……508
皮膚病・外傷など……509
歯・目など……510
（2）動物を薬とする療法……510
（3）呪術的療法……511
風邪　ものもらい　目にはいったゴミ　目　夜泣き　かんの虫　百日咳　麻疹　はしか　ほうそう　いぼ　くさ・できもの　てんかん　とげ　魚の小骨が刺さったとき　おねしょ　虫さされ　歯痛
（4）祈　願……513
夜泣き　かんの虫　てんかん　咳　イボ　とげ　眼病　足が悪くなったとき　耳の病気　おでき　風邪
3　禁　忌……515
（1）妊娠や出産にかかわる禁忌……516
（2）葬送に関するもの……517
（3）年中行事、干支、暦にかかわるもの・517
（4）衣生活・食生活にかかわるもの……518
（5）住生活に関するもの……519
（6）植物に関するもの……520
（7）その他……524
第七章　衣・食・住
第一節　衣生活
1　日常の衣生活
（1）野良着……529
（2）頭　巾……530
（3）はきもの……531
足袋　草履　下駄
（4）子供の身なり……534
2　晴れ着……536
（1）誕生からオビトキまで……536
（2）婚礼衣装……536
3　洗　濯……537
4　寝　具……538
わら布団　敷布団　掛布団　かいまき
5　『郷土調査』から……538
第二節　食生活
1　日常の食事
（1）食　事……542
食事の回数　食事の場所
（2）主　食……543
ムギメシ　すいとん　かてめし　焼餅　めん類　小豆飯　稗・粟・モロコシ
（3）副　食……545
汁物　野菜類　オナメ　肉・魚
（4）弁　当……547
（5）間　食……548
2　晴れの日の食事
（1）餅……549
正月用の餅　ぼた餅　草餅　柏餅　その他の餅
（2）団　子……551
マユダマ　二月一日の団子　彼岸の団子　十三夜と十五夜　その他の団子
（3）まんじゅう……553
（4）雑　煮……554

（5）麺　　類……554
うどん　そば　その他の麺類
（6）粥……555
（7）赤飯……555
（8）その他の食物……556
第三節　住生活
1　民　　家……556
2　日高町の建築儀礼について……558
第八章　社会生活
第一節　純農村
1　ムラのしくみ……565
（1）ムラの範囲と区分
ムラの区域……565
ムラグミ（村組）……566
（2）ムラの組織と運営
ムラ役職と機能……567
ムライリ（村入）……567
ムラの行事……568
共同作業……568
道普請　イドカイ　クサカリ　ユイシゴト
共有財産……570
共有地　膳椀　公会堂
（3）ムラの諸集団
氏子組織……572
楡木区の事例　駒寺区の事例
年齢集団……573
青年団　子供会
2　イエのしくみ
（1）家族構成
家族数と高齢者……580
奉公人……581
ム　コ……582
（2）親族のつきあい
分家と隠居……582
イッケ……583
屋　号……583
互　助……584
不祝儀の互助　祝儀の互助
第二節　開拓地
1　日高町の開拓地……586
2　開拓の歩みと民俗
（1）栄新田・高萩新宿地区……589
（2）髙麗川新宿地区……593
（3）旭ケ丘地区……597
（4）高富地区……599第九章　伝説と世間話
第一節　伝説と地名伝承
鹿台地名の由来……605
箕輪山霊岸寺の田植地蔵様……606
鍛冶屋原地名の由来……607
平沢地名今昔……607
八剣の何ぢゃもんぢゃ……608
高萩地名の由来……609
馬引沢地名の由来……609
女の影……610
女影仙女ケ池……613
池底の白蛇とお諏訪様……614
元萩の池……615
その他の地名伝承……616
炭釜　稲荷下　西勝寺　きんちゃく田　西欠ま
ぶり坂　膳椀淵　獅子岩橋　おくら淵　　清水
坂　鶴巻　御判塚　ひまわり塚　お天狗山　お
庚申　乳母坂　馬坂　蟹原　山の神　嘶原　板
畠　稲荷　久平橋　しょうじんば　旗塚　殿淵
おとうか様　蔵屋敷　餅搗き坂　山王塚　アイ
オイマツ　貫井　大字高富字豊栄　しるたり
十日窪　旭ケ丘
第二節　世間話
きつねに化かされた話……621
オーサキの話……626
むじなの話……630
蛇の話……631
猫の話……633
つばめの話……634
妖怪の話……635
天狗　小豆洗い　カッパ　ケツアブリ　その他
の妖怪　おくり狼　神隠し　ひとだま　足音
第三節　なぞなぞ……640
第十章　娯楽と遊び
第一節　子供の遊び
1　昔の子供の遊びの諸相
（1）屋内での遊び……645
つけもの遊び　ミカンつり　トッコ　人形遊び
キシャゴ　戦闘遊技　手遊び
（2）屋外の遊び……647
鬼遊び（カクレンボ・今年のボタンは良いボタ
ン・影踏み・目隠しオニ）　国取り　石蹴り
縄跳び　メンチ
（3）手作りの玩具を使った屋外の遊び……650
兵隊ごっこ　凧　独楽　竹馬　ゴム管　竹トン
ボ　竹鉄砲（ガス鉄砲・水鉄砲・チョウメデッ
ポウ・竹鉄砲）
（4）山野での遊び……654
虫捕り（蛍捕り・セミ捕り）捕鳥（バッタン・
鳥モチ）植物採集（桑の実捕り・チダケ採り）
2　わらべうた
（1）わらべうたの伝承者……658
（2）遊戯唄……660
まりつき唄　お手玉唄　羽根つき唄　おはじき
唄　なわとび唄　凧揚げの唄　ちゃんばらごっ
この唄　絵かき唄　指遊びの唄　手遊び唄　手
合わせ唄　輪遊び唄　子とろあそびの唄　くぐ
り遊び唄　子もらい遊び唄　押し合い遊び唄
（3）ことばからうたへ……669
鳴き声　ジャンケン唄　かくれんぼの唄　別れ
唄　呪い唄　悪口唄　ことばあそび唄　占い唄
数え唄　自然の唄　動・植物の唄　行事唄　そ
の他の唄
（4）子守り唄……675
（5）鳥声と虫の音……676
ほととぎす　ほおじろ　じょうびたき　いかる
こじゅけい　きじ鳩　めじろ　みみずく　はと
こおろぎ　せみ
3　現代の子供の遊び
（1）屋内での遊び……681
あきすとぜねこ　何パーセント　こより占い
ブタ（トリ）の糞　おなべふ　貧乏大尽大大尽
花書き　牛乳のフタ遊び　えんぴつ　戦争
（2）屋外での遊び……683
将軍大名　どろけい　缶蹴り　ポコペン　あん
たがたどこさ　グリコ　チンチン山道　ゴム段
自転車乗り　だんご鬼　どこ行き　ベエゴマ
（3）山野での遊び……687
虫取り　杉玉鉄砲　草花あそび　思い出
4　子供の生活
（1）手伝いと子供……688
田植えの手伝い　家事の手伝い
（2）食べたったもの……690
（3）恐かったこと……690
第二節　昔の娯楽
夜遊びの思い出……693
ラジオ……694
旅芸人……695
第十一章　町の民俗を考える
第一節　ムラ社会と講……699
第二節　お日待ちの諸相
1　地域別にみたお日待ち……728
2　お日待ちの種類……742
（1）二月のお日待ち……742
（2）春のお日待ち……746
（3）麦の収穫祭……750
（4）オショウジン……753
（5）二百十日・二百二十日……756
（6）オシラ様……758
（7）天神講……760
（8）雨乞い日待ち・おしめり祝い……761
（9）下向日待ち……762

(10) その他のお日待ち……765
3　現在のお日待ち……765
まとめ……767
あとがき
執筆者と分担
話者・資料提供者一覧
民俗調査員一覧
日高町史編集調査協力員一覧
日高町史編さん関係者一覧
平成元年3月20日発行
日高町

044『富士見市史』資料編7　民俗
平成1年3月
目　次
富士見市の民俗とその概要
第一編　富士見市の民俗
第一章　村と世間
第一節　ムラの生活……9
1　ムラと村
(一) ムラと村の歴史……9
(二) ムラの空間……16
(三) ムラの運営……21
(四) ムラの生活倫理……24
2　年齢集団
(一) 若者と祭り……27
(二) 老人と信仰……29
(三) 子供と年中行事……30
第二節　人と物の動き
1　内と外の交渉
(一) 陸と川の交通……33
(二) 運搬法と運搬具……43
2　行商の人たち
(一) 食べ物を売る人たち……46
(二) 生活用品を売る人たち……47
(三) 外から訪れる職人たち……49
第三節　人の一生とつきあい
1　人の人生
(一) 出産と子供の成長……52
(二) 結婚……57
(三) 葬送と供養……63
2　親族と交際
(一) 本家と分家……67
(二) 親戚……70
(三) 親族と交際……71
第四節　氏神と講
1　氏神
(一) 神社とその系譜……75
(二) 組織と祭祀……83
2　講
(一) 多様な講集団……90
(二) 日待ち講……91
(三) 代参講……92
第五節　祭りと芸能
1　祭り……97
(一) 平心講の祭り……98
(二) 天王様の祭り……102
2　芸能
(一) 市内の里神楽……105
(二) 獅子舞……112
(三) 市内の囃子……118
(四) 万作……126
(五) 面芝居、芝居……127
3　わらべうたと民謡……128
(一) 遊びとわらべうた……129
(二) 行事とわらべうた……136
(三) からかいと批判のうた……139
(四) 子守りとうた……140
(五) その他のわらべうた……142
(六) 民謡……144
(七) 祝儀唄……149
第六節　伝説・世間話の「世界」と俗信
1　ことばのなかの「風景」……150
2　微地形のながめ……153
3　日常性の亀裂から
(一) 語られる日常風景の亀裂……165
(二)「迷途」の経験と「狐」の仕業……167
(三)「できごと」の構造化と「風景」……172
4　俗信……174
第二章　家の生活
第一節　家族と家
1　家と相続原理……182
2　家族生活の展開……186
3　擬制的親子関係……190
第二節　住まいと衣・食
1　住まい
(一) 住まいと風土……191
(二) 屋敷の構成……197
(三) 母屋の外観と間取……200
2　昔の着物
(一) よそゆきと普段着……209
(二) 頭に被るものと履物……216
(三) 機織りと裁縫……219
3　昔の食事
(一) 御飯とおかず……222
(二) 調理の道具と食器……226
第三節　農業と職人
1　土地の利用と所有……228
2　稲作とその過程
(一) 水田と用水……234
(二) 稲作の過程……238
(三) ツミダの特徴……246
3　畑作とその過程
(一) 畑の諸相と慣行……249
(二) 作物の種類と栽培過程……251
4　肥料
5　労働慣行と農休日
(一) 労働慣行……261
(二) 農休日と農耕儀礼……265
6　諸職
(一) 諸職の概要……269
(二) 職人の暮らし……271
7　川漁
(一) 市内の川漁……280
(二) 漁法のいろいろ……283
第四節　家の中・屋敷神
1　家の神……286
2　屋敷神……290
第五節　寺と墓
1　寺壇関係……293
2　墓制……299
第六節　家の行事
1　市域の行事概観……301
2　正月行事……303
3　春から夏にかけての行事……312
4　盆行事……319
5　秋から冬にかけての行事……322
第七節　昔話
1　昔話の現状……325
2　語りの場面－時と場－……328
3　語り手と聞き手……333
4　昔話の内容と話型……334
第二編　近代以降の民俗変化
第一章　村の統合と民俗社会
第一節　近代化と村の統合……341
第二節　近代化と若者集団の変貌……346
第三節　近代化と婦人……353
第二章　技術革新と民俗社会
第一節　生産性の向上と民俗
1　農地の変化……358
2　各種組合の組織……365

3　作物の変化……368
4　技術革新……373
5　生産性の向上と民俗の変化……375
第二節　より機能的な衣食住を求めて
1　生活改善運動のはじまり……379
2　クラブの活動とその成果……380
3　住生活の分野における生活改善……384
4　衣生活の簡素化……386
5　衣食住における近代化……387
第三章　神社統合と儀礼の変化
第一節　神社の変遷
1　神社分離……389
2　神社合祀……395
3　神仏分離と合祀のもたらすもの……401
第二節　婚姻・葬送儀礼
1　婚姻儀礼……402
2　婚姻儀礼の変化……405
3　葬送儀礼……406
第四章　歴史と伝説の谷間
第一節　語られた「事件」……411
（一）語られるものとしての「歴史」……411
（二）ぼっこし……413
（三）官軍に処刑された彰義隊残党……416
（四）明治43年の洪水……419
第三編　都市化の民俗変化
第一章　市民とムラ人
第一節　都市化と村落生活の変貌
1　ムラの変貌……425
2　年齢集団・家族生活の変化……432
第二節　団地・新興住宅の民俗……436
第二章　減少する農家と都市生活
第一節　都市化と農業
1　都市化と農地の減少……445
2　都市化と農業
（一）都市化と公害……449
（二）新しい農業への動き……452
3　都市化と農業にかかわる民俗の変貌……457
第二節　衣生活・食生活における都市化
1　80年代の衣生活……459
2　80年代の食生活……462
3　食生活の都市化……464
第三章　祭り・儀礼の消滅と再生
第一節　信仰の継続と消滅……470
第二節　現代の婚姻儀礼と葬送儀礼
1　婚姻儀礼の変化……477
2　葬送儀礼の変化……478
第三節　祭りと芸能
1　祭　り……480
2　芸　能……483
参考文献一覧……489
執筆分担
話者・資料提供者・協力者
富士見市史編さん関係者名簿
あとがき
平成元年3月31日発行
富士見市

045『三郷市史』第九巻　別編　民俗編
平成3年3月

目　次

総　説……1
第一章　三郷市の自然と歴史
第一節　三郷市の自然条件
1　はじめに……7
2　三郷市の土地条件
（1）三郷の土地と河川……7
（2）三郷の沖積層と海水準変動……9
3　三郷市の気候条件
（1）年平均気温の推移……12
（2）年最高気温の推移……12
（3）年最低気温の推移……14
（4）年降水量の推移……14
（5）年平均湿度の推移……14
（6）変化傾向をめぐって……14
（7）埼玉県内の主要地点との比較……16
4　三郷市の自然をめぐる問題
（1）地盤災害－地震による液状化現象－……17
（2）地盤災害－地盤沈下－……18
（3）河川洪水災害……18
第二節　三郷市の歴史
1　原始・古代の三郷……20
2　中世の三郷……26
下河辺荘と葛西御厨　戸ケ崎・彦名の河関と彦名・花和田の市　小田原衆所領役帳と匝嵯氏　喜連川家料所記と簗田氏の定書　本土寺過去帳に記された人々　近世の社会へ
3　近世の三郷……32
開けゆく三郷の村々　二郷半領の支配　検地の実施　鷹場の村　水との闘い　江戸後期の村の様相
4　近代の三郷……37
明治維新期の三郷　大小区制と三新法　明治・大正期の生活
5　現代の三郷……48
第二章　経済と民俗
第一節　農業と生産技術
1　土地利用と水利
（1）土地利用……55
土壌　自然堤防と畑作　後背湿地と稲作　耕地地の分布
（2）水利……59
沿革　水利慣行
2　農業の概観……65
3　稲作の技術
（1）稲の品種……66
保村　利根早生　農林一号　品川　愛国　白芒　八州千本　コボレ　ハッセキ　実取ラズ　三次郎糯　太郎兵衛糯　埼玉十号　大正糯
（2）稲作技術……69
田うない　苗代　種籾　播種　下肥　代掻き　苗取り　田植え　田植えの方法　イウイとヒョウトリ　田植えの一日　除草　害虫・病気　稲刈り　稲架　脱穀　籾干し　籾すり　選別
4　畑作の技術……89
クイリョウとセンザイ　麦　粟　きみ　とうもろこし　もろこし　大豆　小豆　ささげ　いんげん　えんどう　里芋　じゃが芋　さつま芋　大根　小蕪　ねぎ　漬け菜　畑作の儀礼
5　農　具……103
稲作農家の所蔵農具
6　川　漁
（1）概　観……116
（2）魚の種類……116
鯉　鮒　鰻　鯰　ライギョ
（3）漁期と漁法……117
ウナギカキ　タカズッポ　オシアミ　シカンゴ　カリグミ・キリモミ　ナマズバコ　ドジョウホリ　オキバリ　ナゲナワ　ヨトボシ　ヨツデ　ケエツケ　アジアミ　ドウ　ビンドウ　ヤス漁　ナマズツリ　ハネツケ　ドジョウカゴ　カエボリ　オッパシ　ガチャアミ　トアミ　エビトリ　シジミトリ　カラスガイトリ
第二節　交　易
1　農家の副業……126
出稼ぎ　藁細工
2　蔬菜の出荷……130
出荷準備　運搬方法　出荷先　セリの様子　相場　出荷組合
3　下肥買い……134
下肥の使用　下肥組合
4　渡し舟（渡し場）……138
第三節　職　人……142
概観
1　よしず屋……143
系譜・組織　材料　製作工程　生産暦
2　井戸屋（上総掘り）……145

系譜　井戸のいろいろ　仕事の手順　材料
3　長坂中型（ゆかた染め）にかかわる職人１４８
系譜・組織　製作技術　生産暦　材料　職人の生活　信仰
4　舟大工……１５４
系譜　製作工程　材料　制作用具　職人の生活　休み日・信仰
5　瓦　　屋……１５８
系譜　製作工程　材料・燃料　生産暦　職人の生活
第四節　衣・食・住
1　住まい
（1）屋　敷……１６３
家屋配置　屋敷構え　付属建物
（2）母　屋……１６７
間取り　部屋の名称と利用　ハレと部屋の使用法　土間の名称と利用　その他の特殊な部屋　井戸と風呂　照明と燃料　屋根
（3）建築儀礼……１７５
ジマツリ・地鎮祭　ジンギョウ・ジツキ　タテマエ・上棟式　トウリョウオクリ・ダイクオクリ　イミネンブツ　新築祝い
2　食べもの……１７９
食制　主食と副食　味噌・醤油　晴れの食事
3　衣　　服……１９１
概観　野良着と普段着・晴れ着　裁縫と衣服の管理
4　消費生活……１９９
自給自足の生活　購入する品々
第三章　社会と民俗
第一節　ムラの歴史とその姿
1　新田開発のムラ……２０７
三つの村　ムラの成り立ち　小名と新田村　ムラのすがた（彦成地区上口）（早稲田地区丹後・半田）（東和地区高須）　ムラのしくみ　集会場　ムラとムラのつきあい
2　江戸・東京と三郷のムラ……２２１
近郊農村としての三郷　ヒヨウトリと出稼ぎ　ムラの中の商店　行商と市　休み日と遊び
第二節　ムラの秩序と人々の構成
1　地主と奉公……２２９
早稲田地区　彦成地区　東和地区　地主の生活　小作人の生活　奉公人の生活　ムラの階層構成と村柄
2　近隣組織と相互扶助……２３５
町会と組　氏子組織と組　新住民と班編成　ムラの共同労働・共有財産　ムラのなかの互助組織葬式組と互助　婚礼・出産と組の付き合い　家屋の普請と手伝い合い　農作業の手伝い合い　リンカ付き合い
3　ムラの諸集団……２４５
ワカシュ講の伝統　念仏講から老人へ　戸主の集まり　ムラの行事と子供の役割
第三節　家族と親族
1　家　　族
（1）家族の地位と役割……２５３
家族の呼称と名称　屋号（アダナ）家柄　家長・主婦の役割　アトトリの役割　嫁の役割　子供の役割　年寄りの役割　奉公人　食事の座位置　家族の寝場所
（2）家族の継承と相続……２６２
相続の形態　財産の分配　相続の時期　養子
2　親　　族……２６５
（1）イットウ・イッケとホンケ・イモチ・２６６
本家による統制　イットウ・イッケの付き合い　イットウ・イッケ間での婚姻　分家の事例
（2）親戚関係……２７１
第四節　人の人生
1　産　　育
（1）妊　　娠……２７６
妊娠中の食事　妊娠中の禁忌・俗信　安産祈願　腹帯・帯祝い
（2）出　　産……２７８
出産場所　産婆・トリアゲバアサン　出産　出産後の処理　産後の寝床と食事　出産と出産後の禁忌・俗信
（3）誕生と儀礼……２８２
初子の意義　産着　産湯　乳付けと俗信　ミツメのボタモチ　お七夜　マゴダキ　マゴミセと宮参り　産見舞い　産後の祈願　産婦の忌み明けと働き始め　食い初め　初正月　初節供　初誕生　モチショイ
（4）育児と俗信……２８９
三歳・五歳・七歳の祝い　手伝い　育児の俗信
2　婚　　姻
（1）結婚までの過程……２９３
見合い結婚　結婚年齢　縁談と仲人　結婚の条件　通婚圏　見合　結納　結婚の時期　アシイレ　恋愛結婚
（2）祝言から里帰りまで……３０１
嫁入り道具と荷送り　ムコイリ（嫁迎え）　嫁入り　たいまつと菅笠（入家式）　祝言の客　祝言　カミマイリ　メデタ　ミツメ　カミアライ・ハツドマリ
3　葬　　送……３１０
（1）臨　　終……３１１
葬式組　葬儀委員長とクミの仕事　シニヅカイ　オクリダンゴ　湯灌　死装束　北枕と魔除け　神棚・仏壇　シホウガタメ　葬具作り　通夜と香奠　納棺と副葬品
（2）野辺送り……３１８
出棺と棺の出入口　ロクドウ　野辺送り　たいまつ　ドラとカネ　埋葬　念仏　忌中バライ　マクラダシ
（3）供養と年忌……３２２
墓　墓参り　初七日　七本塔婆　四十九日　ハカナラシ　年忌供養
（4）異常死と俗信……３２６
異常死　水子・無縁仏の供養　葬儀に関する俗信
第四章　祭りと芸能
第一節　村の祭り（概観）……３３１
1　祭祀組織……３３３
半田・高須・茂田井地区の祭祀組織　谷中・寄巻地区の祭祀組織　大広戸・彦糸・上口・彦倉地区の祭祀組織　花和田・戸ケ崎地区の祭祀組織
2　祭りの諸相……３３８
（1）オビシャなどの新年を迎えて行われる祭り
弓を射るオビシャ　蛇を射るオビシャ　蛇と弓を作るオビシャ
（2）二月初稲荷神社の祭り……３４９
（3）夏の祭り……３５６
御輿の出る祭り　百万遍　ダイハンニャ　獅子
（4）秋の祭り……３６６
3　芸　　能……３６９
（1）戸ケ崎の獅子舞……３７０
由来　組織　獅子舞の用具　祭りまでの経過　ヨイミヤ（宵宮）　演目
（2）幸房・岩野木の獅子舞……３８１
由来　組織　獅子舞の用具　祭りまでの経過　ヨミヤ（宵宮）　祭り当日　日待勘定　演目
（3）囃子（神楽を含む）……３８６
系譜および流派　組織　楽器および曲目　練習　囃子を行う場所
（4）万　　作……３９０
第二節　家の祭り
1　暦と休み日
（1）休み日……３９７
（2）暦……３９９
2　正月行事……４００
（1）正月の準備……４０１
ススハライ　暮れの市　破魔弓・羽子板　餅搗き　お飾り付け　門松　お礼とヘイシン　ミソカッパライ（晦日祓い）　オミタマサマの飯　ミソカソバ（晦日そば）オタキアゲ　除夜の鐘
（2）正月の行事……４０５
初詣　若水汲み　ヨシダナ（葭棚）　正月三が

日の供えもの・食事　元旦祭　寺への年始と住職の年始　仕事始め　クスリダシ（薬出し）初荷　初湯　オオバン　新年会　タナサガシ　ナナクサ（七草）蔵開き・鏡開き　神社の祭礼
（3）小正月の行事……414
マユダマ　ケヅリカケとヤナギバシ　アズキガユ　お飾り納め　ヤブイリ　ハツカコガシ　恵比寿講　初天神　高須のツジキリ（辻切り）
3　春から夏の行事……419
節分　初午　八日節供　針供養　三月の節供　春の彼岸　種まき　正月　谷口の不動様　お釈迦様　真間の手児奈さん　彦倉の虚空蔵様　五月の節供　荒神苗　サナブリとサナブリ正月　カミ正月　浅間参り　戸ケ崎の浅間神社・香取神社の祭りと獅子舞　長戸呂のツジギリ　半田の虫追い　百万遍　大般若　ミヤナギ（宮薙）　天王様・山王様　上口の香取神社祭礼　花和田の厄神様の祭り　土用干し　雨乞い
4　盆の行事……435
カマノクチ　トウロウタテ（灯籠立て）　新盆の供養　七夕　墓石洗い　ガラガラ・コシカケ　盆棚作り　ホトケのお迎え　墓の灯籠　盆の供えもの　盆礼　墓参り　ホトケ遊ばせ　高野の施餓鬼　棚経　棚念仏　盆踊り　盆の送り　ヤブイリとエンマサマの日　施餓鬼会　ウラボン
5　秋から冬の行事……453
バカモコセック（馬鹿婿節供）　十五夜　秋の彼岸　十三夜　オヒマチ（お日待）　オカマサマ　収穫の儀礼　デイシゲユ（大師粥）　トウカンヤ　オビトキ・七五三・オトリサマ　恵比須講　八日節供　冬至
第五章　神と仏
第一節　村の神と家の神
1　村の神社
（1）神社の分布と伝承……461
香取神社と稲荷神社　女体神社・上口香取神社　ご神体と境内社
（2）神社合祀と信仰……467
（3）氏子組織……470
彦成の氏子会　戸ケ崎の氏子会　長戸呂の氏子親睦会　高須の氏子組織　幸房・岩野木の氏子組織　大広戸の氏子組織　半田の氏子組織　采女新田の氏子組織　横堀の祭礼と氏子組織　そのほかの地区の氏子組織
2　小地区で祀る神
（1）組で祀る神……477
彦成の組の神　仁蔵の組の上　茂田井の鎮守　上口の組の神　戸ケ崎の稲荷と吹上天神社
（2）数軒で祀る神……480
幸房の稲荷祭祀　イットウや本分家で祀る神　水神・弁天　高須の第六天社
（3）路傍の神仏……482
地蔵　長戸呂の照暗地蔵　久兵衛の阿弥陀様　普門品供養塔　庚申塔
3　屋敷神
（1）上口の屋敷神……487
（2）長戸呂の屋敷神……491
（3）そのほかの屋敷神信仰……495
4　屋内に祀られる神
（1）神　　棚……500
（2）荒　　神……502
（3）恵比須・大黒……503
（4）仏　　壇……503
（5）井戸神・水神……504
（6）そのほかの屋内神……504
第二節　寺と堂
1　寺院の行事と檀家
（1）三郷市域の寺院と宗派……506
真言宗　曹洞宗　日蓮宗　天台宗　浄土宗　寺院の本尊
（2）寺院と檀家……509
上口の寺と檀家　彦成の寺と檀家　長戸呂の寺と檀家　半田の寺と檀家　采女新田の檀家　戸ケ崎の寺と檀家　横堀の寺と檀家　高須の宝蓮寺と半檀家　彦糸の安養院と大いちょう
（3）真言宗醍醐派寺院の信徒と行事……517
谷口の成就院　高須の大師様と先達
（4）日蓮宗の信仰と行事……522
久兵衛の本隆寺と十二日講　大広戸の高応寺と鬼子母神講　彦沢の日蓮宗様
2　堂と寮
（1）堂・寮と信仰……529
（2）薬師堂とお釈迦様行事……531
（3）彦倉の虚空蔵堂と行事……533
3　巡りの信仰
（1）武蔵（新西国）三十三ケ所観音礼所…536
十番彦糸実相院　十一番彦富兵左衛門屋敷　十二番彦成西福寺　十三番匠免迎摂院　十四番戸ケ崎常楽寺　花和田の観音堂　境木の観音堂　そのほかの観音　札所巡り
（2）大師札所巡りと送り大師……550
新四国四ケ領八十八ケ所大師札所　二十一大師　江戸川八十八ケ所　新田組二十一ケ所　大正記念大師講（送り大師）
第三節　講と信仰
1　在地講
念仏講　観音経（普門品講）　不動講　勢至講　大師講　庚申講　天神講　稲荷講
2　参拝講……578
大山講　御嶽講　三峰講　富士講　木曽御嶽講　成田講　雷神講　川崎大師講　戸隠講　道了講　筑波講　牛馬講　榛名講　山倉講
第六章　暮らしと物語
第一節　他の土地とを結ぶ物語……607
品川から苗を貰いにくる由来（一）（二）（三）　番匠免の地名の件　町屋のテンノウサマ　町屋のテンノウサマ　半田稲荷
第二節　暮らしを支える物語……614
獅子舞の由来　大刀の由来　大隅守信利の鰐口　水戸黄門と権現松　近藤勇と丹後村の人々　巡礼坊の由来　高札場の由来　千人首塚　背槍の山　小合溜の水神様　地蔵の石と足の痛み　サンコウダイシ　虚空蔵と鰻の禁忌　稲の起源　十二支の由来（一）（二）（三）　猫が祟る訳
第三節　暮らしの中の物語……626
浅間神社の蛇　小合溜の蛇　卵と蛇　ムジナにばやかされる（一）ムジナに鯰を見せられる　ムジナにばやかされる（二）ムジナのアブク　提灯化け物　狐に化かされる　稲荷に迷わされる　稲荷に化かされる　狐憑き　火まわりが怖かった　オートバイに襲われる　人魂（一）　人魂（二）　埋められた地蔵
第四節　暮らしの物語……634
おいはぎの話　関東大震災　昔の小遣い　浅草の思い出　婚姻のこと　戦争・戦地で　戦争・空襲　戦争・復員　食糧難　二十二年の洪水（一）　二十二年の洪水（二）
第七章　水害をめぐる民俗
丹後地区の水害をめぐって……645
南蓮沼地区の水害をめぐって……654
彦糸地区の水害をめぐって……665
高須地区の水害をめぐって……675
花和田地区の水害をめぐって……684
索引　　あとがき
平成3年3月30日　発行
三　郷　市

『半田の民俗』

目　　次

村　　制……1
生産・生業……17
年中行事……30
民間信仰……56
半田地区話者一覧
民俗部会活動経過
平成元年3月30日発行

三郷市企画財政部広報広聴課

『高須の民俗』
目　次
生産・生業……1
年中行事……15
民間信仰……41
口承文芸……74
高須地区話者一覧
民俗部会活動経過
平成2年3月30日発行
三郷市企画財政部広報広聴課

046『皆野町誌』資料編五　民俗
昭和61年3月
目　次
第一章　皆野町の概観……1
1　皆野町の自然環境……2
2　農林業……4
3　町の変遷……8
第二章　腰の民俗……13
第一節　腰の概観……14
第二節　むらと家
1　ム　ラ……16
（1）ムラの区分　（5）つきあい
（2）諸　役　（6）諸集団
（3）寄合い　（7）共有財産
（4）共同作業
2　イ　エ……23
第三節　交通と交易
1　交　通……24
2　運　輸……25
3　通　信……26
4　交　易……26
第四節　生産と生業
1　稲　作……27
2　麦　作……32
3　皆野地区の役牛……36
4　養　蚕……38
第五節　一年の行事
1　正月の行事……45
2　春から夏の行事……49
3　盆の行事……50
4　秋から冬の行事……53
第六節　衣と食
1　衣……54
2　食……56　第七節　人の人生
1　子育て……60
2　成　人……63
3　婚　姻……64
4　厄年・年祝い……68
5　葬　喪……68
第八節　信　仰
1　イエでまつる神仏……73
（1）屋内神
（2）屋敷神
2　コーチでまつる神仏……74
3　ムラでまつる神仏……76
4　講……77
第三章　下田野の民俗
第一節　下田野の概観……80
第二節　むらと家
1　ム　ラ……82
（1）ムラの区分　（4）つきあい
（2）諸　役　（5）諸集団
（3）共同作業　（6）共有財産
2　イ　エ……91
（1）家　族
（3）分家・隠居
（2）相　続
（4）親類のつきあい
第三節　交通と交易
1　交　通……93
（1）ムラの交通
（2）来村者
2　運　輸……95
3　通　信……96
4　交　易……96
第四節　生産と生業
1　農　業……96
（1）稲　作　（4）農耕儀礼
（2）畑　作　（5）労働慣行
（3）養　蚕
2　山仕事……113
（1）薪炭づくり
（2）こびき
3　川漁と水車……115
（1）魚とり
（2）水　車
4　諸　職……123
第五節　一年の行事
1　正月の行事……125
2　春から夏の行事……132
3　盆の行事……136
4　秋から冬の行事……141
第六節　衣・食・住
1　衣……143
2　食……148
3　住……153
第七節　人の人生
1　子育て……156
2　成　人……161
3　婚　姻……161
4　厄年・年祝い……166
5　葬　喪……166
第八節　信　仰
1　イエでまつる神仏……172
（1）屋内神
（2）屋敷神
2　コーチでまつる神仏……175
（1）組や同族でまつる神
（2）路傍にまつられた神仏
3　ムラでまつる神仏……179
（1）赤城大神社
（3）その他の社寺
（2）西福寺
4　講……183
（1）日待ち
（3）一人講
（2）代参講
第四章　谷草の民俗
第一節　谷草の概観……190
第二節　むらの家……192
1　コーチ……192
2　イ　エ……199
第三節　交易と交易
1　交　通……200
2　運　輸……204
3　通　信……205
4　交　易……206
第四節　生産と生業
1　農　業……207
（1）畑　作
（3）稲　作
（2）養　蚕
（4）農耕儀礼
2　林　業……221
（1）白炭がま
（2）黒炭がま
第五節　一年の行事
1　正月の行事……234
2　春から夏の行事……242
3　盆の行事……245
4　秋から冬の行事……248
第六節　衣と食
1　衣……250

2　食……252　第七節　人の人生
1　子育て……260
2　婚　姻……264
3　厄年・年祝い……268
4　葬　喪……269
第八節　信　仰
1　イエでまつる神仏……274
（1）屋内神
（2）屋外神
2　コーチでまつる神仏……277
（1）コーチにまつられた神仏
（2）共同祈願
3　講……279　第九節　ことわざ
1　予　兆……282
2　禁　忌……283
3　民間療法……283
4　その他……284
第五章　国神の民俗
第一節　国神の概観……286
第二節　むらと家
1　ム　ラ……288
2　イ　エ……295
第三節　交通と交易
1　交　通……296
2　運　輸……299
3　通　信……300
4　交　易……301
（1）村内の交易
（2）行　商
第四節　生産と生業
1　農　業……303
（1）畑　作
（2）養　蚕
2　林　業……317
3　機　業……319
第五節　一年の行事
1　正月の行事……321
2　春から夏の行事……327
3　盆の行事……330
4　秋から冬の行事……331
第六節　衣と食
1　衣……332
2　食……335
第七節　人の人生
1　子育て……342
2　成　人……350
3　婚　姻……351
4　厄年・年祝い……361
（1）厄　年
（2）年祝い
5　葬　喪……361
第八節　信　仰
1　イエでまつる神仏……370
（1）屋内神
（2）屋敷神
2　コーチでまつる神仏……371
（1）組や同族でまつる神仏
（2）路傍にまつられた神仏
3　ムラでまつる神仏……373
（1）国神神社
（2）長言寺
第九節　ことわざ
1　予　兆……377
2　禁　忌……378
3　民間療法……379
第六章　門平の民俗
第一節　門平の概観……382
第二節　むらと家……384
第三節　交通と交易
1　交　通……389
2　運　輸……392
3　通　信……392
4　交　易……393
第四節　生産と生業……395
1　こんにゃく栽培……397
2　養　蚕……400
3　林　業……403
第五節　一年の行事
1　正月の行事……410
2　春から夏の行事……418
3　盆の行事……420
4　秋から冬の行事……425
第六節　衣と食
1　衣……427
2　食……428
第七節　人の人生
1　子育て……432
2　成　人……435
3　婚　姻……437
4　厄年・年祝い……440
5　葬　喪……441
第八節　信　仰
1　イエでまつる神仏……446
2　コーチでまつる神仏……447
3　組などでまつる神仏……450
4　共同祈願……452
第九節　ことわざ……453
第七章　上三沢の民俗
第一節　上三沢の概観……458
第二節　むらと家
1　ム　ラ……460
2　イ　エ……465
第三節　交通と交易
1　交　通……467
2　運　輸……470
3　通　信……471
4　交　易……471
第四節　生産と生業
1　麦作り……473
2　薪作り……476
3　機　業……478
（1）年季（Aさんの場合）
（2）年季（Bさんの場合）
（3）年季（Cさんの場合）
（4）工場主としてのTさん
（5）捺染加工屋
第五節　一年の行事
1　正月の行事……495
2　春から夏の行事……501
3　盆の行事……503
4　秋から冬の行事……507
第六節　衣と食……508
第七節　人の人生
1　子育て……514
2　婚　姻……520
3　厄年・年祝い……524
4　葬　喪……525
第八節　信　仰
1　イエでまつる神仏……530
2　コーチでまつる神仏……532
3　ムラでまつる神仏……534
4　講……537
第九節　ことわざ
1　予　兆……538
2　禁　忌……538
3　まじない……540
4　民間療法……541
第八章　平草の民俗
第一節　平草の概観……544
第二節　むらと家
1　コーチ……546
2　イ　エ……557
第三節　交通と交易
1　交　通……560
2　運　輸……562
3　通　信……563

4　交　易……563
（1）行商　（3）その他の来村者
（2）職人の来　（4）市
第四節　生産と生業
1　農　業……566
（1）麦作り　（3）農耕儀礼と禁忌
（2）稲　作　（4）労働慣行
2　山仕事……581
（1）クロキ山
（2）アサキ山
第五節　一年の行事
1　正月の行事……593
2　春から夏の行事……604
3　盆の行事……607
4　秋から冬の行事……611
第六節　衣と食
1　衣……613
2　食……614
第七節　人の人生
1　子育て……619
2　婚　姻……624
3　厄年・年祝い……629
（1）厄年
（2）年祝い
4　葬　喪……630
第八節　信　仰
1　イエでまつる神仏……637
（1）屋内神
（2）屋外神
2　コーチでまつる神仏……638
（1）組や同族でまつる神仏
（2）路傍にまつられた神仏
（3）丸山神社
（4）虚空蔵堂
（6）講
（5）共同祈願
（7）日待
第九章　金沢の民俗
第一節　金沢の概観……646
第二節　むらと家
1　概　要……648
2　村落生活……651
3　家族生活……659
第三節　生産と生業
1　農　業……661
2　養　蚕……667
3　林　業……669
第四節　一年の行
一　月……675
二　月……682
三　月・四　月……684
五　月・六　月……685
七　月・八　月……686
九　月・十　月……689
十一月・十二月……690
第五節　衣と住
1　衣（着物）……692
2　住（民家）……697
第六節　人の人生
1　誕　生……705
2　誕生後……708
3　育　児……710
4　成　人……711
5　婚　姻……711
6　厄　年……714
7　葬　式……716
8　葬　制……717
第七節　信　仰
1　「村」の神々……718
2　「ムラ（耕地）」の神々……720
3　「イエ」の神々……721
4　代参講……724
5　その他の信仰……725
第八節　芸能・娯楽・遊戯
1　民俗芸能……727
2　娯楽・童戯……728
第九節　口頭伝承・民俗知識
1　伝説・昔話……730
2　民　謡……737
3　民俗知識……738
皆野町の住居と職人
坪井英彦……743
第一節　住居と生活
1　概　観……744
2　屋敷取り……746
（1）平地の民家
（2）山地の民家
3　民家の形式……753
（1）新井家住宅
（2）皆野の民家
イ　民家の概要
ロ　間取りと架構の復元
（イ）平家住宅　（ニ）霜田家住宅
（ロ）若林家住宅　（ホ）飯野家住宅
（ハ）田島家住宅　（ヘ）金室家住宅
4　生業と住宅……768
（1）生産暦
イ　霜田氏宅
ロ　田島氏宅
（2）養蚕と住宅
イ　セガイ造り
ロ　蚕　室
ハ　蚕の成長と空間
5　住生活とその変遷……778
（1）間取りの変遷
イ　第一段階
ロ　第二段階
ハ　第三段階
（2）住生活の変化
イ　霜田氏宅
ロ　飯野氏宅
（3）住まい方としきたり
（4）住居と信仰
6　生業と生産用具……801
（1）住居と生産用具
（2）生産用具の種類と用途
イ　竹　籠
ロ　野道具
第二節　諸　職
1　概　観……811
（1）江戸時代の職人
（2）明治以降の職人
2　籠　屋……815
（1）仕事場　（3）仕事と道具
（2）製品の種類　（4）仕事の変化
3　鍛冶屋……832
（1）仕事場　（3）仕事の変化
（2）仕事と製品　（4）修　業
4　桶　屋……845
（1）仕事場　（4）仕事の変化
（2）製品の種類　（5）修　業
（3）仕事の様子と道具（6）信　仰
5　屋根屋……862
（1）仕　事
（2）道　具
（3）修　業
6　大　工……868
（1）仕　事　（3）仕事の変化
（2）建　前　（4）しきたりと慣習
資料一　公認埼玉県竹工製品組合聯合会定款…874
資料二　秩父桶工組合の価格表……912
あとがき……916
皆野町の伝説
山口槌男……917
下田野の伝説……918
国神の伝説……920

金沢の伝説……９２３
皆野町の民俗芸能
－椋神社の獅子舞－　関根幸一……１０３８
あとがき……１０３９
昭和61年3月31日発行
皆野町

047『妻沼町誌』
昭和52年3月
目　次（抜粋）
第十一章　民俗・信仰
第一節　年中行事……６９９
第二節　婚礼・葬儀……７１１
第三節　方言・訛語……７１５
第四節　神社と祭神……７１９
第五節　寺院と本尊仏……７３７
第六節　修験道……７５９
第七節　民間信仰……７６２
第八節　伝　節……７８５
聖天様は松が嫌い・雉子は聖天様の眷族・葛和田の大杉様・大龍寺の草創・島田道竿の大蛇退治・河童与兵衛・福川の由来・七夕様の迎え馬
妻沼町の歴史年表……８６１
妻沼町誌編纂委員会の構成……８８０
昭和52年3月30日発行
妻沼町役場

048『毛呂山民俗誌』Vol.1
平成2年3月
目　次
１　不思議なはなし
１　怖い場所　河童のはなし　小豆洗いのはなし　天狗のはなし　狸・むじなのはなし　狐・オトーカのはなし　送り狼のはなし　オーサキのはなし
２　唱えごととお呪ない……２２
歯が抜けた　モノモライができた　イボができた　やけどをした　コウデを病んだ　犬に吠えられた　悪い夢を見た　雷が鳴った　地震だ・大変だ　子どもが転んで泣いた　暮れの茄子・豆・菊の殻燃やし　大晦日のミソカッパライ　七草粥の料理　成木責め　節分の豆を煎る　鬼は外の作法　トーカンヤ
３　年中行事覚え書……３７
歳神様　正月の食事　若水くみ　仕事初め　山入り　お焚き上げ　蔵びらき　小豆粥　藪入り　次郎のついたち　八日節供　初午　苗びらき　馬鍬洗い　野あがり　けつあぶり　生姜節供　二百十日　おくんち　川浸り
４　蕨の恩を忘れたか－蛇の伝承－……４８
５　水車の音……５２
６　雨乞い獅子の活躍……５６
７　お天気占い……５９
８　世間話のあれこれ－顔かたち－……６３
ほくろ　つむじ　みみたぶ　足の親指　鼻の形と大きさ　手の大きさ　その他
９　囲炉裏のはなし……６９
いろりの現状　いろりの灰　自在鉤となくしもの　鉤と豆とお金　火傷除け　荒神様とおむすび　いろりの燃料　いろりの座席
１０　出産と育児をめぐる伝承……８２
（１）安産祈願－妊婦と食事　赤ちゃんとアザ　安産の神様　難産と流産　お産のカチマケ　後産の処理
（２）子育ての苦心－赤ちゃんのセッチンマイリ　ヤクドシッコのお呪い　丈夫に育てたい　腰に吊るした白南天　夜泣きのお呪い　かんの虫を治したい　はしかのお呪い　百日咳の治しかた　てんかんの発作　子どもの寝小便
１１　家例の諸相……１０１
１２　記憶される災害……１０４
関東大震災　大水　落雷　カンバツの被害　ひょうの被害
［コラム］
豊作の予想　チンピラの不思議　木曽の御嶽様
次号の特集内容　昔のまりの作り方　産湯はどこに捨てるのか　オキノサマ
◎指導・協力ならびに伝承資料の提供者一覧……１２４
あとがき……１２５
平成2年3月31日発行
毛呂山町教育委員会

『毛呂山民俗誌』Vol.2
平成3年8月
目　次
１　行商人の消息……１
くず繭買い　石屋・臼の目立て　いかけ屋　研屋・棒屋　油屋　呉服屋　下駄屋　ぞうり屋　豆腐屋　魚屋　アオッパ買い　飴屋　目立て屋　薬屋　たまご買い　桶屋　かご屋　箕づくり
２　２０歳の風景……２４
３　町の講組織……４０
前久保の講　沢田の講　大師１区の講　滝ノ入の講　阿諏訪の講　大谷木の講　長瀬１区の講　長瀬３区の講　葛貫の講　川角の講　西大久保の講　西戸の講　第三団地の講　岩井（沢田）の講　岩井（平山）の講　大類の講
４　世間話　－町のフォークとヒーローたち－……５１
５　年中行事覚え書　－２－……５９
失われた正月気分・オクンチ・盆行事・年中行事の資料
６　毛呂山町のうた……９６
７　夜遊びの伝説……１１９
［コラム］
蝉の抜け殻　眼が悪くなったら　夜泣きの対処法　足が悪くならないように　異母取りの方法
◎指導・協力者一覧……１２９
あとがき……１３０
平成3年8月1日発行
毛呂山町教育委員会

『毛呂山民俗誌』Vol.3
平成５年３月
目　次
１　魚とりのはなし……１
２　夏休みの体験……１５
３　なぞなぞ……２３
４　戦後のできごと……２６
買い出し　八高線の大事故　民俗の戦後
５　農家の藁仕事－消えてしまった藁－……５８
６　食の伝承……６４
救荒食物のこと　食糧難の経験　食事の作法　大根の食べ方
７　農家の暮らしと経済－農地解放以前－……９２
８　履物の変化……９９
９　葬送儀礼ノオト　－１－……１０５
死の予兆　よみがえり
１０　農家の時間割
－アサヅクリからヨナベまで－……１０９
１１　風呂のはなし……１１８
１２　楽になった農作業－機械化される農業－・１２５
１３　出荷という仕事－換金までの苦労－１３６　［コラム］
てんかんの発作の処置法　オシラ講　日高市上鹿山のＡさんのはなし　セブリの消息　厄年の伝承　むかで油　金婚式カップル訪問－１－　厄介なトゲ　大久保耕地のオトウカ　山口満さんのことば　薬草の知識　チトリの話　オキノサン　お百度参り　馬車引きの金さん　ジザイモチの味　父の口癖　町のフォークヒーロー　箱根駅伝　オイテケ・オイテケ
◎指導・協力者一覧……１４１
あとがき……１４２
平成5年3月1日発行
毛呂山町教育委員会

『毛呂山民俗誌』Vol.4
平成6年3月

目　次

1　食の伝承……1
赤飯をつくる日　小豆粥　七草粥　お粥ー産婦の食事ー　サツマメシ　カテメシ　だしを使った料理
山野で採集した食べ物
補遺　山野で採集した食べ物　子どもが食べた野山の実
2　暮らしと燃料……33
マキとソダ　炭の消費
3　馬と牛の記憶……51
4　土への関心……73
5　少し前の酒事情……86
6　下肥のはなし……95
下肥の購入　下肥の施肥方法　外便所の思い出
7　筵と生活……103
8　旅芸人の消息……115
9　農民の敵……119
10　町の職人
ー平野さんは籠屋さんであったー……123
11　町の動物記……136
12　青年の経験……151
［コラム］
爪切りの伝承　雨だれの伝承　トリウチボウシとナカオレ　写真の噂　ヒトダマその1　ぜんこさん　阿諏訪のフォークヒーロー・鉄雄さん　葛貫の蛭　五円渕の由来　よみがえり　疱瘡神様　日高市上鹿山のAさんの経験談　藁布団　小便とミミズ　泥棒の噂　麦藁帽子　ヒトダマその2　裁縫をめぐる禁忌　朝の蜘蛛と夜の蜘蛛　箒と掃除　初物の収穫　妻の苦労　柿渋　井戸の話題　猫を飼う　犬を飼いたい　ホッカブリとハチマキ
◎指導・協力者の一覧表……157
あとがき……158

平成6年3月1日発行
呂山町歴史民俗資料館

『毛呂山民俗誌』vol.5
平成8年3月

目　次

1　婚姻儀礼の覚え書……1
縁談を持ってきた人質　恋愛結婚の評価　見合いの様子　仲人口という技術　仲人のプロ　口固めの様子　結納の様子　御袴代（結納返し）　結納儀礼の様子　嫁迎え　嫁入りは歩きだった　嫁入り道具のなかみ　祝儀の手伝い　花嫁さんが婚家に入る　祝儀進行のプログラム　嫁入り道具を拝見　髪洗いという名の里帰り　嫁さんの顔見せ
2　ああ寒かったね……36
3　暗闇の記憶……46
4　町の住生活ー屋根の変化ー……57
5　ゾーヤマ（雑山）への関心……69
6　産育の伝承ー夫の出産体験ー……79
7　伝承された治療法……90
ほくろ（黒子）の取り方　痔の悩み　赤ちゃんのアセモ　クサやトビヒの治療法　漆でかぶれたときの処置　ひび・あかぎれ・しもやけの治し方　歯が痛い　できものの処置　赤ちゃんのアザ　釘を踏んだ　カクランの処置法　耳が悪くなったら　しゃっくりを止める　暑気当たりの処置法　止血の処置法　マムシに咬まれたときの処置法
8　家伝という名の医療……106
9　達者な人たちー長寿の称号ー……112
10　「筆おろし」という体験……123
11　少し昔の子どもたち……129
家事手伝い　稲作の手伝い　麦作りの手伝い　蚕の手伝い　畑仕事と山仕事の手伝い　小遣いの記憶　子ども部屋の誕生
［コラム］
針が見つからない　ダイジンの伝承ー平山ダイジンー　流鏑馬の今昔ー福田三一さんの思い出　夜の蝶　死に欲が出る、ということ　盆月には亡くならないで欲しい　味噌の話題　神前と仏前　死に欲が出る、ということ（その2）　庭木への関心　後生楽という語彙　またぐな、踏むな、腰かけるな　ダイジンの伝承ー矢倉ダイジンー　してはいけない一覧　カイブシ（蚊燻し）　井戸とボウフラ　大沢幸平さんが20歳のころ　ダイジンの伝承ー向ダイジンー　西戸の名人　蚊との交流　後生がいい、ということ　消えた病ー脚気の消息ー　健康優良児　観音の夢　長男の損得
◎指導・協力者一覧表……164
毛呂山町文化財保護審議委員会名簿
毛呂山町民俗調査員名簿
毛呂山町民俗調査事務局名簿
あとがき……165

平成8年3月1日発行
毛呂山町歴史民俗資料館

049『八潮市史』民俗編
昭和60年9月

目　次

第一章　社会生活
第一節　ムラのしくみ
概　説……2
1　ムラの構造
（1）ムラの起源……7
ムラ　ムラの起源　中川沿いのムラ起源　綾瀬川沿いのムラ起源　川に面しない他のムラ起源　ムラ境　辻切り
（2）ムラの仕組み……16
組と講　五人組・部落会・町会　ムラ組　ムラ役　言継ぎと定使い　寄り合いと常会
（3）ムラ入りと宮入り……33
仲間入り　ムラ入り　嫁・婿のムラ入り　宮入りと若衆入り
（4）相互扶助と共同作業……36
合力　生業に関わる相互扶助　安全・衛生に関わる相互扶助　生活に関わる相互扶助
（5）年齢集団……39
年齢の階梯　若い衆講と青年会　戸主会　主婦たちの集団　老人集団
2　家と同族
（1）家族の生活……47
家族構成　高木の家族構成例　家族の地位と呼称　部屋の利用　奉公人　下男・下女　家族の仕事分担　家柄
（2）相続と隠居……59
相続　隠居相続　身上渡し　隠居後の生活
（3）同族慣行……62
本家と分家　隠居分家　所帯持ち　徴兵忌避の分家　地分け　先祖分け　イッケと身内　通婚圏
（4）擬制的親子……70
仮の親子　幼児期の仮親　成年期の仮親
第二節　水と生活
概　説……73
1　恵みをもたらす水
（1）水と儀礼……75
儀礼　産湯　赤い椀　食初めの河原石　髪洗い　水天宮の札　死水　湯灌　流れ灌頂　土左衛門
（2）水と年中行事……85
年中行事　初水　洗顔と今日様　七草水　菖蒲湯　天王様　初生り胡瓜　雨乞い　垢離とり　釜の口開け　七夕　盆河童　盆莫莚　迎え火の風呂　迎え火　仏の足洗い水　川施餓鬼　精霊流し　砂取り　お礼流し
（3）水と信仰……100
水の祭祀　水神　井戸神　弁財天・厳島社　水口の祭祀　流物祭祀　水中出現仏　川流し
2　便益をもたらす水
（1）飲料水……110
飲み水　川の水　川棚　天水　井戸水　水脈　井戸掘り　井戸替え　井戸釣瓶　濾し水　水甕　貰い水　井戸講
（2）風　呂……117
風呂　風呂水　風呂桶　湯殿・風呂場　貰い風呂　入浴の回数　入浴順　水浴　落とし湯　俗信

（３）用排水路と水利慣行……１２２
水路の名称　用水　井堀　手樋　落し堀　組織　水利慣行　用排水の施設　その他
（４）河　　川……１３６
川の名称　水利組合　流れに関わる名称　堤川洲　流作業　川に関わる俗信
（５）川魚漁……１４０
川魚　漁法　漁場と漁法
３　災害をもたらす水
（１）水　害……１４７
水害　明治４３年の水　昭和２２年の水　地水
（２）災害を避ける努力……１５５
水防と水の備え　備蓄　水防団　水塚　水害予備船　水防に関わる伝承
第三節　人の人生
概　　説……１６４
１　産　　育
（１）妊娠と帯祝い……１６６
妊娠　帯祝い　産神　胎児　妊婦
（２）出産と里からの見舞い……１７５
産室　産褥　出産　後産　産湯　異常分娩　里からの見舞い　産婦
（３）子供の成長と祝い……１８７
七夜　出産見舞い　宮参り　食い初め　初正月　初節供　育児と俗信　子守り　初誕生　三・五・七歳の祝い　髪型　初潮　一人前
２　婚　姻
（１）見合いと結納……２０２
縁談　通婚圏　結婚年齢　女回り　見合い　仲人　結納
（２）嫁迎えと祝言……２１１
祝言の時期　嫁迎え　出家式　嫁の荷物　入家式　盃事　無礼講　立ち茶
（３）後座敷と里帰り……２１９
後座敷　里帰り　仲人札　鉄漿　嫁の地位
３　年祝い
（１）厄年と長寿の祝い……２２４
４　葬　　送
（１）臨終と野辺送り……２２６
死　葬制　臨終　団子と飯　葬式組　弔いの沙汰　湯灌　通夜　野道具　香奠　焼香　穴掘り　野辺送り　埋葬　忌中祓い
（２）忌明けと年回忌……２４７
死の穢れ　初七日　四十九日　新盆　年回忌
第二章　経済生活
第一節　生業生産と労働慣行
概　　説……２５８
１　農　業
（１）地主と小作……２６０
地主　小作人　小作契約　小作料
（２）土地利用……２６４
（３）生産暦と農耕儀礼……２６５
（４）稲作とその儀礼……２６５
蔵開き　鍬入れ　小豆粥　芝焼き　田耕　苗間作り　種籾　播種　苗間の管理　水口祭り　苗間の上肥　稲の品種　品種の作付割合　田植え前の施肥　田植えの準備　畔道づくり　水汲み　田植えの代掻き　田植え　苗取り　苗回し　イウイとウエッコ　稲の一株　植え方　マザキ苗　田植えの食事　早苗振り　田の草取り　田植え後の追肥　稲刈り　稲の刈り束　カマッパライ　ノロシかけ　田舟　稲扱き　コキッパライ　ボッチ　籾乾し　カラスビキ　カラスッパライ　選別　俵詰め　ムシロッパライ　貯蔵　精米　種籾の保存
（５）畑　作……３０３
畑作物の変遷　麦作　雑穀　芋類　野菜類　工芸作物
（６）農閑作業……３２４
ヨナベ　藁製品作り　出稼ぎ
（７）農　　具……３２８
農具　耕起具　除草具　土浚い　運搬具と牛馬　揚排水用具　脱穀調整具
（８）肥　　料……３３７
肥料　下肥　堆肥
２　諸　　職
（１）市の伝統的諸職……３４１
職人　低湿地の諸職　各地区の諸職　現在の諸職
（２）染色業……３５８
市域の染色業　長坂中型　注染　形場と染場　形付師の生活　注染の形付職人の生活　還元建糸紺屋　紺屋町
（３）菓子製造業……３８１
菓子製造業　煎餅生地職　和菓子職　白玉業
（４）その他の諸職……３８８
浮世絵版画師　竹細工職　理髪師　畳床職　今戸焼　焼瓦職
（５）職人の信仰と組合……３９７
講　太子講　愛染講
第二節　交通と交易
概　　説……４０５
１　交　通
（１）道　路……４０６
路　鎌倉街道　中世の古道　近世の道　公道　道の俗称
（２）宿……４１４
宿　八條の宿　大原の宿
（３）橋……４２２
橋　架橋　板橋　石橋　橋に纏わる伝説
（４）運搬具と車両……４２７
運搬具　人力運搬具　車両運搬具　乗合馬車・自動車　運送業
（５）舟　運……４３０
川船の名称　渡し場　河岸　船大工　舟運業
２　交　易
（１）市と他地区との交流……４４８
市　野菜の出荷と市場　買物圏　遊興圏
（２）行　商……４５６
行商の呼称　行商の種類
（３）店　舗……４５７
店舗の呼称　万屋　荒縄商い
第三節　衣・食・住
概　　説……４６６
１　衣生活
（１）ふだん着……４７１
ふだん着　下着　野良着
（２）晴　　着……４７７
晴着　余所行き　子供の祝着　祝言　葬式
（３）被物と履物……４８２
被物　蓑　履物　雨具
（４）衣服の管理・調達……４８７
（５）化　粧……４９０
髪型　お歯黒
２　食生活
（１）食　料……４９１
農産物の種類　穀類　根菜と蔬菜類　魚肉類
（２）食　制……４９４
食事の呼称と回数
（３）食品と調達……４９９
主食品と間食品　副食　保存食　携帯食　調味料　調理　餅　醗酵
（４）共同飲食……５２８
儀礼と食物　年中行事と食物　人の一生と食物　本膳
（５）施設と食具……５４１
調理施設と道具　食事用具
（６）食物禁忌と食い合せ……５４５
３　住生活
（１）屋　敷……５４６
家の分布　屋敷　付属屋
（２）母屋の利用……５５４
母屋の位置と向き　部屋の呼称と利用　土間の呼称と利用　大原の浮塚の室呼称　屋根裏部屋　証明と換気
（３）母屋の構造……５６１
八潮の民家の概形　平面形式　構造　寸法と材

質　間取りの変遷　浜野昭氏住宅　和井田重男氏住宅　石井明氏住宅　大山昇氏住宅　栗原由一氏住宅　古姓敏男氏住宅　篠木正義氏住宅　豊田穣平氏住宅　朝田泰一氏住宅
（4）建築儀礼……593
新築の計画（建替えの理由　棟梁の決定　旧母屋の解体　ドモリ）
建前以前（ジマツリ　ジンギョウ　建築材の加工　木組み　タテメエ　棟梁送り）
建前以後（屋根葺き・オグシイワイ　造作　屋移り　新築祝い　家見念仏）
母屋の修理（屋根の葺き替え　小屋の取り替え　家の補修）
家に関わる俗信（俗信　方角に関する俗信　間取りに関する俗信　その他の俗信）
第三章　信仰生活
第一節　神と信仰
概　説……614
1　神社と信仰
（1）神社の諸相……616
鎮守社と諸社　小名の氏神　神社の起立　神社建築
（2）神社の氏子組織・祭り組……625
（3）さまざまな祭り……629
祭り　弓ぶち　初午　蛇捩り　獅子舞い　天王祭と川祭り　収穫祭
2　民間の神信仰
（1）屋内神……656
屋内の神々　大神宮　歳神と歳棚　荒神　恵比須神　便所神　マブリ札
（2）屋敷神と同族神……661
屋敷神　地先祖　井戸神・水神　稲荷神　三峰神
（3）さまざまな講……664
遠隔地の神社　伊勢講　大山講　古峰講　戸隠講　榛名講　富士講　三峰講　雷電講
（4）石　祠……673
諸神　鳥居　手水鉢　狛犬
第二節　仏教と信仰
概　説……677
1　寺院と信仰
（1）寺院の変遷と諸相……678
市域の寺院　宗派別寺院分布　寺院の開創　寺院の本末　寺院の統廃合　組寺　寺院建築　境内・境外仏堂
（2）寺院と檀家……711
結檀　寺の惣代と世話人　檀家圏　複檀家　ラントウバ
（3）さまざまな寺行事……727
年始の行事　節分・涅槃・大般若　彼岸　お釈迦様と薬師様　盆　修験
2　民間の仏教信仰
（1）諸仏の信仰と野仏……736
諸野仏　観音　地蔵　不動　念仏　庚申　廻国・六十六部　観音霊場巡り　弘法大師　遠忌　名号・題目・真言　宝篋印塔　普請　道標　灯籠
（2）さまざまな講……746
念仏講　月並み念仏　寺の念仏　ニッキ念仏　家具念仏　仏の念仏　念仏講の組織　百万遍　その他の講　巡礼・巡業
第三節　民俗知識
概　説……768
1　天候と気象
（1）自然現象による予知……771
天候　雲による予知　風による予知　光象・時制による予知　方角による予知
（2）動植物による予知……780
（3）その他の予知……784
2　民間療法
（1）疾患と治療法……786
風邪と内臓疾患　神経性疾患　成人性疾患　皮膚の疾患　外傷　眼病疾患　歯痛
（2）呪術的療法……799
神仏の加護　呪い
（3）薬物的療法……804
動物　植物　その他
（4）医　療……812
買薬　灸師　医師
3　前兆予知
（1）吉凶・事変の予知……815
動植物　天候・気象　分布の状態　予知の多様性　悪と不幸　善と幸運　時刻　予知の正当性
（2）人格・命運の予知……832
身体の各部　施毛と黒子
第四節　年中行事
1　暦と休み……841
2　正月の行事
（1）正月準備……842
煤掃き　門松迎え　注連飾り　歳棚　神膳　餅搗き　歳の市　大晦日
（2）一　月……847
元旦　三箇日　年始まわり　南川崎の薬出し　仕事始め　四日　七草　蔵開き　鍬入れ　臼起し　めーだま餅　削り花　小豆粥　藪入り　弓ぶち　二十日焦し　恵比須講　初卯　初辰
3　春と夏の行事……852
（1）二　月……853
二月正月　節分　初午　初巳　八日節供　天満宮の祭礼
（2）三　月……855
雛祭り　氷川神社の祭礼　春の彼岸　大般若経　火渡り
（3）四　月……856
灌仏会　太子講　三峰講　観音講　蛇捩り　苗間作り　千地蔵
（4）五　月……857
三峰様　菖蒲湯　五月節供　田植え
（5）六　月……858
早苗振り　辻切り
（6）七　月……859
浅間様　大瀬の獅子舞い　虫追い　百万遍　天王様　二丁目の獅子舞い　祈祷獅子
4　盆の行事……863
釜の口　高灯籠　盆棚詣り　七夕　墓掃除　盆棚作り　迎え火　仏の遊ばせ　棚経　高野の施餓鬼　送り火　施餓鬼　盂蘭盆
5　秋と冬の行事
（1）九　月……870
八朔　十五夜　秋の彼岸
（2）十　月……871
十三夜　日待講と秋祭り　荒神　鎌祓い
（3）十一月
大師講　酉の日　恵比須講　荒神
（4）十二月……874
八日　針供養　鞴祭り　冬至　大晦日
第四章　言語生活
第一節　民俗芸能
概　説……882
1　芸　能
（1）競　技……884
競技　相撲　弓ぶち　自転車競争　草競馬　ゲートボール
（2）門付芸と諸芸……889
門付芸　太神楽　田舎芝居　祭り囃子
2　民謡と万作
（1）民　謡……899
民謡　市域の民謡　祝い唄　祭り唄　行事唄　作業唄
（2）万　作……927
万作　呼称　分布　伝承方法　踊り場と組織　道具・衣裳　曲目　小念仏　歌詞と旋律
3　念　仏
（1）念　仏……953
講員　楽器と法具
（2）月次念仏……954
（3）弔い念仏……958
（4）家見念仏……963

（5）その他の念仏……968
第二節　伝説と昔話
概　　説……974
1　伝　説
（1）自然伝説……976
狐　狢　狸　河童　蛇
（2）歴史伝説……984
鶴ケ曽根　馬場　若柳　こうてんぼう　浮塚　鶴塚　三角山　とうかん台　釜場　関屋　八反野　二塚耕地　四軒屋耕地　御成道　蛇橋　行屋敷　白山店　喜内　鶴塚　新地　狢圦　鷹狩り　山王様の獅子頭　花又の獅子頭　二丁目の獅子　八幡神社の御輿　大瀬の半五郎
（3）信仰伝説……991
稲荷様　山王様　水神様　白尊様　白山様　権現様　伊勢野の神明様　松之木の観音様　小作田の不動様　大曽根の満蔵寺　普門院の弁天様　福蔵院の大師様　はなかけ地蔵　提灯お化け　人魂　大男と小男　婆池　念仏橋
2　昔　話
（1）完形昔話……997
桃太郎　子育て幽霊　狐女房　女房　まま子話　弘法風呂　食わず女房
（2）派生昔話……999
尾長鳥の鳴き声　猿蟹合戦　菖蒲湯の由来　八百比丘尼
第三節　童戯と童唄
概　　説……1003
1　童　戯
（1）子供と童戯……1006
（2）子供の成長と童戯の種類……1007
童戯の分類　口遊び　軒遊び　外遊び　辻技　児童演技
（3）石拳と玩具……1014
童戯と玩具　玩具を使わない童戯　石拳の歴史　石拳の掛け声　玩具を使う童戯　手作りの玩具
（4）季節の変化と童戯の内容……1022
季節と童戯　春の童戯　夏の童戯　秋の童戯　冬の童戯　草花童戯
2　童　　唄
（1）市域の童唄……1040
（2）遊戯唄……1041
手毬唄　ナッコ唄　細螺唄　羽根突き唄　縄とび唄　輪遊び唄　鬼遊び唄　子取り遊び唄　関所遊び唄　物真似遊び唄　押合い唄　手合せ唄　手・指遊び唄　顔遊び唄　呪い唄　絵かき唄
（3）子守唄……1071
眠らせ唄　守っ子唄　遊ばせ唄
（4）天体・気象の唄……1074
（5）動植物の唄……1076
第四節　方　　言
概　　説……1080
1　八潮市の方言調査小史……1082
2　八潮市方言の特徴……1084
（1）音　韻（母音・子音）……1084
（2）分　法……1086
動詞　形容詞　助動詞　助詞
（3）アクセント……1093
二音節名詞　三音節名詞
3　八潮市方言の分布……1098
すりばち　いなずま・いなびかり　かまきり　おてだま　つらら　まゆげ
・生活年表
・索　　引
・『八潮市史　民俗編』執筆者
・八潮の民俗調査協力者氏名
・あとがき
・八潮市史編さん関係者氏名
昭和60年9月30日発行
八潮市役所

050『吉田町史』
昭和57年3月

目　　次（抜粋）
三　文化財と行事……970
1　文化財……970
2　民俗と年中行事
（1）年中行事……980
（2）祭りと信仰……1064
吉田町史年表……1105
町史編纂関係者名簿……1143
あとがき……1144
昭和57年3月31日発行
吉田町

051『与野市史』民俗編
昭和55年3月

目　　次
一　総　　観……1
二　社会生活
（一）町村合併……17
（二）村内・町内の区分……19
（1）字
（2）上と下
（三）近隣組織……21
（1）クミ
（2）近所
（3）隣組
（四）共同作業……24
（1）モヤイ仕事
（2）火の番
（五）地主小作関係……27
（六）年齢集団
（1）青年会と青年団
（2）ワカイシ……29
（3）子供の集まり……33
三　生産・盛業
（一）概　　況……37
（二）水田耕作……38
（1）摘田の概要……40
（2）栽培技術……41
（三）畑　　作
（1）麦栽培……52
（2）甘藷栽培……60
（四）養　　蚕
（1）掃立て……65
（2）育　成……66
（3）上　簇……67
（五）農耕儀礼
（1）予祝儀礼……69
（2）田植え・田摘みの儀礼……71
（3）収穫儀礼……72
四　交通・交易
（一）与野の市
（1）市の歴史と概要……73
（2）穀　　市……76
（3）暮れの市……80
（4）その他の市
（5）市神様……84
（二）消費生活
（1）自給の品……85
（2）商店と職人……87
（3）行　　商……93
（三）道路と道普請……95
（四）運　　搬
（1）運搬具……104
（2）運送業者……107
（五）商店と奉公人……110
五　衣・食・住
（一）服　　飾
（1）衣　　料……113
（2）服　　物……114
（3）服　　装……125
（4）結　　髪……129
（5）洗　　濯……130
（二）食　　事

（1）主　　食……132
（2）粉　　食……134
（3）副　　食……136
（4）漬物と干物……138
（5）間食品
（6）調味料……139
（7）嗜好品
（8）弁　当……142
（9）毎日の食事……143
（10）祝儀・不祝儀・物日の食事……145
（三）住　　居
（1）屋敷構え……149
（2）母屋の間取りと使い方……155
（3）建築工程と儀礼……171
六　信　　仰……176
（一）村の神
（1）大戸・氷川神社……178
（2）八王子・浅間神社……181
（3）上落合・神明社……183
（二）屋敷内の神
（1）屋敷神……185
（2）井戸神・便所神……189
（三）家内の神
（1）神　棚（大神宮様）……190
（2）荒　神……192
（四）講集団
（1）村の講……195
（2）代参講……201
（五）信仰の諸相……206
（1）大戸のオヒジリサマ……207
（2）本町の市神……208
（3）円阿弥の雷神信仰とフセギ……209
（4）サイモンヨミ……210
（5）馬頭観音・薬師・カナヤマサマ……211
七　人生儀礼
（一）誕生まで
（1）帯祝い……213
（2）妊娠中の禁忌
（3）産婆
（4）出産・214
（5）出産後の忌……215
（6）産婦の食事……216
（二）生児儀礼
（1）お七夜……216
（2）宮参り……217
（3）孫抱き
（4）お食い初め……218
（5）初節供
（6）帯解き……219
（三）婚姻と婚礼
（1）自由恋愛と見合い……220
（2）通婚圏と縁組の良し悪し……220
（3）仲　人……221
（4）結　納……222
（5）道具送り
（6）出祝儀……224
（7）本祝儀……226
（8）里帰り
（9）村回り……229
（10）足入れ……230
（四）厄　　年……230
（五）葬　　送……230
（1）死にづかい
（2）トコトリ
（3）北枕……231
（4）湯灌と納棺……232
（5）祭　壇
（6）通　夜……233
（7）出　棺……234
（8）葬　列……235
（9）埋　葬
（10）墓　地……238
（11）忌中・忌明け……239
（12）新　盆
（13）年　忌……241
（14）川施餓鬼
（15）産褥の死……241
（16）その他の習俗……242
八　年中行事
（一）正月の準備
（1）すす払い
（2）餅つき……244
（3）松飾り・注連飾り……245
（4）大晦日……246
（二）正月の行事
（1）大正月……247
（2）大盤振舞い
（3）仕事始め……252
（4）七　夕
（5）蔵開き……253
（6）小正月……254
（三）春から夏の行事
（1）恵比須講……257
（2）節　　分……259
（3）八日節供……262
（4）妙行寺金比羅堂のダルマ市……262
（5）上寺の観音様
（6）初　午……264
（7）春彼岸
（8）雛祭り
（9）灌仏会……265
（10）男の節供
（11）天王様の祭り……266
（12）与野の夏祭り……267
（四）盆の行事
（1）七　夕……271
（2）盆……276
（五）秋から冬の行事
（1）十五夜……285
（2）十三夜と日待ち……286
（3）十日夜……287
（4）恵比須講……288
（5）大師様とカビタリ
（6）冬至……288
九　芸　　能
（一）円阿弥の万作……291
（1）由来・伝承……292
（2）万作を上演する時期……296
（3）役割・組織……298
（4）場所・施設……304
（5）万作道具……306
（6）演　　目……316
（7）万作の台本……320
（二）大戸の神楽
（1）由来・伝承……347
（2）奉納時期と場所……352
（3）曲　　目……354
（4）舞の基本型……358
（5）神楽・面・採物・服装……359
（6）神楽の筋書き……367
（7）神楽と面芝居……386
（三）祭りばやし
（1）大戸の祭りばやし……393
（2）麗和会はやし連……395
十　伝説・昔話
（1）疫神にとりつかれて死んだ少女……398
（2）二度栗山と弘法大師……400
（3）源頼義の奥州征伐と笠守さま……402
（4）与野の大カヤと金比羅天……405
（5）黄金塚
（6）鷹狩りと弓の名人……407
（7）長伝寺の水飲み竜……409
（8）おしどり寺……415
（9）お化け地蔵……417
（10）鮮血に染まった送り地蔵……420
（11）夜泣き直しのお稲荷さま……422

(12) 諏訪坂の一つ目大入道……424
(13) 傘　松……427
(14) 災難を知らせた長伝寺の普光観智国師像 428
(15) 普門院のいたずら禅師画像……432
(16) 天狗隠し……434
(17) あみだ様とへび……435
(18) ご神木のたたり……438
(19) 猫橋のいわれ……440
(20) 海中から出現した釈迦来像……443
十一　歌　謡……445
十二　方　言……455
あとがき……477
伝承者・調査先一覧……478
執筆分担……480
市史編さん関係者名簿……481
昭和55年3月31日発行
与野市長　白鳥　三郎

052『寄居町の民俗』町史編纂調査報告第八集
昭和57年3月

目　次

民俗調査にあたって……1
第一章　村の民俗
一　衣食住……3
1　衣
(1) 織……3
(2) 服　装
(3) 通過儀礼と衣装……4
2　食
(1) 日常の食事……5
(2) 通過儀礼と食事
(3) 年中行事と食事・7
3　住
(1) 屋根構え……9
(2) 母屋と生活……10
(3) 建築儀礼……15
(4) 屋根葺き……16
二　年中行事……(割愛) 17
三　人の人生
1　出　産……17
2　生児儀礼……19
3　葬　送……21
四　生産・生業
1　稲　作……27
2　畑　作
(1) 麦　作……29
(2) さまざまな畑作物……31
3　養　蚕……33
4　山仕事……37
5　生産・生業用具……38
6　山居の紙漉き
(1) 紙の種類
(2) 紙屋の生活……54
(3) 原料と処理……55
(4) 紙漉きの工程……56
(5) 出　荷……58
(6) 紙漉きと新井家……59
(7) カシキ屋……60
(8) 紙漉きの家と用具……62
五　社会生活
1　村の内部構成……73
2　村の役職
3　講……75
4　共有財産・共同労働等……76
5　互助慣行
6　氏子組織・寺檀組織……77
7　家　族……78
8　親　族……80
六　信　仰
1　寺　社……81
2　その他の神や仏たち……82
3　祭り……83
4　講……84
5　釜山神社
(1) 釜伏峠への道……86
(2) いにしえの釜伏峠……87
(3) 釜山神社の成立まで……88
(4) 釜山神社の祭りと行事……90
(5) 釜伏の神楽……92
第二章　町場の民俗……94
一　町並と商家
1　町並とその変遷
(1) 明治のころの町並……94
(2) 町の地割り……95
(3) 明治35年の町並と現在との比較……96
(4) 町の通り……100
(5) 明治時代の絵図にみる商店今昔……101
2　商　家
(1) 商家の間取り……102
(2)「幡知屋」と「十一屋」……104
3　町のうつり変わり……108
二　商人のくらし
1　店と行商……109
2　商家の民具と暮らし……113
3　商人の信仰……115
三　職人のくらし……116
1　大　工……117
2　石　屋……118
3　鍛冶屋……119
4　籠　屋……120
四　祭りと信仰
1　祭　り……121
2　市と市神……126
3　祠堂と石仏……127
4　屋敷神……133
5　講……135
(1) 遠隔地信仰……135
(2) 職人の講……137
(3) 地縁的講
(4) 現代の講……138
6　俗　信……138
第三章　川と生活
一　荒川の筏流し……140
1　折原村の筏継宿黒瀬家……141
2　黒瀬平八郎氏よりの聞き書き……141
二　荒川の渡し場……146
三　川の習俗
1　荒川の水車……148
2　沢と井戸……152
3　水と信仰……154
四　漁　撈
1　荒川の漁撈
(1) 前期における状況……155
(2) 中期の状況
(3) 後期の状況……160
(4) 特記事項……161
2　鵜飼い
3　沼と沢の漁法……163
編集後記……165
昭和57年3月30日発行
寄居町教育委員会

053『年中行事』　りょうがみ双書1
昭和61年3月

目　次

正月の準備……1
正　月……8
七　草……14
カダテ（鍬立て）・蔵開き……16
小正月……22
山の神……42
恵比須講……44
天神様・天神待……46
節　分……54
初　午……58

針　供　養……59
彼　　岸……62
雛　祭　り……66
八十八夜……76
端午の節供……79
花　祭　り……86
六月一日の行事……89
初寅の日……92
土用丑の日……94
天　王　様……96
農　休　み……105
釜の口あき……108
七　　夕……110
盆　行　事……112
八朔の節供……126
十　五　夜……128
十　三　夜……131
おくんち（長陽節）……132
とうかんや（十日夜）……137
川っ浸り餅……146
冬　　至……148
昭和61年3月30日発行
両神村役場

『祭りと芸能』　りょうかみ双書2
63年2月
目　　次
法養寺薬師尊の縁日……1
下大胡桃の虚空蔵様……5
山田大久保の道陸神焼き……8
常木の念仏……16
沼里の馬頭観音様……18
川塩の馬頭観音様……22
出原の天気占い……26
常木駒形神明の祭礼……34
浦島の念仏……38
下和田の春祭りと天王様……43
小沢口のお天狗様……46
柏沢太々神楽……50
加明地の金比羅様……60
乳不動尊の縁日……63
煤川の獅子舞……66
両神山の開山式（山開き）……72
両神神社の大祭……80
二夜様（廿二夜様）・産泰様……86
塩沢の稲荷様（宇賀神社）の祭り……91
金剛院のお祭り……96
加明地の天王焼き……100
間庭の甘酒祭り……104
雨ごい……110
大塩野の天王様……117
西平の天王様（ネジ作り）……121
柏沢のちんじんめえり……125
竹平の獅子舞……136
御霊神社の奉納歌舞伎……149
御霊神社大祭……156
小森のお諏訪様……161
ふるさとまつり……165
ぜんき様（前鬼様）……171
昭和63年2月22日発行
両神村役場

『両神山』　りょうかみ双書3
平成2年1月
目　　次
はじめに……7
第一章　自　　然
一　位置と範囲……10
二　地　　質……12
三　地　　形（山系／水系）……15
四　気　　候（気候／降水量／積雪）……18
五　生　　物（動物／植物）……21
第二章　登山道と地名
一　登山道……28
表口・日向大谷コース・浦島コース・七滝沢コース／北口・尾の内沢コース・八丁峠コース／南口・白井差コース・石舟沢コース・梵天尾根コース／西口・落合橋コース／その他のコース
二　地　名……48
『新編武蔵風土記稿』の地名／尾根・ピーク／岩・穴／峠・鞍部／平・坂／窪・堀／湧水／滝／他
第三章　山岳信仰……58
原始・古代／修験のおこり／龍頭神社の縁起／中世／近世・観蔵院・金剛院・三峰山観音院の影響・龍頭神社／近代・現代
一　両神神社（観蔵院）……75
当山派の修験寺院・観蔵院／本山との関係／観蔵院（鈴木家）文書／御眷属信仰／観蔵院の修験僧／講の活動／最後の修験者／八日見神社の眷属貸出／両神神社の奉納額
二　御嶽神社（金剛院）……94
金剛院と本山派修験／聖護院御教書および金剛院過去帳／御岳山開闢記／金剛院・観蔵院議定書／登山道／神仏分離／講中／修験者の行と祈祷／年中行事・その他
三　龍頭神社……108
八日見山の由来／神社縁起／祭り／山開き／氏子・講中／信仰／神職・高野家／奉納物／禁忌
四　石神・石仏・石碑……120
第四章　伝説と登山史
一　伝　　説……146
弘法様／ジンペンサマ（神変様）／景行天皇と日本武尊／ヤマイヌ（山犬）／一位ケタワの由来／天狗の話／腰越の滝の主／地蔵様のたたり／武田氏の金山開発／甲源一刀流
二　登山史……158
平賀源内／牧野富太郎／鮫島重男／徳川義親／岡松生／原全教／皇太子殿下／第22回埼玉国体
第五章　民間知識
一　民間医療……170
二　予　　兆
三　禁　　忌……171
第六章　御巣鷹山と秩父日記
一　両神山の御巣鷹山……174
山中家文書と御巣鷹山／御巣鷹山「出北・丸山」／日向大谷の鷹見衆／鷹の巣懸けと巣卸し／御鷹上納／境目争論／御巣鷹山の場所替え
二　秩父日記と両神山……181
旅程／両神山の図／文中の両神山と薄村
平成2年1月8日発行
両神村役場

『昔がたり』　りょうかみ双書4
平成3年3月
目　　次
［寺・神社と信仰の話］
1　小沢口の念仏橋……1
2　田んぼかきをした虚空蔵様……3
3　御霊神社と鍛冶屋……7
4　長又傘松地蔵……9
5　丹生様と犬……12
6　竹内いしの話……14
7　おいし地蔵……18
8　大円寺と赤いフクジュソウ……21
9　大円寺は秩父三円寺の一つ……24
10　善光寺と悪人……26
11　串脇の山王様……29
12　魚を取り返した山の神……31
13　宝泉寺に奉納された木鉢……33
14　熱田神社の大杉……35
15　秋葉神社の獅子舞……37
16　六葉の六地蔵……39
17　大堤のお諏訪様と四阿屋山の天狗様……41
18　中尾の薬師様と目薬……43
19　病気とまじない……46
［四阿屋山の話］

20　弘法の井戸……48
21　弘法様と山居の娘……52
22　弘法様とキンタマイモ……56
23　弘法様が山居で彫った仏像……59
24　山居を逃げた薬師様と地名……61
25　四阿屋山のヤマンバ……63
26　市蔵と四阿屋山のまもの……66
27　柏沢の秋祭りとお天狗様……69
28　四阿屋山の大カワウソ……72
[キツネとオオカミの話]
29　黒海土の猟師とキツネ……74
30　キツネにつかれた黒海土の男……76
31　延命寺のオオカミ……78
32　音明山のキツネ……80
33　四阿屋山の白キツネ……83
34　榧の木峠のキツネ火……87
35　キツネったかりとオオサキったかり……89
36　キツネつきとまんじゅう売り……92
[武将と落人の話]
37　小沢口の小沢左近……96
38　信玄のかくし湯……99
39　五合峠（権五郎峠）で死んだ馬……101
40　穴部と将軍地蔵……103
41　多比良将監とイノシシ……105
42　藤指の楠氏……108
43　道明塚……110
44　川塩に土着した猪俣氏……113
[オバケと不思議な話]
45　子供たちがつかまえた人魂……116
46　場違戸のオバケ……118
47　出原のこうせんまんじゅうと大蛇……123
48　食わず女房……125
49　薬師堂の白ヘビ……127
50　神出の巳の宮様……130
51　西沢の小豆よなげと薬罐ころがし……132
52　川塩のオバタケ……134
54　度胸のいい男……138
55　親不孝な娘と赤い鳥……141
56　カアキット……143
[人にまつわる話]
57　栄太郎さんと岩楚里道……145
58　塩沢の力士・山砲山……148
59　加明寺の孝子・豊五郎……150
60　正禅という旅の僧……152
61　桜本のえみや（延命屋）……155
[地名等の話]
62　小沢口の米高石……157
63　黒海土河原のババァ淵……159
64　美女ケ平の由来……161
65　浦島太郎の話……164
66　若森座と一二間の舞台……167
[騒動の話]
67　出原のケヤキ騒動……168
68　野沢騒動……170
[自然現象に関する話]
69　煤川の山津波……172
70　飢きんと白井指のカヤの木……174
[昔　話]
71　コブ取りじじいの話……176
72　花咲かじじい……179
73　サルの嫁……182
74　猿蟹合戦……184
75　カチカチ山……186
76　舌切りスズメ……188

平成3年3月1日発行
両神村役場

054『和光市史』　民俗編
昭和58年3月

目　　次

第一編　生活と地域
第一章　家
第一節　屋敷と家
1　家の姿……1
2　屋敷構えと付属屋……10
3　間取り……21
4　商家と旅籠……35
5　建築儀礼……37
第二節　家と家族
1　家族構成……41
2　家族の展開……48
3　相続と継承……55
4　養子と婿養子……65
第三節　家族生活と居住空間
1　家族の役割……68
2　農作業と住生活……75
3　食事・だんらん・就寝と住生活……81
4　日常と非日常の住生活……88
第四節　親族と交際
1　親族の範囲と名称……93
2　本家と分家……100
3　親類と交際の諸相……117
4　親族名称と呼称……137
第二章　村
第一節　村の姿
1　集落と村……141
2　村の領域……146
第二節　村の組織と運営
1　村と村人……152
2　村の仕組み……161
3　村の共有と共同……169
4　子供と青年……177
第三節　近隣組織と生活互助
1　村　組……186
2　近隣組……192
3　両隣と近所……197
第四節　水田と水
1　水田と稲作……202
2　水田の灌漑……210
第五節　畑と林
1　畑と畑作……229
2　山の利用……237
3　川と生活……239
第三章　町と世間
第一節　道と街道
1　生活の中の道路……243
2　道と世間……248
第二節　村を訪れる人々
1　旅芸人と旅の宗教者……259
2　行商人と職人の活動……262
第三節　白子宿と新倉河岸
1　白子宿……265
2　新倉河岸……274
第四節　江戸・東京との交流
1　野菜の出荷……280
2　肥料の入手……286
3　白子囃子……289
4　白子丸瀧講……292
5　近隣町村との交流……294
第五節　旅の世界
1　代参と旅……296
2　遠隔地の寺社めぐり……302
3　入湯道中……313
第二編　生活と時間
第一章　一日の生活
第一節　農家の朝
1　一日のはじまり……315
2　主食と副食……315
3　家族たちの朝……321
4　食事とその後……321
第二節　のら仕事と茶受け
1　仕事用の着物……324
2　畑での作業……327
3　茶うけ……332
第三節　昼食と午後の生活
1　昼の食事……336

2　午後の仕事……337
3　仕事の上がり……338
第四節　夕食と夜の仕事・夜の時間
1　夕　　食……341
2　夜なべ仕事……348
3　夜の時間……349
第五節　機織り・染め物・裁縫
1　機織り……353
2　染め物……354
3　裁　縫……355
第六節　商人の一日……356
第二章　一年の生活
第一節　年中行事と暦
1　ハレとケ……368
2　暦……369
第二節　正月の生活
1　正月の準備……372
2　大正月の行事……381
3　小正月の行事……386
第三節　春から夏の生活
1　節分から彼岸まで……389
2　種子まきまでの農作業……396
3　花祭りから五月節供まで……397
4　田植と麦刈り……399
第四節　盆の生活
1　盆供と七夕……402
2　盆の行事……403
第五節　秋から冬の生活
1　八朔から亥の子まで……408
2　麦まきと稲刈り……410
3　荒神様から冬至まで……413
第三章　人の一生
第一節　婚　　姻
1　見合いと結納……418
2　嫁迎えと御祝儀……428
3　後座敷と里帰り……440
第二節　出　　産
1　妊娠と帯祝い……444
2　産褥と里からの見舞い……455
第三節　子供の成長
1　育児と成長……466
2　遊びとしつけ……487
第四節　年祝い
1　厄年と長寿の祝い……502
第五節　葬　　送
1　臨終と野辺送り……505
2　忌明けと年回忌……525
第三編　生活と心意
第一章　家と神仏
第一節　家の神々
1　屋内の神々……533
2　屋敷の神々……549
第二節　先祖と仏
1　仏壇と墓地……564
2　家と家例……577
第二小　村と神仏
第一節　村の小祠
1　小祠の特色……581
2　水の信仰と小祠……583
3　地蔵の信仰と小祠……588
4　稲荷の信仰と小祠……590
5　代参と小祠……593
第二節　講と代参
1　講の特色……596
2　念仏講……597
3　題目講……601
4　連経講（観音経）……602
5　庚申講……605
6　代参講……611
7　富士講……612
8　武州御嶽講……619
9　大山講と榛名講……622
10　木曽御嶽講……625
第三節　吹上観音
1　縁　　起……626
2　開張と市・嫁市……631
3　吹上観音の霊験と信仰……635
4　ささら獅子舞……637
第四節　神社とその祭祀
1　市内の神社……648
2　氏神祭祀と人々の信仰生活……660
第五節　寺院とその機能
1　新倉の寺院……667
2　下新倉の寺院……671
3　白子の寺院……679
4　寺とその種類……688
5　寺とその縁起……692
第六節　俗　　信
1　俗信とは……700
2　予　　兆……702
3　ト　　占……703
4　禁　　忌……704
5　呪　　術……708
6　民間療法……709
第三章　伝説と昔話
第一節　伝　　説……711
第二節　川越地方昔話集の世界
1　『川越地方昔話集』……730
2　市域の昔話……732
付録　石塔・石仏
和光の石塔・石仏……741
一　庚申塔……753
二　地蔵菩薩……779
三　馬頭観世音……792
四　念仏・日待・月待供養塔……803
五　各種供養塔……807
六　富士講碑……821
あとがき
執筆分担一覧・調査参加者氏名
市史編さん関係者氏名
和光市全図
昭和58年3月30日発行
和光市

055『蕨市史』　民俗編
平成6年2月

目　　次

第一章　社会構成
第一節　蕨市の生活環境
1　歴史的概況……3
旧蕨宿と塚越村　生業と人口の変遷
2　地理的概況……9
地形と集落の立地　近・現代における生業の変遷　災害史　字名と地域名
第二節　ムラのつきあい・マチのつきあい……21
1　近隣集団……22
いわゆる村入り　共同体の運営　共同作業・労力交換・休み日　クミアイのつきあい
2　諸集団……30
若衆の組織　青年団・処女会　消防団　無尽講　ムラとマチの交流
第三節　ムラからマチへ
1　新しいマチの形成……40
新しいマチの形成と都市化による地域生活の再編　伝統的地域の変化
2　町内会の結成……44
3　マチづくりと行政……49
町内会の活動　市民葬
第四節　家族と親族
1　家族の生活……54
家族構成　家の経済的基盤　家族員の名称・呼称　家族員の地位　家族員の役割分担　奉公人　イエ観念
2　家の継承と分出……62
相続　両養子　分家　隠居　奉公人の分出　廃絶家再興　徴兵逃れの分家・婿入り

3　親族慣行……67
イッケ　ミウチとシンルイ　地所親類
4　仮親慣行……72
第二章　人生儀礼
第一節　産　育
1　妊　娠……77
妊娠　帯祝い　妊娠中の禁忌・俗信　安産祈願
2　出　産……82
出産の場所・方法　胎盤と産湯の始末　夫の役割　産婦の死　出産後の生活の俗信　産婆
3　誕生儀礼……89
産立て飯　ミツメ　お七夜　命名　お宮参り　食い初め　初正月・初節供　誕生祝い　誕生と俗信
4　成長祝いと民間療法……98
七五三（帯解き）　三歳・五歳・七歳の祝い　引き摺り餅　成人の祝い　子育ての俗信・民間療法
5　社会事情と産育……105
伝染病の流行　乳幼児保護　母子衛生　妊産婦保護
第二節　婚姻習俗
1　配偶者の選択……114
夜遊びと男女交際　配偶者の選択　結婚年齢　通婚圏　仲人　見合い　結納
2　ご祝儀……119
祝儀の時期と日取り　嫁入り道具の送り　新客立ち振る舞い　嫁入り行列　中宿　入家式　盃事　披露宴　高盛り　近所披露
3　婚姻後の嫁の生活……124
元服　ミツメ　髪洗い　新客　里帰り　嫁の生活
4　婚姻の諸相……125
入り婿　足入れ　近親婚ほか　離婚・再婚
第三節　葬送儀礼
1　死から通夜の前まで……127
総称　死の前兆　助命・延命の祈願　臨終　理想的な死　死の忌み　枕返し　死の知らせ　枕団子と枕飯　葬儀の準備と手伝い　悔やみと帳場　弔いの日取り　死に使い　早桶　七本仏ほか　野道具　掛け無垢ほか　床番　穴掘り
2　湯灌から埋葬まで……135
湯灌　死に装束　納棺　通夜　弔い　出棺　庭弔い　野辺の送り　喪服　埋葬　清め　本膳　念仏
3　供養・年忌ほか……139
四十九日までの供養　四十九日　位牌　形見分け　百カ日　年忌　新盆　彼岸　墓地　特殊な死　弔いの変化
第三章　生　業
第一節　農　業
1　市域の農業とその推移……147
史料にみる蕨の農業　市域の農業の現状
2　耕地と土地利用……152
耕地と土質　ノガタとサト
3　稲作と畑作
（1）用水（水争い）……156
（2）稲　作……159
田の耕作　播種　田植え　田の管理　雨乞い　収穫・脱穀・調整など
（3）ハス・クワイ……167
（4）畑　作……169
市域の畑作　畑作物の変遷　麦作　畑の農具
4　その他の仕事
（1）養　蚕など（養蚕　木綿）……172
（2）パイスケ作り……174
パイスケの伝来　材料　製品　制作　職人・経営　信仰と年中行事
第二節　機物業
1　機物業の変遷……182
2　織物の生産流通組織……185
3　蕨の織物業と他地域との関係……187
4　機織りの用具・糸など
（1）用　具……189
フワリ（符割）　ザクリ（座繰り）　コワク（小枠）　ヘダイ（経台）　メハジキ（溜眼）　整経機　マキボウ（巻き棒）　アラオサ（粗筬・荒筬）ハタクサ　マキダイ　アヤ　アヤトウシ（綾通し）　オサ（筬）　オサトオシ（筬通し）　チマキ（千巻き）　クダ（管）　クダマキキ（管巻き器）　高機　ナゲビ（投げ杼）　バッタン　マキイタ（巻き板）
（2）糸……192
5　機織り……193
6　機屋のくらし
（1）機家の一日（朝　昼　おやつ　夜）・199
（2）機屋の人々の仕事と暮らし……201
だんなの仕事　おかみさんの仕事　子供の仕事女工の仕事とくらし　おさんどんの仕事　男工の仕事　作男の仕事
（3）機屋の休日……209
（4）機屋の衣・食・住……211
（5）機屋の信仰……214
7　蕨町で生産された織物……215
双子織　綿縮　綿紹　黒八　帯地
8　織物の流通
（1）買継の仕事……218
市日の仕事　市間の仕事
（2）買継屋の人々の仕事とくらし……222
だんなの仕事　おかみさんの仕事　跡継ぎの仕事　小僧・番頭の仕事　女中の仕事　買継の服装
第三節　染色業……225
1　藍染めの用具・原料など……226
用具　アイダマ（藍玉）　石灰と洗いソーダ　インジコ・ピーア　スマ　スクモ　藁縄
2　藍による糸染め
（1）日本藍だけの藍建て……227
（2）日本藍とインジコ・ピーアヲを使う藍建て・
（3）藍の液の管理……229
（4）糸染め……230
3　紺屋の人々の仕事とくらし……232
主人の仕事　おかみさんの仕事　子供の仕事　小僧の仕事　紺屋の職人　渡り職人　紺屋の信仰
4　染工場の仕事……233
用具　染料　染め方
第四節　織物関連業
1　機道具屋……237
高機　足踏み織機　バッタン　矢羽根の道具　ヨロケの筬　座繰り　筬屋　ツムカジヤ　綾糸屋　撚り糸屋　管屋　紋切り屋
2　糸　屋……242
市日の士ごと　市間の士ごと　毎日の仕事　初市の日の仕事　取り扱った糸の種類　取引のあった機屋
3　そのほかの関連業……244
整理屋　クケヤ　染料屋　運送屋　お針さん　桂庵
第五節　交通・交易
1　道　路……248
鎌倉街道　もとの中山道　中山道　文蔵道　早瀬道　美女木道　新曽道　主要地　方道朝霞蕨線　停車場道　鳩ヶ谷道　善光寺道　下青木道
2　橋……254
松葉橋　一六橋　境橋
3　行　商……255
ヨカヨカ飴屋　煮豆売り　ザル屋　カンピョウ売り　座敷ボウキ売り　富山の薬売り　ドッケシ売り　本屋　八百屋　アイスクリン売り
4　市
（1）蕨の市……257
六斎市　反物市　おかめ市
（2）近傍の市……258
引又（志木）の市　鳩ヶ谷（鳩ヶ井）の市　吹上観音様の市
5　旅……260
大山参り　幕末の初山　戦前の初山

第四章　衣・食・住
第一節　衣
1　仕事着……269
農家の仕事着　仕事をする人たちの服装　一年間の衣生活　下着
2　晴れ着……280
結婚式の着物　葬式の着物　髪型・化粧
3　子供の服装、機織り・その他……287
子供の服装　機織り　裁縫　寝具　履物
第二節　食
1　食　制……301
職業による食制の違い　食事をさす言葉　農家の食制　機屋の食制　職人・勤め人の食制
2　食事の内容……312
主食　副食・味噌汁　漬物　味噌・醤油・塩　酢・油・砂糖　酒・茶　間食
3　料理の食事の仕方……331
料理の仕方　食事の仕方　食器
4　晴れの日の食……332
モノビの食・ヒトヨセの食　祝いや寄り合いの食　結婚式の食　葬式・法事の食
第三節　住
1　民家と建築儀礼……342
蕨の民家　カマド　地鎮祭　棟上げ式　植木の忌み
2　大石　崇家（中央四丁目）……343
3　奥田總次郎家（錦町六丁目）……344
4　安田辰馬家（南町二丁目）……344
5　渡辺弘之家（錦町三丁目）……345
6　中島康之家（北町二丁目）……346
7　金子榮一家（中央五丁目）……350
第五章　年中行事
第一節　年中行事と暦……375
暦法の変遷　行事の行われる日
第二節　正月準備の行事……378
クネユイ　奉公人の宿入り・出替わり　ススハキ　いかめ市　火の用心　餅つき　餅のいろいろ　賃餅　オソナイ　カマジメ　歳神棚　正月飾り　神の膳・神の椀　門松　御歳暮　大晦日　除夜の鐘・改旦　ミソカッパライ
第三節　正月の行事……395
若水・年男　元旦　雑煮・オセチ料理　三が日　初正月　正月の子供の遊び　正月の門付け　初詣で　旗立て　年始回り・大番　初荷　鍬入れ・仕事始め　出初め式　寺の年始・墓参　タナサガシ　寒の水・寒の粉　卯の日　初寄り　七草　蔵開き　小正月・マユダマ　小豆粥・粥かき棒　稲の花・アーボヘーボ　筒粥・粥占い　ヤブイリ
第四節　春・夏の行事……407
成年式　檀家の寄り合い　上岡の観音様　エビス講　オンタケサン　三学院の初地蔵　題目講　機屋の休日　念仏講　オサンニチ　市日　毎月の寺の行事　御嶽講のオヒマチ　春日社の春祭り　初午・ビシャ講　村寄り合い・若衆入り　神社の初午祭り　節分　八日節供　涅槃会　雛市　三月節供・雛祭り　チヂモチ　彼岸　フセギ　社日参り　田うない正月・野焼き　花祭り・お釈迦様　花見坂東まいり　大師送り　講・参詣　川ざらえ・共同作業　種まき正月　五月節供　オロクショウ・サナブリ　平方の獅子　木綿坊主　麦打ちボタモチ　朝マンジュウに昼ウドン　土用の丑の日　虫追い・虫祭り　榛名の水もらい
第五節　盆の行事……430
盆供　釜の口　新盆の高燈瀧　盆提燈　新盆の配り餅　七夕　仏具磨き・井戸替え　墓掃除　機まいり　盆棚　盆棚への給仕　迎え盆　仏様参り　盆中　送り盆　盆のヤブイリ　施餓鬼　龍體院のお施餓鬼　ウラ盆
第六節　秋・冬の行事……451
八朔・二百十日　十五夜・十三夜　音嶽講　観音堂の縁日　太子堂・薬師堂の縁日　妙顕寺の虫干し・首つぎボタモチ　オヒマチ・神社の秋祭り　荒神の出雲発ち　十日夜　お会式・お天道様　カリアゲ　秋の参詣講　大師粥　フイゴ祭り　七五三・オビトキ　冬至　星祭り　カビタリ
第六章　信　　仰
第一節　神社と寺堂……463
神社の概観　和楽備神社　塚越稲荷社と機神社　春日社・丁張稲荷社など　寺堂の概観　真言宗の寺堂　臨済宗・日蓮宗の寺院
第二節　家の神……487
神札と幣神　家の中の神　屋敷神
第三節　講そのほか
1　講の変遷……500
2　稲荷講……501
3　観音経の講中……502
4　念仏講と題目講……503
5　太子講……506
6　そのほかの講……507
榛名講と雨乞い　木曽御嶽講　大山講　成田講　智栄講　三峯講　第六天講　光生講　古峯ケ原講　富士講　柴又講　岡のお不動さんの講中　戸隠講　猪狩講　伊勢講　文殊様の蕨講中
7　平方のお獅子様……530
8　蕨八幡講……540
9　観音参り・大師送り……541
10　そのほか……542
第四節　俗　　信
1　予　　兆……544
2　ト　　占
3　禁　　忌……551
4　呪　　術……561
5　民間医療……570
第七章　芸　　能
第一節　概　　説……577
第二節　奉納芸
1　祭り囃子……578
丁張・塚越の囃子　塚越おはやし連　法華田・水深の囃子　春日町の囃子　郷の囃子　仲上の囃子　御殿町の囃子　須賀町の囃子
2　里神楽……585
八幡山（神功皇后）　紅葉狩
3　人形芝居……587
第三節　蕨八幡講……590
蕨八幡講の名称　講組織の在り方　稽古　岩城山と蕨八幡講　オシャミ相撲大会　八幡講の活躍　地方巡業　地鎮祭の奉納相撲　歴代の力士たち　興亜連盟発足　橿原神宮相撲大会出場　相撲甚句
第四節　木遣りと梯子乗り……607
第五節　外来芸……612
万歳　飴屋歌　瞽女　太神楽獅子舞　角兵衛獅子
第六節　その他の芸能……615
八木節踊り　茶番劇
第七節　謡　曲……617
第八節　下蕨観音経……621
第九節　念仏講……624
蜜厳流三学院遍照講塚越支部　蜜厳流三学院遍照講　太子堂念仏講　空海東寺流　太子講下蕨支部
第十節　民　謡……630
概況　伝承者　歌詞の記述・譜例作成について
1　祝い歌……631
はつうせ　餅つき唄　トノサ節　相撲甚句
2　祭り踊り歌……636
戸田の盆唄
3　行事歌……640
ミソカッパライ　七草の唄　エビス講の唄　節分の唄　初午の唄　盆迎えの唄　十日夜の唄
4　仕事歌……640
麦打ち唄（ボー様）　機織り唄　馬方節
5　子供歌……648
ジャンケン唄　指遊びの唄　手合わせ唄　腕遊びの唄　きしゃご（おはじき）唄　お手玉唄　まりつき唄　羽根つき唄　縄とび唄　下駄隠しの唄　凧揚げ唄　トンボとりの唄　列遊びの唄　くぐり遊びの唄　人当て輪遊びの唄　鬼ごっこ

の唄　天体気象や動植物の唄　数取り唄　数え唄　絵かき唄　囃し唄　遊ばせ唄　眠らせ唄
6　物売り歌・流行歌など……667
飴売り唄　投げ節　心中節
第十一節　童　　戯……673
子供の年齢区分　地域と仲間　遊びの場所　遊びの種類
1　室内の遊び……680
あやとり　絵文字かき　お手玉（ナッコ）　軍艦遊戯　きしゃご（おはじき）　手合わせ　指遊び　かけごと　カルタ　すごろく　幻灯会
2　屋外の遊び……681
石けり　運動会ごっこ　鬼ごっこ　かくれんぼ　くぐり遊び　下駄かくなし　氷滑り　こままわし　陣取り　戦争ごっこ　団子釣り　手ぬぐい落とし　度胸だめし　十日夜　縄とび　ネッキンボウ　羽根つき　ひっぱりっこ　人当て輪遊び　兵隊ごっこ　まりつき　水泳ぎ　メンチ面遊び　列遊び
3　捕獲採集および製作の遊び……686
エビガニとり　カエル　カッタケとり　タニシとり　ドジョウとり　ざっこつり　ざるかぶせとりもち　ホタルがり　クワガタ・カブト虫とり　セミとり　トンボとり　イナゴとり　バッタとり　コオロギとり　ノビロつみ　セリつみ　モチ草つみ　レンゲつみ　草イチゴ　桑の実とり　イチジク・カキ・ザクロとり　竹馬　竹トンボ　弓
第八章　口承文芸
第一節　昔　　話……693
1　動物昔話……697
十二支の由来　かちかち山　ムリどん　のどを刺した話　雀と燕　猿蟹合戦　兎と亀　蟻とキリギリス
2　本格昔話……703
菖蒲湯由来　一寸法師　桃太郎　花咲じい　舌切り雀　こぶ取りじいさん　継子の話　浦島太郎　鳥も鳴かずば撃たれまい
3　笑　話……711
どっこいしょ　へやのいわれ　鼠の嫁入り　肉付きの面　おば棄て山　親棄て山　和尚と小僧　子供を作る時期
第二節　伝　　説……727
一本杉　要害の物見の松　蛇田（比丘尼田）蛇田　王子稲荷と装束稲荷　牛に引かれて善光寺　庚申様　つるつるてんさん　第六天　荒神様　渋川公夫人と雨乞い　渋川公と雨乞い　渋川公の戦死と奥方の身投げ　渋川公龍神になる　渋川公とソバ畑　渋川公と夫人の入水　渋川公の戦死と夫人の入水　蕨の地名　塚越の地名　丁張の地名　法華田の地名　姥棄て場　元日に餅をつく　節分　お雛様　菖蒲湯　七夕　エビス様　釜が鳴く
第三節　世間話……754
狐の嫁入り　不思議な火　「大深い」　ソバ畑を踏みつぶす　田んぼの周りを歩く　肥溜めに入る　ドジョウを取られる　ウナギを取られる　魚を取られる　中山道の狐をだます　汽車を止めた狐　空き地にお月様　狐に教える　お稲荷さんの狐　狸が尻尾で戸をたたく　烙が尾っぽで戸をたたく　蛇は主　蛇の抜け殻　猫は魔物　化け猫　猫の名前　山繭の着物　アズキトギと火　緑川のアズキババア　青い人魂　白と赤の火　火の玉　家の人には見えない　家の上に出る　お墓のふたを開けた夢　枕元へ立った人　人の気配　雨戸をたたいた　夢知らせ　「まだ早い」と言われて戻る　お地蔵様とお不動様に手を引っ張られる　死体部屋に入れず戻る　お花畑で呼ばれて戻る　北向稲荷　お稲荷さんの祟り　子育地蔵　火伏せの地蔵様　火事を教えた地蔵様　火事の寸前に家人を起こす　人形の話（人形に取りつかれる）　青坊主　三学院の仁王様　平方のお獅子様　米俵三俵ずつ運ぶ　柿泥棒で浴衣をなくす　若い衆の夜遊び　瓜泥棒を謝らせる　若い衆を懲らしめる　人糞を土産と間違える　ケバさん　「ドアのうち」と呼ぶ　志村坂の後押し　笹目稲荷　梅の木稲荷　女相撲　子供を助ける　安政の地震と関東大震災　道普請　戸田の馬鹿っぱやし　泣き虫田んぼ　べえべえ言葉　思案の戸田の橋
協力者一覧
あとがき
蕨市史編さん関係者氏名一覧
平成6年2月4日発行
蕨市

056『上福岡市史』資料編第五巻　民俗
平成9年7月

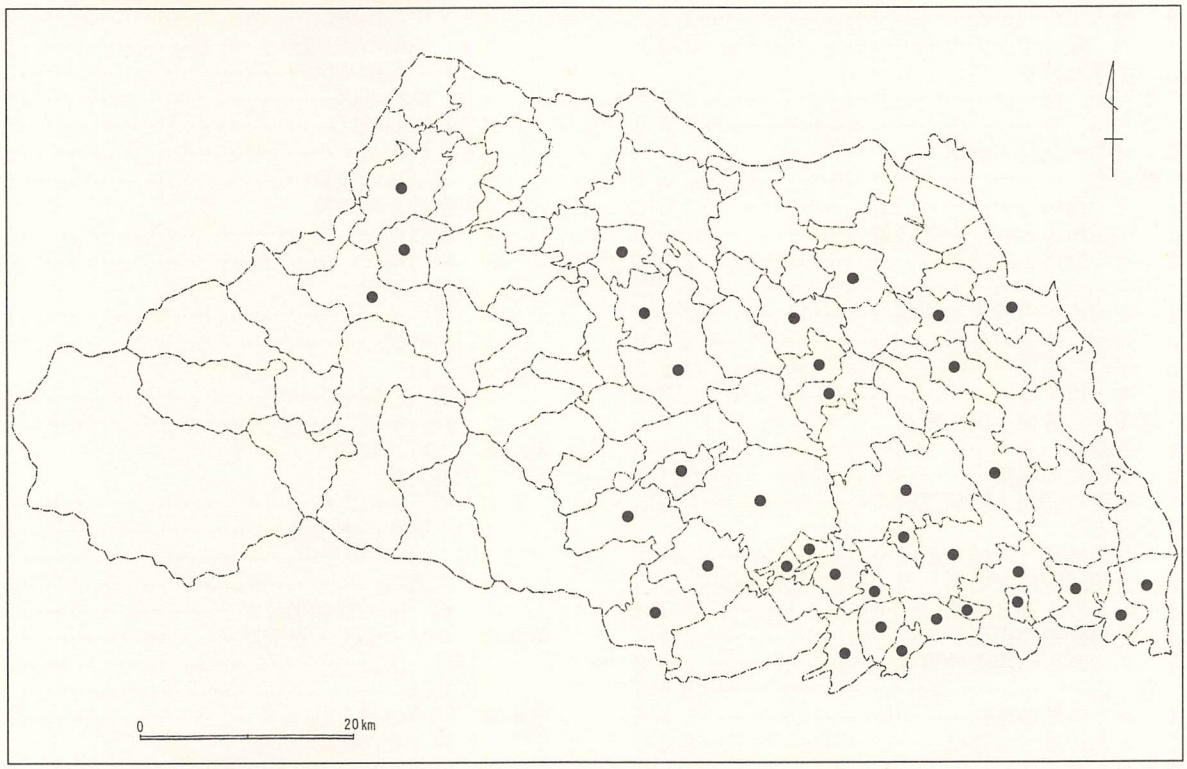
目　次

第一章　上福岡の地域概観……1
一　上福岡の地理と歴史
1　上福岡の地理……1
2　上福岡の歴史……4
二　上福岡の都市化と民俗の変化
1　都市化における民俗変化……12
2　団地・新興住宅地の習俗……17
第二章　ムラと家
一　ムラの社会生活
1　ム　ラ……19
2　ムラの組織と運営……26
3　ムラの活動……37
4　近隣集団……40
二　年齢集団
1　青年集団……46
2　消防集団……53
3　子供集団……59
4　婦人集団……63
5　老人集団……68
三　家と親族
1　ウチ（家）……71
2　家の内部－家に生活する人々……73
3　家の内部－家の継承……77
4　家の日常生活……84
5　親　族……89
四　交　際
1　家の交際……98
2　結婚をめぐる交際……99
3　人の誕生と交際……105
4　人の死と交際……108
5　近年の変化……117
第三章　生産と生業
一　稲作と畑作……121
1　稲　作
（1）耕地の所有と土質・耕地整理……126
（2）稲作の過程……128
2　畑　作
（1）作物の変遷・耕地の所有と土質……147
（2）一日の労働……152
（3）麦作り（大麦・小麦・ビール麦）……152
（4）甘　藷……158
（5）ニンジン……163
（6）ゴボウ……165
（7）陸　稲……168
（8）ホウキモロコシ……169
（9）養　蚕……171
（10）茶……174
（11）その他の作物・家畜……174
（12）畑作物と出荷……177
3　肥　料……178
4　農家で働く人・農耕儀礼・禁忌・農休日……179
二　さまざまな仕事と諸職……182
1　職人の仕事と諸相
（1）市域における職人の歴史……183
（2）職人の系譜……185
（3）さまざまな仕事……187
2　箒　屋……188
3　井戸掘り職人……198
4　屋根屋……203

5　桶　屋……209
6　カゴ屋……214
7　足袋屋……219
8　紙漉き……221
9　船大工……227
10　機　織……246
11　漁撈と狩り
（1）漁　撈……251
（2）狩　り……259
第四章　交通・交易・通信
一　陸の道……261
1　河岸道……262
2　川越街道とムラムラの道……266
3　道の管理と道普請……268
二　川の道……271
1　新河岸川舟運と河岸場……272
2　荷船と船頭の暮らし……279
3　船頭の信仰……297
4　橋と渡し場……303
三　運搬具と運輸手段の変遷
1　運搬具……310
2　車利用の運搬……313
3　鉄道の開通と駅前運送店……323
四　交易と市
1　舟運時代（町場）の店……331
2　上福岡駅前（町場）の店……335
3　ムラのミセと行商……344
4　上福岡青物市場……349
5　その外の市場と仲買人……352
五　通　信……355
1　ムラ内部の連絡……356
2　ムラの外への連絡……356
第五章　衣・食・住
一　衣生活
1　衣生活の変化……359
2　仕事着……361
3　子供着と晴れ着……364
4　衣服の整理・管理……366
5　裁縫・編み物・ウチオリ……369
6　かぶりもの・履物・雨具……372
7　髪型と化粧……375
二　食生活
1　変化した食生活……378
2　食制と飲食器……380
3　毎日の食事……382
4　ハレの日の食事……388
5　調味料・保存食・調理用具……398
三　住生活
1　屋敷と母屋……402
2　カマド・イロリ・暖房……414
3　屋根葺き……416
4　風　呂……417
5　井　戸……418
6　照　明……420
7　建築儀礼……423
第六章　儀　礼
一　年中行事
1　暦と年中行事……427
2　正月行事……429
3　春から夏にかけての行事……437
4　盆行事……440
5　秋から冬にかけての行事……447
6　現在の年中行事……449
二　人の人生
1　産　育……459
2　婚　姻……463
3　葬　送……471
4　現在の人の一生の儀礼……478
第七章　信　仰
一　神社と寺院
1　市域の神社と寺院の概観……483
（1）神　社……484
（2）寺　院……488
2　市域の神社・寺院
（1）滝地区……490
はけ
（2）囗地区……495
（3）中福岡地区……497
（4）福岡新田地区……503
（5）下福岡地区……505
（6）駒林地区……513
（7）川崎地区……520
（8）駅周辺……526
3　天王様の祭り……529
二　屋敷神と屋内神
1　屋敷神……535
2　屋内神……539
三　講と代参講
1　講……550
2　代参講……557
四　祈　願
1　個人祈願……566
2　共同祈願……570
第八章　民俗芸能
一　民俗芸能
1　福寿連の万作……575
2　下福岡の囃子連……583
二　民　謡……584
1　作業唄……585
2　祝い唄・娯楽唄ほか……589
第九章　昔話・伝説・世間話……593
一　昔話・伝説……594
二　世間話……604
第十章　団地の暮らし……615
一　伝統と近代化
1　伝統的社会と「団地の暮らし」……616
2　「団地の暮らし」の読み取り方……617
3　変化する「団地の暮らし」……619
二　「文化住宅」の誕生
1　「団地」の登場……621
2　あこがれの「文化住宅」……625
3　ダイニング・キッチンのある生活……628
三　団地の「生活共同体」
1　生活共同体の芽生え……634
2　“団地族”の力学……637
3　“団地族”の共同体機構……640
四　“団地族”の交際
1　団地集会所の空間……644
2　グラウンドの空間……647
五　「ムラ」から「まち」へ……651
第十一章　吉野とめさん（102歳）の思い出ばなし
一　子どものころ……655
二　婚　姻……657
三　産　育……659
四　葬　送……660
五　衣生活……662
六　食生活……664
七　住生活……665
八　家業について……667
九　思い出……668
参考・引用文献一覧……671
民俗調査話者一覧……673
資料提供者・協力者一覧……675
執筆分担一覧……676
上福岡市史編纂関係者名簿一覧……677
あとがき……678
索　引……巻末

平成9年7月31日発行
上福岡市

県内『民俗編』刊行状況図



おわりに

前回でも今回でも、当該市町村の『民俗編』刊行前のテスト・ラン的な民俗調査報告書の章立て資料の提示は多く行っていない。とりわけ、すでに『民俗編』刊行された事例では、『民俗編』そのものの章立ては紹介したが、それ以前の報告書は行っていない。ただ、『民俗編』が刊行されていない、つまりテスト・ラン最中の報告書は紹介しようと努めてきたのである。

次回では、もう少し市町村で刊行された民俗資料報告書を捜しだして、章立て資料を提示し、経時的に民俗調査報告書の章立ての変遷をたどってみたいと思う。章立てという窓口は明らかに、民俗調査というもののイデオロギーが内包されていると考えている。つぎなる段階での資料提示の後に、『民俗編』の問題点について、自分自身の大いなる反省を込めながら述べてみたいと考えている。

最後のオカノエ講
～行田市大字埼玉百塚中組の庚申講～

田　中　裕　子

1　オカノエは「お茶飲み講」

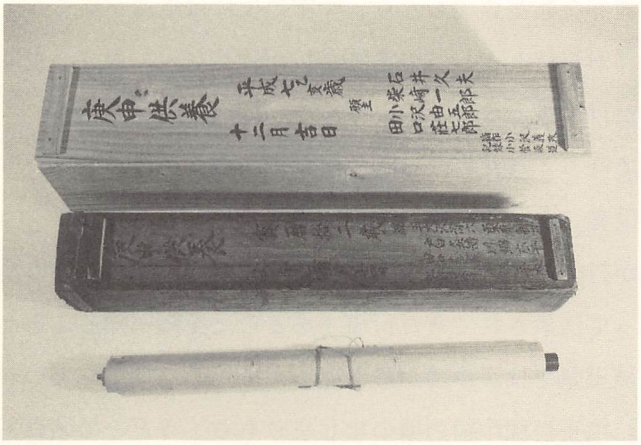
「オカノエ様の掛け軸をもらってくれないか。」という話があったのは、平成７年（1995）の春のことである。「オカノエ様」とは庚申様のこと、つまりは庚申講の掛軸の寄贈申請である。

さきたま風土記の丘にほど近い行田市大字埼玉百塚中組では、平成７年まで庚申講が継続して行なわれてきた。しかし、講中の高齢化が進むにつれて存続が難しくなり、行事の終息を余儀なくされることになった。そこで、問題になったのが当講で伝承してきた掛軸の取り扱いである。少なからず信仰の対象であったものを、講員の誰かが代表して保管していくことにもためらいがあり、結果として当館へ寄贈したい旨の申請があったという次第であった。

埼玉百塚中組では庚申講のことを「オカノエ講」と呼んでいて、「訳は知らないけど、夜中までただ世間話をしていればいいんだ。」といわれていた。このことが、オカノエ様を別名「お茶飲み講」と称している理由でもある。火難除けのために集まるのだという話も聞いたことがあるという。盛んな時期には、最高で11人もの講員がいたこともあるということで、講の当日皆が集まるヤドは、籤で順番が決められた。

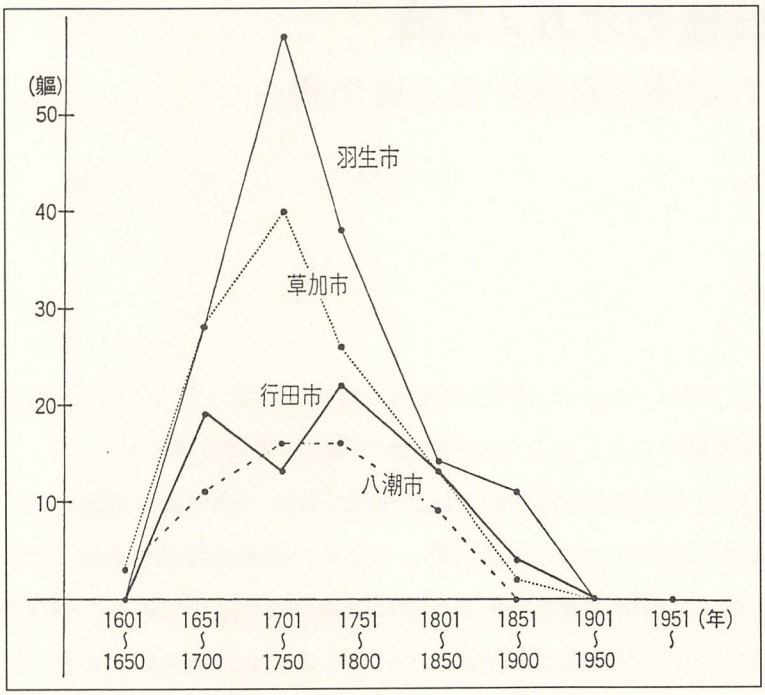
オカノエの夜は、講員がヤドに集まり、掛軸にうどんや煮物などの御馳走を供えて手を合わせ、一同で食事をともにして楽しく過ごすのである。賄いは「ヤド賄い」といってヤドが用意したものである。その献立は、おこわを蒸かしたり、うどん・天麩羅・煮物などの精進料理であった。夕飯を食べて12時を過ぎたら、さらに赤飯とか混ぜご飯を振る舞ったこともあったという。

近頃は午後10時には解散してしまうが、昔は午前２時か３時まで集まっていたという。こんなふうに近所の者



外箱を新調して寄贈された

寄贈された庚申講掛軸



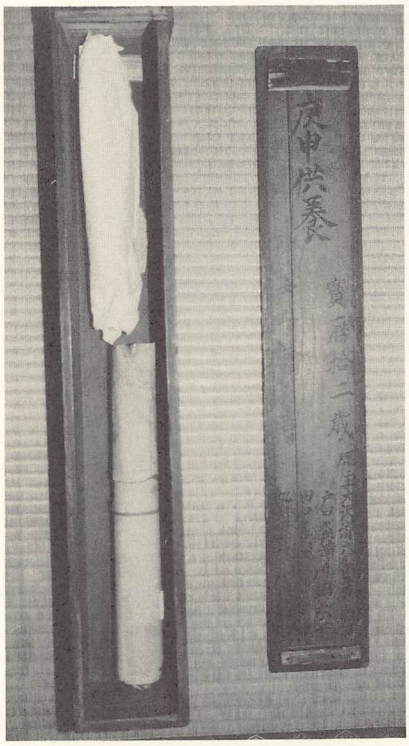
庚申講の年代別造立数（低地）
新編埼玉県史　別編２　民俗２
昭和61年　埼玉県
P.69 から転載

左の表によると、行田市内の庚申塔の年代別の造立数では、18世紀の後半のものが最も多いとされている。
この百塚上組でももとは庚申塔があったという。

がじっくりと集まる機会は他になかったので、決めごとをするのには好都合だったという。

ここでも、深夜の12時を過ぎてから地震が来ると、翌日ヤドをもう１度やらなければならないという決まりがあった。この時ばかりは、ヤドの負担軽減のため各自が米を５合持ち寄ったそうである。このような言い伝えはあるものの、行事そのものが形骸化していて他のことについては残念なことにほとんど採集することができなかった。

例えば、「人間の身体に三尸という虫がいて、庚申の夜人が眠っている間に抜け出して昇天し、天帝にその罪科を報告するといわれている。そのために、60日に１度訪れる庚申の夜を一夜眠らずにこの虫を見張っているのだ。」というような話は、誰もが初めて耳にすることであったらしく、こちらの方が面食らってしまった。



「庚申供養……」の墨書

つまりは、庚申の日に夜を撤して身を慎む行事が本来の姿であったが、近世中期以降に庚申講が広まると無病息災を祈る対象として青面金剛が登場したり、庚申の夜には講員が集まって飲食する「お日待」としての意味合いが強くなってきて、世間話をするだけの講となったようである。

この講で守ってきた青面金剛の掛軸の箱書きには、

「庚申供養　寶暦拾二歳　壬午　霜月吉日」とあり、

この講が1762年から平成７年の1995年までの200年以上の長きにわたって伝承されてきた行事であることを窺い知ることができる。埼玉県では庚申講が最も盛んだったのが18世紀といわれている。埼玉百塚中組の講のはじまりもちょうどその頃にあ

たるといえよう。今となっては、当初の講の内容を知る由もないが、何らかの目的をもって集まっていた講も200年の経過とともに「何だかわからないけれど世間話をしていれば良い講」に変容してきたのである。

2　200年を綴る

前述したように、箱書きには「庚申供養　寶暦拾二歳　壬午　霜月吉日」とあり、この講のはじまりを示してくれた。200年の伝承を裏付るように、同箱には毎年の講の実施記録を書き付けた綴りが入っていた。非常に残念なことには、つい何年か前にあまりに傷んでいる古い文書を廃棄してしまったということで、現在残されている文書のうちで最も古い記録は、明治38年（1905）のものになってしまっている。

この綴りの各々には、当年の何月にオカノエ講があったかを記録してあり、その時のヤドの名も記されている。ということは、1年のうち何回の講があったかも自ずと知るところになる。

なかには1年に8回もの集まりをもっている年があり、こうなると60日に1度巡ってくる、庚申の日に限ってはいないという計算になる。「申の日に講員の数だけやる。」という調査結果もあるように、「申」にだけこだわったのかもしれない。

この綴りを表にして次頁以降に掲げた。

講員の名については、英字の頭文字で記すにとどめた。これを見ると多いときには8軒もの講員の家があったのに、徐々に少なくなっていくことがわかる。「最も盛んな時期に11人の講員がいた」とはこのころを指すのだろうか。今のように転居が当たり前の時代ではなく、ましては土地とのつながりが強い地域のことでは、終わり間際に4軒に減ってしまったことは、「衰退」という表現が相応しいものに思われる。

聞き取り調査の中で、「食い講なので、戦後抜けた人が多かった。」という話があったように、昭和12年に8軒あったものが昭和25年には6軒に減っている。農家でない家は、戦時中にヤドを引き受けるのが大変だったようである。

平成6・7年はわずか4軒の講員となり、今回の終わりを決断させる原因ともなった。

綴りをめくっているうちに、明治期から昭和の初期までの記録は和紙に墨書きであったのに、次第に半紙や障子紙が使われ、ボールペン・サインペンが登場するなどの変化を感じることができた。100枚の綴りは、間違いなく100年の時の流れなのである。

寄贈された庚申講掛軸

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月	年間回数	講　中
1905年（明治38年）		○				○		○		○		○	5	K.S.S.T.T家
1906年（明治39年）		○		○			○		○		○		5	K.S.S.T.T家
1907年（明治40年）	○		○					○		○		○	5	K.S.S.T.T家
1908年（明治41年）		○				○		○		○		○	5	K.S.S.T.T家
1910年（明治43年）	○		○		○		○		○	○			6	K.O.S.S.T.T家
1911年（明治44年）	○		○		○		○		○		○	○	7	I.K.O.S.S.T.T家
1912年（明治45年）			○	○			○	○		○	○	○	7	〃
1913年（大正２年）		○		○			○	○		○	○	○	7	〃
1914年（大正３年）	○	○		○		○		○		○	○		7	〃
1915年（大正４年）		○	○	○			○		○		○		6	I.K.O.S.T.T家
1916年（大正５年）	○		○	○			○		○		○	○	7	I.K.O.S.S.T.T家
1917年（大正６年）		○		○			○	○		○	○	○	7	〃
1918年（大正７年）		○	○	○			○		○		○		6	I.K.O.S.S.T家
1919年（大正８年）	○	○	○	○			○		○		○	○	8	I.K.O.S.S.T.T.T家
1920年（大正９年）		○	○	○			○		○	○		○	7	I.K.O.S.S.T.T家
1921年（大正10年）		○	○	○			○		○	○		○	7	〃
1922年（大正11年）		○	○	○			○		○	○		○	7	〃
1923年（大正12年）	○		○	○			○		○	○		○	7	〃
1924年（大正13年）		○	○	○			○		○	○		○	7	〃
1925年（大正14年）		○	○	○			○		○	○		○	7	〃
1927年（大正16年）		○	○	○			○		○		○	○	7	I.K.O.S.S.T.T家
1928年（昭和３年）		○	○		○		○		○		○	○	7	〃
1929年（昭和４年）	○		○		○		○		○	○	○	○	8	I.K.O.S.S.S.T.T家
1930年（昭和５年）	○		○		○		○		○	○	○	○	8	〃
1931年（昭和６年）	○		○		○		○		○	○	○	○	8	〃
1932年（昭和７年）	○		○		○		○		○	○	○	○	8	〃
1933年（昭和８年）	○		○		○		○		○	○	○	○	8	〃
1934年（昭和９年）	○		○		○		○		○	○	○	○	8	〃
1935年（昭和10年）	○	○			○		○		○	○	○	○	8	〃
1936年（昭和11年）	○		○		○		○		○	○	○	○	8	〃

※1927年は、「大正16年」となっていた。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月	年間回数	講　中
1937年（昭和12年）	○		○		○		○		○	○	○	○	8	I. K. O. S. S. S. T. T家
1938年（昭和13年）	○		○		○				○	○	○	○	7	I. K. O. S. S. T. T家
1939年（昭和14年）	○		○	○			○			○	○	○	7	〃
1940年（昭和15年）	○		○	○			○			○	○	○	7	〃
1941年（昭和16年）	○		○		○				○	○	○	○	7	〃
1942年（昭和17年）	○		○		○				○	○	○	○	7	〃
1943年（昭和18年）	○		○		○				○	○	○	○	7	〃
1944年（昭和19年）	○		○		○				○	○	○	○	7	〃
1945年（昭和20年）	○		○		○				○	○	○	○	7	〃
1946年（昭和21年）	○		○		○				○	○	○	○	7	〃
1947年（昭和22年）	○		○		○				○	○	○	○	7	〃
1948年（昭和23年）	○		○		○				○	○	○	○	7	〃
1949年（昭和24年）	○		○		○				○	○	○	○	7	〃
1950年（昭和25年）	○		○		○					○	○	○	6	I. O. S. S. T. T家
1951年（昭和26年）	○		○		○					○	○	○	6	〃
1952年（昭和27年）	○		○		○					○	○	○	6	〃
1953年（昭和28年）	○		○		○					○	○	○	6	〃
1954年（昭和29年）	○		○		○					○	○	○	6	〃
1955年（昭和30年）	○		○		○					○	○	○	6	〃
1956年（昭和31年）	○		○		○					○	○	○	6	〃
1957年（昭和32年）	○		○		○					○	○	○	6	〃
1958年（昭和33年）	○		○		○					○	○	○	6	〃
1959年（昭和34年）	○		○		○					○	○	○	6	〃
1960年（昭和35年）	○		○		○					○	○	○	6	〃
1961年（昭和36年）	○		○		○					○	○	○	6	〃
1962年（昭和37年）	○		○	○					○		○	○	6	I. O. O. S. T. T家
1963年（昭和38年）	○		○	○					○		○	○	6	〃
1964年（昭和39年）	○		○	○					○		○	○	6	〃
1965年（昭和40年）	○		○	○					○		○	○	6	〃
1966年（昭和41年）	○		○	○					○		○	○	6	〃
1967年（昭和42年）	○		○	○					○		○	○	6	〃
1968年（昭和43年）			○	○					○		○	○	5	I. O. O. S. T家

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月	年間回数	講　中
1969年（昭和44年）			○	○					○		○	○	5	I.O.O.S.T家
1970年（昭和45年）			○	○					○		○	○	5	〃
1971年（昭和46年）			○	○					○		○	○	5	〃
1972年（昭和47年）			○	○					○		○	○	5	〃
1973年（昭和48年）			○	○					○		○	○	5	〃
1974年（昭和49年）			○	○					○		○	○	5	〃
1975年（昭和50年）			○	○					○		○	○	5	〃
1976年（昭和51年）			○	○					○		○	○	5	〃
1977年（昭和52年）			○	○					○		○	○	5	〃
1978年（昭和53年）			○	○					○		○	○	5	〃
1979年（昭和54年）			○	○					○		○	○	5	〃
1980年（昭和55年）			○	○					○		○	○	5	〃
1981年（昭和56年）			○	○					○		○	○	5	〃
1982年（昭和57年）			○	○					○		○	○	5	〃
1983年（昭和58年）			○	○					○		○	○	5	〃
1984年（昭和59年）			○	○					○		○	○	5	〃
1985年（昭和60年）			○	○					○		○	○	5	〃
1986年（昭和61年）			○	○	○				○		○	○	6	I.O.O.S.S.T家
1987年（昭和62年）			○	○					○		○	○	5	I.O.O.S.T家
1988年（昭和63年）			○	○					○		○	○	5	〃
1989年（昭和64年）			○	○					○		○	○	5	〃
1990年（平成２年）			○	○					○		○	○	5	〃
1991年（平成３年）			○	○					○		○	○	5	〃
1992年（平成４年）			○	○					○		○	○	5	〃
1993年（平成５年）			○	○					○		○	○	5	〃
1994年（平成６年）			○	○					○			○	4	I.O.S.T家
1995年（平成７年）			○	○					○			○	4	〃

掛軸そのものは、一般的な青面金剛の図柄で「日月　青面金剛　三猿　鶏」等が描かれている。「青面金剛は庚申の本地なりといひ、また帝釈天の使者なりという。その身体は青色にして六臂あり、弓・箭・寶剣を執り、怒髪にして両足に一鬼を踏むを形にす。」というそのものの構図である。紙本着色で、本紙だけでなく表装自体にかなりの傷みがあり、右の軸頭も欠失している。本紙に「西川重信」の落款があるが、この絵師については宝暦年間に西川佑信（1671～1750）という絵師が活躍しており、その門下の西川姓の者あるいは重信名の者かと考えたが特定できなかった。

箱蓋裏の墨書は、以下のとおりである。

「庚申供養　　寶暦拾二歳
　　壬午　霜月吉日
　　願主　大沢源六　　栗原新六
　　戸田久兵衛　　川鍋六平
　　田口甚之烝　　小沢平太
　　柴崎源右門　　」

小沢平太とは、小沢家の当代から数えて９代前の祖先であるという。

3　行事の終息

最後のオカノエ講は、平成７年11月25日に行なわれた。

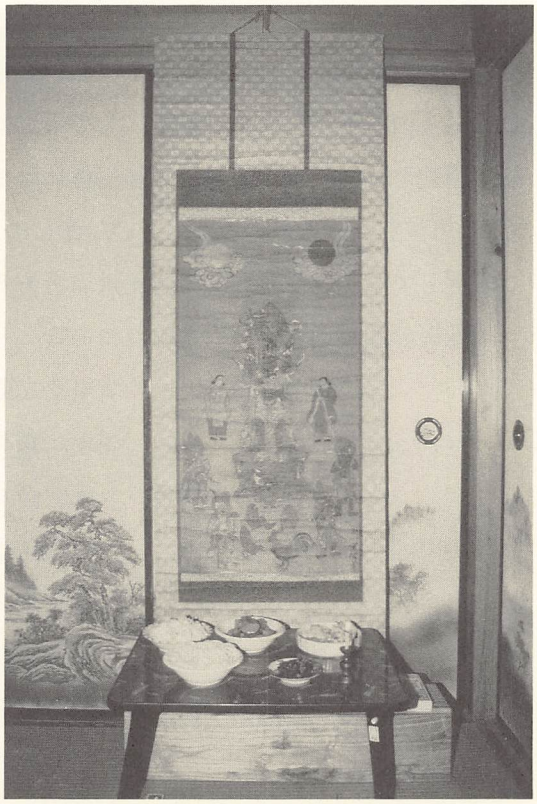
この日は、夕方からヤドとなった小沢氏の家に講員４人が集まった。手打ちうどんに天麩羅・煮物という精進料理が用意され、青面金剛の掛け軸にも灯明とともにそれらの料理が供えられた。

「お茶のみ講」であるから、世間話をしながら時を過ごした。ここでの講について少し話を聞いたあとに、一般的な事例についてもあらためて話をした。

つまりは、「人間の身体に三尸という虫がいるということ。その虫が、人のすべての行動を見ていて、庚申の夜に天帝にその罪科を報告するのを防ぐために庚申の夜は眠らずに起きているのだということ。」である。行事を終息するとはいえ、これまで講の目的をまったく知らずに実施してきたので、多少なりともその歴史的な意味合いを知っていただく良い機会であった。

オカノエ講の様子

用意された精進料理



掛軸にも精進料理が供えられている

一同は思い出話をしながら時間を過ごし、精進料理をいただいた。幸いなことに当夜は地震がなく、ヤドのやり直しをすることもなかった。

最後の頃には、自分たちの代で行事を断つことへの無念さと、掛け軸が将来消失しなくてもすんだという安堵感のようなものがあり、和やかなうちにお開きとなった。

掛け軸は、後日日を改めて当館に寄贈された。

オカノエ講の様子

伝統的な行事は、その運営に行き詰まる地域も少なくないが、かといってこれまで連綿と継承されてきたものを簡単に断ち切ることにもまた抵抗があるものである。今回の調査では、伝統的な行事の最後に立ち合えたことで、その継続の難しさを痛感した。今後、この掛軸を活用する機会はあまり得られないかもしれないが、「保存」の形で継承していきたいものである。

当館に掛け軸を寄贈してくれるにあたって、外箱を新調し真新しい墨書まで記された。その箱書きには、

「庚申供養　平成七乙亥歳　　十二月吉日

願主　　石井久夫

柴崎一郎

小沢由五郎

田口荘七郎

箱作　　小沢義政

記録　　小菅峻道　　」

とあった。

博物館と学校教育の連携（3）

－ボランティア活動の試み－

渡　辺　　勤

1　はじめに

次の文章は、当館においてボランティア活動を展開している中学3年生の体験談である。

活動するボランティアたち

今年の4月から「さきたま青少年ボランティア」の一員として、様々な活動に参加してきました。イベントの受付や補助、参加者へのアドバイスが私たちの仕事です。

初仕事は、4月の「土曜おもしろ博物館ー実感！古墳探検ワークシートー」でした。ワークシートの問題を実際に解いた後、参加者の受付や採点、アドバイスをしました。とても楽しく、充実した時を過ごすことができたのを覚えています。

夏休み、はにわ作りとまが玉作りに参加しました。ボランティアとしてお手伝いやアドバイスをしなくてはならなかったのですが、それよりも作ることが楽しく、製作に熱中してしまったこともありました。まが玉作りのとき、決してうまくないのですが参加者の方のお手伝いをしたら、「やっぱり上手ですね」とほめていただいたことがありました。「私でも何かを教えられるのだ」と思い、うれしくなりました。

このボランティア活動は、自分のためになるボランティアだと思います。たくさんの出会いやたくさんの経験を通して様々なことを学びました。そして、そのすべてが私自身を成長させてくれているような気がします。

自分のためになるこのボランティア。でも誰かのために少しでも役立ちたいという気持ちを忘れずに、楽しみながら続けていきたいと思います。（加須市立加須東中学校3年　小川芙美香）

この生徒は、本年度当館が導入した「さきたま青少年ボランティア」に登録し、積極的に活動している一人である。

阪神大震災以来、我が国においてもボランティア活動への関心が急速な高まりを見せており、生涯学習時代を迎えた今日、ボランティア活動は社会の要請ともなってきている。学校教育においても、豊かな人間性を育む教育の推進に、ボランティア活動などの体験活動の充実が求められている。

本稿は、こうした動向を踏まえ、博物館等と学校教育の連携をボランティアの面から、その試みをもとに考察しようとするものである。

2　教育改革の動向とボランティア

変化の激しいこれからの社会において、「ゆとり」のなかで「生きる力」を育むことを重視する教育を提言した中央教育審議会第一次答申（平成８年７月19日）は、「これからの地域社会における教育の在り方」のなかで、その具体的な充実方策の一つに「活動の機会の充実」をあげ、青少年期におけるボランティア体験の教育的意義の大きさを次のように指摘している。

「他者の存在を意識し、コミュニティーの一員であることを自覚し、お互いが支え合う社会の仕組みを考える上で、自己を形成し、実際の活動を通じて自己実現を図っていくなど、青少年期におけるボランティア体験の教育的意義は特に大きい。子供たちの、社会性の不足が指摘される今日、体験的な学習としてボランティア活動に青少年が気軽に参加できる機会を提供することは急務であると考える。」

このため、地域の博物館等においても、ボランティア活動を実際に体験したり、活動の理念や必要な知識・技能等について学習する機会を提供することは極めて重要な役割であるといえる。

また、同答申を受けた教育課程審議会の『中間まとめ』（平成９年11月17日）は、「教育課程の基準の改善の基本的な考え方」のなかで、「時代を超えて変わらない価値あるもの」の一つに「ボランティア精神」をあげ、子供たちにしっかりと身に付けさせていかなければならないとし、学校教育にボランティア活動を位置づけている。具体的には、「ボランティア活動は、地域社会の一員であることを自覚し、互いが支え合う社会の仕組みを考える上で意義のあることであると同時に、単に社会に貢献するということだけでなく、自分自身を高めるためにも必要なことであり、大切なことであるという意味で、大きな教育的意義があると考える。」として、特に体験的・実践的な指導を充実する上で重要な機能を果たす特別活動おいて、ボランティア活動を一層促すことを期待している。また、新設が予定される「総合的な学習（仮称）」においても、横断的・総合的な学習活動を展開する上で、自然体験やボランティアなどの社会体験といった体験的な学習を重視している。

次に述べる２つの実践は、こうした教育改革の動向を踏まえつつ、学校教育との連携を図りながら取り組んだ体験学習的なボランティアの実践である。

3　さきたま青少年ボランティア

「さきたま青少年ボランティア」（略称ＳＪＶ＝Sakitama Junior Volunteer）は、青少年に体験活動的なボランティア活動の場を提供すべく、当館の教育普及事業に限り、本年度試行的に導入したボランティアである。その概要は以下のとおりである。

(1)「さきたま青少年ボランティア」の概要

①目　的

埴輪や勾玉の製作、七夕馬やワラジづくり、綿くりの体験など、当館の特色である考古及び民俗に関する体験活動的なボランティア活動の場を青少年に提供し、ボランティア精神を培うとともに、地域の史跡・文化財等を大切にする心を培い、豊かな人間性を育むことを目的とした。

委嘱式後のボランティアたち

② 対　象

行田市内及び隣接市町村の中学校、高校、大学等に在学または同地域に在住する生徒や学生等を対象とした。

③ 募　集

関係小・中・高等学校に募集要項を配布するとともに、行田市及び隣接市町村の広報紙及び新聞に募集要項を掲載した。

④ 応　募

応募には、下記の条件を課した。

・ボランティアに興味・関心があり、活動意欲のある人（ボランティアに対する考え方を含め、応募理由を原稿用紙1枚以上にまとめ提出）

・未成年者は保護者の同意が必要

・本人が直接来館し申し込む

※応募者の応募理由

「ボランティアに興味がある」

「人の役に立ちたい」

「いろいろな人と交流したい」

「将来の職業に役立てたい」

「学芸員課程に役立てたい」

「考古学の勉強をしたい」

など、それぞれが目的意識をしっかりと持って応募してくれた。

おそろいの帽子をかぶって古墳の話を聞くボランティアの青少年たち＝行田市の埼玉古墳群で

ボランティア委嘱

はにわ作りに補佐役

さきたま資料館

行田市の県立さきたま資料館（吉川国男館長）は、はにわづくりなどの活動を手伝ってもらう「さきたま青少年ボランティア」を組織し、十九日に十八人を委嘱した。

県内の博物館・資料館のボランティア組織は初めてという。

同資料館は埼玉古墳群内にあり、国宝の稲荷山鉄剣などを展示している。教育普及活動にも力を入れており、活動の補助と体験学習をするボランティアを公募した。

中学生から大学生、社会人まで応募があり、まず、将軍山古墳展示館開館記念「古墳ウルトラクイズ」の運営補助役から活動を始める。夏には、はにわ、まが玉づくりの体験学習を手伝うといった多彩な活動を予定している。

越谷市千間台の高校一年郷間恵さん(一五)は「看護婦希望なので、いろんな体験を積んで心を広くしたい」と話していた。

委嘱式の後、県立南教育センターの田丸淳哉・社会教育主事から「ボランティアは学びの世界」という話を聞いた。

朝日新聞（平成九年四月二十一日付）

⑤ 登録者19人（男３人、女16人）

中学生10人（行田市内８人）、高校生３人、大学生４人、社会人２人

⑥ 活動内容

土曜おもしろ博物館やさきたま風土記の丘教室等、当館が主催する教育普及事業の中で、体験学習的な事業の事前体験、準備、参加者への支援等

※別紙「平成９年度さきたま青少年ボランティア活動」参照

⑦ 活動日

原則として、休業土曜日、夏休み等の教育普及事業開催日

※別紙「平成９年度さきたま青少年ボランティア活動」参照

⑧ ボランティアへの対応について

ア、ボランティアへの対応は、主に教育普及担当職員があたった。

イ、登録者には、「さきたま青少年ボランティア」を委嘱した。なお、委嘱期間は平成１０年４月19日から平成10年３月31日までとした。

ウ、ボランティア全員を対象にボランティア保険に加入した。

エ、ボランティア全員に「さきたま青少年ボランティア帽子」を貸与した。

オ、年度末、ボランティアに感謝状を贈呈した。

さきたま青少年ボランティア帽子

カ、ボランティア活動を円滑に行うため、回数は少なかったが、「さきたま青少年ボランティア連絡会議」を開催した。

キ、教育普及事業の事前体験を中心として、ボランティアのための研修の機会を設けた。

ク、「さきたま青少年ボランティア」の活動を必要に応じて当館の広報紙等を活用し広報した。

ケ、 交通費、昼食等はボランティアの負担とした。

(2) 学校との連携

特に行田市を中心とした中学校との連携を次の点で図ってみた。

①募集要項の配布の時に、ボランティア等の担当教師に当ボランティアの趣旨を説明し、生徒への働きかけを依頼した。その際、生徒の自主性を重んじるため、働きかけは校内に掲示する程度にしていただいた。

②応募に際し、直接当館へ申し込むのではなく、担当教師を経由していただいた。その際、原稿用紙１枚程度にまとめる応募理由に関し、指導・助言も加えていただいた。そのため、当ボランティアの趣旨を理解し、目的意識をしっかりと持って応募してくれた。

③当館から、活動の様子を担当教師へ報告し、学校からもボランティアへ評価を加えていただいた。

④当館の広報紙『さきたま』第９号に、ボランティアの体験談を含めた活動の様子を紹介し、県内の小・中・高等学校及び社会教育施設等に配布した。

⑤活動修了後には、館長より、感謝状を贈呈したが、学校内でも紹介していただいた。

当ボランティアは、当館とボランティア個人の関わりが中心であるが、以上のような連携を学校と取り合うことによって、参加したボランティアにとっても大きな励みになるとともに、他の生徒へも良い刺激となったようである。

(3) 成果と今後の課題

本年度、試行的に導入した「さきたま青少年ボランティア」であったが、その成果としては次のような点があげられる。

○活動がボランティア自身の体験学習になっている。

○事前に事業の体験をするため、参加者に関わりやすい。

○参加者、特に子どもたちもボランティアに関わりやすい。

○活動を通して、ボランティアを実感し、ボランティア精神を培うことができる。

平成９年度さきたま青少年ボランティア活動

月	日	曜	事　業　名	主な活動内容	人数
4	19	土	委嘱式	委嘱式 講話	１８
4	26	土	土曜おもしろ博物館 －実感！古墳探検 ワークシート－ 将軍山古墳展示館開館記念 行事－古墳ウルトラクイズ－ （準備）	ワークシートを体験 参加者へのアドバイス 受付、採点 当日の役割分担 看板の製作 その他の準備	１０
4	29	火	将軍山古墳展示館開館記念 行事－古墳ウルトラクイズ－	準備、リハーサル 古墳ウルトラクイズの運営	１４
5	24	土	土曜おもしろ博物館 －実感！古墳探検 オリエンテーリング－	オリエンテーリングを体験 参加者へのアドバイス 準備、受付、採点	8
6	28	土	土曜おもしろ博物館 －実感！古墳探検 ワークシート－	参加者へのアドバイス 準備、受付、採点 新ワークシートづくり	8
7	22	火	さきたま風土記の丘教室 「はにわを作ろう」（準備）	古代劇の準備 埴輪の製作を体験	7
7	25	金	さきたま風土記の丘教室 「はにわを作ろう」	受付 埴輪作りの援助	6
7	26	土	さきたま風土記の丘教室 「はにわを作ろう」	受付 埴輪作りの援助	6
8	2	土	さきたま風土記の丘教室 「七夕馬を作ろう」（準備）	マコモ刈り、準備 七夕馬の製作を体験	5
8	3	日	さきたま風土記の丘教室 「七夕馬を作ろう」	受付 七夕馬作りの援助	5
8	20	水	さきたま風土記の丘教室 「まが玉を作ろう」（準備）	まが玉の製作を体験 埴輪の野焼きの準備	5
8	22	金	さきたま風土記の丘教室 「まが玉を作ろう」	受付 まが玉作りの援助	7
8	23	土	さきたま風土記の丘教室 「まが玉を作ろう」 埴輪の野焼き	受付 まが玉作りの援助 埴輪の野焼きの援助	6
8	26	火	さきたまアカデミア 「博学融合」（まが玉の製作）	受付 まが玉作りの援助	4
9	27	土	土曜おもしろ博物館 －実感！古墳探検 オリエンテーリング－	問題看板の設置 参加者へのアドバイス 受付、採点等	5
10	25	土	土曜おもしろ博物館 －実感！古墳探検 古墳ウルトラクイズ－	準備、リハーサル 古墳ウルトラクイズの運営	8
11	14	金	県民の日記念行事 －わくわくドキドキ考古学－	受付 事業に参加 午前　ワラすぐりをする	6
11	22	土	土曜おもしろ博物館 －縄を作って、 縄とびをしよう－	ワラ打ちをする 縄作りを体験 午後　受付 縄作りの援助	4
12	13	土	土曜おもしろ博物館 －凧を作って、 凧あげをしよう－（準備）	凧作りを体験	3
1	11	土	土曜おもしろ博物館 －凧を作って、 凧あげをしよう－	準備、受付 凧作りの援助	3
2	14	土	土曜おもしろ博物館 －糸車をまわしてみよう－	準備、受付 事業に参加	7
3	14	土	土曜おもしろ博物館 －ワラゾウリを作ろう－ 感謝状贈呈式	午前　ワラすぐりをする ワラ打ちをする ワラゾウリ作りを体験 午後　受付 ワラゾウリ作りの援助 感謝状の贈呈	１０

受付をするＳＪＶ

「七夕馬をつくろう」の準備をするＳＪＶ

勾玉作りを体験するＳＪＶ

古墳ウルトラクイズ大会を運営するＳＪＶ

……「さきたま青少年ボランティア」体験談……

収穫大きいＳＪＶ

行田市立埼玉中学校２年　黒川　直実

私は今、ＳＪＶとして毎月第４土曜日に資料館へ行き活動を続けています。中学生なので時間がないと感じることもありますが、収穫は大きなものがあります。今まで知らなかった人と話をしたり、教えたりすることが何とも楽しいのです。日常生活や学校ではできないことを体験できることが、気分もいいし、とにかく楽しいのです。

たしかにボランティアは、つらいことや難しいこともあります。問題は「やるのか、やらないのか」だと思います。何事もやる気がないのならやらないほうがずっと楽ですし、やったところで意味がありません。「名ばかりの体験にさせない」ことが私の目標であり、まさにやりたいからボランティアをやっているのです。

「チャンスの神は前髪しかない」

今、このボランティア活動をしていて、自分が楽しい。「前髪をつかみそこねなくて良かった」と、自分に充実感を感じています。

新しい体験や発見があるＳＪＶ

花咲徳栄高等学校１年　黒川　光子

私は、２年前土曜おもしろ博物館に参加しました。それ以来資料館の事業には、休まず参加するようになり、いつの間にかお手伝いをするようになっていました。自主的にボランティア活動をしていたのです。

ボランティア活動からは、新しい体験や発見を得ることができます。一つの作品を一生懸命に作り、完成した自分の作品を人一倍喜んでいる子供たちや、子供とのコミュニケーションをとろうと子供以上に熱心な大人の方々、そして何よりもアシスタントとして走り回るボランティアのメンバーや職員の方々、一人一人の行動が日々大きな成果を上げているのだなと感じています。

将来は、考古学の学芸員を志望しています。人前で話をしたり、手伝いをするといった多くの活動をこのボランティアでできるというとは、私にとってとてもうれしいことです。活動をしていると様々な方からボランティアについて問いかけられますが、皆さんとっても感心してくださいます。長くこのボランティアを続けていきたいと思っています。

楽しみながら学べるボランティア

武蔵大学３年　藤倉千夏

私は現在、大学の学芸員課程で博物館学などを学んだり、博物館の見学実習に行ったりしています。実際に資料館の教育普及に携わることができることは、私にとっても魅力的で、資料館を内側から見ることができる良い機会だと思い、このボランティアに応募しました。

４月の「古墳ウルトラクイズ」と夏休みの「風土記の丘教室」に参加して、思った以上に得たものは大きかったと感じています。埴輪、七夕馬、勾玉作りやマコモ刈り、埴輪の野焼きなどを体験して、私自身も埼玉古墳が身近になり勉強になりました。

また、教室に参加した方たちが一生懸命勾玉を作り、完成した自分の作品をうれしそうに持ち帰る姿を見て、教育普及は資料館と地域の人々をつなぐ大事な役割をもっていることを痛感しました。楽しみながら学べる、とても良い環境だと思います。このボランティアを通じて資料館の方をはじめ、実習生の先輩、ボランティアの中高生など幅広い出会いがあったことも有意義なことです。

自分が役に立てているかどうかは分かりませんが、このボランティア自体も、「さきたま資料館」の教育普及の一環としてより多くの方に参加していただいて、もっと資料館を身近に感じてくれたらいいなと思います。

実践的なボランティア活動を目指して

調査補助員　市川康弘

一昨年の学芸員実習で知り合った友人に誘われたのをきっかけに、私は「さきたま青少年ボランティア」に加入し、さきたま資料館が行っている教育普及活動のお手伝いをさせていただいています。もともと教育普及活動に興味があった私にとって、その現場に直に関わることが出来たのは大きな収穫であり、また、さきたま資料館でアルバイトをするきっかけをつくってくれた運命的なものでありました。

そのためかボランティア活動にも自然と力が入り、毎月その日が来るのを心待ちにしている自分がやけに生き生きとしていたように思えます。

初仕事となった４月の「古墳ウルトラクイズ」では、重たいアンプを両手に２つ持ちながら古墳の階段をかけ上がり、強風吹きすさむ中、横断幕を身をもって支えました。当日は500人を超える人達がこのイベントに参加してくださったので頑張った甲斐がありました。その後も、土曜おもしろ博物館等での参加者の方々とのコミュニケーションを通じたり、教育普及活動の方々と一緒になって、糸車まわし等の民俗体験を行う機会を得るなど、年間を通じて様々なことを学びました。また、共にボランティア活動をしている中・高生、大学生の自分とは異なった新鮮な感覚に触れられたのも意外な収穫でした。

今年度の活動を振り返ってみると、自分のために行ったというイメージが強いので、次年度はそのことに留意し、館が行っている教育普及活動により実践的に取り組んでいきたいと思っています。今後も「青少年」と呼ばれるのがきつくなるまでは、この事業に参加していく所存です。

○参加者も、年齢の近い人のボランティア活動に触れられる。

○参加者のニーズに幅広く対応できる。

○ボランティアを通し、事業への参加者が増えている。

○登録者のいる学校では、ボランティアが話題になっているという。

※ボランティアの体験談（p.106）も参照

② 今後の課題

◆ボランティアの活動が受け身になってしまった感がある。今回、ボランティア自身で土曜おもしろ博物館のワークシートを作成したように、ボランティアも企画に関われる体制をつくり、ボランティアの自主的な活動の場を用意していく必要がある。

◆事業の参加者に対する支援を行う際、ボランティアが自信を持って活動するためには、事前学習、事前体験の時間を十分に確保する必要がある。

◆ボランティアの評価として、ボランティアの活動を紹介する広報活動を積極的に行う。特に登録者の学校との連携を密にする必要がある。

◆活動するボランティアが固定化してしまった感がある。ボランティアの評価を工夫するとともに、いつでも参加しやすい雰囲気づくりが必要である。

◆ボランティアの交通費及び昼食等の問題がある。

◆来年度は年齢制限をなくし、高齢者の豊かな経験を生かし、幅広い体験を可能にしたい。特に、地域には機械化される以前の農具を実際に使用し、農作業を行ってきた方々もいる。そうした方々の生涯学習の場としても、ボランティア活動の機会を拡大する必要がある。

4　埼玉古墳群除草ボランティア

昨年度６月、市内の中学校（行田市立忍中学校）と連携を図り、「埼玉古墳群除草ボランティア」を受け入れた。生徒会活動のＪＲＣ（青少年赤十字）委員会の呼びかけに、土曜日の午後、なんと２２１名もの生徒が参加し、稲荷山古墳の前方部を中心に、丸墓山古墳の周囲等の除草に取り組んでくれた（次ページの新聞記事参照）。なお、学校側のねらいは次の通りであった。

除草ボランティアに取り組む生徒たち

・社会奉仕の精神を養い、地域社会の一員としての自覚を育てる。

・思いやりの心や、協力の大切さを理解させる。

・公共の施設や設備を清潔にし、大切に扱う態度を身につけさせる。

・体験的活動を通して、成就感を達成させる。

・生徒会と連携し、全校生徒に呼びかけ、生徒の自主的活動として位置づける。

・地域の歴史的文化財に触れることにより、学習の場としても位置づける。

この実践化にあたっては、担当教師との連携をとにかく密にした。具体的には、学校側から、つまり生徒の側からのボランティアの申し入れを当館が受け入れるというかたちで行った。ボランティアを申し入れるために、当館を訪れたＪＲＣ委員会の代表の生徒たちが、当館を出るときのホットした表情が今でも思い出される。それは、純粋に「ボランティアができるのだ」という喜びの表情をしており、ボランティアへの意欲を感じた。

そして、学校内での呼びかけが始まった。呼びかけは、生徒の自発性を尊重するため、あえて教師からの呼びかけは行わず、生徒総会で呼びかけたり、ボランティア募集のポスターを作成し、廊下に掲示するなど、ＪＲＣ委員会が行ったという。こうしたＪＲＣ委員の意気込みによって、多くの生徒が集まったといえよう。背丈もある雑草と格闘した生徒たちは、自らの意志で参加したボランティアでもあり、次ページの感想文にもあるように充実感を味わってくれたようである。友達に誘われて参加した生徒も、実際に体験することでボランティアの良さを必要性を実感したのではないだろうか。また、参加した生徒の体験は学校内や家庭、地域で語られ、他の生徒や父母に対しても少なからずとも好影響を及ぼしたようである。この実践の学校側のねらいは達成されたのではないだろうか。

なお、この実践における当館の役割は、ボランティア活動の場を提供することのみならず、活動のねらいの一つでもある「地域の歴史的文化財に触れることにより、学習の場としても位置づける」ことへの学習支援であった。そこで、主たる活動の場となる稲荷山古墳を中心とした埼玉古墳群の概要をまとめた小冊子「忍中学校ＪＲＣ活動参加記念『稲荷山古墳と鉄剣』」を作成し、参加者全員に配布した。そして、活動前の全体説明会において館長より解説を加

古墳の草刈り

行田　忍中生徒が美化活動

H.8.6.5 (水) 埼玉

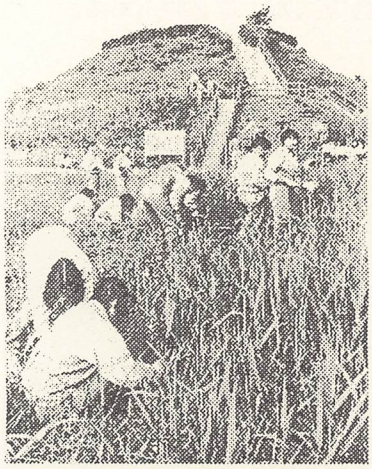
貴重な文化財である古墳を自分たちの手で守ろうと、行田市忍中学校(佐藤武司校長、生徒数五百八十八人)の生徒がこのほど、さきたま古墳公園で除草作業を行った。

今年は地域の美化活動に取り組もうと、ＪＲＣ（青少年赤十字）委員会がポスターなどで全校生徒に呼びかけたところ、予想を大きく上回る二百二十一人が参加。「五十人も集まれば来年につなげられるか」と思っていた先生たちを驚かせた。

県立さきたま資料館では、この機会を古墳についての学習の場にもしてもらおうとパンフレットを配布し、作業前に横川好富館長が古墳全般について説明。その最中にも、部活を終えた生徒たちが次々と駆け付けた。

生徒たちは丸墓山古墳、二子山古墳、稲荷山古墳に分かれて作業を開始。稲荷山古墳で腰の高さまで茂った雑草を刈り込んでいた女子生徒は「ストレス解消になる」。丸墓山古墳では階段部分にいっぱいに生えたササのような雑草を一つひとつ丁寧に抜いていた。

ＪＲＣ担当の小野田誠教諭は「大勢が参加してくれて、生徒たちのボランティア意識が意外に高いのに驚いた。この分なら学校の恒例行事にできます」と話していた。



稲荷山古墳では中学２年生が、腰のあたりまである雑草を刈り込んだ

埼玉新聞（平成８年６月５日付）

題名

ボランティアを活発にするために

二年　六組二三番
氏名（久米華絵）

六月一日土曜日、忍中学校の参加希望者、二百二十一人は埼玉古墳へ除草ボランティアへ行きました。二年生八十七名は稲荷山古墳を、一年生七十七名は稲荷山古墳前方を、一年生五十七名は丸墓山古墳を除草しました。二しょりも、高い草を、一時間以上かりつづけるのは、楽ではありませんでしたが、後に自分の住んでいる行田のほこれる古墳どんをきれいにすることの手伝いができたというなんともいえない充実感をかぼえました。

また、この思いは、私だけでなくボランティアに参加した全員が感じた思いだと思います。そして私だけでなく、また、このようなきかいがあったら参加したいと思っていると思います。

今回ボランティアにかるい気持ちで参加した人もいると思います。しかし、前々からやってみたいと思っていた人も多かったと思います。実際に予想していた参加人数の四倍もいたのだから、きっとおおぜいの人が、このきかいをまっていたのだと思います。そのようなきかいをまっているのは、忍中生だけではないと思います。行田市民、埼玉県、日本国民、忍中だけでも、予想人数の四倍もいたのですから、日本国民では、多くの人々がまっています。

自分から、そのきかいをつくらないというのは、本当のボランティアではないかもしれません。しかし、ただでさえ、ボランティアの活発ではない日本。そんなか、自分たちで計画し、行動するのは、とても困難で、勇気のいることです。だからまずそのようなきかいをどんどん増やし、参加し、ボランティアを活発にさせれば、自然とみずから行動できる雰囲気も、でると思います。だから、どんどんこのようなボランティアのきかいを増やし、活発にすることが大切だと思います。

全体説明会において館長より解説を加えた。博物館等施設が、学校教育と連携しボランティアを受け入れる場合、ボランティア精神を培うことはもちろんのこと、地域社会の一員として地域の史跡や文化財等を大切にする心を育んでいくことは極めて重要なことであろう。

そして、この実践は本年度、同校の呼びかけによって、近隣3中学校合同の「さきたま古墳群除草ボランティア活動」へと発展した。夏休みの暑い中にもかかわらず約１５０人が参加し、将軍山古墳西側の除草に取り組んだ。ボランティアを通じて学校間の連携が図れた実践でもあり、大きな成果が得られた。前掲の感想を書いた生徒が語っているように、ボランティア活動が根付くまで、学校教育も社会教育も子供たちにこうした機会を提供する必要があるのではないだろうか。それは、子供たちがボランティアと体験的に関わるきっかけをつくることにもなるのである。

5　総合的な学習とボランティア

２００２年より、社会の変化に主体的に対応できる資質や能力を育成すべく、教科の枠を超えた横断的・総合的な学習を展開するための「総合的な学習の時間(仮称)」が教育課程に組み込まれスタートする。教育課程審議会の『中間まとめ』は、この学習活動について、「例えば、国際理解・外国語会話、情報、環境、福祉などの横断的・総合的な課題などについて各学校が創意工夫を十分発揮して学習活動を展開するものとする。その際、自然体験やボランティアなどの社会体験といった実体験、実験・観察、調査やものづくりなど体験的な学習、問題解決的な学習を重視する。」とし、ボランティア体験を組み入れた「総合的な学習の時間(仮称)」の展開を求めている。

ところで、前掲の行田市立忍中学校のＪＲＣ委員会を中心とする「埼玉古墳群除草ボランティア」は、ある意味では環境や福祉等に関わる「総合的な学習」といえよう。また、この活動のねらいには、道徳、特別活動、そして社会科において培うべき資質や能力が盛り込まれており、実際の活動によってそれらの資質や能力が培われていることを生徒の感想文等からも十分に読みとることができ、生徒主体の効果的な体験学習であったといえる。付け加えるならば、例えば古墳文化に関する学習(社会科)や古墳公園内の植物の学習(理科)を問題解決的学習として、また埴輪等の製作を体験的な学習として組み込むことも考えられる。さらには、事前あるいは事後の学習として、ボランティアについて討論やディベートをしたり、世界と比較しながら、我が国のボランティア活動の現状について調査・研究をするなど、「ボランティア」をテーマとした様々な学習活動が考えられる。保護者や公民館等と連携し、地域の人々をも巻き込んだ活動とすることも可能である。

学校の創意工夫を生かし、多様な活動を展開できることに「総合的な学習」の特色がある。受け入れる側としてもそうした点を理解し、学校の指導計画に沿い、より望ましいかたちで支援・協力ができるよう連携を図っていきたいものである。

6　おわりに

ボランティアは学びの世界……。これは、「さきたま青少年ボランティア」委嘱式において、埼玉県立南教育センター社会教育主事田丸淳哉先生より贈られた言葉である。さきたま青少年ボランティア一人一人がこの言葉を実感したのではないだろうか。

生涯学習時代を迎え、博物館等も「学び」の場を提供するとともに、「学びの世界」になっていかなければならないと思うのである。

埼玉古墳群研究の新視点

平成10年は、史跡指定60周年、稲荷山古墳発掘調査30周年、鉄剣銘文発見20周年を迎えます。

さきたま資料館では、埼玉新聞社の企画に協力して、館外の研究者にも呼びかけ、その後の研究の成果や動向を、7回にわたって埼玉新聞紙上で紹介させていただきました。

この連載は、各方面から注目されましたので、同新聞社と各執筆者のご了解を得て、ここに転載いたします。テーマと執筆者は以下の通りです。

1　古墳群成立の背景　　高橋一夫

2　古墳群の墳丘の規格　　塚田良道

3　稀有な大型古墳群　　吉川國男

4　稲荷山古墳の疑問解明　　宮　昌之

5　古墳群の保存と研究　　塩野　博

6　周辺遺跡からの探求　　斎藤国夫

7　稲荷山の被葬者の出自　　坂本和俊

9月19日 金曜日
1997年（平成9年）

発行所
埼玉新聞社
浦和市岸町6丁目12番11号
郵便番号336
電話 代表048(862)3371～4
編集(直)862-3269～71
郵便振替 00180-2-20988

埼玉新聞
THE SAITAMA SHIMBUN

埼玉古墳群 研究の新視点 ▶1

古墳群成立の背景

低地開発の集団

S字かめを持って移住

高橋 一夫

埼玉県内には、現在一二三基ほどの前方後円墳が確認されているが、その大半は台地上に存在する。埼玉古墳群は埋没したローム台地上に立地するとはいうものの、なぜ広大な沖積地の真ん中に、一〇〇メートル級の古墳が九基も築かれたのだろうか。

かつて、低地の考古学的調査は、「低地には遺跡は存在しない」という既成概念から調査の手はあまり入らなかった。しかし最近では、低地部の埋没台地や自然堤防上には、かなりの密度で遺跡が存在することが明らかになり、積極的に調査が行われるようになった。県下の考古学地図は変わりつつある。

そこで、埼玉古墳群周辺の古墳群出現以前の遺跡の動向等から、その成立の背景を探ってみよう。

埼玉古墳群が存在する行田市、その周辺の熊谷市・妻沼町・羽生市の低地部で相次いで古墳時代初頭の遺跡が発見されている。現在のところ、発掘調査された遺跡は一〇か所程度である。しかし、この地域は河川による氾濫土が厚く堆積し、遺跡が確認しにくい状況にあるので、さらに多くの遺跡が地下に眠っていることが予想される。

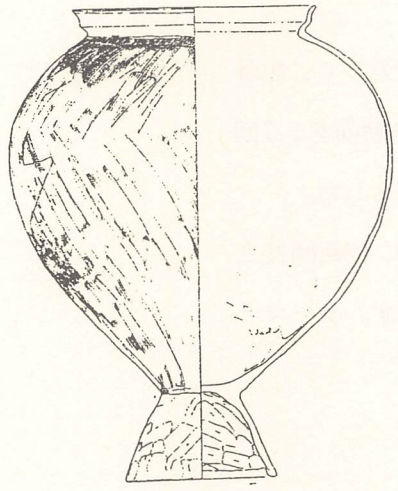
こうした低地部の遺跡からは、必ずS字状口縁台付甕（S字甕）が出土する。この名称は甕の口辺の部分が「S」の字形に立ちあがっていることからつけられた。もともとS字甕は、愛知県尾張地方の低地部で発生した土器で、弥生時代終末から古墳時代初頭（三世紀末から四世紀前半）にかけて東国各地で出土する。

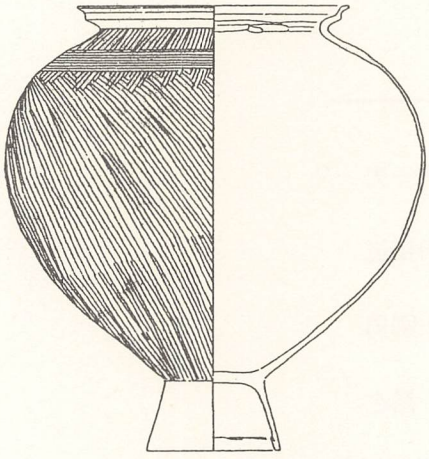
S字甕は、弥生時代には空白地帯であった地域から出土する傾向にある。利根川の対岸の群馬県太田市周辺は、弥生時代は無人地帯であったが、古墳時代になるとS字甕を多量に出土する遺跡が突如として出現する。こうした考古学的現象から、東海地方西部の人びとがその地に移住して低地を開発した、とする見解が有力である。S字甕をつくった人びとは、低地の開発を得意としていたようだ。

行田市周辺でも、弥生時代中期は池上遺跡などがわずかに存在するものの、それに続く遺跡はなく、古墳時代に突如S字甕を伴う遺跡が出現する。類似する現象は単に行田市周辺だけでなく、草加市の毛長川流域に、さらには東京湾低地にもみられるのである。ここでもS字甕をもつ人びとが、低地を開発している様子をみることができる。毛長川流域では、毛長川を眼下に見おろす台地先端部に、前方後円墳としては県内で最古の高稲荷古墳が造営された。

以上の点から、埼玉古墳群周辺もS字甕をもつ集団が開発主体となり、広大な低地を開発したようすが読みとれる。開発は成功した。開発の成功は、経済的基盤の確立と人口の増加をもたらした。開発指導者はしだいに大豪族に成長し、埼玉古墳群の造営へとつながっていくものと思われる。

（埼玉県立さきたま資料館副館長）





（上）熊谷市小敷田遺跡のS字甕（下）尾張地方のS字甕

埼玉古墳群

研究の新視点 ▶2

古墳群の墳丘の規格

「近畿」の権力と関係

巨大古墳の形を縮小か

塚田　良道

前方後円墳の形は、大きくみればどれも似ており、細かくみればそれぞれで微妙に違っている。しかし、こうした鍵穴の形が何らかの設計に基づいて造られたことは、いくつかの研究で明らかにされている。墳形の研究で興味を引くのは、しばしば地方において、近畿地方の巨大古墳の形を縮小した古墳が認められることである。その背景には、大王墓の設計を知った地方の王が、その縮尺率を変えて自らの墓を築いた歴史があったのであろう。

古墳の形を比較する方法は、図面上にいくつかの基準点を設け、その距離の比率を比較する方法が主流であったが、この方法は基準点の認識の仕方によって形が違ってしまう弊害があった。このため近年、図面の縮尺率を変えて直接対比する方法が、文化庁記念物課の岸本直文氏によって用いられている。

▽大仙古墳の規格を縮小

後者の方法で、埼玉古墳群の八基の前方後円墳を検討すると、武蔵最大の前方後円墳である二子山古墳は、日本最大の大仙古墳（大山古墳・宮内庁指定仁徳天皇陵）の規格を縮尺して築造した古墳であることが分かる。大きさの比率をみると、大仙古墳は後円径が全長の二分の一であり、後円部頂点と前方部頂点がそれぞれ全長の四分の一に位置する。また前方幅は、後円径八に対し一〇の割合の長さとなる。

このような大仙古墳の規格は、前方部前縁が右上がり斜めになるものの鉄砲山古墳にも認められ、金錯銘鉄剣の見つかった稲荷山古墳も、現在以後この規格を基本とし、大きさを変え築造されていったと考えられる。

愛宕山、瓦塚、奥の山、中古墳の大きさを比較すると、稲荷山古墳が全長一二〇mで大仙古墳（四八六m）のほぼ四分の一になる。また二子山古墳は一三八mで、これは稲荷山をおよそ一と八分の一倍にして築造された古墳にあたり、鉄砲山古墳は全長一〇九mで、二子山をほぼ八〇%に縮小したものである。築造順序は稲荷山↓二子山↓鉄砲山の順であり、埼玉古墳群の大型前方後円墳では、おそらく最初にできた稲荷山古墳に大仙古墳の形が導入され、前方部を失っているが、大仙古墳と共通する可能性が高いと考えられる。

の山といった前方後円墳についても、部分的な調査によって推定される形は大仙古墳と共通するものが認められる。

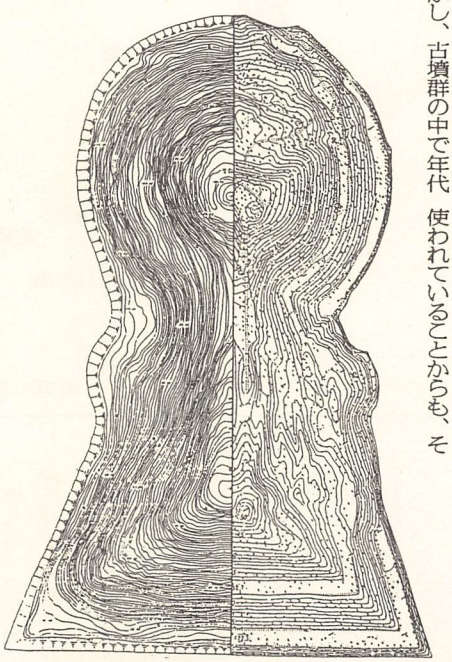
このように、墳丘規格の比較検討を進めることによって、埼玉古墳群の造営が、単に一地方豪族の意志だけでなく、近畿地方の大王権力との関係の上に行われた可能性が浮かび上がってこよう。

▽形のちがう将軍山古墳

しかし、古墳群の中で年代の新しい将軍山古墳は、別の形になる。後円部が小さく前方部の長大な将軍山の墳形は、近畿地方ではあまりみられないもので、千葉県富津市の稲荷山古墳の規格と共通している。墳形からみれば、これまでの埼玉古墳群の前方後円墳とは異なった経緯によって造られたと思われる。将軍山では横穴式石室の石材に、富津市周辺でとれる房州石が使われていることからも、その築造背景には、埼玉古墳群を営んだ王権に何らかの変化が生じ、千葉県南部との交流を深めるに至った歴史があったのかもしれない。

古墳の形は、古代の技術と政治関係をうかがう大きな手がかりをもっており、今後発掘成果を踏まえて、さらに研究を深めていく必要があろう。

（行田市郷土博物館学芸員）



二子山（左）と大仙古墳（右）の墳形

埼玉古墳群

研究の新視点

▶3

稀有な大型古墳群

三水系の要地に造る

大和朝廷と密接な関係

吉川國男

黄金色の稲穂ごしに百㍍級の大型古墳を見ていると、古代の民衆のみなぎるエネルギーに圧倒される。

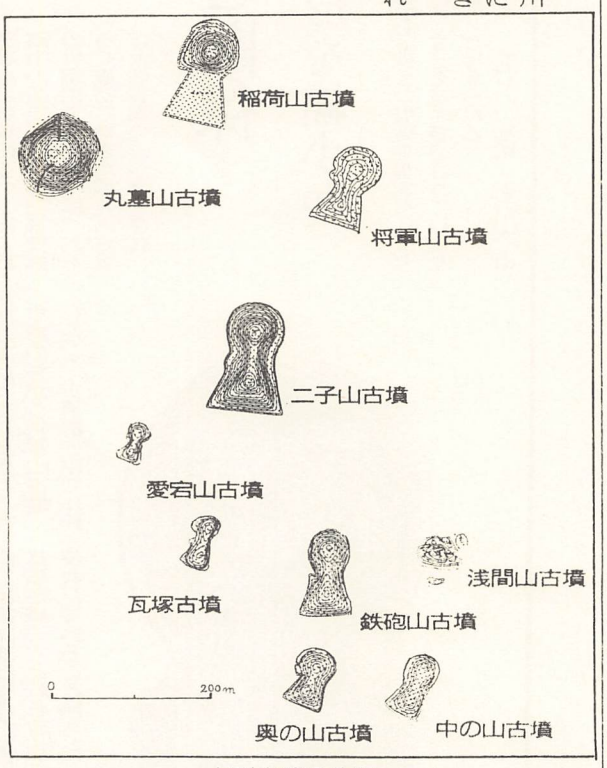
埼玉古墳群は、行田市埼玉にあって、東西九百㍍、南北四百㍍の間に十基の大型古墳が群在している。この密集ぶりは、大阪平野の百舌鳥古墳群や古市古墳群、奈良盆地の柳本古墳群とくらべても決してひけをとらない。国内的にも、世界的にも、稀有な大型古墳群ということができる。この偉容な大型古墳群をめぐる疑問点は、じゅうぶん解明されたとはいえない。

今でこそ平坦な穀倉地帯であるが、もとはといえば、利根川、荒川の乱流地帯。地盤が沈下する関東構造盆地にあるため、氾濫を受けやすい洪水常襲地帯でもあった。上空からこの下流一帯を望むと、北西から南東に向かって、洪水のツメでひっかいたような地形が縞模様をなして末広がっている。

その頃の利根川は、行田と羽生の間から南下して越谷あたりで荒川を合流して、東京湾に流れていた。

埼玉の王者は、流域の住民を使役して、洪水を封じこめるため河川の築堤工事をまず行い、自然堤防や埋没台地の微高地にも水を引くいっぽう、後背湿地や湖沼地を排水し、広域的に水田開発を行っていった。

これらの開発は、治水の知識や土木技術に長けた首長によってすすめられ、開拓に成功するたびに、影響領域を広げ、流域の集落を掌握し傘下を拡大していった。埼玉の地は、利根川、荒川、和田吉野川―入間川の三水系をおさえる要地にあった。水の統御さえできれば、この流域の土壌は、秩父や上州三山から運ばれてきた沃土であったので、豊かな収穫は約束されていた。こうして、埼玉の王者は、武蔵地方において抜きん出た勢力を伸ばし、五世紀には多摩川下流域にとって代り、武蔵一円に覇権を確立していったものと推測される。



大型古墳の分布

この成功と実力を大和朝廷が見逃すはずがなかった。仁徳天皇の十一年に、武蔵の人強頸（こわくび）を大阪淀川の茨田（まんだ）堤の築堤に当たらせていたことが、『日本書紀』に書かれているのは、その間の事情を物語るものであろう。

ところで、国宝の金錯銘鉄剣に書かれている乎獲居臣の人物像については、在地説、中央豪族説、中央豪族下向説などがある。銘文発見当初は、在地説が優勢であったが、現在は中央豪族説も有力になってきた。今後この議論は、出土品や墳丘、埋葬主体部の前後・類縁関係から、長らくつづくものと予想される。

筆者は、『日本書紀』雄略天皇十一年の条に書かれている、「武蔵国直丁が天皇の近くに侍宿していた」という記事に注目している。鉄剣銘の「乎獲居臣が獲加多支鹵大王のときに奉事していた」ことと符合し、乎獲居臣在地説の強力な論拠になりうるからである。両史料は、埼玉の王者が大和朝廷の軍事機構の中枢にあって、大きな役割を演じていたことを投影するものであろう。

五・六世紀、埼玉の累代の王者が安定した強さを保持しえたのは、大和朝廷と密接な関係があったからであり、このことも大型古墳を造りつづけることを可能にさせたのであろう。

（埼玉県立さきたま資料館長）

埼玉古墳群

研究の新視点

▶4

稲荷山古墳の疑問解明

中央に本来の被葬者？

築造時期示す証拠に期待

宮　昌之

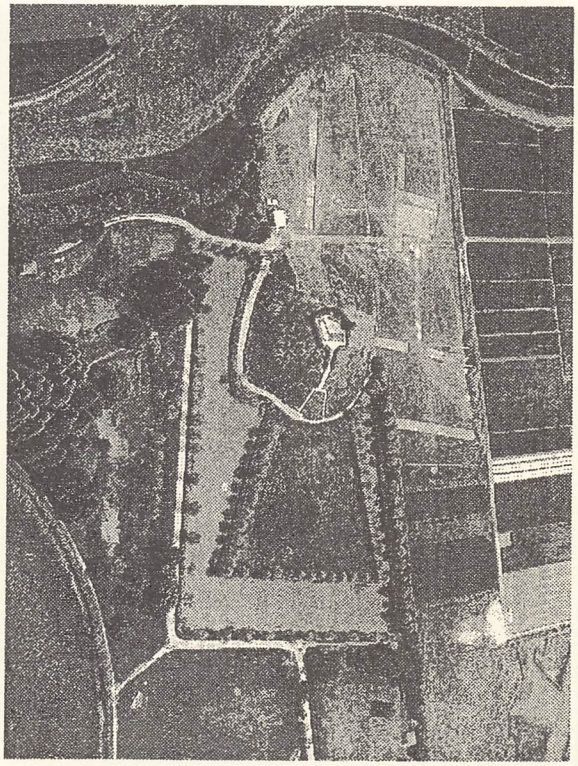
稲荷山古墳は風土記の丘整理事業に伴う最初の発掘調査として昭和四十三年に行われた。古墳からは礫槨と粘土槨と呼ばれる二か所の埋葬施設が発見され、出土品は「国宝武蔵稲荷山古墳出土品」に指定されている。昭和四十八年度には周堀の調査を行い、二重の堀を持つ全長百二十㍍の前方後円墳であることが確認された。

昭和五十三年には、保存処理中の鉄剣から百十五文字の銘文が金象嵌された「金錯銘」が発見された。銘文解釈・被葬者について多くの学説が発表され、論争は現在も続いている。

このように全国的にその名が知られ、教科書にも登場する稲荷山古墳であるが、古墳の前方部は昭和十三年の土取りのために削り取られたままになっている。また、周堀の復原が部分的であるため、墳丘の形や周堀の位置について誤解を招く事もあった。さらに、学術的にも解決しなければならない問題が残されていた。

その第一に、埋葬施設の問題があげられる。既に発見されている礫槨と粘土槨の位置は、後円部の中心を外れてL字形にある。このことから、後円部中央に稲荷山古墳本来の被葬者のための埋葬施設が存在する可能性や中心を外れた他の埋葬施設の存在も考えられよう。

第二は、古墳の年代である。稲荷山古墳からは辛亥年で始まる実年代が分かる資料が出土している。辛亥年は西暦四七一年と考えているが、六十年後の五三一年とする研究者も多い。これは、埋葬施設の副葬品や堀から出土した埴輪などから導き出せる時期では年代幅が広く、年代判定に使われている須恵器も、前方部堀削時に発見されたと伝えられている出土位置の不確実な遺物であるためである。特に須恵器は年代決定の指標となりうることから、今後の発掘調査における出土が期待される。



また、稲荷山古墳築造の時期には、群馬県榛名山二ツ岳が爆発し、埼玉県北部にまで火山灰が降下している。この火山灰はFAあるいは榛名―渋川テフラ（Hr―S）とも呼ばれ、六世紀初頭の降灰と考えられている。堀の中に堆積していれば爆裂以前の築造であることが結論できる。

第三は、丸墓山古墳との時期的な前後関係である。丸墓山古墳はかつて稲荷山古墳に先行する古墳として扱われていたが、墳丘下にFAと推定される層が発見され、埴輪もやや後出の要素がみられることから、現在では稲荷山古墳に次ぐ時期に考えられている。両古墳の堀は接近しており、両者が重複し、切りあい関係があるのか、どちらか一方がよけているのかを解決させておく必要があろう。

これらの問題を解決するため、平成九年度から五か年計画で、文化庁からの補助を受け、整備を実施することになった。消失している前方部に盛土を行い、発掘調査の成果をもとに堀位置の完全な復原を実施する計画である。

平成十四年春、新たな姿に生まれ変わる稲荷山古墳に期待していただきたい。

（埼玉県立さきたま資料館学芸員）

埼玉古墳群

研究の新視点

▶5

古墳群の保存と研究

特異な長方形周溝

畿内にない強い地域性

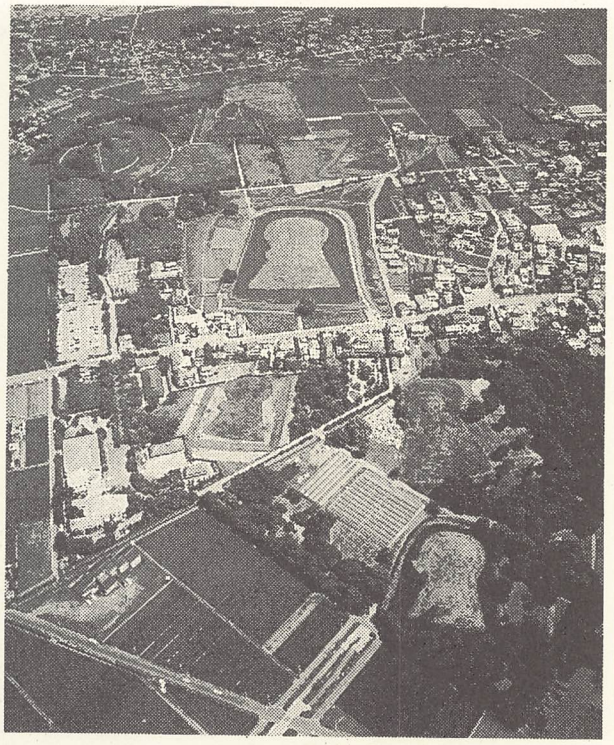
塩野　博

さきたまの古墳は、江戸時代の『新編武蔵國風土記稿』や『忍名所圖會』、明治十年福田一麿著『埼玉縣地理抄』、四十年に清水雪翁が著わした『北武八志』など地誌類に広く紹介されている。考古学者では、明治三十八年柴田常恵が、将軍山古墳出土の遺物を実見し、発見状況と遺物を『東京人類學會雑誌』に報告し、学術的な考察をしたのが初である。昭和十年、後藤守一が考古學會總會で「前方後圓墳の編年」を発表、埼玉古墳群の前方後円墳の主軸が、「同一方向に採ってゐる」との見解を示した。また十三年、三友國五郎の「古墳群と平野」は、歴史地理的観点から立地と当時の景観を復原している。さらに地元の高木豊三郎は古墳群の実態をくまなく記述した『史蹟埼玉』を著わし、広く頒布して古墳群の保存とその啓発に努めた。

古墳群についての研究や関心が高まる一方、昭和九年若王子古墳が埋立用土採取で破壊され、埼玉古墳群でも土採取の危機が迫り、村では昭和十年五月に丸墓山・二子山・鉄砲山古墳の保存を県に要望した。県は即仮指定すべく、六月文部大臣に申請した。文部省は「三古墳ノミニ止マラス附近ニ存スルモノヲモ併セ古墳群トシテ一括保存可致モノト被認」との見解を示したが、再度窮状を上申、七月十七日付けで三古墳の仮指定が了承されたのである。

埼玉縣史蹟名勝天然記念物調査會は文部省が古墳群全体の保存を示唆したのに応え、昭和十一年二月、埼玉古墳群を「國家的保存價値アルモノト認メ其筋ニ指定調査ヲ要求スヘキモノ」と決定、県は国指定史跡の申請を行なった。文部省は、十二年一月と十月に実地調査、十三年八月八日付け『官報』に指定を告示し、埼玉村を管理者に指定した。村では十四年三月に丸墓山古墳の村有を契機に「埼玉村古墳保存會」を結成し記念碑を建立、十四年度から保存施設の工事を行ない保存に万全を尽くした。しかし戦後、食糧事情から幾つかの古墳に鍬先が向けられた。瓦塚古墳の一部が、開墾耕作され大問題となったのは昭和二十五年であった。補助金交付や瓦塚開墾耕作事件を契機に埼玉村史蹟保存会は、「埼玉村文化財保護会」と改称し保存活動を展開した。だが多くの古墳が民有で、その保存に限界があり村では、公有地化を決定、二十七年一月、愛宕山・二子山及び墨趾・中の山・奥の山古墳の買収補助金交付を申請、実現した。この地元の方々の保存に対するたゆまぬ努力が、今日の古墳群存在の裏にある。

昭和四十一年度、国は「風土記の丘」事業を新設した。初年度は懸案の鉄砲山古墳の公有地化、四十二年度から「風土記の丘の整備事業」が開始された。四十三年に瓦塚古墳を公有地とし、稲荷山古墳の主体部の発掘調査を行ない、以来三十年経つ現在も、学術調査と並行しながら着々と整備が進められている。この間、稲荷山古墳出土の鉄剣から百十五文字の金象嵌が発見され、その内容から「五世紀のわが国の古代社会が大きく変容をとげている時期のきわめて数少ない同時代資料」と評価され、伴出した遺物も含め「国宝」に指定されるなど、昭和十年代以来三十年ぶりの活気が甦がえったのである。



埼玉古墳群全景

整備事業から得られた成果は、大型古墳の企画的配置から同じ血筋の中で首長権が継承されていること、埼玉古墳群の前方後円墳の周溝の形態が長方形を呈した特異なもので、東国では千葉県舟塚原古墳、殿塚古墳、姫塚古墳に確認されているだけで畿内に見られない強い地域性が看取されることなど、稲荷山古墳被葬者の自出や人物像、東国最大の埼玉古墳群の性格を考える上で次々と大きな問題を提起している。私たちはこの、かけがえのない埼玉の地宝「埼玉古墳群」の内包する問題を広い視野から探究し、先人そして現在も保存整備に努力している人たちに報い、さらに日本古代史研究に資するため精励しなければならない。

（埼玉県教育局文化財保護課長）

埼玉古墳群

研究の新視点

▶6

周辺遺跡からの探求

朝鮮半島の強い影響

6世紀中頃に転換期

斎藤国夫

稲荷山古墳から出土していた鉄剣の保存処理中に一一五文字の銘文が発見されたのは昭和五十三年であった。最初は銘文に刻まれた「辛亥の年」から辛亥銘鉄剣（しんがいめいてっけん）と呼ばれ、やがて国宝指定に伴い、銘文が金象嵌されている特色から金錯銘鉄剣（きんさくめいてっけん）と呼ばれるようになり、呼び慣れた名称が変わったことに戸惑ったことが思い出される。あれからもう二十年近く経とうとしているが、その間断続的にではあるが、筆者は埼玉古墳群周辺の多くの遺跡の発掘調査に従事してきた。銘文発見当時から比べれば大量の情報が得られているといえる。解決した問題、未解決な問題、新たに発生した問題などがある。ここでは、周辺の遺跡の発掘調査の成果から見た埼玉古墳群をめぐる二、三の問題点について述べておきたい。

まず六世紀を中心として九基の大型古墳を築造し続けた古墳の被葬者達が、どこに住んでいたのか。築造当時の竪穴住居の集落は、古墳群から見て東側に小針（こばり）遺跡が確認されている。近年では、一般の竪穴住居とは異なる塊に囲まれた居館が群馬県などで多く発見されており、こうした居館が埼玉古墳群の周辺にあった可能性があるが未発見である。

次に筆者らが最近発掘調査した行田市藤原町の北大竹遺跡では密集した小円墳群が発見された。すでに調査されている大型の前方後円墳の周囲に小円墳群が造られる形であったと思われるが、それは他の古墳群を見ても一般的な形である。しかるに埼玉古墳群では、稲荷山古墳周辺に六世紀前半に小円墳群が造られるが、それ以降は大型の古墳ばかりが密集して造られているだけである。小円墳群を排除している形といえる。一つの血筋で一世紀以上も首長権を確保してきた彼等は、一般の人々からは隔絶した存在となっていたのか。集団の性格の問題である。

最後に将軍山古墳が、六世紀後半に築造されたことがはっきりしたが、問題は、将軍山古墳に埋葬された人物が生前に活躍したのは、六世紀中頃である。市内の各所に前方後円墳がさかんに築造されるのも後半である。さらに将軍山古墳の石室から出土した蛇行状鉄器は、朝鮮半島の高句麗の騎馬兵の装備と同じものである。その装着状態を埴輪で表現したのが、行田市酒巻十四号墳出土の馬形埴輪であるが、十四号墳の人物埴輪の服装などにも朝鮮半島の影響が強く残されている。こうしたことからも六世紀中頃に、この地域に大きな転換期があったと想定できるが、それが何か。埼玉県埋蔵文化財調査事業団が行っている行田市野の築道下遺跡では六世紀を中心に七百軒以上の竪穴住居が狭い範囲に密集して発見されているが、そのこともこうした事象と何等か関係しているはずである。

以上の他にも多くの問題が残されている。埼玉古墳群自態の発掘調査とともに、周辺の遺跡発掘調査を通して、これらの問題解決の糸口をつかみたい。

（行田市教育委員会生涯学習課課長補佐）

埼玉古墳群

研究の新視点

▶7

稲荷山の被葬者の出自

上総の豪族の子孫か

第三の埋葬施設を想定

坂本　和俊

稲荷山古墳の墳頂に立って礫槨と粘土槨を見ると、いずれも浅い位置にあり、墳丘中軸線上に無いのが観察される。このことは、稲荷山古墳に第三の埋葬施設があるのを想定させる。それは、礫槨・粘土槨の副葬品、括れ部の須恵器より、円筒埴輪がやや古い特徴を持つことからも言える。

礫槨の被葬者とそこから出土した鉄剣に記された乎獲居臣の関係を、第三の埋葬施設が存在する前提で考えてみよう。稲荷山古墳のように複数の埋葬施設がある古墳の被葬者の親族関係を歯から分析した田中良之氏の研究を参考にすれば、第三の埋葬施設と礫槨及び粘土槨の被葬者は親子であったと推定される。親と一緒に埋葬される者が、鉄剣に自らの系譜を誇る銘文を記したとは考えられない。

彼は自分の古墳を造る地位、即ち親の職掌を継承する立場に無かった故に、後の舎人のように杖刀人として獲加多支鹵大王の下に出仕して、勲功により杖刀人首の乎獲居臣から鉄剣を賜与されたのであろう。

これは、景行天皇が伊勢を経て上総に到った時に、膳臣の祖磐鹿六雁が武蔵国造の上祖大多毛比らを召して鰹などを調理させて天皇に供献したことが『高橋氏文』に記されることからも想定される。膳臣もオオヒコを祖する氏族だからである。この記事は、武蔵国造の上祖が上総で漁業を行っていたことも想起させる。

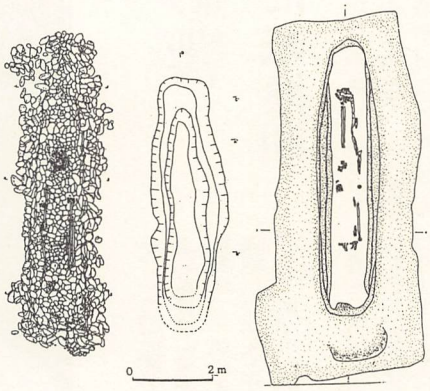
これは、稲荷山古墳の粘土槨と礫槨に置かれた木棺が舟形を呈すると考えられることとも関係がある。千葉県館山市大寺山洞穴では丸木舟に遺体を埋葬する例、市原市山王山古墳でも粘土槨に舟形木棺を安置した例が確認されている。弥生時代の方形周溝墓では、被葬者の出自が木棺に反映するとされる。さらに埼玉古墳群の前方後円墳のように長方形を呈する周溝が、千葉県山武郡横芝町殿塚古墳、香取郡神埼町舟塚原古墳でも確認されている。これらは、埼玉古墳群の前方後円墳に比べると前方部が短いが、山王山古墳を初めとする姉ヶ崎古墳群の前方後円墳には埼玉古墳群同様に前方部が長く、周溝が長方形になる可能性があるものが多い。特に時期・墳形から稲荷山古墳と姉ヶ崎二子塚古墳は、密接な関係にあると考えられる。そこで筆者は、姉ヶ崎古墳群を形成した豪族の子孫が埼玉地方へ進出して、稲荷山古墳を築造したと推定する。

姉ヶ崎古墳群は、後の上海上国造の奥津城とされる。『国造本紀』は、武蔵国造と上海上国造を同祖と記す。後の文献に見える上総国上海郡の桧前舎人直健麻呂、武蔵国賀美郡の桧前舎人直由加麻呂はその子孫であろう。さらに『国造本紀』は、上海郡の隣の市原郡域に置かれた菊間国造を武蔵国造の子と記す。

市原郡域にある山倉一号墳の埴輪が、埼玉古墳群に供給するために形成された鴻巣市生出塚埴輪窯から供給されているのは、『国造本紀』の記述が一定の史実を反映することを示唆する。武蔵国造の子が菊間国造に就任するに際して、同族の上海上国造の支援があったのだろう。国造制は、山倉一号墳の築造された六世紀後半に成立すると考える。

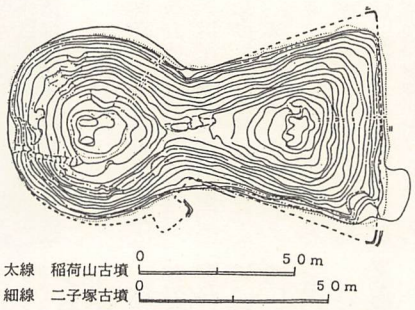
このように埼玉古墳群の形成は、考古資料と文献の両面から見る必要がある。

（県立本庄高等学校教諭）



舟形木棺を安置した埋葬施設の平面図

左　稲荷山古墳礫槨　中央　同粘土槨　右山王山古墳粘土槨



稲荷山古墳と姉崎二子塚古墳（6：5）

(9) 門脇禎二　「特集・謎の五世紀　まず地域史から考える」『歴史と人物』昭和五十四年一月号中央公論社　一九七九年
(10) 西山要一ほか(前掲書4)
(11) 直木孝次郎　「人制の研究」『日本古代国家の構造』青木書店　一九五八年
(12) 平野邦雄　「大化前代の社会の構造」『岩波講座日本歴史2古代2』一九六二年
(13) 直木孝次郎　(前掲書)
(14) 土橋　寛　『古代歌謡全注釈』古事記編
(15) 直木孝次郎(前掲書)
(16) 佐伯有清　「丈部氏および丈部の基礎的研究」『日本古代史論考』吉川弘文館　一九八〇年
(17) 井上光貞　『日本古代史の諸問題』一九四九年
(18) 平野邦雄(前掲書)
(19) 斎藤　忠・岸　俊男・田中　稔・狩野　久(前掲書)
(20) 小川良祐(前掲書)
(21) 佐伯有清　「特集・謎の五世紀　臣か直か――銘文と武蔵豪族」『歴史と人物』昭和五十四年一月号　中央公論社　一九七九年
(22) 直木孝次郎　「特集・謎の五世紀　古代ヤマト政権と鉄剣銘」『歴史と人物』昭和五十四年一月号中央公論社　一九七九年
(23) 栗原文蔵・田部井功・小久保徹・杉崎茂樹・若松良一・田中正夫「丸墓山古墳の調査」『埼玉古墳群発掘調査報告書』第六集　埼玉県教育委員会　一九八八年
(24) 吉川國男　(前掲書五)
(25) 平野邦雄(前掲書)
(26) 金井塚良一　『北武蔵考古学図鑑』校倉書房　一九七六年
(27) 加藤謙治　「渡来の人びと」『雄略天皇とその時代』吉川弘文館　一九八八年
(28) 加藤謙治(前掲書)
(29) 亀井正道　「船山古墳と銀象嵌大刀」『MUSEUM』三四〇　東京国立博物館　一九七九年
(30) 篠川　賢　「鉄刀銘の世界」『雄略天皇とその時代』吉川弘文館　一九八八年
(31) 鈴木靖民　「武(雄略)の王権と東アジア」『雄略天皇とその時代』吉川弘文館　一九八八年
(32) 吉川國男(前掲書)
(33) 上田正昭　「大和国家の構造」、平野邦雄(前掲論文)『岩波講座日本歴史2　古代2』岩波書店　一九六二年
(34) 井上光貞　「雄略朝における王権と東アジア」『東アジア世界における日本古代史講座』4　一九八〇年

最強の上野勢力を監察・示武する役目も担っていたと推察されるのである。行政は、祭礼式典、人事・除正、勧業、貢納・力役、巡察・交通、地方統属を担当し、平群氏に管掌させたふしがある。外交は、中国大陸・朝鮮半島との関係・交流を担当し、身狭氏や檜隈氏に所掌させていたとみられる。

これらの四機構の実態把握は今後の研究課題であり、また朝廷の意志決定や指揮系統がどのように組織化され機能していたかも定かではないが、記紀や金石文などから素描を試みると、左図のように書くことができる。乎獲居も、開府と軍事機構に関与・活躍していたものと考えられる。雄略朝の統治機構の存在については、かつて上田正昭氏や平野邦雄氏らも予察的に提起されたことがある(33)。また井上光貞氏も「雄略朝における王権と東アジア」の論文のなかで触れられているので、参照していただきたい(34)。

最初にも述べたように本稿では、雄略紀十一年の条の記事は稲荷山鉄剣銘を理解する場合においても、きわめて重要である旨を論じてきた。十一年条の記事は、年月・場所も入り、地名・人名も具体的であるので、実話性・信憑性も高い事件であると推論してきた。かくして両史料を透視することによって、五世紀後半における、武蔵と大和朝廷の関係はかなり捕捉できるようになった。また、関連する記紀の記事や金石文の史料も投影してみると、雄略朝の政体＝統治機構も、おぼろげながら見えてきた。今後、考古学の成果との突き合わせを行えば、さらに鮮やかな像を結ぶことができると期待している。本稿がそのようなときに少しでも役立てば幸いである。擱筆にあたり、参考とさせていただいた先学諸氏の研究業績に対し、敬意と感謝を申し上げるとともに、本稿に対する御叱正と御教示を懇願する次第である。

参考文献

(1) 斎藤　忠・岸　俊男・田中　稔・狩野　久　『稲荷山古墳出土鉄剣金象嵌銘概報』埼玉県教育委員会　一九七九年

(2) 斎藤　忠・柳田敏司・栗原文蔵・増田逸朗・田部井功・駒宮史朗・金子真土・小川良祐・塩野　博・今泉泰之・町田　章・江本義理・沢田正章・杉下龍一郎・成瀬正和　『埼玉　稲荷山古墳』埼玉県教育委員会　一九八〇年

(3) 小川良祐　「埼玉県行田市稲荷山古墳出土辛亥年銘鉄剣の金象嵌について」『考古学雑誌』第六五巻第二号　日本考古学会　一九七九年

(4) 西山要一、増沢文武、沢田正昭、秋山隆保、馬淵久夫、松田隆嗣、田中　勇、中野政樹、町田　章、江本義理、岸　俊男、田中　稔、狩野　久　『埼玉稲荷山古墳辛亥銘鉄剣修理報告書』埼玉県教育委員会　一九八二年

(5) 吉川國男　「大化前代の武蔵の動向」『埼玉の考古学』柳田敏司先生還暦記念論文集刊行委員会　一九八七年

(6) 吉川國男　「中原高句麗碑と辛亥銘鉄剣」『古代探叢』Ⅲ　早稲田大学出版部　一九九一年

(7) 黒板勝美・国史大系編修会　『新訂増補国史大系　日本書紀』前篇　吉川弘文館　一九五七年

(8) 水野　祐　「古事記崩年干支註記考」『日本古代王朝史論序説』〔新版〕早稲田大学出版部　一九九二年

で複雑化した社会活動を営むうえで、不可欠な意思伝達手段である。文字は、価値観や習俗の違う人間集団の統括、共通化を図る魔力を有している。筆者は、国家成立の重要要件として領土、人民、支配、臣僚、軍隊とともに、文字使用も見逃せない要素と考えているので、雄略朝は、立派に国家的な体制を有していたと評価できよう。

結、雄略朝の統治機構と埼玉王権

以上、両史料およびそれにまつわる諸事項にって私見を述べてきたが、最後にこの両史料から雄略朝の政治機構を眺め、そのなかでの埼玉王権の位置づけを論じてまとめとしたい。

そこで、雄略朝の統治機構を史料から見てみよう。まず、中国『宋書』に載せる倭王武の上表文によれば、大王のもとに「開府儀同三司」の政治機構があり、そのほか二十三人の軍郡を任命していた（倭王済以来）とみられる。開府とは宮廷の役所を意味し、儀同三司は後世の大臣など高官をさすものとみられる。したがって、開府儀同三司とは、大和朝廷の都府と官僚群――当然、平群大臣、大伴大連や物部大連、膳臣などの軍事的伴造が臣僚の中心になったほか、杖刀人首の乎獲居や江田船山古墳鉄刀銘の典曹人の无利弓などもこの機関に属していたものと推察される。軍郡とは、将軍、郡太守（地方の大豪族）のこと考えられている(31)。中原高句麗碑にも高句麗の役職名とみられる大使者、主簿、道使、憧主などがみられるので(32)、当時の朝鮮半島、倭など中国の周辺諸国は、中国の政治体制に学び、中国流の政治組織をもっていたものと推考される。

倭王武の上表文（『宋書』倭国伝）

順帝昇明二遣使上表曰封國偏遠作藩于外自昔祖禰躬擐甲冑跋涉山川不遑寧処東征毛人五十五國西服衆夷六十六國渡平海北九十五國王道融泰廓土遐畿累葉朝宗不愆千歳臣雖下愚忝胤先緒驅率所統歸崇天極道遥百済装治船舫而句驪無道圖欲見吞掠抄邊隷處劉不已毎致稽滞以失良風雖曰進路或通或不臣亡考濟實忿寇讐壅塞天路控弦百萬義聲感激方欲大挙奄衷父兄使垂成之功不獲一簣居在諒闇不動兵甲是以偃息未捷至今欲練甲治兵申父兄之志義士虎貴文武効白刃交前亦所不顧若以帝德覆載摧此彊敵克靖方難無替前功竊自假開府儀同三司其餘咸假授以勸忠節詔除武使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國軍事安東大将軍倭王

以上のことから雄略朝の統治機構は、大王のもとに開府（内廷）、軍事、行政、外交の四つの政治機構があったものと思われる。開府は、現在でいえば皇室と宮内庁、総理府をまとめたような権能をもち、大王が直轄し、膳氏らが補佐していた。武蔵国直丁はここに属していた。軍事機構は遠征・常備・親衛軍の別がすでにで分かれており、大伴氏と物部氏に管掌させた。その組織は、大将軍（紀小弓宿禰ら）の下に将軍（吉備臣尾代ら）がおり、その下には軍兵や兵士で編成されていたようである。鉄剣銘の杖刀人は、親衛軍に属し、その首は親衛軍の帥であったと考えられる。

雄略朝の統治機構

乎獲居は、「吾左治天下」と銘記しているところをみると、単に親衛軍だけでなく全軍の中枢にあって、雄略朝の大王のもと、軍事機構全体に関与していた。のみならず、武蔵・朝廷間を往来する沿道諸国や東国

仁徳朝、雄略朝――も極めて大きな役割と影響をもたらしたことを強調しておきたい。

（六）史部・典曹人・稲荷山鉄剣銘

杖刀人に対置される江田船山古墳の典曹人は、一般に杖刀人の武官に対して文官として雄略朝に仕えたと考えられている。江田船山の鉄刀は下賜品ではなく、典曹人の无利弖が主体的に製作したものと考えられている(29)。

典曹人について、篠川　賢氏は、特殊な限定された職掌を思わせる名称ではなく、朝廷に奉事した人々の総称であると注目されている(30)。筆者は、典曹人を文書の読み書きができる行政官であると思っている。西日本は、早くから文字文化が普及していたので、无利弖のような多くの典曹人を朝廷に出仕させていたのであろう。それは、東国が武人の供給地であったのとは対照をなすものであった。

雄略朝の政治体制については、いままで軍事専制的な権力機構の確立面だけに注意が払われてきたが、典曹人の九州からの出仕は行政機構のめざましい発達があったことを裏書きするものでもある。そのことは、雄略天皇が即位後まもない、二年十月条の『日本書紀』のつぎの記事によっても明らかなように、大王の政治姿勢として、文筆記録による統治も重視していた。

是月。置史戸。河上舎人部。（中略）唯所愛寵。史部身狭村主青。檜隈民使博徳等也。

また、史部の身狭村主青と檜隈民使博徳は中国語にも精通していたらしく、雄略朝八年、十年、十二年、十四年と四回、中国南朝へ外交使節として派遣されている（雄略紀）。倭王武が宋朝に上表した文書が格調高く名文なのも、天皇の文筆重視の表れである。同十六年には、漢部を集めて伴造を定め、直の姓を賜ったのもその関連であろう。『新撰姓氏録』を見ると、東漢氏、西漢氏には史の姓をつけた人たちが何人も載っている。雄略紀九年の条には、「河内飛鳥戸郡人。史伯孫女者。古市郡人書首加龍之妻也。」と載せ、河内には書（ふみ）の首（おびと）をはじめ、史部が住んでいたことを伝えている。

稲荷山鉄剣銘の文体、用語がすぐれ、簡明な文章を行書・篆書・隷書風に、筆遣いがわかるほど巧みに刻んだ金文字を見るにつけ、芸術的にもすばらしい金錯銘であると思っている。また、日本語の発音を、正確に、しかも規則正しく漢字で表記し、文章前半は語り部が語るような日本文で、後半は明瞭な漢文体で作文している。それは当時すでに、公用文・常用文の様式があって、それに則って書かれているようにさえ感じられる。乎獲居は宮廷に出仕していたので、文字知識は当然もっていて、上手な文案家や刀鍛冶師、金工師に依頼して、鉄剣を製作させたにちがいない。銘文を刻まさせるからには、彼の地元の周辺にもかなり識字層がいたはずであるし、五世紀後半になると東国にもひろく文字・文筆記録の文化が浸透していたものと察せられる。

（七）文字使用と古代国家

朝廷には、文字を扱って執務する官人層がすでに形成されており、これら官人層は広汎な史部に支えられて行政執行に当たっていたことは確実であろう。文字使用は、規則書、日継ぎ記録、除正・人事管理、貢納記録、経済活動、命令・指示書、外交文書、系図、墓記（誌）など高度

血縁につらなる臣と、皇室と祖先を異にする畿内の有力豪族（伴造の家柄のものが多い。）である連、皇室より分かれた小氏や地方豪族である公（君）、および職業集団の品部や名代・子代などの首長に与えられた伴造によって構成されていた[25]。地方は、国県制に基づき国造を任命し、おおかた直の姓を与えられたが、吉備の豪族は臣、上野豪族は君であった。各氏は、苗字（職業名の場合もある）のほかにこの姓を使用した。朝廷は、この氏姓制度を政治組織にからめ、職務を位階で表して執行していた。

またこの時期、部民制が発達し鳥養部だけでなく、つぎのような部民や伴造が設置された。

雄略紀二年　宍戸部　山野で狩りをし、動物を捕らえる。
〃　〃　史部　記録・文筆を司る。
〃　六年　少子部　嬰児を養育するための少子部に連の姓を賜う。
〃十一年　鳥養部　鳥の飼育や鳥取りを司る。
〃十七年　土師部　土師器や埴輪を製作する。
〃十九年　穴穂部　穴穂命（安康天皇）のために置かれる。

五世紀のこのような政治社会的背景のなかで鳥養部が設置されたことも容易に考えられるところである。武蔵地方には鳥養部の居住を示す遺跡は確認されていないが、考古資料として、埼玉古墳群から水鳥埴輪が出土しているし、東松山市の岩鼻古墳群からは禽を冠した人物埴輪が出土している[26]。

（五）渡来人の活躍と稲荷山鉄剣

大陸の先進文化の摂取・普及のため、朝廷は渡来人を厚遇した。

雄略紀七年　今来才伎を倭国吾礪広津邑に招く。その後、陶部・鞍部・画部・錦部・訳語らを上桃原・下桃原・真神原の三所に遷す。
〃十四年　中国南朝派遣されていた身狭村主青らとともに、手末才伎の漢織・呉織・衣縫の兄媛・弟媛らが献上される。
〃十六年　漢部を集めて伴造と定め、直の姓を賜う。

旧来の渡来人が西漢氏のもとに統率されていたのに対して、今来の渡来人集団の多くは東漢氏の配下に統率され、耕地や鉱山の開発を行ういっぽう、生産物の貢納をとおして大王に奉仕し、屯倉の経営に際しても、大量に動員された[27]。倭王武が版図を東日本から九州、朝鮮半島にまで拡大したという宋への上表文があるような背景には、これらの渡来人の技術力と生産力に負うところが多かったのは明白であろう。おびただしい武器・具、馬具、船舶の消耗を余儀なくした「征戦」、それを賄う壮大な生産体制と資源の徴発には、列島・半島民の莫大な犠牲と消耗、辛酸があったことが偲ばれる。加藤謙吉氏は『続日本紀』から渡来系金属工の氏姓としてつぎのような氏を挙げている。三田首、鞍作、山背甲作、朝妻手人、忍海手人、忍海漢人、河内手人、河内手人刀子作、金作部、飽波漢人、韓鍛冶、韓鍛冶首、鎧作[28]。稲荷山鉄剣の製作にも、大和か河内の渡来系氏族が何らかの形で関わっているものと想像される。

一般に、渡来人の来朝・活躍というと、六～八世紀の部分が大きく取り上げられているが、古墳時代における二回の大規模な渡来――応神・

ず、長さ一二〇メートルの前方後円墳を築造することができたのかという問題である。第三点は、稲荷山と丸墓山の築造年代の問題であるが、丸墓山は、稲荷山より新しいという現時点の考古学的な年代観からすれば、乎獲居のつぎの代の不祥事とすれば納得できる。第四点は、乎獲居の前の不祥事だとすれば、鉄剣銘文の「加差披余」に称号がついていないことは理に適う。

雄略紀十一年の条は、丸墓山が円墳であることに対する解答例としては、明解な名答ではないかもしれないが、折りあるごとに検討の俎上に乗せていただきたいと思う。

（二）雄略紀十一年の条と稲荷山鉄剣銘の特長

雄略紀十一年の条は、もちろん文献史料であり、二百数十年前の出来事と考えられる天皇家の伝承や氏族伝承について、八世紀に編集して『日本書紀』に収録され、写本されながら、伝えられたものである。これに対し鉄剣銘は、五世紀の雄略朝において書かれ刻まれた同時代の金文が、直接に我々の目で確認できる史料である。雄略紀が伝聞伝承史料であるのに対して、鉄剣銘は同時代実物史料の強みがある。また、雄略紀が朝廷（中央）の目から武蔵（地方）を見ているのに対して、鉄剣銘は地方（多分武蔵であろう）の目から中央（全国）を、または武蔵から東国一円を意識して見ている史料と言うこともできる。

両史料とも五世紀という史料がきわめて稀少な時代の、中央と地方の問題についての共通するいくつかの重要な事柄を含有している。

その第一は、五世紀に武蔵から朝廷に出仕・上番する慣習の存在を提示したこと。第二は、その出向が軍事的色彩がつよいこと。第三には、その関係が慣習的というよりは、政治制度・機構に基づく交流ではないかと看取されることである。

（三）乎獲居の人物像

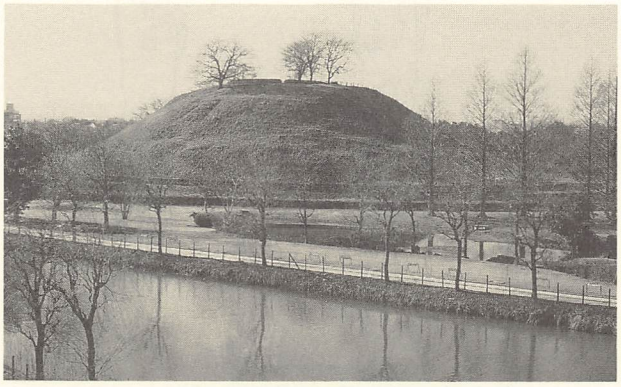
鉄剣銘にある乎獲居なる人物像については諸説がある。在地豪族説、中央豪族説、中央豪族下向説などあって論争されているが、雄略紀十一年の記事を読むと、在地豪族説すなわち、乎獲居の本拠地は稲荷山鉄剣が出土した埼玉（さきたま）地方にあって、雄略朝に出仕し、重職をつとめた豪族である蓋然性が強まってくる。大王に奉事した杖刀人首の鉄剣が埼玉古墳群から出土したことは、主題の雄略紀十一年の記事にとっても、記事内容そのものの信憑性・実話性が高まったと言ってよいのではないかと思う。両史料をごく自然に考えた場合、乎獲居は埼玉地方において王権を成長させてきた在地の豪族と考えるのが無理のない解釈である。この成長の原動力は、利根川・荒川水系の河川工事に着手し、流域の耕地拡大に成功をおさめ、それを足場に下流域・周辺地域を開発し、民衆の支持を背景に、畿内の大王権とも親密な交流をすすめた累代の王者の指導性を指摘しないわけにはいかない。このころ、全国的に大河川の流域平野へ開発が爆発的に展開していったが、埼玉の王者はいわば日本大開拓時代のヒーローであったと極言もできよう。仁徳紀十一年の条に出ている武蔵の強頸の話――河内淀川の茨田堤の築堤に当たった――は、その間の事情を如実に物語るものであろう(24)。

（四）氏姓制度と部民制の発達

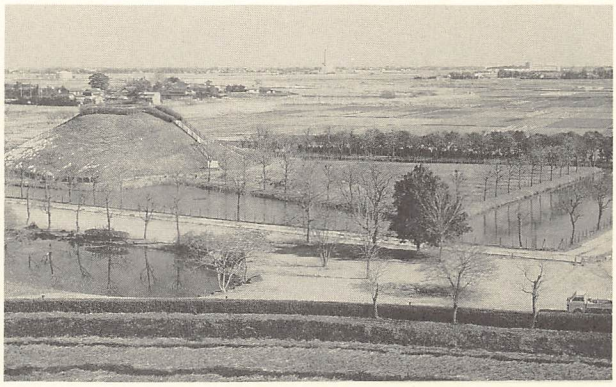
記紀によれば、当時の大和朝廷の組織は、大王や皇族のもとに大王の

無名墳
無名墳
稲荷山古墳
丸墓山古墳
梅塚古墳
5号墳
3号墳
4号墳
ボッチ山古墳
6号墳
将軍山古墳
7号墳
無名墳
天王山古墳
山宮古墳
天祥寺裏古墳
二子山古墳
0
200m

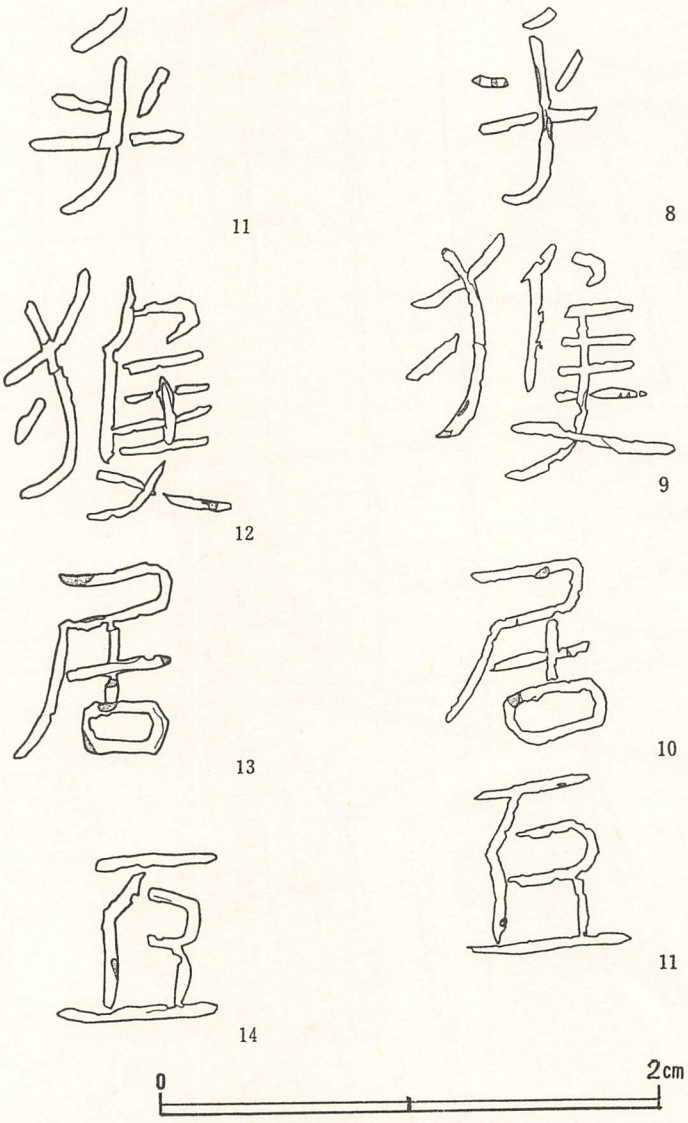
第３図　埼玉古墳群北半の分布図



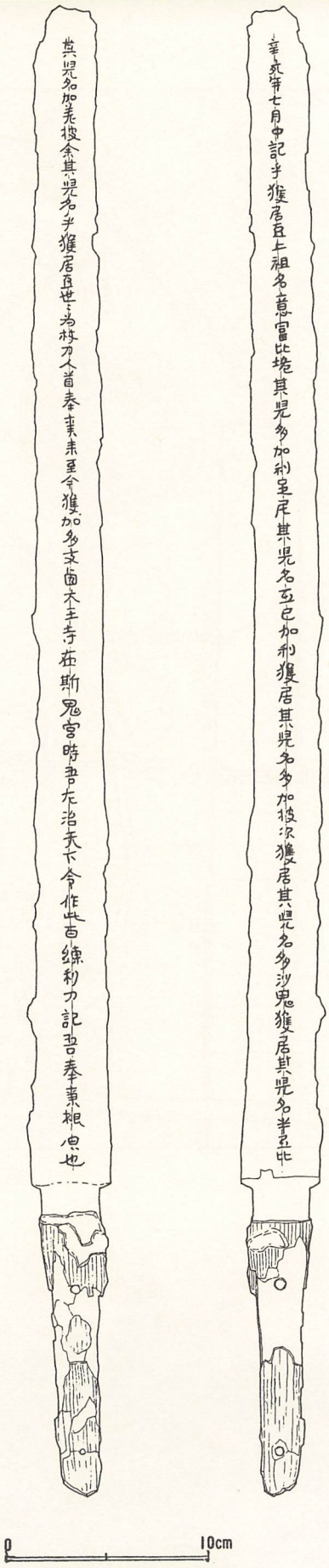
第４図　丸墓山古墳の近況



第５図　稲荷山古墳の近況



第２図　乎獲居の金錯銘（4）



第１図　稲荷山鉄剣実測図（2）

これに対して、佐伯有清氏は、高崎市山名町所在の山ノ碑の碑文の「自」が臣と記されていることを根拠に、「直」の字が臣となっていてもおかしくはなく、「直」の行書体の一つであると考えてよいと思う、と述べられている(21)。今後この論争は続くかもしれないが、雄略紀十一年条にとっては「直」と読めた方が好都合であると思う。

蛇足であるが、乎獲居のつぎの字が臣であれば、筆者は謙称のシンと発音するのがよいと考えている。その理由は、獲居ワケが尊称の姓なのに、そのうえ臣オミという姓を下重ねして使うだろうか。ただ、大王家と血族的な関係があればオミでもおかしくない。

武蔵国直丁は、国造の子弟が朝廷に上番するという制度・慣習に基づいて、武蔵から出仕して雄略天皇に近侍していたのである。その任務は天皇の警護と宮廷の警固をする衛士のような役目をになっていたと推察できる。いわゆる近衛集団である。しかしそれは、律令で規定されているような、兵衛に配置された下級武官というよりは、天皇直属の親衛軍に属する人であったろう。それは、まさに鉄剣銘にある杖刀人であろう。『日本書紀』が成立した七世紀の知識のレベルからいうと仕丁と認識されたかもしれないが、実のところは杖刀人であった可能性が強い。直木孝次郎氏によれば、杖刀人は、舎人や酒人、藏人、宍人など朝廷の政務・庶務を分掌する六世紀の人制――四・五世紀の部民制の後をうけて六世紀に全盛になった――につらなるものであろうと推論されている(22)。

このように、『日本書紀』雄略紀十一年の記事は、五世紀、武蔵から朝廷へ兵士を出す制度があったことを跡づけるものである。武蔵のどこから出仕していたかは、明らかではないが、大型古墳が他地域を圧する形で集在している埼玉(さきたま)地方の王者一族の人物の可能性が高い。

転、両史料からみた雄略朝の中央と武蔵

(一) 雄略紀十一年の条と丸墓山古墳

埼玉古墳群には、百メートル級の大型古墳が十基ある(消滅したのも含む)。それらの墳形は、丸墓山が円墳のほかは前方後円墳である。丸墓山の墳形は、昭和四十八年度および六十年度の発掘調査で一応円墳との所見が得られた(23)ということであるから、円墳だということを前提で考えてみよう。

各地の首長は競って、朝廷の〝公認〟を得て前方後円墳を築造していたのに、なぜ、丸墓山の被葬者は強大な王権を示威するため、円墳で造らなければならなかったのか。多くの研究者は疑問を抱いてきたけれども、いまだもって明解に答えられないでいる。

雄略紀十一年の条は、その疑問に応える一つの解答例として検討していただきたい。つまり、武蔵国直丁が天皇を誹謗するという不祥事をしでかしてしまったために、その本人または父親は、前方後円墳を築造することができず、円墳を造らざる得なかったと考えてみたら、いかがなものかということである。

この解答例には、すでに無理な点と合理的な点をいくつか感じているので、併せて指摘しておきたい。第一点は、武蔵国直丁の不祥事が発生したのは、稲荷山鉄剣の製作年の四年前の雄略朝十一年であるから、であるとすれば、乎獲居は鉄剣にあんなに高らかな事績を書き込むことができたのか。この年次比定をどう解釈すればよいのかという問題である。第二点は、乎獲居は自分を含め、関係者に不祥事が起きたにもかかわら

神祇官の条に、「宮廷内駆使耳、不可駈使山野、諸国点定進上者也、賦役令云、仕丁五十戸二人、三年一替是也」とあるのが、それである。そしてその位階は、使部、駈使部と同等の者とすると(14)、軍防令内六位条に「六位以下、八位以上嫡子、年二十一以上、」とあるので、下級官吏であるが、五世紀後半においてはもっと高い位置づけにあったと推察される。「侍宿せり」とは、天皇の身辺を警護したり宮廷内の諸事を司る職役が想定されるので、稲荷山鉄剣銘でいえば杖刀人、六世紀ころであれば舎人のような役柄であっただろう。因みに、「舎人の後身と考えられる令制の左右兵衛府の組織をみると、督以下の四等官の下に医師一人・番長四人・兵衛四百人・使部三十人・直丁二人とある。舎人が兵衛に相当するのであるから、舎人直は番長に当たると考えることができよう。」(15) その後で諸国進上のなかに、「国造丁直丁等」とあり、佐伯有清氏は、杖刀人の職掌がおそらく丈部（はせつかいべ）の前身であり、また丈部の後身が令制の駈使丁ではなく、使部であったと考えられている(16)。

このことは、雄略朝の統治機構のなかに、中央の支配権が地方に波及し根づいていくなかで令制のように、地方豪族の子弟を朝廷に任官させる制度を有していたことを物語るものではあるまいか。地方豪族側も、朝廷に自分の身内を出仕させることによって、大王との臣従関係を内外に公認させるうえで重要な政治的意味があり、この大樹の後ろ盾をもって領内における権力基盤を強固なものとするいっぽうで、周辺地域に対しては自己の優越性を認知させる機会ととらえた。朝廷側では、支配領域拡張にあたらねばならない東国や西辺にとくに、そのような新興豪族の台頭を欲し、それとの関係を梃子に大王権の伸長と強化を図っていく必要があった。その背景には、倭国の国際的な地歩の向上と発展を期する必要があったのである。だとすれば、雄略朝の直丁は、有力な豪族、なかんづく朝廷と親密な関係にあった地方国造の子弟から構成されていたと考えられるのである。井上光貞氏はかつて、「大和国家の軍事的基礎」と題する論文の中で、五世紀後半ごろから東国国造の子弟が舎人となって天皇の側近に仕え、親衛軍を組織して、大和国家の軍事的基礎の一部となり、令制五衛府のうちの左右兵衛府の前身となった」と論じられたことがある(17)。この推論は稲荷山鉄剣銘の発見により実証されたといってよく、その先見性には敬服するばかりである。

「五世紀末の朝廷の政治組織の変革によって、直は朝廷に帰服した地方豪族で、五、六世紀のいわゆる国県制に基づき、国造に認められたものに一律に与えられたらしい。首は地方的伴造や帰化人の子孫などの地方村落の首長に、史・村主・薬師は主として五世紀以後渡来した帰化人に与えられている。」(18)この説に従えば、国造の姓（カバネ）は直であるから、雄略紀十一年条の「武蔵国直丁」の直丁はアタヒノヨホロと訓むべきであるし、武蔵国造の子弟と解することができるのである。となれば、稲荷山鉄剣銘文の十一番目の字の解読については、銘文の発見当初から「臣」か「直」かということで見解が分かれていたが、解読に直接当たられた岸・田中・狩野の三先生も、「直」の疑いをもちながらも金錯の字画を観られたり、金文の類字を探されたりした結果、どちらかといえば「臣」と読めるといわれているし(19)、銘文の実測図を作成された小川良祐氏も「四角に囲まれる横画が丸味を持って縦から横に刻まれる例は（直には）ないので「直」にはならないであろう。」と述べられている(20)。

仕えて鳥飼をしていた公人がいたと解釈される。この公人は、杖刀人や酒人と同じように、養鳥人として職能をもって仕えていた人制(11)に属していたと人であろう。これは、直木孝次郎氏が論ずるところの、部民とは別に組織された、天皇家や豪族に従属した職業集団と考えることができる。

いっぽう、鳥養部は、鳥を飼育する部民で、鳥を捕って朝廷に献上する鳥取部と同様に鳥取造の所掌下に置かれた品部であって、垂仁紀廿三年の条につぎのように記されている。

十一月甲午朔乙未。湯河板挙献鵠也。誉津別命弄是鵠。遂得言語。由是。以敦賞湯河板挙。則賜姓而曰鳥取造。因亦定鳥取部。鳥養部。誉津部。

雄略朝において、十一年の条以外にも二件、鳥飼いに関する記事が載っている。十年秋九月の条には、身狭村主青らが呉の献じようとした鵝をもって筑紫に到着したら、水間君の犬にかみ殺されてしまったので、水間君は、恐れて十隻の鴻と養鳥人を献上して許されたとある。また、同年冬十月の条には、水間君が献じた養鳥人らを大和の軽村と磐余村とに安置したとある。このように、雄略朝に都合三件も鳥飼いに関することが記載されているのは、注目される。雄略天皇がことのほか鳥が好きだったのか、あるいは鳥取造との間に何か特別の関係があったのではないかなどと、その理由を詮索してみることも必要である。

大化前代において、宮廷や豪族が動物を飼育する専門の職業集団を有していたことは、記紀や『万葉集』などの記載、各地に残る地名、および動物埴輪などから知ることができる。鳥養部のほか、犬養部、馬飼部、猪飼部などが実際おかれていた。彼らは、伴造に引率され、役畜の提供や食肉の献上、儀式への参列など、重要な役割を果たしていた。それゆえに、「いずれも貴人の身辺の従者であり、その本質はヤツコ（家僕）であるが、法制上の奴婢ではなはなく、独立の戸をなし、村落の構成員であるのが通例である。」(12)

直木孝次郎氏は、「伴造が部民を管理して朝廷の事務を分掌する組織は、四世紀末ないし五世紀初頭に遡り、五世紀代に盛行したと考えてよかろう。」と述べられているが(13)、前述したように雄略朝に鳥飼いに関する記事三件があったり、「負嚢者」を設けたとする記事があるのは、まさに五世紀における政治社会上の一断面を表徴するものであろう。

（五）武蔵国直丁

つぎに、雄略天皇の宮廷に侍宿していたという信濃国と武蔵国の「直丁」とは、いったいどのような人物であったのか考えてみよう。まず、直丁の訓みについてであるが、新訂増補国史大系本（吉川弘文館刊）ではツカヘノヨホロと振り仮名をつけている。日本古典文学大系本（岩波書店刊）でも同じである。これは、日本書紀の写本の傍訓に則ったものであろう。しかしながら、ツカヘノヨホロは、漢字を当てると仕丁になってしまう。したがって、「直丁」の訓みをツカヘノヨホロと発音するのは適当ではない。むしろ、アタヒノヨホロ、あるいは、ジキテイ（日本国語辞典＝小学館刊）、ジキチョウ（国史大辞典＝吉川弘文館刊）、の方が適当な訓みかたであると思う。筆者は、五世紀段階の発音ではアタヒノヨホロと訓むのが、最も実態にかなっていると考えている。

直丁の職掌については、時代がくだった律令制下での職務は、中央官庁の雑役に服するため、諸司に配属された者をいう。『令集解』職員令

（二）記事の舞台の場所

この記事の舞台となった場所については明記されてないが、前後の文脈や天皇の近くで「侍宿」していたと書かれていることから、宮廷内の出来事であったと推定できる。この宮廷の所在地については、『古事記』では「長谷朝倉宮」とあり、『日本書紀』には「泊瀬朝倉宮」とある。この宮の所在地は、銘文の解読に当たられた岸俊男先生をはじめ大方の学者は大和東部の旧磯城郡の初瀬川（大和川の支流）流域をあてているが、鉄剣銘には「斯鬼宮に在るとき」とあって一致しない。門脇禎二氏ら一部の研究者は、雄略記に出ている河内の志幾（志紀）ではないかと考えられている(9)。ここは、志幾県主が身分不相応な居宅に住んでいたのを雄略天皇から咎められた場所であるとともに、若日下大王が出た所と伝えられる地域である。また、雄略天皇が葬られた場所も河内の丹比高鷲原陵（大阪府羽曳野市島泉に所在）と『日本書紀』清寧天皇元年の条に書かれている。

これに対して、岸先生らは、『日本霊異記』の冒頭に、雄略天皇が大和の磐余の宮に住んでいたと記されているところから、この地は朝倉の宮がある磯城郡に含まれるので、この宮を斯鬼の宮と呼んだのであろうとされている(10)。このことは、雄略紀十一年の条の記事中に狗の所有者が「茐田の人」とあることからも、間接的ながらその蓋然性を補強することはできる。というのは、茐田は、後世の宇陀郡地方のことであり、磯城郡とは地続きの東側に当たり、初瀬川の上流地域にあるとともに、木津川の上流水系である宇陀川流域の山間地にある。狗を連れ立って行ける宮廷とすれば、隣の磯城郡あたりまでと考えるのが自然だからである。

しかし、天皇の居所が、「斯鬼宮に在るとき」と特記しているのであるから、朝倉の宮以外に移動したこともじゅうぶん考えられる。斯鬼宮の在地は、大和か河内か明確には比定できない。稲荷山鉄剣に金錯銘が発見された昭和五十三年当時は、埼玉県の志木市も斯鬼宮の比定地の一つと考えられていたが、現在はその可能性はない。

（三）鳥官と狗

「鳥官」については、公営の鳥類飼育場を意味するのか、宮廷の鳥飼い人すなわち鳥養部の伴造のような役人を意味するのか判然としない。「鳥官之禽」と書かれていることを考えると、いろいろな種類の鳥を宮廷内で飼っていたのであろう。狗にかみ殺されたのは、その内の鶏（現在の地鶏）であったとみられる。「狗」は普通の犬なのか、狼なのかよくわからないが、雄略紀九年の条や欽明天皇十九年の条にオオカミのこととして「狼」の字を使って区別しているので、犬と考えてよいだろう。その狗の種類は、奈良盆地の東側の山がちな宇陀の地理的環境を考えると、紀伊地方で家畜化され飼養されていた中型犬の紀州犬ではないかと思われる。

（四）鳥養部の設置

雄略天皇の前で失態をした犬の飼い主＝茐田の人と、信濃国と武蔵国の直丁が鳥養部にさせられたという話は、部民制の成立ひいては大和政権の社会構造や政治組織を理解するうえでも、その歴史的意味は大きい。そこで、この問題についても、触れておこう。

まず、「鳥官」が、施設ではなくて、人であるとした場合は、宮廷に

神功皇后四十七年	丁卯	三六七年か	武蔵国の人ともいう千熊長彦を新羅に遣わし、百済の貢物奪った罪を推問させる	日本書紀・百済記
神功皇后五十年	庚午	三七〇年か	千熊長彦が、久氐らとともに百済から帰る	日本書紀
神功皇后五十一年	辛未	三七一年か	千熊長彦に久氐らを副えて再び百済に派遣	日本書紀
神功皇后五十二年	壬申	三七二年か	百済の久氐らが千熊長彦に従って朝貢する	日本書紀
仁徳天皇十一年	癸未	五C初め	武蔵の人強頸が茨田堤（河内）の築堤工事に召されてあたる	日本書紀
雄略天皇十一年	丁未	四六七年か	武蔵国直丁らを鳥養部にする	日本書紀
獲加多支鹵大王	辛亥	四七一年	乎獲居が鉄剣に、自分の系譜と来歴を記す	稲荷山鉄剣
安閑天皇元年	甲寅	五三四年	武蔵国造職めぐる内乱は上野、朝廷を巻き込む	日本書紀

これらの中には、知知夫彦命が、東国の国造としては最も早い崇神朝に任命されたとあったり、兄邪志国造も成務天皇代に設置されたとある。強頸のように大和朝廷に招致されて淀川の築堤工事に当たったり、千熊長彦のように外交使節として日朝間を往来した人物もいたとある。このような四世紀から六世紀にかけての時代推移のなかで、雄略紀十一年、武蔵国直丁が朝廷に出仕していたという記事は、決して唐突でも意外な出来事ではなく、むしろ朝廷と武蔵との関係史の中では、有り得べき歴史事象と考えてよいのではないかと思う。

それでは、雄略紀十一年は西暦何年に当たるだろうか。鉄剣銘の辛亥年が四七一年だとすれば、雄略紀十五年に該当するので、その算出式は471－（15－11）＝467年、すなわち雄略紀十一年は西暦四六七年に比定することができる。この年次比定を中国の『宋書』倭国伝により検証してみよう。倭王武が宋朝の順帝に上表文を出したのが四七八年＝昇明二年＝戊午であるから、その計算式は478－471＝7年。そこで戊午の年から干支を七年遡れば辛亥の年、すなわち稲荷山鉄剣銘の紀年になる。また、十一年遡れば丁未となり、雄略紀十一年の干支と一致する。さらに韓国の中原高句麗碑の紀年＝申酉年の方が、同碑に見える狛残王が百済の盖盧王とみられることからすると四八一年と考えられるので、直近の丁未年は、四六七年であると比定することができる。

まわりくどい説明をしてきたが、雄略紀十一年の年次は、稲荷山鉄剣銘、倭王武の上表文および中原高句麗碑の年次比定から、それが西暦四六七年であると割り出されるのである。

ただ、『古事記』に註記されている雄略天皇の崩年干支を根拠にすると(8)、四七二年となってしまう。

③ この記事に登場する武蔵国直丁は、誰なのか。鉄剣銘の乎獲居一族に関連があるとみられる。

④ 武蔵国直丁の訓みは、『日本書紀』の傍訓のツカヘノヨホロでよいのか。

⑤ 武蔵国直丁がペナルテーを受けたことと、丸墓山古墳が円墳であることと関連性はないのか。

（一）記事の時期

まず、時期の問題であるが、この記事の内容が雄略天皇代であり、稲荷山鉄剣銘に重なる時期か、またはごく近い時期のことであると推定される。記事の雄略天皇十一年は西暦に換算すると、四六七年に当たる。この前後で武蔵のことで文献や金石文に出てくる事象としては次のようなものがある。（埼玉県『新編埼玉県史』資料編4古代2、拙稿『大化前代の武蔵の動向』参照）

四～六世紀における武蔵をめぐる動向

年次			主な出来事	収録史料
天皇紀年	干支	（西暦）		
崇神天皇十年	癸巳	三C末～四C初め	朝廷が大彦命ら四将軍を各道に派遣	古事記・日本書紀
崇神天皇代	同	右	知知夫国造に知知夫彦命を定める	先代旧事本紀
成務天皇代		四C初め	无邪志国造に兄多毛比命を定める	先代旧事本紀
成務天皇代		四C初め	胸刺国造に伊狭知直を定める	先代旧事本紀
景行天皇二十七年	丁酉	四C前半	武内宿禰が東国から帰り、東国の様子を報告	日本書紀
景行天皇四十年	庚戌	四C前半	朝廷が日本武尊を東征させる	古事記・日本書紀
景行天皇五十三年	癸亥	四C前半	膳臣の遠祖磐鹿六雁命が無邪志国造上祖大多毛比・知知夫国造上祖天上腹・天下腹人らを召し魚や貝の料理を天皇に供献	古事記・日本書紀・本朝月令
景行天皇五十六年	丙寅	四C前半	朝廷が御諸別王に東国を統治させる	日本書紀
景行天皇五十七年		四C前半	武蔵国知知夫大伴部の上祖三宅連意由が木綿を角髪に巻く	本朝月令

でいて、また驚いた。というのは、同天皇十一年の条に、武蔵国直丁が天皇の近くに侍宿していた旨の記事（後掲）を見出し、そしてこの記事は、「乎獲居臣が獲加多支鹵大王に奉事した」という金錯銘文に符合するものではないかと、考えたからである。この見解は、当時、『辛亥銘鉄剣と埼玉の古墳群』（読売新聞浦和支局編、昭和五十三年十二月二十五日発行）に紹介されたのをはじめ、その後、拙稿「大化前代の武蔵の動向」(5)「中原高句麗碑と辛亥銘鉄剣」(6)でも取り上げ、その重要性について指摘した。しかし、渉猟不足と管見の誹りを受けるかもしれないが、このことに関する碩学の論文などには、未だ接していない。

そこで、本稿では、今後多くの方々にこの問題を論じていただくため、文献と金石文を使って真正面から取り上げて検討してみた。本稿の構成は、最初に雄略紀十一年の条に関する内容の分析検討を行い、その後で、稲荷山鉄剣銘と埼玉古墳群との関連性、五世紀における朝廷と武蔵との関係を検討するなかで十一年の条の記事を考え、最後に武蔵国直丁や乎獲居が侍宿・奉事した雄略朝の統治機構についても素描してみた。また、鉄剣銘文からもわかるように、五世紀における文字の普及が国家統治の要件であったことにも言及した。とは申せ、なにぶん力量不足のため、見当違いのところもあると思われるので、御高覧いただき大方の御批判・御教示を仰ぎたく存ずる次第である。

承、雄略紀十一年の条の分析

それでは、まず『日本書紀』雄略天皇十一年冬十月の条をあげてみよう。

冬十月。鳥官之禽。為菟田人狗所嚙死。天皇瞋。黥面而為鳥養部。於是信濃國直丁與武藏直丁侍宿。嗟乎。我國積鳥之高同於小墓。且暮而食。尚有其餘。今天皇由一鳥之故而黥人面。太無道理、悪行之主也。天皇聞而使聚積之。直丁等不能忽備。仍詔為鳥養部。(7)

この記事を現代語訳すると、次のようになろう。

冬十月、鳥の司の鶏が菟田（現在の奈良県宇陀郡）の人の犬にかみ殺されて死んでしまった。雄略天皇は、怒ってその人の顔に入れ墨をして、鳥養部にした。ちょうどそこに（宮廷内）侍宿していた、信濃国の直丁と武蔵国の直丁が言うには、ああー、我が国には、鳥なんか積めば小塚の高さと同じ位いる。朝夕食べても、なお余るほどである。いま、天皇は一羽の鶏のために人の顔に入れ墨をなさった。甚だ道理もない、悪行の主である。

天皇は、これを聞いて直丁らに鳥を集め積ましたが、すぐに集め備えることができなかった。よって、直丁らを鳥養部にするようにと命じた。

この記事は、一般には鳥養部の設置説話として知られている。筆者もそれを否定するものではないけれども、単にそれだけの問題として等閑視できない。とくに稲荷山鉄剣銘が発見されて、雄略朝と武蔵の関係、ひいては五世紀における日本の政治的な支配状況について、雄略朝が論議されている今日、重大な記事であると考えたからである。稲荷山鉄剣銘の関係でいえば、次のような問題点を含んでいる。

① この記事の時期が、稲荷山鉄剣銘と同じ雄略朝の出来事である。

② この記事の場所が、稲荷山鉄剣銘の乎獲居が出仕したとみられる宮廷である。

雄略紀所載の武蔵国直丁と稲荷山鉄剣銘について

吉川國男

要　約　『日本書紀』雄略天皇十一年の条に、武蔵国直丁なる人物が雄略天皇のもとに侍宿していたという記事がある。従来、この記事は鳥養部の設置説話として取り上げられたり、同天皇が「悪行の主」だということで取り上げられたりしたことはあった。

本稿では、この記事が稲荷山鉄剣銘に書かれた乎獲居累代の朝廷出仕記事との関連で、重要である旨を問題提起した。そのうえで、他の金石文や文献史料を援用しながら記事の内容を分析検討した結果、鳥養部設置説話以外に、かなり信用できる部分・状況があるのではないかとの感触を得た。具体的には、雄略朝に武蔵国造一族が出仕していたことを、文献のうえから証明するものではないか。雄略朝には、すでに内廷・軍事・行政・外交の四部門からなる統治機構が存在していた可能性がある。そのなかで、武蔵から出仕した乎獲居は内廷・軍事、東国の統属に深く関与していたと推察してみた。

起、はじめに

埼玉県教育委員会が「さきたま風土記の丘」建設の一環として昭和四十三年（一九六八）発掘した稲荷山古墳の出土鉄剣に、昭和五十三年（一九七八）一一五字の金錯銘が発見されたことは、歴史学者ばかりでなく広く国民に、大きなそして喜ばしい衝撃を与えた。稲荷山古墳は、史跡埼玉古墳群の内の一基で、埼玉県行田市大字埼玉九七番地ほかに所在する古墳である。この発掘調査と金錯銘文の調査結果は、つぎの報告書などにより公刊されている。

『稲荷山古墳出土鉄剣金象嵌銘概報』(1)　『埼玉　稲荷山古墳』(2)
『埼玉県行田市稲荷山古墳出土辛亥年金象嵌鉄剣の象嵌について』(3)
『埼玉稲荷山古墳辛亥銘鉄剣修理報告書』(4)

この発掘調査に間接的に関与していた筆者も、大いに驚嘆した一人であった。銘文発見当時、金錯銘文中の「獲加多支鹵大王」が雄略天皇に比定されると発表されていたので、『日本書紀』雄略天皇の条文を読ん

調査研究報告　第11号

印　　刷	平成10年3月21日
発　　行	平成10年3月28日
編集・発行	埼玉県立さきたま資料館
	〒361-0025　行田市埼玉4834
印　　刷	㈲三共社印刷所

森林保護のため本文は再生紙を使用しています。